新潟県埋蔵文化財調査報告書　第187集

一般国道7号

万代橋下流橋関係発掘調査報告書

近世新潟町跡

（広小路堀地点）

２００８

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道７号

万代橋下流橋関係発掘調査報告書

近世新潟町跡
（広小路堀地点）

２００８

新　潟　県　教　育　委　員　会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

「一般国道７号万代橋下流橋」は、新潟市西堀前通十番町から同市万代島に至る延長1.5kmの道路です。国道７号は新潟市から日本海沿いに、山形県庄内地方、秋田県を経由して青森県青森市に至る主要幹線道路です。現在、新潟県から秋田県にかけて、この国道７号と並走する形で日本海東北自動車道が整備中で、一部区間は供用しています。国道７号は、江戸時代には新潟市から秋田市までは羽州浜街道、秋田市から青森市までは羽州街道として五街道に準ずる脇街道とされていました。

万代橋下流橋は、新潟市中心部と新潟バイパスを結ぶ、都市計画道路万代島ルート線の信濃川を横断する区間で、新潟市における各橋梁部での交通渋滞の緩和と、市街中心部へのアクセスの向上を図ることを目的に計画されました。万代橋下流橋は柳都大橋として平成14年５月に開通しています。

本書は「一般国道７号万代橋下流橋」の建設に伴って実施した、新潟市本町通十番町ほかに所在する近世新潟町跡広小路堀地点の発掘調査報告書です。近世新潟町跡は明暦元（1655）年に現在地に移転してきました。移転に際しては移転前の町並みを出来るだけ変更しないよう、計画的に町割が行われました。

発掘調査によって、江戸時代の17世紀から19世紀までの遺構・遺物が検出されました。建物の礎板や礎石、土坑、溝等が多数検出されました。溝の中には屋敷地の境の排水溝と考えられるものもあります。今回の調査地点は広小路に面した屋敷地を部分的に調査したため、屋敷全体の構造を解明するには至っておりませんが、10数回程度土盛りをして屋敷地を嵩上げし水害対策をしていたことが判明しました。遺物は肥前系陶磁器を中心に食膳具や甕、焜炉、灯火具、硯、水滴、鏡、土人形等多様な遺物が多数出土しています。これまで、近世新潟町跡は市街化の進捗により破壊されてしまっていると考えられていましたが、今回の発掘調査によって良好な状態で遺存していることが判明しました。

発掘調査で得られたこれらの資料や本報告書が、埋蔵文化財の理解や認識を深める契機となり、地域の歴史資料として広く活用されることを期待しています。

最後に、この発掘調査に対し、多大なご協力とご理解をいただきました新潟市総務局国際文化部歴史文化課、同市都市整備局土木部土木企画課、並びに地元の方々、また、発掘調査から本書の作成まで格別なご配慮をいただきました国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対し厚くお礼を申し上げます。

平成20年３月

新潟県教育委員会

教育長　武藤　克己

例　　言

1　本書は、新潟県新潟市中央区本町通十番町1,862番地、同区上大川前通十番町1,863番地、同区東堀前通九番町1,392番地ほかに所在する近世新潟町跡広小路堀地点の発掘調査記録である。

2　この調査は一般国道7号万代橋下流橋事業に伴い、国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所から新潟県教育委員会（以下、県教委）が受託したもので、調査主体である県教委は財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）に調査を依頼した。

3　埋文事業団は掘削作業等を株式会社帆苅組に委託して発掘調査を実施した。

4　遺物の註記は、近世新潟町跡の略記号「04ニイガタ」（試掘調査）、「06ニイガタ」（本発掘調査）にトレンチNo.・グリッドNo.・遺構名・層位等を併記した。

5　本書の図中で示す方位は、すべて真北である。ただし、ここでいう「真北」は日本平面国家座標のX軸方向を示す。

6　掲載遺物の番号は、試掘調査と本調査別に土器・陶磁器・土製品、石製品、木製品、金属製品の種別に通し番号を付した。本文および観察表、図面図版、写真図版の遺物番号はすべて一致している。

7　本文中の注は脚注とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は、著者および発行年（西暦）を文中に［　］で示し、巻末に一括して掲載した。

8　第Ⅴ章自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに委託した。

9　石製品の一部の石材鑑定は、倉田征雄氏（株式会社石六石材店）に御教示いただいた。文責は高田賢治（株式会社帆苅組）にある。

10　近世陶磁器の産地・年代等については、相羽重徳氏、安藤正美氏、渡邊ますみ氏からご教示をいただいたが、本文中の誤記等についての文責は佐藤友子にある。

11　木簡の釈文等については原直史氏（新潟大学人文学部）のご教示をいただいた。

12　遺構図のトレースおよび各種図版作成・編集に関しては、株式会社セビアスに委託してデジタルトレースとDTPソフトによる編集を実施し、完成データを印刷業者へ入稿し印刷した。

13　本書の執筆は、寺崎裕助（埋文事業団　調査課長代理）の指導のもと、佐藤友子（同　班長）、桐原雅史（同主任調査員）、高田賢治（株式会社帆苅組埋蔵文化財調査課　調査員）が行い、編集は佐藤友子が担当した。執筆分担は桐原雅史：第Ⅱ章1、高田賢治：第Ⅲ章2B（2T・5T）、第Ⅳ章3・4、第Ⅵ章3で、これ以外は佐藤友子である。

14　発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々および機関から多くのご教示・ご協力をいただいた。ここに記して厚く御礼申し上げる。（敬称略　五十音順）

相羽　重徳　　甘粕　　健　　安藤　正美　　伊東　祐之　　卜部　厚志　　金子　拓男　　倉田　征雄
財団法人新潟市歴史博物館　　高濱　信行　　田代　雅春　　新潟市総務局国際文化部歴史文化課
新潟市都市整備局土木部土木企画課　　新潟大学災害復興科学センター　　原　　直史　　藤塚　　明
渡邊ますみ

目　　次

第Ⅰ章　序　　説 …… 1

1　調査に至る経緯 …… 1

2　調査の経過 …… 2
A　調査経過 …… 2
B　調査体制 …… 5
C　整理経過 …… 6

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境 …… 7

1　遺跡の位置と地理的環境 …… 7

2　新潟町の歴史 …… 10
A　新潟の三ケ津 …… 10
B　新潟町の移転 …… 11
C　広小路堀地点について …… 13

第Ⅲ章　遺　　跡 …… 15

1　調査方法 …… 15
A　調査区の呼称とグリッド設定 …… 15
B　基本層序 …… 16

2　遺　　構 …… 20
A　概　　観 …… 20
B　各　　説 …… 20

第Ⅳ章　遺　　物 …… 29

1　概　　要 …… 29

2　土器・陶磁器・土製品 …… 29
A　土器・陶磁器 …… 29
B　土　製　品 …… 34

3　石　製　品 …… 34
A　概　　要 …… 34
B　各　　説 …… 35

4　木　製　品 …… 36
A　概　　要 …… 36
B　各　　説 …… 36

5　木　　簡 …… 40

6　金属製品 …… 41

第Ⅴ章　自然科学分析 …… 43

1　テフラ分析 …… 43

A　試料と分析方法 …… 43
B　鉱物分析結果 …… 43
C　火山ガラス屈折率測定結果 …… 45
D　おわりに …… 45

2　珪藻化石群集 …… 46
A　はじめに …… 46
B　試料及び分析方法 …… 46
C　珪藻化石の環境指標種群について …… 46
D　珪藻化石群集の特徴 …… 47
E　考　　察 …… 49
F　おわりに …… 50

3　寄生虫卵分析 …… 50
A　はじめに …… 50
B　試料と分析方法 …… 50
C　寄生虫卵分析結果 …… 50
D　糞便について …… 50

4　木製品の樹種同定 …… 51
A　はじめに …… 51
B　試料と方法 …… 52
C　結　　果 …… 52
D　考　　察 …… 60

5　漆器の塗膜分析 …… 60
A　はじめに …… 60
B　試料と方法 …… 60
C　結　　果 …… 61
D　考　　察 …… 63

第Ⅵ章　ま　と　め …… 66

1　遺構について …… 66

2　陶磁器について …… 68

3　礎石の石材とその流通について …… 69

《要　　約》 …… 71

《引用・参考文献》 …… 72

《観　察　表》 …… 73

挿図目次

第１図　一般国道７号万代橋下流橋予定路線図 …1
第２図　試掘調査トレンチ位置図 ……2
第３図　試掘調査土層柱状図 ……3
第４図　本発掘調査位置図 ……4
第５図　ジオスライサー作業風景 ……5
第６図　越後平野の地勢と遺跡の位置 ……8
第７図　遺跡周辺の地形概念図 ……9
第８図　新潟町の変遷と拡大 ……11
第９図　明暦２年広小路付近図 ……14
第10図　明和８年広小路付近図 ……14
第11図　2Tグリッド設定図・基本層序 ……17
第12図　3Tグリッド設定図・基本層序 ……18
第13図　5Tグリッド設定図・基本層序 ……19
第14図　土器・陶磁器器種分類 ……30
第15図　堆積物の鉱物組成 ……44
第16図　火山ガラスの屈折率測定結果 ……44
第17図　堆積物中に含まれる鉱物類 ……45
第18図　珪藻化石分布図 ……48
第19図　珪藻化石顕微鏡写真 ……49
第20図　寄生虫卵分析試料の顕微鏡写真 ……51
第21図　木製品材組織の顕微鏡写真（1）……57
第22図　木製品材組織の顕微鏡写真（2）……57
第23図　木製品材組織の顕微鏡写真（3）……58
第24図　木製品材組織の顕微鏡写真（4）……58
第25図　木製品材組織の顕微鏡写真（5）……59
第26図　木製品材組織の顕微鏡写真（6）……59
第27図　漆器塗膜薄片の顕微鏡写真 ……62
第28図　漆器塗膜と赤外分光スペクトル図 ……63
第29図　漆器塗膜の二次電子像と点分析位置 ……64
第30図　天保２年に描かれた新潟町 ……67
第31図　幕末期町屋の間取り ……67
第32図　小澤邸 ……68
第33図　石材産地と近世船道活動域図 ……69

表目次

第１表　遺構の略称 ……20
第２表　木製品器種構成 ……37
第３表　銭貨集計表 ……42
第４表　テフラ分析試料一覧 ……43
第５表　テフラ分析結果 ……44
第６表　珪藻化石産出表 ……48
第７表　木製品の樹種同定結果一覧 ……54・55
第８表　器種別の検出樹種集計 ……56
第９表　塗膜分析を行った漆器と分析の詳細 ……60
第10表　漆器塗膜の元素分析結果 ……61
第11表　生漆の赤外線吸収位置と強度 ……61
第12表　各漆器の塗膜構造と材料 ……61
第13表　基本層序と遺物の時期（1）……68
第14表　基本層序と遺物の時期（2）……69

図版目次

［図面図版］
図版１　2T遺構個別実測図（1）　Ⅱ・ⅢS層
図版２　2T遺構個別実測図（2）　Ⅲ・ⅣS・Ⅳ層
図版３　2T遺構個別実測図（3）　ⅣS・Ⅳ・Ⅵ層
図版４　2T遺構個別実測図（4）　Ⅶ・Ⅷ層
図版５　2T遺構個別実測図（5）　Ⅷ・Ⅹ・Ⅺ・Ⅻ層
図版６　2T遺構個別実測図（6）　Ⅺ・Ⅻ・ⅩⅢ層
図版７　3T遺構個別実測図（1）　Ⅱ層上面
図版８　3T遺構個別実測図（2）　Ⅱ層
図版９　3T遺構個別実測図（3）　Ⅲa層上面
図版10　3T遺構個別実測図（4）　Ⅲ層
図版11　3T遺構個別実測図（5）　Ⅲb層
図版12　3T遺構個別実測図（6）　Ⅳ層
図版13　3T遺構個別実測図（7）　Ⅴ層
図版14　3T遺構個別実測図（8）　Ⅵ層
図版15　3T遺構個別実測図（9）　Ⅶ層
図版16　3T遺構個別実測図（10）　Ⅷ層
図版17　3T遺構個別実測図（11）　Ⅸ層上面
図版18　3T遺構個別実測図（12）　Ⅹ層上面
図版19　5T遺構個別実測図（1）　Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層
図版20　5T遺構個別実測図（2）　Ⅴ・Ⅵ層
図版21　5T遺構個別実測図（3）　Ⅶ・Ⅷ・Ⅸ層
図版22　5T遺構個別実測図（4）　Ⅸ・Ⅹ・Ⅺ層
図版23　5T遺構個別実測図（5）　Ⅺ・Ⅻ層
図版24　試掘調査出土土器・陶磁器（1）　4T～6T
図版25　試掘調査出土土器・陶磁器（2）　6T～9T
図版26　試掘調査出土土器・陶磁器（3）　10T・11T、石製品
図版27　試掘調査出土木製品（1）　4T～6T
図版28　試掘調査出土木製品（2）　7T～8T
図版29　試掘調査出土木製品（3）　8T～11T

図版30　本発掘調査出土土器・陶磁器（1）　2T
図版31　本発掘調査出土土器・陶磁器（2）　3T
図版32　本発掘調査出土土器・陶磁器（3）　3T
図版33　本発掘調査出土土器・陶磁器（4）　3T・5T
図版34　本発掘調査出土土器・陶磁器（5）　5T
図版35　本発掘調査出土土製品
図版36　本発掘調査出土石製品（1）　2T
図版37　本発掘調査出土石製品（2）　2T
図版38　本発掘調査出土石製品（3）　2T・3T
図版39　本発掘調査出土石製品（4）　3T・5T
図版40　本発掘調査出土木製品（1）　2T
図版41　本発掘調査出土木製品（2）　2T
図版42　本発掘調査出土木製品（3）　2T・3T・5T
図版43　本発掘調査出土木製品（4）　5T
図版44　本発掘調査出土金属製品（1）
図版45　本発掘調査出土金属製品（2）
図版46　本発掘調査出土金属製品（3）

［写真図版］

図版47　「新潟町絵図」
図版48　本町通九番町付近、本町通六番町の朝市
図版49　国産磁器、国産陶器、灯火具、土人形、中国産磁器
図版50　遺跡の位置
図版51　2T遺構（1）　近景、基本層序、Ⅱ層礎石・SD1、ⅢS完掘
図版52　2T遺構（2）　ⅢS層完掘・SD2・SD3、Ⅲ層完掘・礎石35・礎石40・SD14
図版53　2T遺構（3）　Ⅲ層SD14・SK4・SK23・SD127、ⅣS層完掘、礎石36
図版54　2T遺構（4）　ⅣS層礎石39・SK37・SK12・Ⅳ層P75、Ⅵ層完掘・礎石80
図版55　2T遺構（5）　Ⅵ層礎石80・SD58・P60、Ⅶ層礎石115・礎石122・礎石123・礎板197・杭258
図版56　2T遺構（6）　Ⅶ層SK129・SD136・SX196、Ⅷ層出土状況・SK146
図版57　2T遺構（7）　Ⅷ層P151、X層完掘・SK153、Ⅺ層完掘・杭167・杭257・P159・P160
図版58　2T遺構（8）　Ⅺ層P160・SX178、ⅫS層出土状況、Ⅻ層柱根199・礎板256・礎石259・礎石262・杭252
図版59　3T遺構（1）　近景、基本層序、Ⅱ層上面焼土・礎石検出状況、Ⅱ層SD27
図版60　3T遺構（2）　Ⅱ層SD27・P20・P45、Ⅲa層上面完掘
図版61　3T遺構（3）　Ⅲa層上面完掘・SK13・SD15・P19、Ⅲ層完掘
図版62　3T遺構（4）　Ⅲ層完掘・SK26・SK28・SK30
図版63　3T遺構（5）　Ⅲ層SK30・SD29・SD32・SD31、Ⅲb層SD145
図版64　3T遺構（6）　Ⅲb層SD145、Ⅳ層完掘・Ⅳ層上面SK68
図版65　3T遺構（7）　Ⅳ層上面SK68、Ⅳ層SD48・SD71・SD78、Ⅴ層上面完掘
図版66　3T遺構（8）　Ⅴ層上面完掘、Ⅴ層SK95・SD79・SD91
図版67　3T遺構（9）　Ⅴ層P96・P183・SX94・SX110
図版68　3T遺構（10）　Ⅴ層SX110、Ⅵ層完掘、Ⅵ層上面SK117、Ⅵ層SK119・SK120
図版69　3T遺構（11）　Ⅵ層P118・P125、Ⅶ層完掘、ⅦS層出土状況、Ⅶ層上面P142
図版70　3T遺構（12）　Ⅶ層上面P142、Ⅶ層上面完掘、SK157・P156・P141
図版71　3T遺構（13）　Ⅷ層上面P141、Ⅸ層上面完掘・P158、Ⅸ層SK174、X層上面完掘
図版72　3T遺構（14）　X層SK187・SD182・P181・杭190、5T遺構（1）　5T近景
図版73　5T遺構（2）　基本層序、Ⅲ層出土状況、Ⅱ～Ⅳ層SD224
図版74　5T遺構（3）　Ⅱ～Ⅳ層SD224、Ⅳ層P201、Ⅴ層完掘・SK202
図版75　5T遺構（4）　Ⅵ層上面完掘、Ⅵ層SK203・P205、Ⅶa層SK231・P227、Ⅶ層SD230
図版76　5T遺構（5）　Ⅸ層上面完掘、Ⅸ層SK207・出土状況、Ⅸa層出土状況、Ⅸb層出土状況、X層上面完掘
図版77　5T遺構（6）　X層P213、Ⅺ層完掘・礎石229・SK221
図版78　5T遺構（7）　Ⅺ層SK221・SK222・SK223、Ⅻ層完掘・礎石245・柱根243

遺物写真

図版79　試掘調査出土土器・陶磁器（1）　4T～6T
図版80　試掘調査出土土器・陶磁器（2）　6T～9T
図版81　試掘調査出土土器・陶磁器（3）　10T・11T、石製品、木製品（1）3T～5T
図版82　試掘調査出土木製品（2）　5T～8T
図版83　試掘調査出土木製品（3）　8T～11T

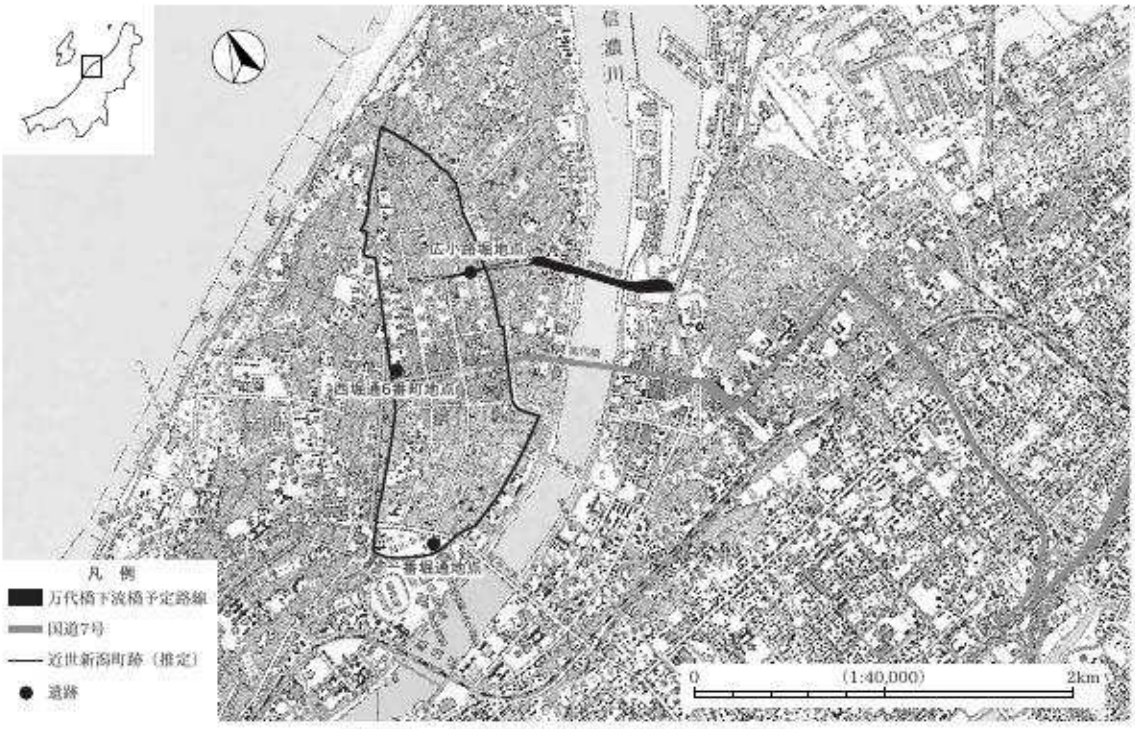
図版84　本発掘調査出土土器・陶磁器（1）　2T
図版85　本発掘調査出土土器・陶磁器（2）　3T
図版86　本発掘調査出土土器・陶磁器（3）　3T
図版87　本発掘調査出土土器・陶磁器（4）　3T・5T
図版88　本発掘調査出土土器・陶磁器（5）　5T
図版89　本発掘調査出土土製品、石製品（1）　2T
図版90　本発掘調査出土石製品（2）　2T・3T
図版91　本発掘調査出土石製品（3）　3T・5T、木製品（1）2T
図版92　本発掘調査出土木製品（2）　2T
図版93　本発掘調査出土木製品（3）　3T・5T
図版94　本発掘調査出土木製品（4）　5T、金属製品（1）
図版95　本発掘調査出土金属製品（2）
図版96　本発掘調査出土金属製品（3）

第Ⅰ章　序　　説

1　調査に至る経緯

一般国道７号万代橋[1]下流橋（柳都大橋）事業は、新潟市の中心部と新潟バイパスを結ぶ都市計画道路万代島ルート線（延長5.58km）の信濃川を横断する区間で、新潟市西堀前通十番町（都市計画道路西堀通線・通称：西堀通）から同市万代島（国道113号・通称：東港線）を結ぶ、延長1.5kmの道路である（第１図）。新潟市の中心市街地である西港周辺地域と高速道路や広域幹線道路を効率的に結び、交通混雑の緩和（特に萬代橋の交通負荷軽減）を図り、人と物の流れを円滑にして西港周辺地域のまちづくりを支援するために計画された。

平成５年に事業化し、平成８年から用地買収に着手した。平成14年には信濃川に柳都大橋が開通した。これに対応し、平成16年には萩川岸通から東堀通までの区間で、遺跡の有無や埋蔵状況を把握するための試掘調査を行った。この区間は現道の拡幅工事が行われる予定である。その結果、調査区間すべての範囲から江戸時代の遺物が出土したが、絵図面等からわかる移転当初の新潟町の範囲のうち、広小路に面した部分の上大川前通から東堀前通までを「近世新潟町跡広小路堀地点」として新遺跡登録した。



第１図　一般国道７号万代橋下流橋予定路線図
（国土地理院「新潟北部」「新潟南部」1:25,000原図 平成14年発行）

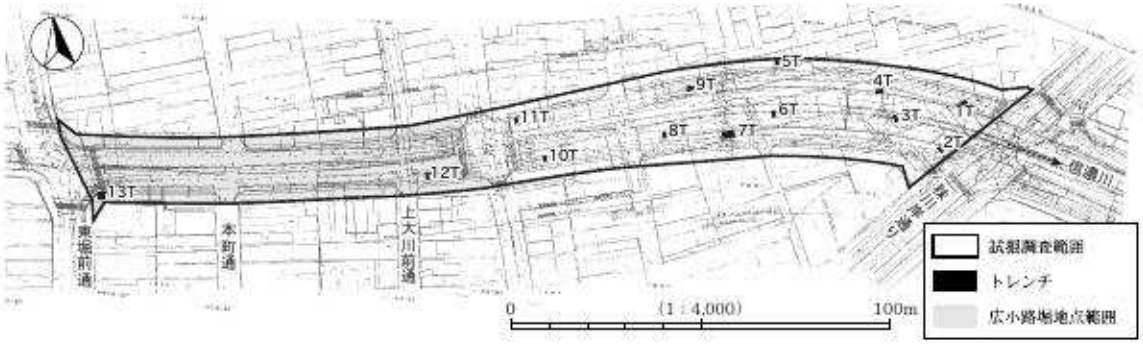
1）万代橋は平成16年に国の重要文化財指定を機に、「万代橋」から「萬代橋」に名称を戻したが、国土交通省の「万代橋下流橋」という事業名称は変わらない。従って事業名を指すときには「万代橋」、橋を指すときには「萬代橋」を使用する。

2　調査の経過

A　調 査 経 過

1）試 掘 調 査

調査対象範囲は面積12,200m^{2}で延長約500m、現道の広小路両側にあたる最大幅約20mである。平成16年7月15日～23日までの6日間調査を行った。現況は店舗・住宅撤去後の荒地である。第2図のように対象地に、任意に13か所のトレンチ（試掘坑）を設定した。実質調査面積は77m^{2}で確認率は0.6％である。調査地点は信濃川左岸の中洲に立地するため軟弱地盤である。各トレンチ（以下、T）には表土除去後、簡易矢板を打設し安全確保を行ったうえ、重機（バックホー）で掘削・精査を行い、遺構・遺物の有無を確認した。調査の結果、5か所（4・6・8・9・12T）で杭・杭列等の遺構を検出した。遺構確認面は複数確認されたが、トレンチ毎に検出層位は異なっている。遺物はすべてのトレンチから出土したが、中世以前のものは検出されず、18世紀代の陶磁器を中心に多数の木製品も出土した。10Tからは木簡（図版29-42）も出土した。



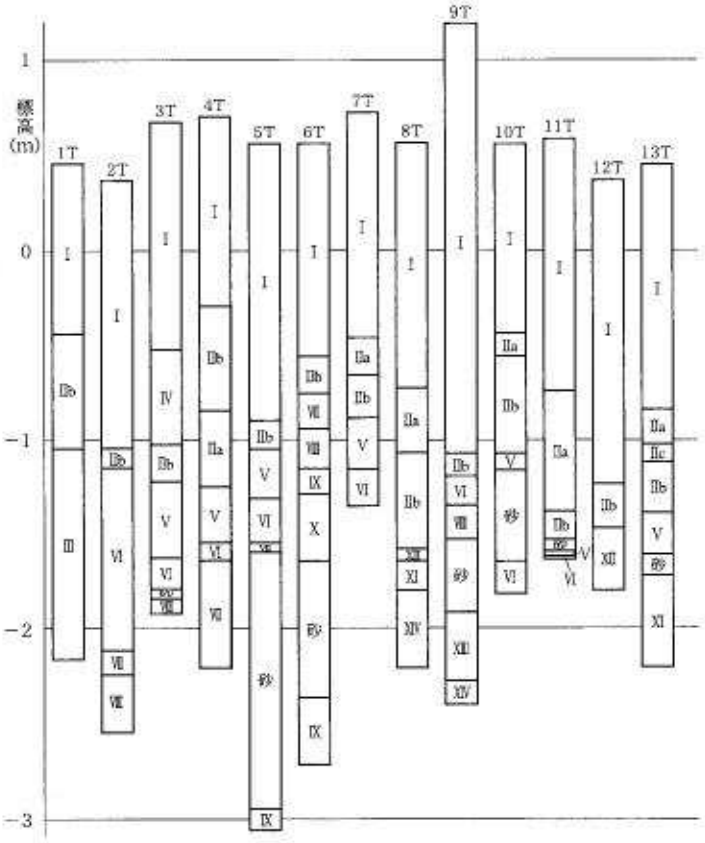
第2図　試掘調査トレンチ位置図

層序はⅠ～ⅩⅣ層に分層した（第3図）。Ⅰ層：盛土。Ⅱa層：黄褐色砂層。Ⅱb層：青灰色砂層。Ⅱc層：黄褐色粘土層。Ⅲ層：腐植土と砂の交互層。Ⅳ層：青灰色の砂と粘土交互層。Ⅴ層：青灰色粘土層。Ⅵ層：茶褐色腐植粘土層（ガツボ層）。Ⅶ層：茶褐色粘土層。Ⅷ層：青灰色粘土層。Ⅸ層：明褐色粘土層。Ⅹ層：淡褐色粘土層。Ⅺ層：灰褐色粘土層。ⅩⅡ層：黒褐色粘土層。ⅩⅢ層：暗灰褐色粘土層。ⅩⅣ層：青灰色粘土と砂の交互層である。この他に青灰色砂層があるが、記号化せずに「青灰色砂層」と記した。

調査地点は東西に長いことから堆積層は一致しないが、青灰色砂層が現地表下2m程（標高約－1.2～－1.8m）で確認される地点が多い。10T付近では若干高い地点で確認されている。

この結果から明暦元（1655）年に現在地に移転したとされる新潟町が、残存していることが明らかとなった。これまで新潟町は遺跡として周知されていなかったが、絵図面等からわかる移転当初の範囲のうち、今回の試掘調査地点を「近世新潟町跡広小路堀地点」として登録した[1)]。広小路堀地点は、現在上大

1）近世新潟町跡は平成18年12月現在、広小路堀地点以外に白山島の白山公園内にある一番堀通地点（新潟県議会旧議事堂）と柾谷小路に面した西堀通6番町地点が周知化されている。一番堀通地点は平成18年に行われた重要文化財・新潟県議会旧議事堂の修復工事において、地盤改良工事を行うため掘削を行ったところ、陶磁器片がコンテナで約2箱出土した。江戸時代には新潟町人の蔵所が建てられたところである。西堀通6番町地点は柾谷小路に面したところである。平成18年に民間のビル新築事業に伴い試掘調査を行い、近世の骨蔵器や卒塔婆が出土した。



第３図　試掘調査土層柱状図（S＝1／40）

川前通から東堀前通までの間が登録されているが、今後西堀前通まで道路が延長される予定であるので、遺跡範囲も拡大する可能性がある。

遺跡の時代は近世であるが、「埋蔵文化財包蔵地の把握と周知に関する基準」（H13.4.1新潟県教育長）及び「発掘調査の要否等の判断基準」（H11.9.10新潟県教育長）により、取扱いは本発掘調査とした。

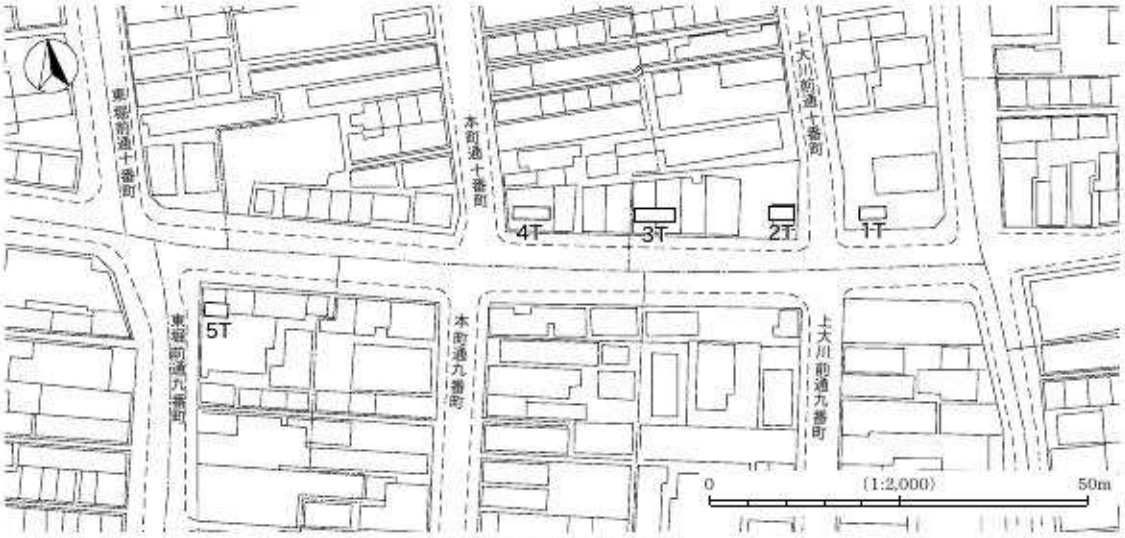
2）本発掘調査

調査位置の設定

本発掘調査は、新潟市歴史文化課との協議により、遺跡の範囲を全面的に発掘調査するのではなく、遺跡が市街地に所在するため周辺環境や工事内容等を考慮して、それぞれ目的を定め５か所のトレンチ調査とした（第４図）。

第１トレンチ（以下、1T）は、信濃川の岸（護岸）や内他門川の岸（護岸）に関する情報を得ることを目的に設定した。当初から、この地点は現代の建物による撹乱や土壌汚染が想定されていた。国土交通省新潟国道事務所（以下、国交省）から、やはり大きな地下埋設施設があるとの情報を得て、大きく破壊されていることが判明し、調査を断念した。

第２トレンチ（以下、2T）は、上大川前通に面した場所に、荷揚げ場が存在した可能性があることから設定した。また、空間利用の情報や時期的・階層的違いの情報を得ることを目的とした。面積は19.2m^2（3.2×6.0m）である。



第４図　本発掘調査位置図

第３トレンチ（以下、3T）は、移転当初は「通し屋敷」[1] であったが、約50年後は屋敷が分割されたことから、その屋敷の境に関する遺構、生活排水路やごみ穴、借家などの情報を得ることを目的とした。当初境の存在が想定された地点を中心に、長さ10mの調査範囲を設定していたが、住民の乗り入れ口確保の必要があり、東側に2.0mほど移動した。面積は32m^2（3.2×10.0m）である。

第４トレンチ（以下、4T）は、本町通に面した店に関する情報を得ることを目的に設定された。しかし、矢板を半分ほど打設した時点で、長大なコンクリート基礎が埋設しており、それ以上の矢板打設は困難と判断して調査を断念した。後に周辺住民から４階建てのビルが建っていたとの情報を得た。

第５トレンチ（以下、5T）は、東堀前通に面する屋敷に関する情報、時期的・階層的違いの情報を得ることを目的に設定された。平成16年の試掘調査13Tの西側に拡張した位置に当たる。現代の建物のコンクリート基礎が残っていたため、当初の調査予定位置から南へ0.5mほど移動した。面積は19.2m^2（3.2×6.0m）である。

ビルの跡地等は撹乱を想定し、調査地点から除外してあったが、上記のように猶把握漏れがあり、途中で調査を断念せざるを得なかった。事前に周辺住民からの十分な情報収集が必要であったと反省している。

経　　過

試掘調査の結果から、調査地点が軟弱地盤で湧水が著しいことから、トレンチ内は矢板を打設し土留めした。地表面から2.0mまで掘削できるように長さ9.0mの矢板を打設した。土層観察用にサブトレンチを掘削したところに集水枡を作り、水中ポンプで排水した。長さ9.0mの矢板を使用したためか、想定されていたほどの湧水はなく、水に悩まされることは意外に少なかった。

６月１日から12日まで矢板打設工事をした。表土に瓦礫が多く含まれ作業に支障を来たすことから、

1）近世の町では、通りに面した屋敷の間口によって地子（今で言う税金）が決められたので、間口が狭く奥行きの長い屋敷地が多く作られることになる。近世の新潟町でも本町通りや古町通りに面している屋敷は、通りから裏の堀または川岸までを屋敷地とすることを基本としており、これを通し屋敷という。このような屋敷割りを行うことによって、表側の売買の場の均等と裏側の水運への均等アクセスが可能となっている。後にこれらの屋敷地は人口増に対応するため分割されることが多いが、なお有力商人は通し屋敷を保持し続けていた。

矢板打設範囲を予め幅1.0m、深さ0.5mほど溝状に掘削し、瓦礫を取り除いた後に工事をした。

6月8日に5Tの表土除去をした。5Tは試掘調査13Tの位置と重複するため、試掘の結果を基に重機で表土除去作業を始めた。試掘の報告では表土が1.3mということであったが、実際は0.5m程度しかなく、13Tの埋め戻しの土による撹乱もあり混乱し、地表面から1.0mほど重機で掘削してしまい、遺物包含層の一部を掘削してしまった。表土除去で取り上げた遺物については、詳細な出土層位が不明であり、人力掘削分と区別するため、試掘の最上層の遺物包含層名Ⅱb層にカッコを付して註記をした。基本層序の観察は南壁で行った。また試掘調査13Tを掘り上げ、その壁面で基本層序を確認した。18・19世紀代の陶磁器を中心に多数の遺物が出土した。調査区の半分程度を試掘調査13Tで占められていたが、残っていた南側で遺構が検出され、隣家との境に当たる位置で、多数の杭が打たれた東西方向の溝を確認した。

2T・3Tは6月13日に重機で表土除去を行った。6月14日から作業員を投入し、包含層掘削を開始した。排土は調査区が狭くベルトコンベアーが使用できなかったので、一輪車で所定の場所へ搬出した。基本層序確認用のベルトは、矢板の内側に2面ないし3面の壁を残しながら調査を進めた。2T・3Tでは南壁にサブトレンチを入れて基本層序を確認した。2T・3Tは移転当初は同じ通し屋敷内と推定されたため、土層堆積も同一と考えられたが、かなり様相が違い基本層序把握に時間がかかった。

各トレンチの層序を検討した結果、すべてのトレンチの遺物包含層は盛土であるということが判明したことから、無理に統一した基本層序の設定は行わず、トレンチごとに基本層序を設定した。

7月6日には調査成果を報道関係者に公開し、7月8日と9日には2日間にわたり現地説明会を行って一般公開した。地元住民を中心に600名の参加者があり、関心の高さが伺えた。

試掘調査で想定されていた遺物包含層は4層であったが、各トレンチとも10層前後に増加したため、県教委、国交省と協議し、調査期間を大幅に延長することになった。調査はそれぞれ層位ごとに包含層掘削を行い、遺構精査・遺構掘削を行い、写真撮影・図面作成などの記録作業を行った。

9月22日に3T、9月27日に2T、10月11日に5Tの調査を終了した。10月17日には新潟大学災害復興センターの協力を得て、すべてのトレンチに2か所ジオスライサー（第5図）を打ち、地表面下2.0m以下の土層堆積状況を確認した。10月17日に3Tを埋め戻し、翌18日に2T・5Tを埋め戻した。10月23日に3Tの矢板抜き取り工事を行ったが、矢板の溝に大量の土砂が付着したまま抜き取るため、地下に出来た空洞に周囲の土砂が入り込で周囲にわずかな亀裂が生じた。2T・5Tについては、セメントとベントナイトを混合した薬剤を注入しながら、矢板抜きを行ったので亀裂は生じなかった。10月31日には整地等を行い、すべての作業を終了した。

第5図　ジオスライサー作業風景（3T）

B　調査体制

1）試掘調査

調査期間　平成16年7月15日～平成18年7月23日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　板屋越麟一）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　理	総　括	黒井　幸一　（事務局長）
	管　理	長谷川二三男（総務課長）
	庶　務	高野　正司　（総務課班長）
調　査	調査総括	藤巻　正信　（調査課長）
	調査指導	山本　　肇　（　同　試掘確認調査担当課長代理）
	調査担当	滝沢　規朗　（　同　班長）
	調査職員	片岡　千恵　（　同　嘱託員）

2）本発掘調査

調査期間　平成18年6月1日～平成18年10月31日

整理期間　平成18年12月1日～平成19年3月31日

調査主体　新潟県教育委員会（教育長　武藤克己）

調　　査　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

管　理	総　括	波多　俊二（事務局長）
	管　理	斎藤　　栄（総務課長）
	庶　務	長谷川　靖（総務課班長）
調　査	調査総括	藤巻　正信（調査課長）
	調査指導	寺崎　裕助（　同　本発掘調査担当課長代理）
	調査担当	佐藤　友子（　同　班長）
	支援組織	株式会社帆苅組
	現場代理人	今井　良男（株式会社帆苅組埋蔵文化財調査課　工事部主任）
	調査員	高田　賢治（株式会社帆苅組埋蔵文化財調査課　調査員）
	整理作業員	和泉裕子　小山たか子（以上、埋文事業団嘱託員） 釣巻奈美子　大瀧明美　佐藤直美　高橋イツ子　田中加代子（以上、株式会社帆苅組埋蔵文化財調査課）

C　整理経過

試掘調査の遺物の中で陶磁器等については、先行して8月から埋文事業団で註記作業を実施し、その後実測を行った。本発掘調査で出土した遺物の洗浄は、発掘調査と並行して行った。陶磁器・土製品・金属製品については埋文事業団で註記・接合・実測・トレース・写真撮影等の整理作業を行った。12月から支援業者の事務所で図面整理・写真整理・註記・木製品や石製品の実測・トレース・写真撮影等の本格的な整理作業を行った。

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置と地理的環境（第6・7図）

越後平野は、広大な流域面積を持つ信濃川や国内最大級の流水量を誇る阿賀野川および加治川・胎内川・荒川などの中小河川が運搬する土砂で埋め立てられて造られた、面積約2,000km^{2}に及ぶ日本屈指の沖積平野である。越後平野の西縁は東頸城丘陵及びその延長である西山丘陵と角田・弥彦山地、東縁は魚沼丘陵とその延長である新津丘陵と笹神丘陵と五頭連峰・櫛形山脈［坂井1991］により、北縁は長さ約140kmにもおよぶ海岸砂丘によって区画されている。

信濃川は関東山地の甲武信ヶ岳を源とし、長野県では千曲川と呼ばれるが、新潟県にはいって信濃川となる。新潟県では十日町盆地から越後平野に向かって北流し、大河津分水付近で流れを東に転ずる。その後、蛇行しながらしだいに向きを北に変え、新潟市関屋分水付近で海岸砂丘に流路を妨げられることで再度東流し、新潟市街を貫流しながら日本海に注ぐ。一方、阿賀野川は福島・栃木県境の荒海山を源とし、福島県では阿賀川と呼ばれ、新潟県にはいって阿賀野川と改称する。蛇行しながら津川盆地・三川盆地を西流した阿賀野川は、阿賀野市分田付近で流れを北に変え、そのまま北流して、現在では新潟市松浜町付近で日本海に注ぐ。

越後平野にはかなりの高まりを持つ海岸砂丘や微高地である自然堤防が広く分布し、平野中央部には広大な後背湿地が形成されている。自然堤防は、信濃川以西では南北方向に帯状に、阿賀野川流域では右岸に顕著に発達している。海岸砂丘は、高田平野の潟町砂丘や柏崎平野の荒浜砂丘のような古砂丘と新砂丘の2階建ての構造とは異なり、新砂丘のみが厚く堆積し、しかも10列もの砂丘が列状に並ぶ横列砂丘[1]をなしている［坂井1991］。このような自然堤防や海岸砂丘を、人間は古くから集落・畑地・道路として利用してきた。砂丘列間の低地や自然堤防に囲まれた後背湿地の中央部には、鳥屋野潟や福島潟など大小様々な潟湖や湿地・沼地がみられる。洪水のたびに冠水が続き「田植えできても稲刈りなし」といわれた［坂井1991］低湿地・沼地を、近世以降、分水や放・排水路および堤防や排水機場の掘削・建設により開発・干拓して乾田化し、日本有数の穀倉地帯に変貌させた。さらに、近年では宅地や商工業用地としても利用されるようになってきている。

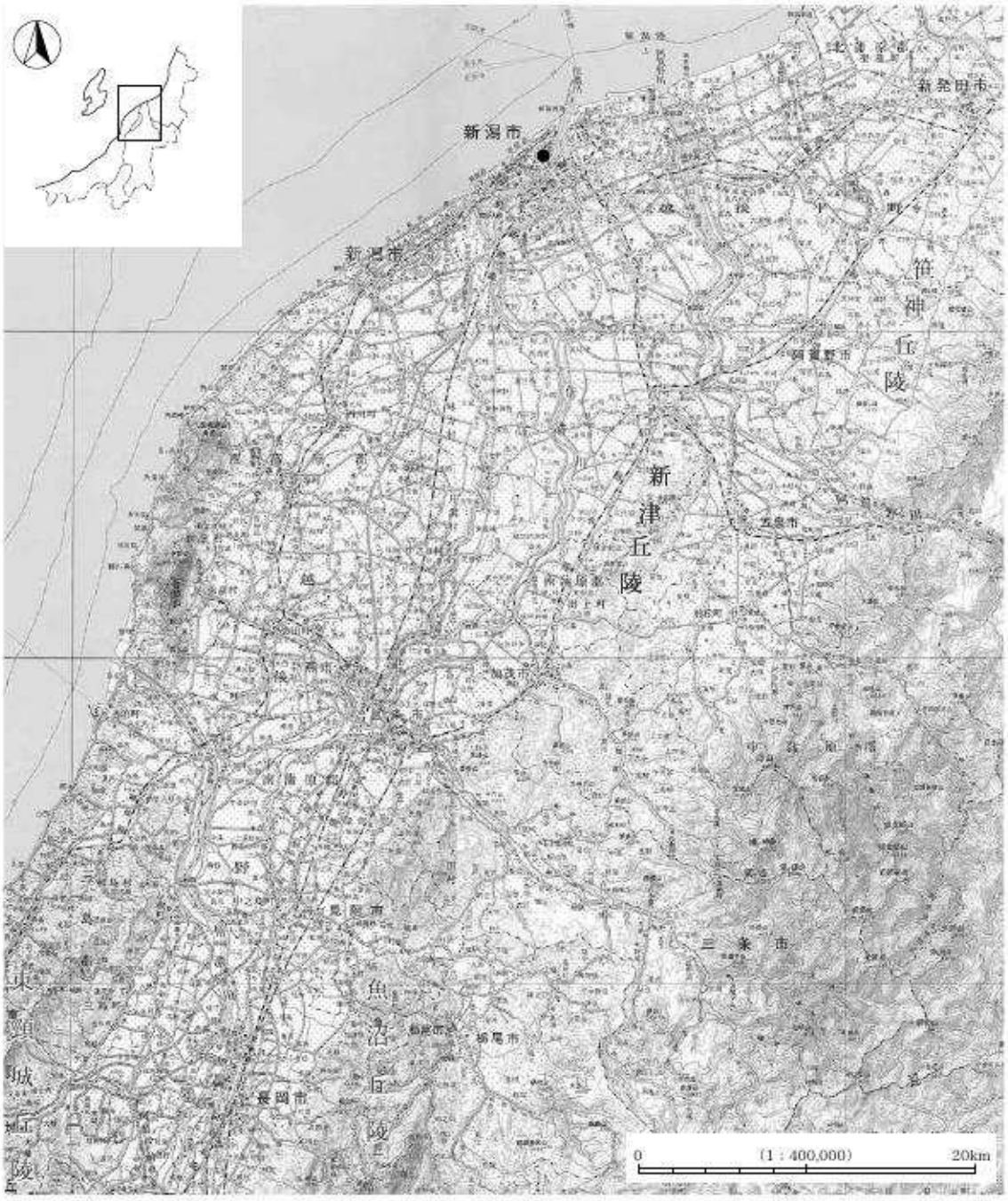
このような越後平野の信濃川・阿賀野川下流域から河口にかけて新潟市は位置する。今回、発掘調査を行った近世新潟町跡広小路堀地点は、上大川前通・東堀前通間を直交する通りに面して所在し、標高は0.5mである。広小路は、信濃川河口に立地する新潟市街をほぼ南北に走る上大川前通から本町通・東堀通・古町通・西堀通の間を直交する小路である。

現在の信濃川左岸における新潟市街は、河口に形成された白山・寄居島と呼ばれた中州を造成し、明暦元（1655）年に移転した新潟町を基礎としている。この造成の過程で、中州を取り巻いていた信濃川の

1）砂丘列は、その分布や形状、腐食層の違いから新砂丘Ⅰ～Ⅲの3つに大別され、さらに細分化されて内陸から新砂丘Ⅰ－1～4、新砂丘Ⅱ－1～4、新砂丘Ⅲ1～2と並ぶ［坂井1991］。

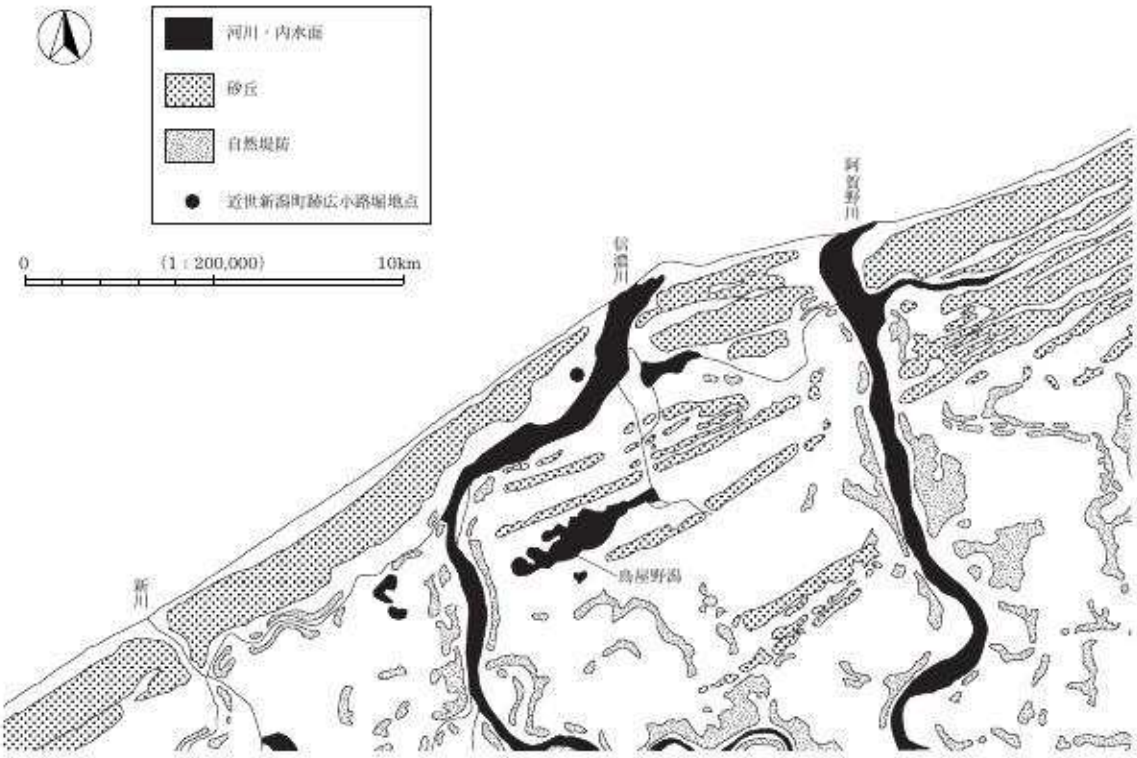
細流を整備し、また、新たに堀割を掘削するなどして寺町掘（現西堀）・片原掘（現東堀）の南北の堀と、これに直交する広小路堀・新津屋堀などの東西の堀が造られた。これらの堀は、港町であり商業地である新潟町に、信濃川河口に停泊する北前船などの大型廻船から艀・川船などの小型の船で物資を搬入・搬出する経路の役割を果たした。近世を通じて新潟町はこれらの堀を含め河川や潟湖などの内水面を活用し、信濃川河口の使用権を独占することで港町として繁栄した。

安政５（1858）年、幕府はアメリカ・イギリス・フランス・オランダ・ロシアの５か国と通商条約を締結した。その内容に、新潟を開港することが約され、開港期日を安政６年12月９日（1860年１月１日）と



第６図　越後平野の地勢と遺跡の位置

（国土地理院地勢図「新潟」平成16年修正・「長岡」平成15年修正に加筆、●近世新潟町跡広小路堀地点）



第７図　遺跡周辺の地形概念図（[新潟古砂丘グループ1979] を改変）

定めていた。しかし、新潟湊が遠浅で大型和船や喫水の深い外国船が入港できないことなど様々な要因が関わり、実際に開港したのは明治元年11月19日（1869年1月1日）であった。日本海側で唯一の開港場であったが、河口港であるがための水深の浅さは変わらず、明治・大正期を通じてその改修・信濃川の治水が課題となった。大型船が接岸できる近代的な港の築港は、大正11（1922）年大河津分水の竣工によって信濃川への土砂流入が減少するようになってから急速に進み、大正15（1926）年３月に完成した。港の場所は、信濃川右岸の旧沼垂町[1]の地であった。

江戸時代中頃から新潟町の東側に新たな中州が複数形成されていた。これらの中州の一部には町割りがなされていたが、大部分は畑地・荒蕪地であり、中州の周囲には新潟町の堀と信濃川河口の港を結ぶ水路が造られた。明治初年、これらの中州は宅地として開発され、また、寺町の裏など新潟町周辺の宅地開発も行われるようになった。この宅地開発に伴い、新たに堀が掘削され、堀と堀との間をつなぐ橋も多数造られた。それだけでなく、通りや堀・橋の名称変更もなされた。江戸時代から大正期まで、堀は、物資の搬入・搬出経路という経済基盤のみならず、飲用水を除く生活用水を供給する場であり、生活排水を捨てる場でもあった。しかし、明治以降、宅地開発が進み、生活排水の流入が多くなると、堀は伝染病の温床ともなり、不要な堀の埋め立て、堀の整備・美化、上水道の設置がなされた。

大正11（1922）年、前述した大河津分水の通水が開始されると信濃川の水位が下がり、同時に堀の水位も下がり、衛生状態も悪化するようになった。大正12（1923）年、新潟市に都市計画法が適用された。これは、明治後期以降、近代産業の発展に伴う工業化の進展、交通量の増加、資本主義経済の発達により計画的なまちづくりが要請されたためである。昭和にはいると、その一環として堀の埋め立て・道路化が

1）新潟市と沼垂町は大正3（1914）年合併し、新潟市となった。

計画されたが、住民の反対にあい、廃案となった。太平洋戦争後の昭和20年代、堀の環境がますます悪化したため、堀は少しずつ埋め立てられていった。その後、高度経済成長がすすみ、自動車による陸上輸送量が増大すると、堀を埋め立て、道路を拡幅することが無視できない状況となった。その結果、昭和30（1955）年の新潟大火からの復興、地盤沈下による溢水の防止、昭和39（1964）年の新潟国体開催を契機に全ての堀は埋め立てられ、江戸時代から続く水郷の面影は消えた。

国体の熱気が未ださめやらない昭和39（1964）年6月16日午後1時1分、マグニチュード7.5の新潟地震が起きた。死者26名、負傷者477名、道路・盛土の亀裂、地盤の陥没・膨れあがり、地層の液状化に伴う噴砂現象、建物の陥没・亀裂・倒壊、昭和大橋に代表される橋桁の落下、埠頭・護岸の倒壊・水没、地下水の噴出及び津波による浸水、原油タンク等からの出火による罹災など大震災となった。今回発掘調査した近世新潟町跡広小路堀地点でも、新潟地震によるとみられる噴砂の痕跡が確認されている。

平成19（2007）年4月1日より、新潟市は日本海側初の政令指定都市に移行した。県都として、新潟県における商工業の中心都市として発展してきた新潟市は、近年の市町村合併により市域を拡大し、80万を超す人口と広大な市域を擁する政令指定都市として政治・行政上でも新たな段階に入ったといえよう。

2　新潟町の歴史

新潟町の歴史については、『新潟市史』通史編1［小村ほか1995］・2［小村ほか1997］、資料編1［甘粕編1994］・2［小村編1990］を基に記述する。

A　新潟の三ケ津

新潟市域には信濃川と阿賀野川の河口があり、信濃川の右岸の河口部には古代から続く国津である蒲原津が存在した。平安時代の延長5（927）年に編纂された『延喜式』には、越後国の国津として蒲原津が定められていた。蒲原津は蒲原郡に属する。この時期、国府は頸城郡の関川流域にあったと考えられるが、国内の物資集積地として、大河川である信濃川、阿賀野川の河口に近接する蒲原津は利便性が高かったと考えられる。

中世以降、信濃川と阿賀野川の河口には蒲原津と沼垂津、新潟津の3つの港があり、上杉氏は三ヶ津と呼び、上杉謙信は天文20（1551）年に代官を任命し支配させている。永禄11（1568）年には、上杉輝虎（謙信）が村上の本庄氏攻撃時に、栗林氏らを三ケ津に集結するよう命じるなど、戦国期には防衛上の重要な港となる。天正8（1580）年新発田重家が新潟津の沖ノ口徴収権を奪い取り、翌年には上杉景勝との抗争が始まる。天正14（1586）年景勝方が新潟・沼垂の重家方を制圧し、6年にも及ぶ抗争は集結し越後を統一する。この景勝の勝利には、新潟町の玉木屋七兵衛（大隅）と若狭屋清左衛門（常安）の協力があり，戦功を賞されている。

この間、蒲原の津は衰退し、戦国時代末までには記録に現れなくなる。沼垂津は14世紀にその名が初めて見え、蒲原津に代わり繁栄するが、近世に入り新興の新潟津と港の利権等を争うが次第に衰退する。新潟の地名が初めて文献に現れるのは永禄7（1564）年である。京都・醍醐寺の僧の旅の記録に「ニカタノワタリ」「新方」と出てくる。三ケ津のうち最後に名が出るのは新潟津である。これら三ケ津があった信濃川、阿賀野川の河口は流路の変遷が著しく、複数回の移転が考えられ、中世の頃の位置は不明である。

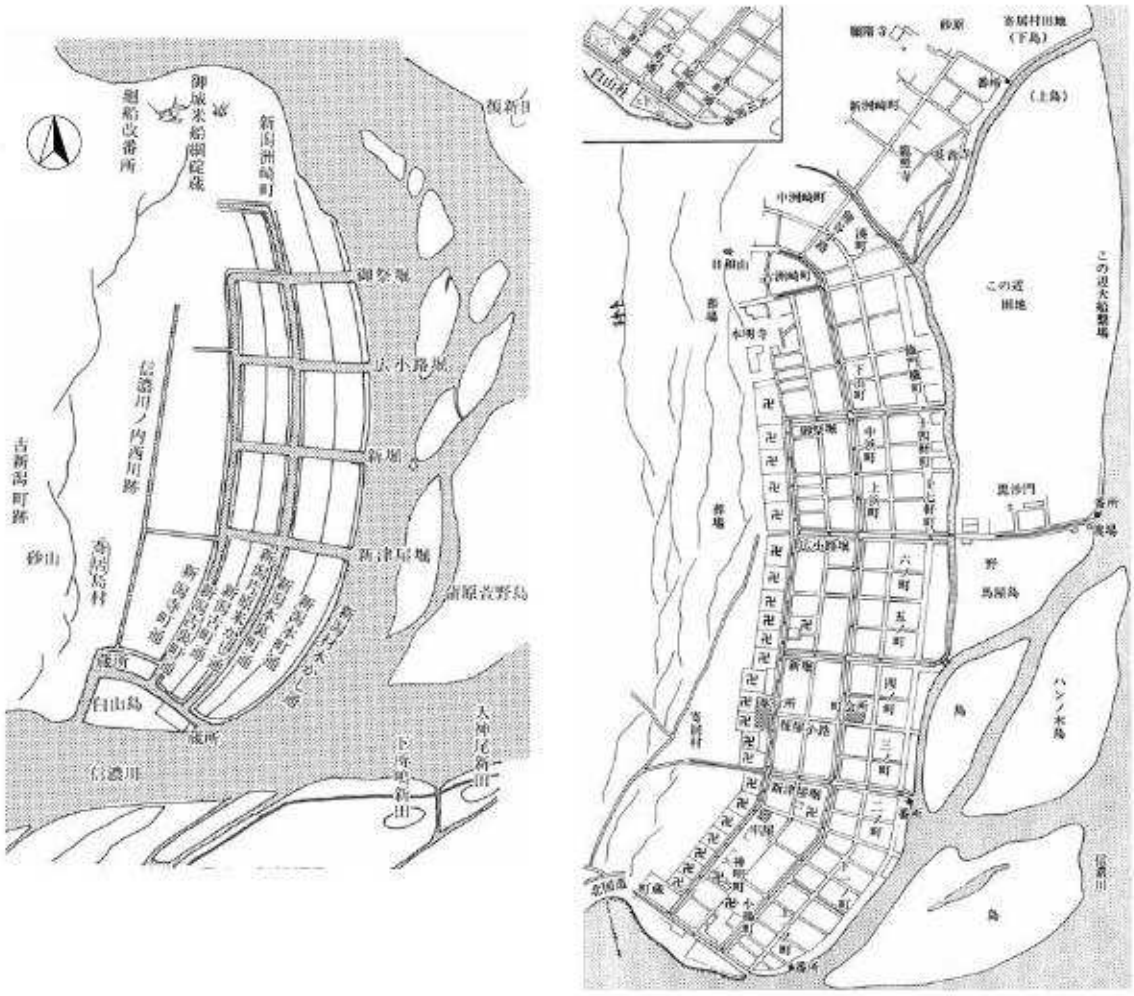
B　新潟町の移転

1）古新潟町の成立と移転

新潟町の移転回数は不明であるが、近世初期に少なくとも2回移転している。1回目の移転は、元和3（1617）年に長岡城主堀直寄によって町建てされている。元禄11（1698）年の絵図（第8図左）にみえる「古新潟町」である。元和3年以前の古新潟町は本町通と片原通で構成されていたが、堀直寄は古新潟町に新たに新町・材木町・洲崎町の町建てを命じる。古新潟町を拡大し港湾都市として整備したのであり、移転という表現は適切でないかもしれない。後に本町通は古町通（以下、古町通に統一）、新町通は本町通（以下、本町通に統一）と改称された。直寄が行った町立ては、現在の新潟町の町割りのもととなっている。寛永年間（1624～1644）には佐藤家が川原町（後に神明町と改称）を開発している。また、寺町が古新潟町時代に形成されている。

「古新潟町」よりもさらに古い新潟町が、青山村さらに古くは赤塚村にあったという記録もある。

寛永15（1638）年長岡藩は新潟町の移転を幕府に申請した。長岡藩は古新潟町の移転に支障がないか新発田藩に照会し、了承を得ている。移転の最大の理由は阿賀野川と合流して信濃川の流れが変わり、それまで利用していた川筋が役立たなくなったことである。当時、信濃川には白山島と寄居島、蒲原萱野島



第8図　新潟町の変遷と拡大（『新潟市史』通史編1・2から転載）
（左：元禄11（1698）年「蒲原新潟立会小絵図」から作成、右：享和元（1801）年頃　昭和9年版『新潟市史』所収図から作成）

があった。信濃川の流れは３本あり、古新潟町と白山・寄居島の間、白山・寄居島と蒲原萱野島の間、蒲原萱野島と蒲原村の間の３本の流れになっていた。湊として利用していたのは古新潟町と白山・寄居島の間の流れであろう。寛永年間から正保ころ（1640年代中頃）には、新潟湊がほとんど機能していない状況だった。

町の移転先は白山・寄居島であった。正保国絵図には寄居島は長さ12町（約1.3km）、幅４町（約0.4km）、白山島は長さ21町40間（約2.3km）、幅６町10間（約0.7km）、と記されている。移転前の白山・寄居島には寄居村の耕地が約60町歩（約60ha）ほどあり、白山島には白山神社が鎮座し、町人の蔵が建っていた。

町移転についての幕府の正式な許可が下りたのは承応３（1654）年で、移転申請から許可が下りるまで17年を要した。長岡藩の公式記録では移転は明暦元（1655）年としている。

2）明暦移転と町割り

新潟町の移転準備は幕府の許可が下りる以前から進められていた。新潟町の移転先を確保するため、長岡藩は寄居村から白山・寄居島の耕地を取り上げ、代地として後の寺町裏手の古川跡を与えた。古川跡は、湊として使用していた信濃川の分流のことであり、このころにはほぼ埋まっていたとみられる。さらに、承応２（1653）年には白山宮から白山島のうち神社地を除く社領を取り上げ、その代償として平島村の開発地のうちから社領として30石分を与えられている。藩は新潟町の地固めや堀の掘削に全領地から人足役または人足役金を負担させ、工事は承応３（1654）年まで行われていた。前述の通り長岡藩の公式記録では移転は明暦元（1655）年となっているが、それ以前の慶安年間（1648～1652）ころには、新津屋小路辺りには家が50軒ほどすでに建っていた。一方、明暦初め、御祭小路から浜町にかけての新屋敷36軒は地固めという基礎工事さえ済んでおらず、地割だけが終了していた。この地域の屋敷の完成は万治から寛文年間（1658～1673）頃とみられる。移転の申請から完成まで30年余り費やしたことになる。

新しい新潟町の規模は明暦地子帳に「家数1,011（実際は1,045）軒、間数合2,308間２尺３寸５分」と記され、町の長さは古新潟町時代と比べて511間長くなっている。移転するに当たり古新潟町の町割りを踏襲して移すことを原則としていた。実際は多少変化し、古新潟町時代に町の上手にあった藩の役所を寺町の中央に移し、空いたところに川原町を移して神明町と改称した。また、南北に片原川（現東堀）・寺町川（現西堀）、東西に白山堀（後の一番堀）・新津屋小路堀（後の二番堀）・広小路堀（後の四番堀）・御祭堀（後の五番堀）を掘り、交通網を整備した。片原川、寺町川はゆるく湾曲しており、白山・寄居島の自然地形を生かしつつ掘削された。新堀（後の三番堀）は明暦移転時には未だ掘削されておらず、延宝年間（1673～1681）に道心小路を掘削し堀とした。正徳７（1710）年に堀の護岸を兼ねて柳を植えている。

新潟町の街路には南北に走る通りと東西に走る小路がある。通りは店の並ぶ道で、小路は通りを結ぶ横道で店はなかった。明暦頃には通りは本町通と古町通で片原川に沿う通りはまだ出来ていない。大川前（現上大川前通）は文字通り大川すなわち信濃川に面していて、通りにはなっていなかった。寺町川の西側は寺院が並び店はなく、東側は古町通の屋敷地の裏で通りではなかった。

信濃川河口は、川によって運ばれる土砂の堆積によって次第に東へ移動し、町外れから河口までの距離は年々伸びていた。また、信濃川左岸の新潟町側には砂州が付いたり、中州が寄り付いたりした。こうして出来た信濃川縁の土地は、榛木島（はんのき）・秣（まくさ）島・毘沙門（びしゃもん）島・上（かみ）島・下（しも）島などと呼ばれた。一方、海岸側も信濃川が供給する土砂によって砂丘が増え続け、海岸線は沖合へ延びていった。新潟町では、年々新しい土

地が生まれていた（第8図）。

町に寄り付いた州や中州は、当初町民や寄居村の人々の萱刈り場や土取り場などになっていた。また、大川前通に寄り付いた中州は、回船の船繋場や荷揚げ場、あるいは冬囲い場に使用されただけでなく、伝馬用の秣場などにもなっていた。藩はこれらの場所を使う者に野手金を課した。野手金を納めることによって、その土地の使用権を得た町、大問屋、個人はさらに希望者にその土地を貸し付け、貸付金を徴収していた。これらの州・島の帰属、あるいは湊の支配権等を巡っては、沼垂町との争いが何度も起こっている。

本発掘調査で遺物包含層が、10数回にも及ぶ盛土であるということが判明しているが、これらの州で土取りされたものが、各屋敷の盛土に利用された可能性が高いと考える。「字土取場」という名の州は、3町6歩の大きさがあった。

C　広小路堀地点について

本書の広小路堀地点は、堀の幅が4間（約7.2m）で両側の小路の幅は3間（約5.4m）、計10間（約18.0m）であった。新潟町で東西に掘られた堀では、新津屋小路堀、御祭堀、新堀とともに大きい堀で、大川前から寺町堀までを貫いている。この広小路の堀と小路の幅は、現在の道路と歩道の幅に当たると見られる。現在歩道には柳の木が植えてあるが、江戸時代にはなかったものである。

以下、トレンチごとに屋敷地の所有者の変遷を見る。

2T

2Tの位置は、明暦移転直後の屋敷所有者が明確でない。明暦地子帳（第9図）では、本町通に間口5間（約9.0m）の店を持つ回船問屋わかさや吉左衛門の屋敷である。隣は本町通に間口3間3尺5寸の店を持つ漆や吉右衛門・長岡新九郎の屋敷地で、これに但し書きが、川端7間1尺角屋敷半分引とある。通常は本町通からの通し屋敷となることから、2Tはわかさや吉左衛門の屋敷となるはずである。しかし、漆や・長岡の屋敷地が川端角屋敷とあることから、2Tは漆や・長岡の屋敷地になる可能性もある。半分引がどのように屋敷地を区画したかは明確でない。明暦地子帳は絵図面ではなく、地子を掛けられた屋敷所有者名を列挙したものであるから、現状では2Tの移転直後の所有者はわかさや・漆や・長岡3者の可能性がある。

115年後の明和8（1771）年の絵図（第10図）では、若狭屋市兵衛の屋敷地で間口は8間3尺5寸（約15.0m）と広がっている。他門川（旧大川）との間に六ノ町大川端という道ができ、この道に面して店があったところに2Tが当たる。明暦から続く若狭屋の家系である。半在家とするときに六ノ町大川端のほうが港に近く、元禄初めより本町通と競合するほど繁栄していたため、隣家を買い取り、間口を広げた可能性もある。

明治29（1896）年まで屋敷範囲は変わらず、上大川前通に面した回船問屋藤田の屋敷地の店側となっている。上大川前通周辺は、明治以降も回船問屋や証券会社、米穀取引所などが多数集まる商業の中心地であった。

3T

3Tは屋敷境を検出する為に位置が設定されている。明暦2（1656）年の地子帳では、本町通に間口5間（約9.0m）の店を持つ回船問屋わかさや吉左衛門の屋敷である。新潟町の屋敷の間口は4間が基本であるが、5間あることから大きな商人である。

明和8（1771）年までには、トレンチの幅10mのうち東側約7m分が六ノ町大川端に面する若狭屋市

兵衛の屋敷地となっている。屋敷の裏側に3Tの東側が当たる。西側約3mは本町通に面した若さ屋理左衛門の屋敷地の裏側となっている。明暦から続く同じ若狭屋の家系であるが，こちらが分家の可能性がある。

明暦2年地子帳に載る「わかさや」は大塩常安家といい，屋号を若狭屋と言った。前述のように先祖の若狭屋七兵衛（常安）は天正14（1586）年に上杉景勝が新潟・沼垂を攻略したとき、玉木大隅と共に景勝方に内応して景勝の勝因を作っている。その子孫は市兵衛・吉左衛門と称した。若狭屋は寛政年間（1789～1801）検断格町老となったが，天保6（1835）年の唐物抜け荷事件に関係して家財を没収され，江戸払いとなっている。若狭屋は中世末から江戸時代後期までを通じ，新潟町を代表する大商人であった。

明治29（1896）年まで屋敷範囲は変わらず，西側は本町通に面した生糸・真綿を商う伊藤家の屋敷地の裏側となっている。東側は2Tと同じく上大川前通に面した回船問屋藤田の屋敷地の裏側となっている。3Tから2Tの間には，平成16年まで6軒長屋が建っており，西側2軒目と3軒目の間が現町境となっている。本発掘調査中に行った元住民の方からの聞き取りでは，明治20年頃に建った長屋と聞いているとのことであった。

5T

5Tは，明暦2（1656）年の地子帳では，本町通に間口4間（約7.2m）の店を持つ回船問屋紀伊国や徳衛門の通し屋敷となっている。5Tの位置は屋敷の裏側で片原川（現東堀）に面している。ここも屋敷の裏側に当たるので借家が建てられることが多かった。また，5Tの範囲に隣家との境が掛かっている可能性がある。

115年後の明和8（1771）年まで，屋敷の大きさは変わらないが，鍋屋伝兵衛の通し屋敷に変わっている。5Tの位置は以前と変わらず屋敷の裏であるが，片原川に面するのではなく，間に六ノ町東片原（現東堀前通）が出来ている。

明治29（1896）年までには屋敷地は半分になり，東堀に面した酒類卸本問の店の位置になる。

第9図　明暦2（1656）年　広小路付近図（「明暦地子帳」『新潟市史』資料編2から作成）

第10図　明和8（1771）年　広小路付近図（「新潟町村絵図」から作成）

第Ⅲ章　遺　　跡

1　調 査 方 法

近世新潟町跡は、信濃川の中州であった白山島と寄居島に計画的に作られた湊町である。本調査地点は寄居島内の広小路堀の両側にあった町屋の跡である。

A　調査区の呼称とグリッド設定

本発掘調査は5か所予定していたが、前述のように実際は3か所しか出来なかった。それぞれの調査地点については、当初予定のトレンチ番号で呼称することとし、第2トレンチ（以下、2T）第3トレンチ（以下、3T）第5トレンチ（以下、5T）とした。各トレンチの位置は現地の状況に応じて設定している。

1）グリッドの設定

グリッドはトレンチごとに設定したが、基本的に調査区に打設した矢板の北西隅の交点を始点に、長軸（東西）方向を基準線とし2×2mのグリッドを設定した。矢板のゆがみがあるため4隅がグリッド内に入っていない部分もあるが、隣接するグリッドの範囲内とした。また、調査区の範囲は、整理段階で矢板の交点から凸部に変更したため、矢板の四隅の交点から全体に13.0cm拡張している。グリッドの呼称は第11～13図のように南西隅を1（基点）に算用数字順とした。包含層出土遺物は、グリッドと層位を記録して取り上げた。

2Tの位置は新潟市中央区上大川前通十番町1,863番地である。駐車場跡地で、砂が敷かれ上に砕石が敷かれていた。現地表面の標高は0.40mである。測点の座標（世界測地系）は以下の通りである。南北グリッドラインは真北から9.0749度東に傾く。グリッドは1～6までである（第11図）。

測点	北緯	東経	X座標	Y座標
A：北西隅	37－55－33.1394	139－02－56.1882	213848.181	48258.703
B：北東隅	37－55－33.1074	139－02－56.4306	213847.229	48264.627

3Tの位置は西側約3mが新潟市中央区本町通十番町1,862番地、東側約7mが上大川前通十番町1,863番地である。住宅・商店移転後の荒地で標高は0.48mである。測点の座標は以下の通りである。南北グリッドラインは真北から9.5842度東に傾く。グリッドは1～10までである（第12図）。

測点	北緯	東経	X座標	Y座標
C：北西隅	37－55－33.3563	139－02－54.7696	213498.765	48540.580
D：北東隅	37－55－33.2982	139－02－55.1725	213497.806	48546.550

5Tの位置は新潟市中央区東堀前通九番町1,392番地である。商店移転後の荒地で標高は0.04mである。測点の座標は以下の通りである。南北グリッドラインは真北から12.1300度東に傾く。グリッドは1～6までである（第13図）。

測点	北緯	東経	X座標	Y座標
E：北西隅	37－55－33.2125	139－02－49.9511	213849.539	48106.378
F：北東隅	37－55－33.1702	139－02－50.1910	213848.271	48112.243

B 基本層序

調査地点の2Tと5Tの間は約150mあり、遺跡全体としての統一的な基本層序を把握することは困難であった。2Tと3Tは、移転当初は同一の町屋の可能性もあったことから、層序は同一の可能性が高かったが、実際はかなり相違があり、無理な統一は行わなかった。また、遺物包含層はすべて盛土であることが分かり、自然堆積土が地表面下何mにあるのかも問題となった。試掘調査の結果から掘削深度を2.0mとしたため、2.0m以下の掘削は矢板の設計上不可能であった。このため、下層の自然堆積土の状況は、新潟大学災害復興科学センターの高濱信行氏等の協力を得て、ジオスライサーを打ち込み情報を得た。ジオスライサーは各トレンチ2か所打設したが、3Tでは上大川前通に向かい若干下方へ傾斜していることが確認された。基本層序の説明はトレンチごとに行う。トレンチごとに層位を設定しているため、同じローマ数字や算用数字を使用しているがトレンチ間での対応関係はない。また、2T、3Tで盛土をつき固めたような層が複数存在するが、基本層序に整地層：Sの記号を付している。前述（第Ⅱ章2）のように明暦移転に際し、地固め等の土木工事を行っているが、どれが相当するかは確定できていない。地下水位が上がり弛緩してしまった可能性もある。

2T

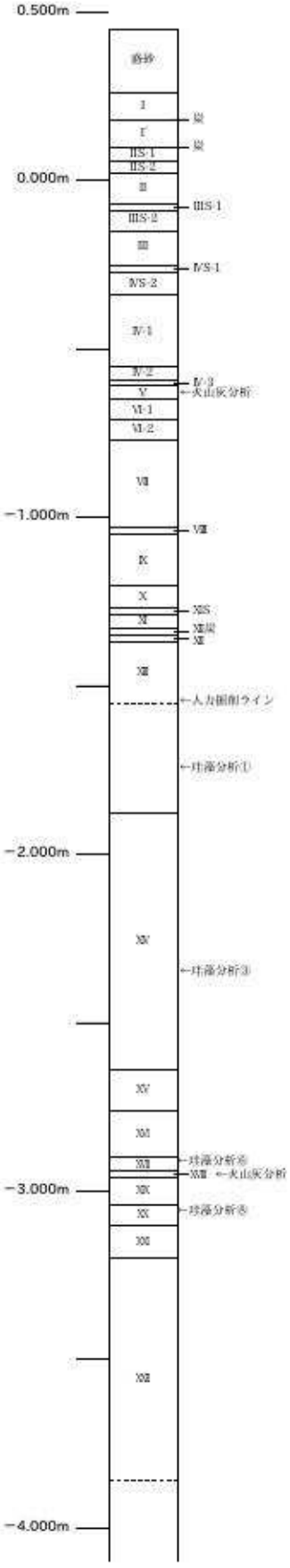
基本層序の解説は第11図を参照願いたい。盛土の堆積は整地層をはさんで整然と堆積しており、地震等の影響も見られなかった[1)]。しかし、盛土の影響もあると考えられるが、層序と出土遺物の年代は整合性を欠いている。遺物はⅠ～XⅢ層まで出土し、遺構はⅡ～XⅢ層まで検出された。XⅣ層以下は、砂と粘土の互層が続くことから自然堆積と考えられる。Ⅱ～Ⅳ層までの整地層の厚さが2cm程度であるのに対し、Ⅴ層の灰色粘土が4～7cmと厚いことから土間になる可能性もある。2TではⅤ層とジオスライサーで採取した標高－2.95mのXⅧ層でも火山灰を検出しており、供給地については分析を行ったが確定できなかった（第Ⅴ章1参照）。

3T

基本層序の解説は第12図を参照願いたい。遺物はⅠ～Ⅹ層、XV層で出土した。遺構はⅡ層からⅩ層まで検出された。Ⅰ～Ⅸ層までは盛土である。Ⅹ層は砂層で層厚が110cmもあることから自然堆積と考え、人力掘削で無遺物層まで調査できたと考えていた。しかし、ジオスライサーで採取されたⅩⅠ層上面にⅡ～Ⅳ層で検出された整地層と同様の硬化面が検出されたこと、またXⅡ層の黒色腐植土中から箸状木製品が出土したことから、XⅡ層までは文化層が存在する可能性がある。XⅦ・XⅧ層には水草のような植物が含まれていたことから、常に水にさらされる状態であったと推測され、XⅦ層以下は自然堆積の可能性が高いと考えられる。

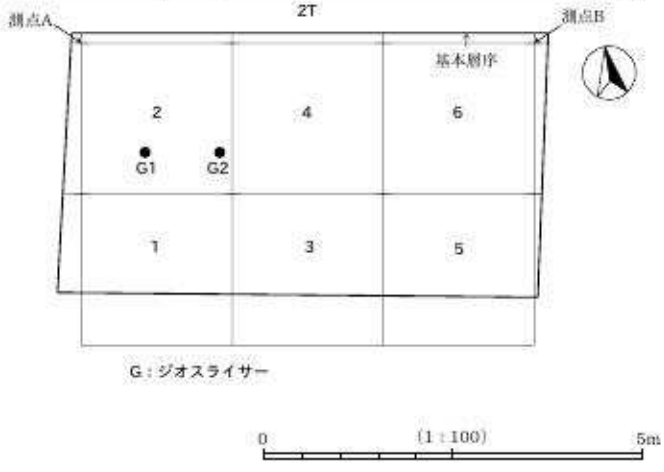
3Tは一部整地層も確認できたが、複数回の地震による噴砂等の影響を受け大きく乱れている。直近の新潟地震とそれ以前に新潟町に影響を及ぼしたと考えられる地震は、天保4（1833）年10月26日に松ヶ崎浜に発生した地震があり、ⅡⅢaS層の間に堆積している砂層は、このときの噴砂の可能性もある［南2002］。それ以前には、宝暦12（1762）年3月29日に起きたマグニチュード6と推定される白根地

1） 昭和39（1964）年の新潟地震のとき，液状化現象や不同沈下による建物被害が多く報告されている。旧寄居島の範囲に当たるところでは被害がほとんどなく、新しく寄り付いた島や中州に大きな被害が出ている。広小路付近では浸水の被害が最も大きく、上大川前通に沿って噴砂と道路の波状変形が確認されている「新潟地震地盤災害図」『アーバン・クボタ17』［久保田鉄工所1979］。

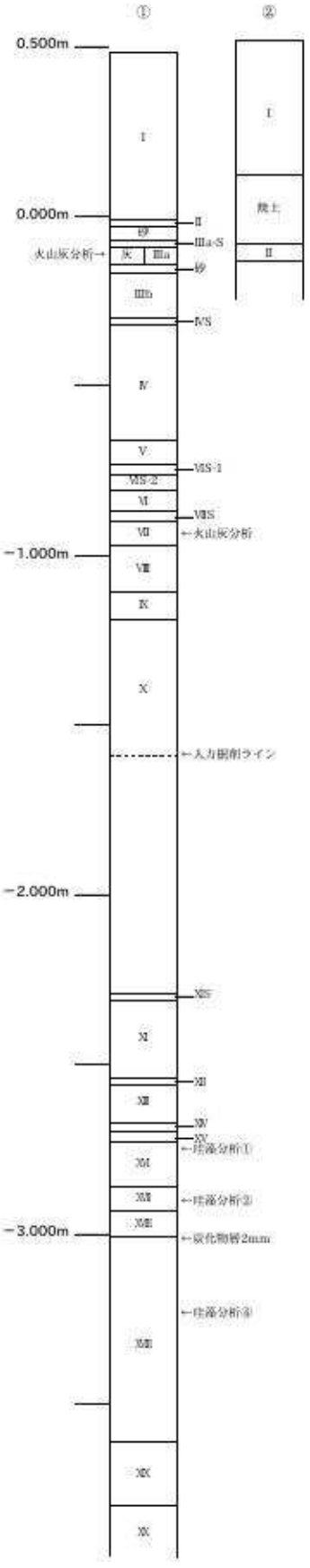


2T基本層序　遺物はI～XXII層まで出土する。
遺構はII～XIII層間で検出された。
地震の影響は出ていない。

層序	色調	層厚(cm)	説明	粘性	しまり
盛砂	白色砂	18～33	平成16年の駐車場撤去後に盛られる。	無	無
I	褐色土10YR4/4	2～8	灰黄褐色粘土ブロック（10YR4/2）少量、砂多量、炭化物少量含む。表土、近・現代の遺物含む。	無	有
I'	褐色砂10YR4/4	2～10	灰黄褐色粘土ブロック斑らに多量に含む。盛土、焼土、炭化物少量含む。上面に炭化物層状む。	無	有
IIS-1	褐色土10YR4/4	8	灰黄褐色粘土ブロック斑らに少量含む。盛土、整地層、焼土、炭化物少量含む。硬くしまる。	有	有
IIS-2	灰黄褐色土10YR4/2	10	褐灰砂質に少量含む。盛土、整地層、炭化物、焼土わずかに含む。硬くしまる。	有	有
II	にぶい黄褐色土10YR4/3	7	灰黄褐色粘土10YR4/2と褐色粘土含む。	有	有
IIIS-1	黒褐色粘土10YR3/2	3	にぶい黄褐色土少量炭化物わずかに含む。整地層、上面被熱により赤変。	有	有
IIIS-2	にぶい黄褐色土10YR4/3	8	灰黄褐色粘土10YR4/2斑に多量、砂多量に含む。盛土、整地層、炭化物わずかに含む。硬くしまる。	有	有
III	にぶい黄褐色土10YR4/3	10	IIIS-2に類似するが灰黄褐色粘土が少なく、砂多量に含む。盛土。	有	有
IVS-1	黒褐色土10YR3/2	2	炭化物わずかに含む。盛土。	有	有
IVS-2	にぶい黄褐色土10YR4/3	8	灰黄褐色粘土斑に少量含む。盛土、炭化物わずかに含む。硬くしまる。	有	有
IV-1	灰黄褐色粘土10YR4/2	2	鉄分沈着、砂多量、炭化物わずかに含む。盛土。極めて硬くしまる。	有	有
IV-2	灰黄褐色粘土10YR4/2	8	鉄分沈着少量、盛土。硬くしまる。	有	有
IV-3	灰黄褐色土10YR4/2	3～6	褐灰色土ブロック状にわずかに含む。盛土、砂多量、炭化物わずかに含む。鉄分の沈着多。	有	有
V	灰色粘土5Y4/1	5	砂大量に含む。炭化物少量含む。2T2に火山灰有。盛土。	有	有
VI-1	黒褐色土10YR3/1	2～6	砂中量、炭化物わずかに含む。盛土。	有	有
VI-2	にぶい黄褐色粘土10YR3/4	3～13	表面鉄分沈着のため硬化。盛土。	有	有
VII	にぶい黄褐色砂10YR6/2	25	盛土。	無	無
VIII	褐灰色粘土10YR4/1	2～5	盛土。	有	有
IX	にぶい黄褐色砂10YR4/3	2～15	盛土。	無	有
X	にぶい黄褐色砂10YR4/3	7	盛土。鉄分少量沈殿。	無	有
XI	青灰色粘土5BG5/1	8	炭化物わずかに含む。盛土。	有	有
XII-1	炭化物	2	植物物を層状に少量含む。盛土。	有	有
XII-2	灰黄褐色砂10YR4/2	3	灰黄褐色粘土ブロック斑に多量含む。盛土。	無	有
XII	灰黄褐色砂10YR4/2	51		無	有
XIV	青灰色粘土10BG6/1	76	植物物、炭化物含む。	有	無
XV	青灰色砂10BG6/1	12	粒子細かい。	無	有
XVI	青灰色砂10BG6/1	14	粘土含む。	無	有
XVII	青灰色10BG5/1	3	粗砂。	無	有
XVIII	緑灰色粘土5G6/1	2	火山灰含む。	有	有
XIX	青灰色粘土10BG6/1	8		有	有
XX	暗青灰色砂10BG5/1	5	粒子中程度。	無	有
XXI	暗青灰色砂10BG4/1	10	粒子細かい。	無	有
XXII	暗青灰色砂10BG3/1	66～	粘土ブロック状に含む。	無	有

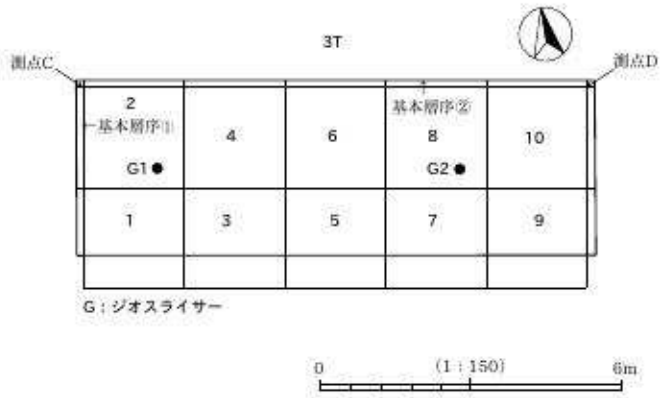


第11図　2Tグリッド設定図・基本層序

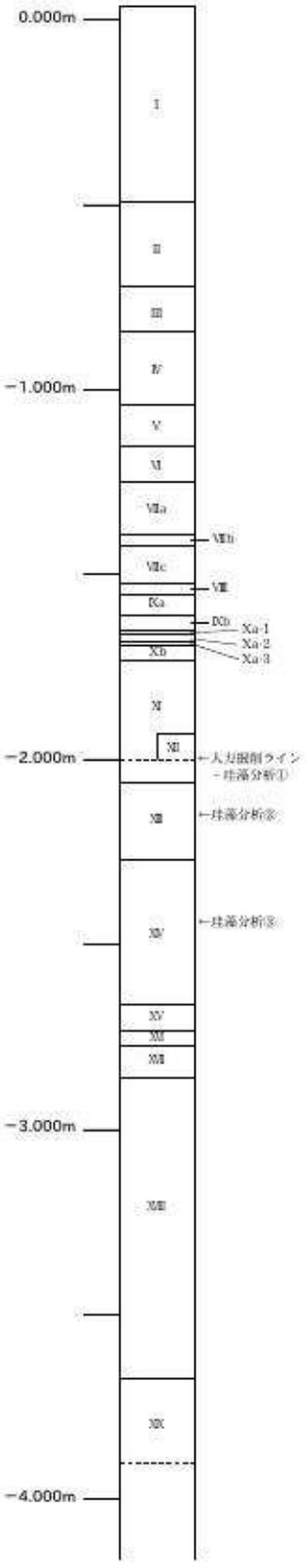


3T基本層序　遺物はI～XII層まで出土する。
遺構はII～X層まで検出された。
火災跡有。
数度の地震の影響を受け、層序はかなり乱れる。

層序	色調	層厚(cm)	説明	粘性	しまり
I	にぶい黄褐色土10YR5/4	35～55	表土。平成16年住宅撤去後に盛られる。近・現代の遺物含む。	有	無
現土	赤色土10R5/8	4～20	ほぼ全面を覆う。	無	有
II	明黄褐色土10YR6/6		褐灰色土を斑に含む。盛土。炭化物、焼土含む。部分的にIIS層有。	有	有
砂	褐灰色砂10YR6/1	4～8	遺構覆土または噴砂の可能性有。部分的に有。	無	無
IIIa-S	灰色土5Y6/1	2	盛土。整地層で部分的に有。硬くしまる。	有	有
灰	明褐灰色土5YR7/2	6	IIIa層と同レベルにわずかに有。火山ガラス検出。	無	有
IIIa	明黄褐色土10YR6/6	4～17	盛土。	有	有
III	褐灰色砂10YR6/1	3～14	IIIaとIIIbを分ける混層で部分的に有。噴砂の可能性有。	無	無
IIIb	明黄褐色土10YR6/6	13	盛土。	有	有
IVS	炭化物	2	部分的に有。	有	無
IV	にぶい黄橙色土10YR6/4	18～33	盛土。	有	有
V	明黄褐色粘土10YR6/6	7～15	盛土。部分的に上部にVS（暗褐色土10YR3/3　層厚2～6cm）有。	有	有
VIS-1	灰色土5Y6/1	3	盛土。整地層。硬くしまる。	有	有
VIS-2	灰色土5Y6/1	3～5	盛土。整地層。硬くしまる。	有	有
VI	明黄褐色土10YR6/8	6～10	盛土。	有	有
VIS	灰色土5Y6/1	3	盛土。整地層。硬くしまる。	有	有
VII	明黄褐色土10YR6/8	7～12	盛土。3T7に火山灰有。	有	有
VIII	暗灰色砂N3/	6～15	盛土。炭化物縞状に含む。地固めか。極めて硬くしまる。	無	有
IX	黄橙色粘土10YR7/8	2～8	盛土。	有	有
X	褐灰色砂10YR6/1	110	砂層。部分的に粘土層が互層状に挟まれる。	無	無
XIS	灰色粘土N6/	2	硬化面。上位の整地面に類似。硬くしまる。	有	有
XI	灰色砂N6/	23		無	有
XII	黒色腐植土N2/	2	骨状木製品出土。	有	無
XIII	灰色砂N6/	11	粘土ブロック含む。	無	有
XIV	灰色粘土N6/	3		有	有
XV	黒色腐植土N2/	3		有	無
XVI	青灰色砂10BG5/1	13		無	有
XVII	灰色粘土N6/	7	植物遺体含む。	有	有
XVIII	明青灰色砂10BG4/1	68	途中に2mmの炭化物層有。植物遺体含む。	無	有
XIX	灰色粘土5Y4/1	19		有	有
XX	明青灰色砂10BG4/1	75～		無	有

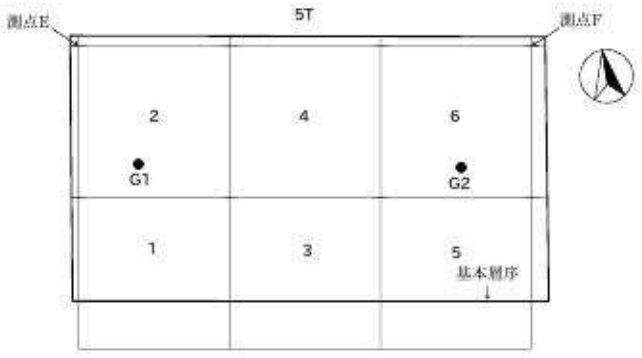


第12図　3Tグリッド設定図・基本層序

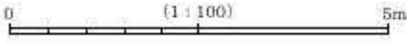


5T基本層序　遺物はⅠ～XII層まで出土する。
遺構はⅡ～XII層まで検出された。
地震の影響は出ていない。
ガツボ層がある。

層序	色調	層厚(cm)	説明	粘性	しまり
Ⅰ		50～63	表土・撹乱層	有	無
Ⅱ	褐灰色粘土10YR4/1	14～22	砂多量に含む、炭化物わずかに含む、盛土。	有	有
Ⅲ	褐灰色粘土10YR4/1	13～25	砂少量含む、腐植物少量含む、盛土。	有	無
Ⅳ	褐灰色粘土10YR4/1	17～30	黒褐色粘土10YR4/1塊に含む、盛土。	有	無
Ⅴ	黒褐色土10YR3/1	10～15	灰黄褐色粘土10YR4/2ブロック状に含む、炭化物わずかに含む、盛土。	有	有
Ⅵ	灰黄褐色砂10YR5/2	8～13	褐灰粘土10YR4/1塊に少量含む、炭化物少量混入、上面酸化鉄沈積、盛土。	無	無
Ⅶa	灰黄褐色砂10YR4/2	14～20	炭化物わずかに含む、上面に炭化物層薄く有、盛土。	無	有
Ⅶb	灰黄褐色砂10YR4/2	3～14	灰黄褐色粘土10YR4/2ブロック状に少量含む、炭化物わずかに含む、盛土。	有	有
Ⅶc	灰黄褐色砂10YR4/2	9	灰黄褐色粘土10YR4/2ブロック状に少量含む、炭化物わずかに含む、盛土。	有	有
Ⅶ	灰黄褐色砂10YR4/2	3～12	炭化物わずかに含む、盛土。	無	有
Ⅸa	灰オリーブ色砂5Y4/2	5～15	灰黄褐色粘土10YR4/2ブロック少量含む、上・下面に腐植物薄く堆積、盛土。	有	有
Ⅸb	灰オリーブ色砂5Y4/2	4～8	炭化物わずかに含む、盛土。	無	有
Xa-1	黒色腐植土N2/	1～2	いわゆるガツボ層。	有	有
Xa-2	灰オリーブ色粘土5Y4/	2		有	有
Xa-3	黒色腐植土N2/	1～2	いわゆるガツボ層。	有	有
Xb	灰色砂5Y4/1	4		無	有
Ⅺ	灰オリーブ色砂5Y4/2	2～33		無	無
Ⅻ	褐灰色粘土10YR5/1	7	部分的に認められる、Ⅺ層中に互層に入る粘土層と考えられる、炭化物含む。	有	有
XIII	灰色砂5Y4/1	21	粒子中程度。	無	有
XIV	青灰色粘土10BG5/1	39		有	有
XV	暗青灰色砂10BG4/1	7	粘土ブロック少量含む。	無	有
XVI	青灰色粘土10BG5/1	4		有	有
XVII	暗青灰色砂10BG4/1	9		無	有
XVIII	青灰色粘土10BG5/1	83		有	有
XIX	暗青灰色砂10BG4/1	33～	粘土ブロックが互層に入る。	無	有



G：ジオスライサー



第13図　5Tグリッド設定図・基本層序

震があり、新潟で土蔵の土壁に亀裂が生じるなどの被害が出ている［渡部2000］。ほかに同年９月15日にも大地震があり、地割れ、液状化現象と噴砂の被害が出ている［南2002］。このときの噴砂の痕跡がⅢａ層とⅢｂ層の間に部分的に堆積が確認された砂層：Ⅲ層に当たる可能性もある。

3Tでは火山灰も複数検出している。Ⅲａ層と同一標高の－0.13m地点と、Ⅴ層で検出されたP96とSK95の覆土中である。Ⅲａ層と同一標高で検出された火山灰と、Ⅴ層で検出されたP96とSK95の覆土で検出された火山灰は明らかに色調、粘性等も異なっている。供給地は分析を行ったが確定できなかった（第Ⅴ章１参照）。昭和９年版『新潟市史』下巻に載る記録では、天明３（1783）年６月28日に浅間山の噴火による「降灰霧のごとし」という記録と、明治21（1888）年７月15日の磐梯山の爆発による「降灰霧のごとし」という記録がある（藤塚明氏ご教示）。

3TではⅡ層上面に火災によると見られる広範な焼土が見られた。この火災については後述のⅡ層上面検出遺構で述べる。

5T

各層の説明は第13図を参照願いたい。遺物はⅠ～XII層まで出土している。遺構はⅡ～XII層まで検出している。5Tでは地震の影響は見られない。5Tの位置は、昭和39年の新潟地震の時には浸水被害が確認されているが、土層堆積のどれが相当するかは確定できていない。東側で検出されたＸａ－１層とＸａ－３層はいわゆるガツボ層で間に灰オリーブ粘土を挟んでいる。層厚はいずれも2cmと薄い。2T～5Tまでこのようなガツボ層の検出はこの２層のみである。新潟町の片原堀（現東堀）と広小路堀では毎年堀さらいを行って堀の整備を行っているが、この浚渫時にでた土砂の一部の可能性もある。調査を行った３か所のうち、5Tが最も層序と出土遺物の年代が整合性を持つ。

2 遺　　構

A 概　　観

遺構番号は2T、3T、5Tを通して種別にかかわらず全て通し番号としている。種別は第１表の通り、アルファベットの略記号を使用したものと漢字をそのまま使用したものがある。礎石としたものの中には、本来礎石として使用されたのか明確でないものも含まれるが、調査で付した名称は変更していない。新潟町で出土した石製品類は基本的にはすべて搬入礫と考えている。遺構の規模、出土遺物等は別表の観察表を参照願いたい。記述はトレンチごとに層位別に記述する。検出された遺構は、調査範囲が狭いことと土層確認のためにサブトレンチを入れたため、全体が検出できたものは少ない。

遺構の種類	略称
礎石	－
礎板	－
杭	－
土坑	SK
溝	SD
ピット・柱穴	P
焼土	－
不明遺構	SX

第１表　遺構の略称

B 各　　説

2T（図版１～６）

Ⅱ層検出遺構

溝１条と礎石９基を検出している。礎石は緑色凝灰岩の方形切石で、いずれも縦にして地中に据えられている。検出時、礎石上部は全て破損しており、小さなものについては、近代以降のものと判断して写真撮影および測量をするに留めた。

SD1　検出された礎石の下部構造である。布掘溝状掘形に礎板を置き、礎板上に２か所、切石が縦にして据えられていた。覆土はブロック状に堆積しており、埋め戻されている。溝は南北方向に走り、両端は矢板に切られ検出出来ていない。礎石１・２の間隔は180cm、約１間である。

Ⅲ S 層検出遺構

遺構検出時、調査区範囲のほぼ全面を薄く炭が覆い、その直下の土層上面では、被熱によりほぼ全面が赤変していた。溝２条を検出している。

SD2・3　ともに主軸を南北方向にもつ浅い溝である。SD2は、後述するSD14－礎石１・２を結ぶように位置する。断面形は箱状で、覆土はブロック状堆積である。SD3は断面形がＶ字状で、溝の中は炭化物で埋まる。SD3の北端に接し礎石35の上面を検出した。

Ⅲ層検出遺構

礎石４基、土坑２基、溝１条、ピット７基を検出している。礎石は切石と、礫を用いたものがある。

礎石35・38・40　礎石35は長さ54cm、幅40cmの花崗岩礫を使用している。掘形は礎石より一回り大きく、覆土はブロック状に堆積している。礎石38は方形切石を立てて据えている。礎石40は破損した切石を土台にし、その上に方形切石を縦に据えている。

SK4　南側は調査区外のため未検出である。断面形が階段状の土坑と思われる。覆土は炭化物を大量に含むしまりの無い黒色土で、焼土を少量含む。被熱した礫や陶磁器片が覆土中から多数出土した（図版30－1）。

SD14　主軸を南北方向にもつ溝である。布掘溝状掘形に礎板が置かれ、礎板上に２か所、切石を縦に設置している（SD14－礎石１・2）。礎板は遺存長が248cmで、スギ材を使用している。覆土には焼土・炭化物を少量含む。溝の下には隅丸長方形の土坑があり（SD14－SK1）、丸太をミカン割りした材が３本並んで出土（SD14そろばん①②③）している。この材は長さ113～118cmで、２点がヒノキ材、１点がスギ材を使用していた。上部の礎板とほぼ直交し、礎板直下に置かれていた。礎石１・２間は90cm（約半間）である。本調査で検出された礎石のなかで、最も厳重な算盤地業を行っており、土蔵等が想定される。

Ⅳ S・Ⅳ層検出遺構

礎石３基・土坑２基・ピット11基・溝１条を検出している。ⅣS層直上には東側に偏って炭化物が薄く堆積し、炭化物直下のⅣS層上面は被熱し赤化している部分が確認された。

礎石36・39　礎石36は、１辺が40cm、厚さ7.7cmのほぼ正方形の切石を使用している。礎石39は長さ約68.4cm、幅58.5cm、厚さ28.5cmの亜角礫を使用している。ともに掘形は礎石よりも一回り大きく、覆土はブロック状堆積である。礎石表面は被熱し大部分が剥落している。礎石39は、表面中央に一辺約15cmの方形に炭化物が付着している。五寸角の柱痕と思われる。礎石36と礎石39は表面標高がほぼ同一で、互いの間隔は185cmでほぼ１間である。このことから、両礎石は石材も形状もまったく異なるが、同一建物の礎石の可能性が高く、ほかの建物の礎石を再利用しているとみられる。

SK12・37　ともに平面形は方形、断面形は箱状である。SK37は底面上に炭化物が1cmほど堆積し、その下に薄い板が底面に密着して出土した。土坑の壁に沿って幅1cm、深さ1cmの溝がある。SK37はSK23を切る。

SD58　長さ66cm、幅5cmの小溝である。P60に切られる。

P75　柱根が出土したが、腐食が著しく原形を留めていない。

Ⅵ層検出遺構

礎石1基・溝3条、ピット8基を検出している。調査区の東半部は、粘土が固くしまっていた。

礎石80　長さ約42cm幅38cm厚さ31cmの亜角礫を用いている。掘形は、不整長方形である。礎石下にこぶし1～2個大の根固め石が詰められていた。礫は検出面付近では被熱の痕跡をもつものが多く，砥石を転用していたものもあった。

SD103　P99とP100を結ぶように位置し、両端を両ピットに切られる。

SD104　SD103の西側に並行する位置にある。SD103と同規模だが、形状は不整形である。

SD105　SD103・104と直交する位置にあり、SD103に切られ，SD104を切る。

Ⅶ層検出遺構

礎石4基、礎板1基、杭1基、土坑2基、溝1条、不明遺構1基を検出している。

礎石115・116・122・123　いずれも扁平な楕円または不整楕円礫を用いている。掘形はなく、地面に直接置いている。4基ともSD136の覆土上にあることから、SD136埋没後に設置されている。

礎板197　水平に検出されたため礎板としたが，角材であることから柱の可能性もある。材の現存長は172cmである。樹種はヒノキで表面には大きくひびが入り、多数の節を有することから床柱の可能性もある。東側は矢板で切断されていた。

SK129・134　ともに直径48cm程度の土坑で、互いに隣接し、陶器甕が正位で埋め込まれている。SK129は甕上半部を欠損、SK134は甕底部破片をわずかに残す。両者ともにSD136覆土上から検出されたため、SD136埋没後に設置されたものと考えられる。当初、便槽の可能性もあったことから、寄生虫卵分析を行ったが、寄生虫卵が少なく便槽の可能性は低くなった（第Ⅴ章3参照）。

SD136　幅240cm以上の溝である。主軸はおおよそ南北方向を向き、両端は調査区外に延びる。断面形状は船底形で、底面付近で陶磁器・木製品が多数出土した。土器・陶磁器集中地点では、土器・陶磁器片利用の面子（図版35－10～12）と、意図的に3～5cm程度に大きさを割りそろえた陶磁器片が出土している。

SX196　部材の組み合わせによる幅約180cm、高さ約40cmの箱形木製品が検出された。矢板に切断され3分割され、検出されたのは南側のみで、北側は不明である。検出当初は井戸枠とも考えたが，幅が約1間と大きく高さが低いこと、また図示出来なかったが、底面両隅には脚部も検出されていることなどを勘案すると、一時的なゴミ捨て場の板囲い等の可能性がある。

Ⅷ層検出遺構

土坑1基、ピット1基を検出している。

Ⅹ層検出遺構

土坑1基を検出している。

SK153　方形の土坑と考えられるが、北側は未検出である。1辺が180cm以上あるが、深さは12cmと広くて浅い。南壁に側板が立った状態で検出された。東側にも側板があった可能性があり、浅い溝が短く検出されている。西側はSD136に切られる。

Ⅺ・Ⅻ層検出遺構

杭10基，ピット6基，不明遺構1基を検出している。

杭171・172・173・179・198・257　いずれも一辺3cm程度の角材を用いている。杭257・173・167は南北に、杭179・171・172は東西に並ぶ。杭168が杭171・172のほぼ中間にあった

が測量から漏れている。杭198を除き、すべての杭がSK153に重なることからSK153の側板を支える下部構造の可能性が高い。

P160　平面が円形、断面が台形状の掘形中央に、ほぼ底面大で厚さ10cmの扁平な楕円礫を設置している。礫上に薄い板が出土した。P159に切られる。

XIII層検出遺構

礎石6基・柱根2基・杭2基・ピット2基・不明遺構1基のほか、多数の木片、礫が出土している。

礎石・柱根　礎石256は推定径40cm・深さ14cmの掘り込みの底部に、ほぼ底面大で厚さ8cm程度の不整扁平円礫を設置している。礫上には柱根199が載る。礎石253・254・255・259・262・263はいずれも掘形はなく、地面に直接礫を設置している。礎石255上には柱根200が載る。礎石255・256と、礎石253・254・259・262・263はそれぞれ南北方向に列を成し、2礎石列の間隔はおよそ2間である。また、礎石255・256と礎石254・262間はそれぞれ約120cm、礎石253・254と礎石262・263間は約90cmである。

杭251・252　杭251は杭としたが、先端が未加工の角材であるため、杭ではない可能性がある。杭252は直径約3cmの角材を使用している。上部は欠損している。

礫・木片　確認面上に礎石より小さい礫と、多数の木片が出土した。木片は板材のほか、切り屑・削り屑が多数を占める。礎石256から東へ60cm離れた位置で木簡（図版41－36）が出土している。

3T（図版7～18）

Ⅱ層上面検出遺構

Ⅰ層除去後、火災跡とみられる焼土および建物の礎石が検出された。楕円形の礎石と、方形の切石を礎石として使用した2種類の建物である。検出された礎石等は、明治以降の新しい遺構と判断し、写真撮影後、礎石、焼土範囲を測量して調査を終了している。

楕円形の礎石は自然石で、新潟県妙高市で現在も採掘している千種石（角閃石ひん岩）である。この千種石は、妙高市の五日市から猪野山にかけての山中で、明治17年頃から採石されている［新井市史下巻1971］。火災の跡は見られないことから、火災後の建物と考えられる。石の形に合わせた掘り形に砂を入れて礎石を据えている。礎石の並びから本町通十番町と上大川前通十番町にまたがって建てられていた可能性が高い。3Tには平成16年まで6軒長屋があり、この長屋は明治20年頃に建てられたといわれていた。この6軒長屋の礎石が千種石である可能性が高い。

方形の切石を礎石として使用した建物は、配置が不規則であるため規模等は不明である。火災の影響を受け、ススが付着したり赤変したものもあったことから、火災以前に建っていた建物である。この切石は緑色凝灰岩で、福島県喜多方市（旧高郷村）で産出する荻野石である。阿賀野川の水運を利用して運搬されたものである。

焼土については、明治13年8月7日の広小路を含む6,175戸に被害を出した大火の可能性が高い。この大火は新潟町の約6割を焼き尽くし、8月12日に発行された新潟新聞号外「新潟大火焼失地域図」［新潟市郷土資料館編1997］では2T・3T・5Tは焼失地域に含まれる。平成16年まで建っていた建物が明治20年頃に建てたものという情報が正しければ、明治35年にも火災の記録があるが、この火災には遭っていないことになる。

Ⅱ層検出遺構

焼土除去後に検出した遺構である。土坑１基、溝１条、ピット２基を検出している。

SK61　明治13年の大火で被災した家財を一括廃棄した土坑と考えられるが、現町境にまたがって掘削されている。当時本町通側の屋敷は大塩家（若狭屋）で上大川前通側の屋敷は安宅家であったが、両家共同で掘削した可能性がある。上部は撹乱されプラスチックやガラス等も出土したが、焼土とともに焼けた木材や土器、陶磁器が大量に出土している。また、和釘（角釘）も出土している。釘は明治10年代後半には洋釘（丸釘）に変わっていることから、この建物の下限は明治10年代初めと推測される。今回の調査で最も大量の遺物が出土した遺構である。

SD27　建物の基礎部分と考えられる。東西方向に長さ2.72m、幅40cm、深さ25cmに布掘溝状堀形に砂を入れ、全体を焼いた礎板を敷いている。当初は火災に遭い礎板が焼けたものと考えたが、下の砂に被熱した痕跡が認められないことから、焼いた礎板を敷いたものと判断した。焼いて炭化させることで強度が増すかどうかは不明である。出土した板は細分化していたため、取り上げず樹種同定用のサンプルを採取するにとどめた。樹種同定の結果はアスナロであった。柱根は残っていないが礎板に柱痕とみられる凹が３か所認められ、柱痕から推測される柱は12cm（４寸）角、柱間は90cm（半間）である。礎板上に御影石のSD27－礎石１（図版38－26）があるが、礎板を壊して据えられていることから、SD27の建物より新しい建物の礎石である。礎石に残る柱痕から柱は12cm角と推定される。SD27、SD27－礎石１に対応する遺構は検出されず、建物の規模は不明である。火災の影響はまったく見られない。

P20・P45・P47　３つのピットは同一の建物の柱穴と考えられる。ほぼ全体が検出できたP20では直径50cm深さ60cmでⅡ層の途中から掘削されている。穴全体に砂と１～10cm前後の礫が詰められている。穴の底部付近の砂は酸化して硬化していた。柱根は出土しておらず、柱間は90cm（半間）である。建物は西側の屋敷のものと推定されるが、規模は不明である。これらのピットも火災の影響は見られない。

Ⅲａ層上面検出遺構

土坑２基、溝３条、ピット３基を検出している。

SD8　東西方向に掘削された溝で、南北方向に掘削されているSD15を切っている。平面形はやや不整形で北側の立ち上がりは検出できていない。礫と陶磁器、大きなハマグリ貝等が出土しており、排水溝と考えられる。

SD15　南北方向に掘削された溝で、礫が詰まった状態で検出された。礫の一部は被熱し、赤変している。礫の間から煙管の雁首が出土している。遺構の性格は排水溝や、礫が詰められていることから暗渠とも考えられるが詳細は不明である。SD8に切られる。

Ⅲ層検出遺構

礎石１基、土坑３基、溝４条、ピット４基、不明遺構１基を検出している。Ⅲ層はⅢａ層とⅢｂ層の間に地震による噴砂が水平に堆積する部分を確認したことから、地震発生当時地表面であったことが判明した。整地層の一部と見られる硬化面が検出されている。

礎石33　礎石33は平坦面を上にして検出したことから礎石とした。しかし、直上のⅢａ層が、撹乱を受けており、Ⅱ層で検出された千草石を礎石とする建物の一部と判断した。近代以降のものである。

SK28　緑色凝灰岩の長方形の切石２点（図版38－28・29）が東西方向に並んで出土した。礫１点も出土している。SD32に切られる。

SK30　底面全体が被熱し赤変し、リング状に検出された。炭化物、焼土が混じる。南北方向に長方形

の緑色凝灰岩の切石（図版38－30）が出土した。SD29・32に切られる。SK28・30で出土した緑色凝灰岩の切石は建物の地覆石の可能性がある。3Tは屋敷の裏側で土蔵が建てられるような位置であるが、切石自体は土坑に廃棄されるような状態で出土しており、建物のどの部分に使用されたかは不明である。

SD31　現在の町堺からわずかに東側にずれるが、南北方向に掘削されることから屋敷の裏堺と考えられる。幅50cm、深さが18cm程度で小規模である。掘りなおしや杭、ピット等は認められない。

Ⅲｂ層検出遺構

礎石１基，礎板１基、溝１条を検出している。

SD145　土層観察用の東側ベルト掘削中に検出された。南北方向に幅50cm、深さ40cmで布掘溝状堀形に、焼いた板を礎板としている。長さは3.2m以上あり調査区外まで続いている。樹種はマツ属である。柱痕は検出できていないが、板に穴が開いた部分に柱が載っていた可能性がある。間隔は約90cm（半間）である。

Ⅳ層検出遺構

最も遺構が密に検出され、噴砂も検出されている。礎石２基、土坑４基、溝６条、ピット９基を検出している。

SK68　東西方向に長軸をあわせ掘削された長方形の土坑である。底部の南側に長方形の板が敷かれていたようである。板が残存していた部分はわずかでほとんどが腐食し、底面が褐色に変色している部分があり、それから推測する板の大きさは長さ170cm、幅50cmである。

SD6　サブトレンチ掘削中に検出された。幅70cm、長さ48cm以上である。被熱し赤変した礫が入っている。

SD48　南北方向に掘削された溝である。東側が検出できていないが、断面は漏斗状になると推測される。覆土は焼土が主体のため赤褐色で炭化物や礫、植物根などを多量に含む。水分を多く含むため粘性が高く、ヘドロ状になっている。もともと水のあった溝に焼土を入れたためと考えられる。底面は被熱していない。

SD71・礎石64　SD71は建物の基礎部分と考えられる。南北方向に幅38cm、深さ22cm、長さ200cm以上の布掘溝状掘形に砂をいれて、焼いた板を礎板としている。この礎板もアスナロであった。柱痕があり、柱は約12cm（４寸）角と推定され、柱間は90cm（半間）である。SD78、P97を切っている。礎石64はSD71の礎板を破壊して据えられていることからSD71より新しい建物の礎石である。柱痕があり約12cm（４寸）角と推定される。長方形の石で東西方向に長軸をあわせている。SD71，礎石64に対応する遺構が検出されず、建物規模等は不明である。

Ⅴ層検出遺構

Ⅳ層に続き遺構が密に検出された。礎石３基，溝４条、ピット13基，不明遺構５基を検出している。

SK95　東西にやや長い長方形の土坑である。底面に黄橙色の火山灰が検出され、供給地の分析を行ったが確定できていない（第Ⅴ章１参照）。火山灰堆積後、一度に埋め戻されている。

SD79・86　現在の町境上に重なる形で南北方向に掘削された溝である。屋敷裏の境の溝と考えられる。SD79の底面から礫が２個互いに支えあうように出土している。祭祀等に関連するものかは不明である。SD79には噴砂の跡と見られる砂の堆積がある。SD79はSD86を切っており掘り直しと考えられる。Ⅴ層以下の遺構確認面では、この位置で堺に当たるような溝は検出されていない。1700年代初頭には通し屋敷が半在家に分割されたといわれていることから，SD86が最初に分割されたときの境の溝でその後、

SD86が掘りなおされた可能性がある。一時期境の溝は埋まり、Ⅲ層でSD31が掘削されるまで別の境界となるものが設置されたのであろう。

SD91　北側が西に短く90度に曲がる南北方向の溝である。断面形は箱状で幅10cmと狭い。

P96　東側が上層の遺構で切られ全体は不明であるが、平面形は方形または長方形になると考えられる。2層で、SX85・3層で検出されたものと同質の火山灰が検出された。供給地については分析を行ったが、確定できていない（第Ⅴ章1）。

P183・184・185・186　東西方向に並んで4か所検出された。P183とP184は近接して南北に検出された。P184と185の間隔は約90cmで半間である。P185とP186の間隔は110cmでやや離れる。P184・185・186は一直線になることから板塀などの杭の可能性が高い。杭は10～14cm角で柱並みに太く先端はとがる。

SX94　東西方向に長い楕円形の土坑である。礫が詰められていることから、建物の柱を固定するための根固め石と考えられるが、掘り込みは浅く、上部が削平されている可能性がある。対応する柱穴は検出されていない。

SX110　大規模な遺構で全体が検出できていない。深さが地表面下2mを超えるため、底面まで掘削出来なかった。平面図に表しきれていないが、断面で少なくとも2段の平坦面がある。一部張り出した硬化面があったが、それを取り除くとさらに下に覆土が続いていた。北側はほぼ壁面まで掘削していると考えている。覆土は単層で一度に埋め戻したものである。遺物は陶磁器（図版32－46）がわずかに出土している。遺物がわずかなことから荷物を全て搬出後、埋め戻したと考えられる。遺構の性格として考えられるのは穴蔵や地下室等である。

Ⅵ層検出遺構

Ⅵ層から遺構密度が下がる傾向にある。土坑3基、ピット9基を検出している。

SK117　長軸方向が北から59°東へ傾く楕円形の土坑である。新潟町の遺構は屋敷の敷地にあわせ東西、あるいは南北方向に長軸方向を合わせるものが大半であるが、SK117はほかとは異なる。

SK120　覆土はレンズ状に堆積する。2層の東側から直径1cm程度の丸石がまとまって出土した。堆積状況から長時間開口のままであったとみられ、塵芥溜であろう。土人形の狛犬（図版35－5）や翁の根付（図版35－2）などが出土した。

P118　南側をP113に切られる。南北にやや長い長方形のピットである。当初6層まで掘削し石の断面が見えた時点で底まで完掘したと考え、断面の写真・図面の記録作業を行った。石を取り上げ完掘しようとしたが、6層と6層下の土との区別が明瞭でなく掘りすぎの可能性もあるが、下から長方形の薄い板と方形の礫が出土した。下から出土した礫と板は別の遺構のものである可能性もある。

Ⅶ層検出遺構

遺構はまばらに検出され、木製品が出土した。ピット11基を検出している。

Ⅷ層検出遺構

土坑1基、ピット4基を検出した。Ⅷ層は西側のみに厚さ12cmで硬化面として検出している。屋敷の土間の可能性が高い。建物の柱穴や礎石などは検出されていない。

SK157　東西に長い長方形の土坑である。覆土はレンズ状に堆積している。

Ⅸ層上面検出遺構

土坑1基、ピット4基、焼土1基、不明遺構2基を検出している。

SK174　南北方向に長い長方形の土坑である。２層中に噴砂の影響と見られる砂が入る。

P158　長方形の板２枚が重なり、礫が出土した。礎板、根固めの石とするには貧弱で問題がある。

Ⅹ層上面検出遺構

最終遺構確認面である。土坑２基、溝１基、ピット３基、杭３基、不明遺構１基を検出している。

SK180　南北に長い長方形の土坑である。１層に炭化物・焼土を含む。

SK187　南北に長い長方形の土坑である。下端は長さ78cm幅50cmの長方形に掘削されていたが、板などの痕跡はない。17世紀後半の呉器手椀が出土している。

SD182・P181　SD182はP181に切られるが、同時に掘削された一体の遺構と見られる。SD182はさらに西側に続くと見られ、断面はＶ字状である。P181に導水する溝とも考えられるが、幅15cm程度と細く用途は不明である。

5T（図版19～23）

Ⅱ・Ⅲ層検出遺構

Ⅱ層で現代とみられる排水溝の側板の一部を検出している。南壁のⅢ層で土器皿・寛永通宝・礫がまとまって出土している。寛永通寶は土器皿から浮いた状態で出土しており、掘り込みも確認出来なかった。当初想定した地鎮跡の可能性は低いと考えている。

Ⅳ層検出遺構

溝１条・ピット１基を検出している。

SD224　主軸はおおよそ東西方向を向く。溝の両端・南側は調査区外のため未検出である。そのため長さは不明で、幅は遺存長で68cmである。溝中には多数の杭が打ち込まれていた。遺構プランはⅣ層で確認したが、杭はⅡ層と同標高から検出されているものがあった。杭は角材・丸材のほか、建築材の端部を加工したものを転用している（図版42・43－51～60）。杭は溝全域に不規則に打ち込まれ、杭の形態ごとにまとまって並ぶ傾向は確認出来ない。溝の北側に並ぶ杭の上部は北、先端部は南に斜めに打ち込まれているものが多い。覆土は単層で、砂を含む粘性の強い黒色土である。また、溝全体の覆土の下位から多数の陶磁器・木製品が出土した。隣家との境の排水溝と考えられる。

P201　柱根と礎板が出土した。柱根は腐食が著しく、原形を留めていない。礎板は腐食が進み、厚さ1cm弱で薄い。

Ⅴ層検出遺構

土坑１基を検出している。

SK202　確認面からの深さが8cmの不整形な土坑である。南側は未検出である。底面上から、陶磁器・金属製品ほか、漆器椀・多数の木製品が出土した。木製品は折り重なるように検出された。

Ⅵ層検出遺構

土坑１基・ピット２基を検出している。

Ⅶ・Ⅷ層検出遺構

土坑１基・溝２条・ピット４基を検出している。

Ⅸ層検出遺構

礎石１基・土坑１基・溝１条・ピット５基を検出している。６グリッドを中心に、平均厚5cmの褐灰色粘土層を検出した。そのほか、遺構外から土錘が出土した。

礎石206　長さ24cmの扁平礫を、褐灰色粘土層上に直接設置している。

SK207　断面箱状の土坑である。確認された範囲では、南壁部のプランは直線状である。

土錘出土地点　1グリッド矢板際から、土錘が5点（図版35－44～48）まとまって出土した。掘り込み等は確認できなかった。

X層検出遺構

溝1条、ピット6基を検出している。

P214・215　ともに長径40cm程度の隅丸方形のピットである。断面形は箱状で、深さは10cm前後である。2基はほぼ南北に並び、中心間隔は約100cmである。

XI層検出遺構

礎石1基・土坑3基・ピット6基を検出した。

礎石229　長径60cm深さ18cmの隅丸方形の掘り込みの中に、長径32cmの礫を設置している。

SK221　長径156cm短径132cm深さ28cmの隅丸方形の土坑である。覆土は上下2層に分かれ、下層は炭化物を多量に含む。下層から木製品が出土した（図版43－73）。

SK222　長径約100cm、深さ24cmの隅丸方形の土坑とみられる。北壁は試掘13Tに切られ未検出である。土坑内に、箱形に配置された板が出土した。板と土坑壁間はブロック状の土が入っていた。底面はごくわずかだが、被熱し赤化していた。SK223に切られる。

XII層検出遺構

礎石2基・柱根1本、ピット1基を検出している。

礎石244・245　いずれも確認面上に直接礫を設置している。礎石間は180cm、約1間である。礎石244の上には柱根が遺存していた。

第Ⅳ章　遺　　物

1　概　　要

出土遺物には土器・陶磁器・土製品・石製品・木製品・金属製品があり、平箱換算（54×34×10cm）で100箱（本発掘調査）である。時期的には近世（江戸時代）の17世紀から19世紀までで、さまざまなものが出土しているが、主体は土器・陶磁器類（35箱）と木製品（46箱）である。中世に遡るものは中国銭貨のみである。試掘調査でも多量の遺物が出土している。試掘調査対象面積の約半分が遺跡範囲外となったが、拡大していった新潟町の範囲に当たり、優品も存在するので報告する。試掘調査13T出土遺物については、本発掘調査5Tと調査範囲が重複することから、本発掘調査に含めて報告する。試掘調査と本発掘調査の土器・陶磁器・石製品・木製品の図版は分けて作成している。記述は種類ごとに行う。

2　土器・陶磁器・土製品

A　土器・陶磁器

1）概　　要

土器・陶磁器は、本発掘調査で6,376点（磁器2,670点、陶器2,534点、土器1,172点）、試掘調査で1,028点（磁器597点、陶器410点、土器21点）出土している。本発掘調査分については、トレンチごとに基本層序が異なり、遺物包含層も10層前後に及ぶことから、各包含層と遺構出土分から時期・産地が明確なものを抽出し報告することとした。このため出土しているすべての器種を網羅しておらず掲載率は低い。また、2T・3Tについては層順と出土している遺物の時期が必ずしも整合性を持っておらず、盛土ということに加え矢板打設時に下層に混入したものも明確に存在する。試掘調査分についても時期・産地が明確なものを中心に抽出した。

土器・陶磁器の中で出土量が最も多いのは肥前系陶磁器で、次に在地系とされる産地を確定できない土器・陶磁器類である。19世紀初頭に生産が始まった瀬戸・美濃の磁器も少量ある。また、京・信楽、備前、須佐唐津、越中瀬戸、堺など日本各地のものが少量出土している。中国青花・粉彩なども3点出土している。各遺物の時期、産地、文様など詳細については観察表を参照願いたい。土器・陶磁器の産地・年代等については、安藤正美氏、渡邊ますみ氏、相羽重徳氏にご教示いただいたが、誤解した場合の文責は執筆者にある。

2）器 種 分 類

種別については、大きく土器・陶器・磁器に分け、器種については第14図のようにした。近世陶磁器については法量、器形、用途、資・史料にみえる名などから多種多様な名称がある。ここでは、器種の細分は行わず、観察表の器形の項目にこれまで一般的に使用されている名称を記すこととする。

参考に椀・皿・小杯・鉢・小鉢については、口径と径高指数（器高／口径×100）から、傾向を見た。

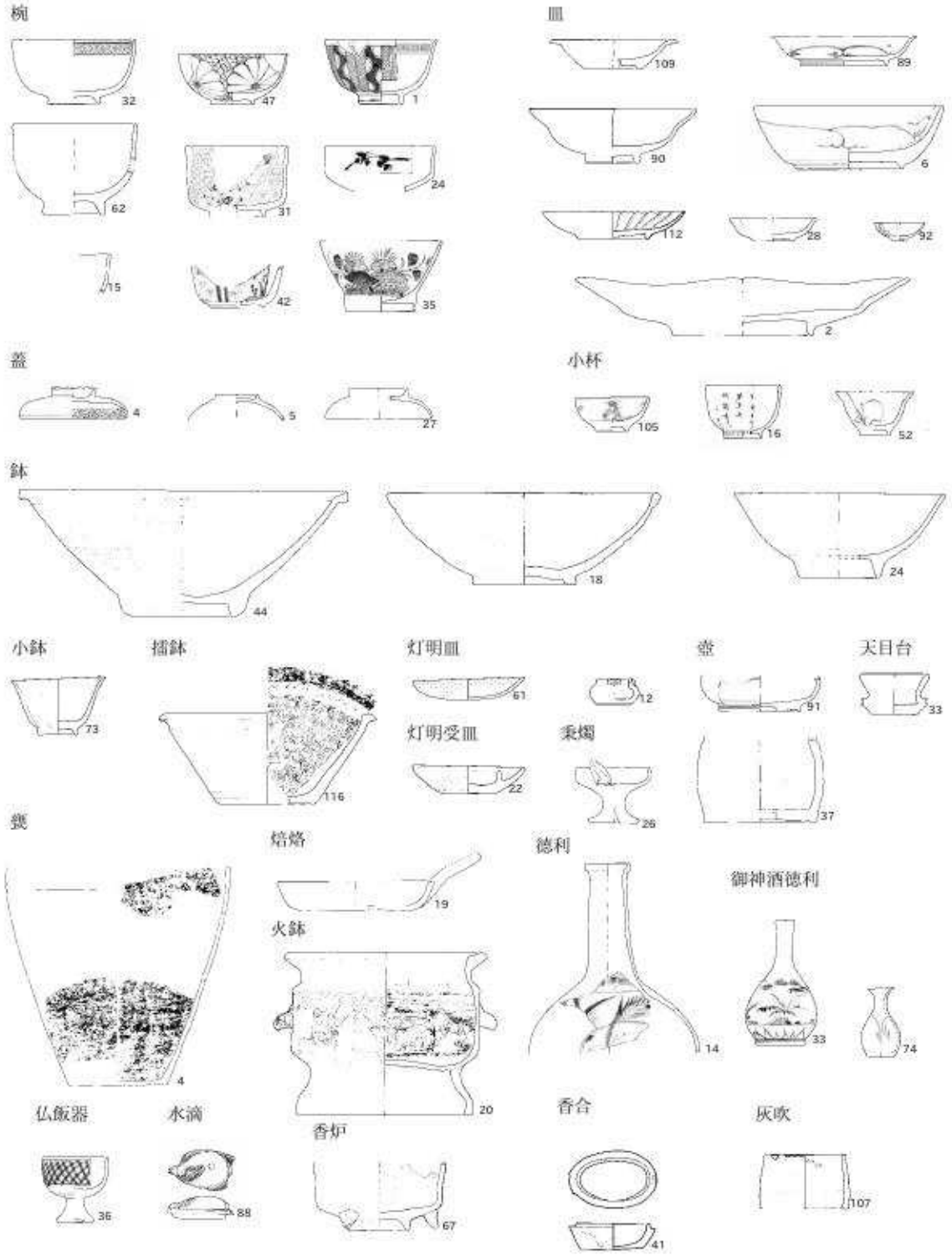
椀：口径は10cm前後で、径高指数は50を越えるものが多い。

皿：口径5cmから30cm（1尺）を越える大皿まである。径高指数は30以下のものが多い。

小杯：口径9cm以下で径高指数45以上のものを一括した。

鉢：口径は20cmから40cmまである。径高指数は30以上である。

小鉢：口径は9cm以下で径高指数は60以上である。



第14図　土器・陶磁器器種分類

3）各　　説

試掘調査（図版24～26）

4T（1）　1は口径38cmで出土中最大の擂鉢で片口が付く。産地・年代など詳細は不明である。

5T（2～7）　2～7はすべて同一層位からの出土の椀皿類である。18世紀末～19世紀前半のものが中心である。2は鍬を担ぐ農夫を描いたものである。笠を被り、簑を着ている。7は体部に家紋由来の源氏香文が描かれる。源氏香文は18世紀後半から現れる。底部に「上マ（部）」と墨書される。

6T（8～27）　出土層位はⅦ～Ⅹ層まであり、18世紀から19世紀までが主体である。8はⅤ層出土となっているが、土層柱状図にはなく、Ⅱb層の誤記の可能性がある。9・22は瀬戸あるいは関西系とされるものでセットの可能性がある。10～12は3個以上のセットの椀と考えられるが、絵柄は少し変えている。20は中国景徳鎮産の青花皿である。器壁が非常に薄く、芙蓉文様を描く。呉須の発色が優れている。時期は明末である。長く使用されたようで18世紀末以降盛行するガラス継がなされる。21は中国清の色絵磁器皿である。粉彩という技法を使い赤い花が描かれる。時期の下限は1650年である。底に銘の一部である「大」の文字の一部が残っているようである。この時期、日本では肥前磁器が流通しており、清朝磁器は非常に少なく発掘調査例が多い江戸の遺跡でも出土例がないという（渡邊ますみ氏ご教示）。26は燭台で灯芯を支える部分は一部欠損している。

7T（28・29）　28は瀬戸・美濃の磁器染付型打皿である。獅子が頭を下にして濃い呉須で描かれる。新発田城［鶴巻ほか1997］に同類の皿の出土がある。19世紀代のものである。地表面下1.0～2.0m地点の出土である。29はⅦ層・地表面下2.0m以下からの出土で18世紀代のものである。

8T（30・31）　30は白磁型打の小杯で漆継がある。31は壺で器壁が非常に薄い。底部外面に非常に丁寧に「ヤヤ」と墨書される。

9T（32～38）　9T出土遺物は18世紀末から19世紀前半のものが主体である。33は御神酒徳利、36は仏飯器で神仏に関するものが出土している。35はいわゆる広東椀である。見込に鷺が描かれる。37は越中瀬戸の壺である。越中瀬戸は本発掘調査も含めこの1点のみである。

10T（39・40）　39の椀は菊散らし文で内外面に描かれる。18世紀後半のものである。40の灯明受皿は信楽産で使用痕は見られない。

11T（41～48）　18世紀前半のものが主体であるが、44の椀は砂目で1620～1630年代のものである。

本発掘調査（図版30～34）

2T（1～17）

SK4（1）　1は染付の椀である。口縁端部が外反するいわゆる端反椀である。

Ⅳ層（2）　2は菱形の皿である。丸く成形した後、菱形に加工し四隅は輪花にし、円い高台をつけている。径は30cmを超え大皿である。大皿の出土は宴会が行われていたことを示し、一般集落では出土しない器種である。時期は19世紀代で被熱している。

Ⅴ層（3）　3は口縁端部が外反する端反皿である。

SK129（4）　18世紀代の肥前系の大甕である。見込にも粗い格子目が見られる。水甕とみられる。このような水甕の出土数は極端に少ない。

SD136（6・7）　6は手捏成形の灯明皿である。

Ⅶ層（8・9）　8は三島手といわれる皿の口縁部である。蓮華文を陰刻した上に白化粧土が施される。

Ⅸ層（10）　10は銅緑釉と透明釉を内外で掛け分けした端反椀である。

Ⅻ層（11・12）　11も銅緑釉を掛け分けした端反椀である。12は灯明皿であるが、器形は片口のついた壺形である。口径2.9cmと小型である

XIII層（13～17）　XIII層は遺物包含層の最下層である。13は1680年代の肥前系の椀である。14・16・17は肥前波佐見三股窯産の青磁製品である。いずれも17世紀後半の製品で新潟町移転後のもので層順とほぼ一致する遺物である。17は見込に陰刻文様がある。15は黒天目椀である。17世紀初頭のもので産地は不明である。移転前からの伝世品であり茶の湯の習慣があったことを示す。

3T（18～79）

SK61（18～20）　SK61は明治13年の大火の後始末をした土坑と考えられる。大量の遺物が出土しているが、特に火に関係する火鉢、焜炉、焙烙などが多数出土しているが、使用痕があるものが少ない。回船問屋の商品あるいは屋敷内で使用する予備品の可能性もある。18の鉢は在地系と見られるが、産地等詳細は不明である。19は持ち手の付いた焙烙である。使用痕は見られない。20は火鉢である。口縁部、脚部は円形で体部は八角形である。口縁端部は外反し、鍔状となる。体部の八面それぞれに風景が型押しされている。体部には獅子頭の突起が2か所付く。意匠を凝らした高級品である。

P19（22）　22は肥前系の灯明受皿で、底部切り離しは回転糸切りで右回転である。

SK26（23）　23は土器の容器の底部片である。外面に「コン」と墨書されるが、内容は不明である。

SD31（24・25）　24は、せんじ椀あるいは腰折椀といわれるもので瀬戸産である。25は京焼風陶器皿で高台内部に「一」の墨書がある。

P25（26）　26は皿の口縁部で、墨弾で文様が描かれる。17世紀後半の移転直後のものである。

Ⅲa層（27）　27は広東椀用の蓋で19世紀代のものである。

Ⅲ層（28）　28は青磁染付端反小皿で、1780年代のものである。高台は京焼を模倣している。

Ⅲb（29・30）　29は18世紀後半の丸椀である。30は産地不明の灯明受皿である。器形は信楽の模倣である。使用痕が見られる。

SD48（31）　31は京・信楽産の色絵筒型椀である。赤以外の色絵具は劣化し、地模様のみ残るような状態であるが、文様は繊細で複雑で高級品であろう。

Ⅳ層（32～45）　33は天目台である。台の全周を打ち欠き、面子に転用する途中である。38の菊散らし文様は18世紀後半から流行し始めている。42は体部が直線的に開く器形になるいわゆる朝顔形椀と見られる。本来は蓋が付く。

SX110（46）　46は片口付の擂鉢である。16世紀末～17世紀前半の移転前のものである。

Ⅴ層（47～52）　Ⅴ層出土遺物は17世紀前半から18世紀後半まで時期幅がある。51は須佐唐津の擂鉢である。口径は31cmである。

SK117（53）　53は底部のみの破片であるが、底径は14.7cmあり大皿となる可能性がある。

SK120（54～57）　出土遺物は17世紀後半のものが主体である。55は有田内山窯を中心に生産された型紙刷の蔓草文の椀である。

Ⅵ層（58～60）　58は肥前波佐見産のいわゆる「くらわんか手」といわれる雑器であるが、出土数は多くない。

Ⅶ S 層（61）　18 世紀代の灯明皿である。油煙が付着する。

Ⅶ層（62～67）　出土遺物の時期は 17 世紀後半～18 世紀中頃までである。62 は 18 世紀前半の呉器手椀である。67 は青磁の三足付きの筒形香炉である。足は獅子の頭部が形作られている。66 は色絵の徳利である。緑色のみわずかに残る。

Ⅷ層（68～71）　69 は絵唐津の皿で 16 世紀末のものである。出土した陶磁器の中では最も古いものである。71 は堺あるいは明石産と見られる擂鉢である。

Ⅸ層（72～75）　72 は青磁染付の椀である。外面の青磁釉の上に、小さな花が色絵で描かれた珍しいものである。見込にも色絵で絵が描かれていた可能性がある。18 世紀後半頃のものである。74 は御神酒徳利になると見られる。簡略化した草花文が描かれる。底部は回転糸切りで右回転である。75 は内外面とも亀甲文と氷裂文が描かれる

SK187（76）　17 世紀後半の呉器手腕である。高台はやや低い。

Ⅹ層（77～79）　77 は墨弾で唐草文が描かれた皿である。大皿になる可能性がある。

5T（図版 33・34）

Ⅰ層（80）　80 は京・信楽系の椀である。全体に貫入が入る。

Ⅱ層（81）　81 は 18 世紀代の皿である。銘は二重方形枠に福である。

Ⅲ層（82～84）　83 は白磁の筒型香炉で内面は無釉である。

SD224（85～88）　85 は中国漳州窯産の磁器皿である。景徳鎮産（図版 25－20）と比べ胎土は粗雑で、呉須の発色が悪い。87 は須佐唐津の擂鉢である。88 は水滴で完形である。染付でびわの葉を現している。

Ⅳ層（89～92）　91 は頸が細くなる壺になると見られ、油壺の可能性がある。92 は紅皿である。

SK202（93）　93 は 17 世紀後半の椀で、型紙刷りの雨降り文様である。

Ⅴ層（94～96）　96 は仏飯器の底部片で砂が付着する。

Ⅶ a 層（97）　97 は 17 世紀後半から 18 世紀初頭の皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎされる。

Ⅶ層（98～100）　98 は白磁の小杯である。100 は白磁の型打皿である。器形は変形皿になる可能性もあり、径は復元していない。

Ⅸ a 層（101）　101 は青磁染付の初期伊万里の椀である。

SK207（102）　102 は口縁部がなぶり口に成形された初期伊万里の皿である。

Ⅹ層（103～107）　104 は網目文の椀で簡略化された魚が描かれているようである。

SK221（108～110）　SK221 の図化した 3 点のうち 2 点が初期伊万里である。108 は初期伊万里で荒磯文が描かれた皿である。この文様は輸出用であり、国内に流通したものは少ない。109 はいわゆる溝縁皿で、本調査ではこの 1 点のみの出土である。110 は口縁部が水平になる皿である。

Ⅺ層（111・112）　112 は白磁の型打菊花皿である。

（Ⅱ b 層）（113～116）　113 は古九谷様式の皿である。被熱して器壁は荒れ、色絵は退色している。破片の文様の配置から推定復元しているが、口径 24.6cm と大皿の部類に入る。口縁部は外反し、裏面には古九谷様式によく見られる雲気文が描かれている。115 は染付輪花皿で口径は 23.4cm と大皿の部類に入る。裏面にハリ支え痕が 5 か所残る。116 の擂鉢は、産地は明確ではないが、在地～東北系の窯で生産されたものとみられる。卸目は密に施される。

B 土 製 品（図版35）

土製品には箱庭道具、根付、土人形、面子、泥面子、玉、土錘、坩堝がある。図化していないが土鈴も1点出土している。箱庭道具などは一般集落などでは出ることはなく、町屋らしい遺物である。

箱庭道具（1） 1は箱庭道具の祠の屋根部分と見られる。素焼きで屋根部分のみ赤彩されている。庶民の間では17世紀後半頃には行われていたようであるが、1は19世紀代のものと見られる。

根 付（2） 2は陶器製の翁の根付である。額の一部と顎が欠損している。

土人形（3～9） 土人形は9点出土している。図化していないが、大黒の俵部分の破片も出土している。土人形の大半は、まじないや民間信仰と結びついていると考えられる。胎土の色調で京都系、在地系と分かれるようである。全て型作りで、型離れを容易にするため型の内側に付けられた雲母が表面に残るものが多い。出土したもののほとんどは、在地で作られたものと考えられる。

3は小形の尼と見られるものである。型に粘土を詰め込んで後、取り出すときに刺した竹串の孔の跡が底に残っている。顔の表現の有無は明確でない。4は裏表同一の文様で顔の表現はない。5は狛犬の阿形である。鬣、尾の表現など繊細である。胎土が白色系であることから京都系の可能性もある。7は頭部・足部が欠損しているが、類例から西行法師とみられる。西行は泥棒除けや疱気・腰痛のまじないに使われた。8は大黒と布袋の組相撲である。このほかに足部分が同一の破片が1点出土している。

面 子（10～14） 10～14は土器・磁器の破片を加工して面子にしたものである。2T・SD136からはまとまって陶磁器の椀・皿類などと共に出土した。直径3～4cm前後で泥面子より約2倍の大きさである。泥面子より下層からの出土であり、泥面子が普及する以前は、このような土器・陶磁器片を加工して使用していたと考えられる。

泥面子（15～42） 泥面子のほとんどは3Tからの出土であり、1～4グリッドの若狭屋の屋敷範囲に多い。19世紀前葉以降急激に増加し、19世紀中葉以降減少する傾向があるといわれるとおり、Ⅰ～Ⅲ層の比較的上層からの出土である。

玉（42） 土製の玉である。土鈴の舌とも考えたが、土玉の可能性が高い。

土 錘（43～48） 網につける管状錘ですべて5Tからの出土で、44～48はまとまって出土した。棒状のものに粘土を巻きつけて成形したものである。44・45には握った指の痕跡が残る。

坩 堝（49・50） 土製の坩堝である。49は砲弾状を成している。口縁部から流れ出たようにガラス質の付着物がある。磁器の破損を修復する技術に焼継・ガラス継と呼ばれる技法が18世紀末以降普及した。この坩堝はこのガラス継に使用された可能性が高い。出土磁器にもガラス継の痕跡が認められるものがある。

3 石 製 品（図版26・36～39）

A 概 要

石製品は、礎石・石臼・石鉢・砥石・火打石・磨石・碁石・不明石製品が出土した。

図化した47点中、礎石が最も多く20点である。礎石は切石を使用したものと、礫の表面に整形加工を施した2種類があった。そのうち切石が12点、礫に加工を施したものが8点である。切石の大半は明確に礎石として使用されている状態で出土したが、土坑に廃棄された状態のものもあり、これらは地覆石

等の用途も考えられる（SK28・30）。次に多く出土したのが碁石と砥石で、碁石は合計６点出土している。白碁石が１点、ほかは全て黒碁石である。ピットや溝等の遺構覆土中から出土している。砥石は６点出土している。切石製と礫を転用したものがあり、切石製は１点、礫転用品は５点出土した。いずれも遺構覆土中から出土した。そのほかの石製品については、出土数が１～２点と少ない。石白と硯が包含層出土で、そのほかは遺構覆土中から出土した。

記述は試掘調査・本発掘調査それぞれ器種ごとに行う。なお石材については、個別説明の中で記述する。石材同定については、ルーペによる肉眼観察で行った[1]。

B 各　　説

試掘調査（図版26）

5Tから硯１点、9Tから砥石が１点出土した。

硯（1）　1は長さ13.5cm、幅5.8cmの小型方硯である。石材は頁岩である。硯面には、使用による凹みはほとんどみられない。裏面に抉り込みあり。

砥　石（2）　2は現存長21.7cm、幅7.5cmの砥石である。石材は凝灰岩である。下端部は欠損している。表・右側・裏面に砥面を有する。表・裏面に線状痕あり。木口面・左右側面・裏面に平鑿整形痕を残す。

本発掘調査（図版36～39）

礎石類（1～9・15・21～32・36・44・45・47）　1～8・28～30は切石の礎石類である。1・2・6・7は緑色凝灰岩の切石である。石材は旧岩室村（現新潟市）産の間瀬石と思われる。色調は風化し茶系の凝灰岩のようにみえるが、割れ口は緑色がかる。いずれも角柱状で、1・2・7は方形に荒割後、表面全体をタガネ状工具で整形している。6は裏面だけ整形加工が施さず、荒割面をそのまま残す。寸法は３種類が確認される。大きいものから幅23cm・厚さ21cm（7）、幅23cm・厚さ18cm（1・2）、幅19cm・厚さ15cm（6）である。

3・4・5・8・28～30も緑色凝灰岩の切石で、福島県産の荻野石である。5・28～29は角柱状で、5は断面形が方形、28～29は台形状である。5は、表面をタガネ状工具で細かく整形し仕上げている。28～30は、荒割後タガネ状工具で表面を整形し、仕上げに表面と側面の一部を平刃状工具で平坦にしている。表面側の両側縁は面取りされている。28は長さがおおよそ90cmで、29・30はほぼ１／２大である。幅は３点とも18cmである。8は正方形板状で、荒割後タガネ状工具で整形し、仕上げに表面と側面の一部を平刃状工具で平坦にしている。一辺は36cmである。表面は被熱により大半が剥離している。3・4は切石の破片で、3は板状、4は角柱状の可能性がある。

26・31は加工を施した礫の礎石である。26・31は花崗岩の亜角礫で、角を敲いて潰している。表面中央に磨痕を有する。9も同様の礎石と思われるが、表面は被熱により剥離し、角の敲痕は明瞭でない。表面中央に、柱痕と思われる炭化物が１辺約15cmの方形に付着している。

1）石製品の石材同定については、埋文事業団　加藤学から、また礎石産地については、新潟市中央区上大川前通七番町の（株）石六石材店　倉田征雄氏からご指導いただいた。石六石材店は安政２（1855）年創業で現在の旧新潟税関の石庫の復元に携わっている。明治２年に建てられた石庫は間瀬石、昭和57年に復元された石庫は、すでに間瀬石が産出していなかったため、福島県の野沢石を使用している。

21～23・25・27・32・35・44・45は磨痕を有する礫の礎石である。いずれも一面が平坦な礫を用い、表面中央が磨れている。このうち44は、表面に1辺約12cmの方形の柱痕がある。

24・36は剥離による整形を施した礫の礎石である。24は片端を剥離し、平坦面を作出している。作出した平坦面上に、柱痕と思われる炭化物が部分的に付着している。36は両端を剥離して大きさを調整し、表面を敲打して平坦に仕上げている。表面中央に方形の柱痕が残る。

硯（33） 33は硯である。長さ7.7cm、幅3.5cmの小型方硯である。硯池は浅い。

砥　石（10～13・16・35） 10～13は自然礫を転用した砥石で、13～16cmの扁平円礫を用い、表面に砥面を有する。16は切石砥石で、表面全体に荒割痕を残す。整等による整形加工は施されない。凝灰岩製である。

碁　石（17～19・37・40・41） 17～19は頁岩製で、直径2cmほどの扁平な小円礫を黒碁石として使用したと思われる。37は石材が白色の凝灰岩で、白碁石と思われる。風化が著しい。40・41は黒色の頁岩製で、表面全体を研磨している。40は被熱で変色している。

石　臼（20） 20は石臼の下臼である。花崗岩製である。直径は29.3cmで臼面は8分画である。側面は線状整跡を残す工具で仕上げられ、整跡は上下2列に整然と並ぶ。底面は荒割痕を残す。

石　鉢（42） 42は方形鉢と思われる。緑色凝灰岩製で荻野石と思われる。側面は線状整跡を残す工具で整形され、口縁部は平刃状工具で平坦に仕上げられている。下面には三角錐形の脚部がある。

火打ち石（34・39） 34・39は火打ち石である。ともに玉髄製である。34は剥片状である。39は表面に自然面を残し、裏面は剥離面で構成されている。側縁と裏面の角は、擦痕がみられ摩滅している。

磨　石（38・46） 38・46は磨石である。石材はともに軽石である。38は表面のみ、46は表裏に磨り面がある。

4 木 製 品（図版27～29、40～43、第2表）

A 概　　要

木製品は試掘調査・本発掘調査合わせて1,091点出土し、そのうち124点について図化した。器種構成は第2表のとおりで、数量は個体数ではなく破片数である。記述は、試掘調査と本発掘調査のトレンチごとに行う。個別の詳細については観察表を参照願いたい。種類・器種名等については、『木器集成図録近畿古代編』「奈良国立文化財研究所1993」の分類を参考とした。また木簡については、別項で扱う。

B 各　　説

試掘調査（図版27～29）

3T（1～6） 板材2、蓋3、把手1点が出土している。1がⅡb層出土で、その他は全てⅥ層出土である。

1は板材である。下半部がL字状に切り落とされている。2～4は蓋と思われる。2は中央に列をなして5か所木釘が打ち込まれている。表面に木釘列に沿って把手の接着痕を残す。3は蓋中央がL字型に加工されている。4は中心に穴があけられ、中心からやや外れて2か所に木釘が打ち込まれている。5は蓋の把手である。下部はほぞ加工を施す。6は板材である。表裏に焼き印がある。表面に多数の線状痕がある。

4T（7）　樽蓋が1点出土している。7は表側が平坦に仕上げられ、裏側は成形時の加工痕を残す。縁辺寄りに直径2.5cmの栓孔がある。縁辺は鋭角で、裏面側の縁は面取りされている。

5T（8・9）　漆器椀1・箸1点が出土している。8は漆器椀である。胴部上半と高台部を破損。内外面ともに黒漆塗りである。9は箸である。表面全体に加工を施す。長さ21.3cmである。

6T（10～18）　漆器鉢1、樽蓋1、下駄1、底板1、下駄2、栓2、板材1、加工材1が出土している。このうちⅦ層から漆器鉢1点、Ⅸ層から樽蓋・下駄・板材が1点ずつ出土している。

10は漆器鉢である。底部中央と胴部上半を欠損している。外面は赤漆、内面と高台内面は黒漆塗りである。11は樽蓋である。側縁形状は算盤玉形で、右側面に木釘が打ち込まれている。12は差歯下駄である。表面中央に焼印がある。形状から屋号等の可能性が考えられる。表面前壺の両脇2か所が摩滅し、浅く窪んでいる。13は板材である。上縁は弧状で、中央に方形の穿孔がある。14は底板である。縁辺形状は鋭角で、裏面側の縁は面取りされている。15・16は栓である。ともに平面形は逆台形状、断面形は円形である。17は差歯下駄である。表裏面は黒漆塗り。18は加工材である。断面形はL字形である。

7T（19～22）　Ⅱb層から樽蓋・蓋・板材が1点ずつ、その他部材が1点出土している。

19は樽蓋である。縁辺近くに直径3.5cmの栓孔がある。表面側は平刃状工具痕、裏面側は鋸痕を残す。裏面側の縁は面取りされている。20は蓋である。両端に長さ約3cmの溝が平行して彫り込まれている。表面縁際に円形の金属片が貼り付いている。金属片のX線撮影を試みたところ、中央に正方形の穴が映し出されたことから、金属片は銭と思われる。銘は不明であり無文の可能性もある。21は板材である。両木口は腐食し失われている。板の左上に穿孔がある。22は部材である。2枚の板材で構成され、チキリ（木製接合材）を表面の3か所に埋め込んでつなぎ合わせている。材中央から先端部にかけて幅が狭くなっている。表面上に角材4点が金具で固定されている。側面には釘穴が10か所ある。

種　類	器　種	破片数	比　率
木　簡	木簡	4	0.4%
食膳具	漆器椀	5	0.5%
	漆器鉢	1	0.1%
	漆器	7	0.6%
	筴	1	0.1%
	箸	30	2.7%
容　器	曲物側板	1	0.1%
	曲物底板	2	0.2%
	結物側板	1	0.1%
	樽蓋	4	0.4%
	底板	18	1.6%
	蓋	7	0.6%
	蓋把手	1	0.1%
	栓	2	0.2%
	指物蓋	1	0.1%
	指物	1	0.1%
服飾具	差歯下駄	4	0.4%
	後歯下駄	1	0.1%
	下駄	4	0.4%
建築材等	柱根	30	2.7%
	礎板	7	0.6%
	板材	226	20.7%
	角材	39	3.6%
	竹材	8	0.7%
	部材	21	1.9%
	杭	103	9.4%
工　具	木錘	1	0.1%
	楔	1	0.1%
漁労具	たも網	2	0.2%
その他	棒状木製品	32	2.9%
	加工材	119	10.9%
	燃えさし	43	3.9%
	削り屑	86	7.9%
	切り屑	24	2.2%
	木片	250	22.9%
	樹皮	4	0.4%
合計		1091	100.0%

第2表　木製品器種構成

8T（23～37）　XII層から曲物底板2、樽蓋1、下駄2、角材1、たも網1、加工材3点出土。その他、排土から樽蓋1、板材1、角材1、加工材1、下駄1点が出土している。

23・24は曲物底板である。表裏両面の中心に直径1mmの凹みがある。23は縁際に樺皮の綴痕がある。25は樽蓋である。縁辺形状は算盤玉状で、表面と右側面に木釘打ち込み痕がある。26は後歯下駄で、左半部と後歯は欠損している。表面は黒漆塗り。27は差歯下駄である。後部両端が切り落とされている。28は部材である。直方体形で、下端部隅に枘を作り出している。29はたも網である。直径約1cmの枝材を用い、端部を平坦に削って加工している。又、枝材の表面に節が多数残すが、一部は削り落とされて

いる。30は加工材である。右側面の上端側にほぞ穴を作り出している。下端はL字型に切り落とされている。表面には多数の切り傷のほか、3か所に釘の打ち込み痕がある。31は加工材である。下面に木釘が3か所打ち込まれている。32は加工材である。断面形状は内歪し、上下両端を削って厚さを減じている。33は底板である。側面は垂直で、裏面側の縁を面取りしている。左側面には木釘が4か所打ち込まれている。34は板材である。表面3か所に穿孔あり。35は角材である。表面側の縁と、木口の側縁が面取りされている。36は板材である。右側面は鋸歯状に切り落とされている。表面と右側面に、釘跡が多数打ち込まれている。37は差歯下駄である。先端部両端・下端部右側が切り落とされ失われている

9T（38～41） Ⅴ～Ⅶ層から漆器椀1点、Ⅶ層から板材1、杭材1、青砂層から底板1点が出土している。

38は漆器椀である。高台部が破損している。表面と高台内は褐色漆塗り・内面は赤漆塗りである。39は板材である。左側面に金具が5か所打ち込まれている。40は杭である。半割材の一端を裏面側から細かく加工し、先端部を作出している。裏面に素材作成時の鋸痕を残す。41は底板である。側面は垂直で、裏面側の縁を面取りしている。表面に直径1mmの凹みがある。

11T（43・44） Ⅴ・Ⅵ層から、曲物側板と指物が1点ずつ出土した。

43は曲物側板の口縁部破片である。重なり合う側板を樺皮で綴っている。44は指物の部材で、5か所に木釘を打ち込んで、2枚の板をL字型に留めている。

本発掘調査（図版40～43）

2T（1～42）

SD1（1） 1は礎板である。板目材を使用している。表面は大半が腐食している。下端部は矢板に切断されている。遺存長は175cmである。

SD14（2～5） 2は礎板である。上端部は矢板に切られ欠損。遺存長は248cmで、幅33cm、厚さ6.4cmの板目材が使われている。表面側の縁は面取りされている。礎石1・2と接する部分は、表面が凹んでいる。3～5はそろばんである。2の礎板の下に、交差する向きに3本並べて置かれていた。3点ともミカン割材で、表面を部分的に加工して使用している。4はスギ材で、3・5はヒノキ材である。2の礎板と接する部分は、礎板の幅で凹んでいる。

礎板197（6） 6は柱材で、表面に多数の節があり、材にそってひびが入っている。片端は矢板に切られ欠損している。現存長は180cm。

SD136（7～12） 7は木簡と思われる。下半部は欠損している。墨書は確認できない。8は木錘と思われる。水滴形で、表面全体を加工して整形している。9は板材である。腐食が著しい。上端部に穿孔がある。10～12は部材で、10は材の片端にほぞを作出している。11は両端部がL字型に切り落とされている。12は角材を加工して、材の片端にほぞを作出している。また中央やや上寄りには、ほぞ穴を作出している。

SX196（13～23） 箱形木製品の部材が、組み合わさった状態で10点出土した。13～15は箱形木製品の南側板である。途中2か所が矢板に切られていたため、3分割された状態で出土したが、本来は一枚の板と思われる。13が南側板の西端部、14が中央部、15が東端部である。13と15は、末端部に別の側板と接合するためのほぞを作出している。上縁には別部材を接合し、ほぞ状の張り出しを作出している。木口面には金具が打ち込まれている。14は表面に小角材を埋め込んでいる。16は箱形木製品の西側板、

17は東側板である。ともに裏面に幅4cmのほぞ穴が作出されている。出土時は南側板のほぞが接合されていた。表面に、16は1か所、17は2か所、金具が打ち込まれている。18～20は箱形木製品の底板である。18は西側、19は中央、20は東側である。3点とも材の横方向に繊維が付着。表面から裏面にかけ、金具の貫通痕があり、21は1か所、22は2か所ある。21・22は箱形木製品の脚部である。21は西側の脚部で、22は東側の脚部である。17の表面中央には金具が打ち込まれている。23は不明木製品である。13の上面に載った状態で出土した。

SK153（25）　25は板材である。SK153の側板として土坑南壁面に立てて貼り付けられていた。現存長は169cmである。表面は腐食が著しい。

P160（26）礎板1点が出土した。26は礎板で、扁平円礫上に載って出土した。長さ21cm幅13cmである。2つに割れている。

杭167・杭168・杭257（27～29）　27・28・29は杭で、地面に直接打ち込まれている。先端部を尖頭状に加工した、幅約2cmの断面不整形な角材を使用している。

柱根200（30）　30は柱根で正面形は二股形、側面形はL字型である。側面に穿孔がある。

Ⅻ層（31～34）　31は角材である。柱根200の西側から出土した。先端部にほぞ穴が作出されている。表面は腐食が著しい。32は角材で側面形状は三角形である。材の中央に金具が貫通している。34は棒状木製品である。材の側面と片端部を加工し、尖頭状に仕上げている。

柱根199（35）　35は柱根で礎石256上に載って出土した。中央に穴が開いている。全体に腐食しているため、穴は穿孔によったためではなく腐食の可能性もある。

ⅩⅢ層（36～42）　36は木簡である。幅3.9cmである。上縁は弧状である。右側面から下端にかけて破損。表裏両面に墨書されている。37・38は箸である。37は先端部のみ加工を施す。38は全面に加工を施す。39・40・41は板材である。39と41は表面黒漆塗り。42は加工材である。材の中央に5か所穿孔されている。

3T（43～49）

SX110（43）　43は、表面に釘の打込み痕が2か所ある。

Ⅵ層（44）　44は板材の破片である。直径1.5cmの穿孔がある。

SK157（45）　45は杭で覆土中から出土した。両端部は腐食して欠損している。釘の打込み痕が表裏両面にあることから、建築材を転用していると思われる。

Ⅷ層（46・47）　46は木簡の先端部破片と思われる。2つに裂かれている。墨書は確認できていない。47は指物蓋の破片である。表面に、黒と金の塗料で船の絵が描かれている。表面には多数の線状痕がある。

杭189（48）　48の杭は末端部を欠損している。直径5cmの丸木材を使用している。

杭190（49）　49は杭で地面に直接打ち込まれている。1.4cmの角材の片端を加工し、先端部を作出している。

5T（50～78）

P201（50）　50は杭でピット覆土中から出土した。材の片端を加工して先端部を作出している。表裏面にほぞ穴状が2か所作出されていること、側面側には、幅2cmの長方形の穴が斜めに貫通していることから、建築材を杭に転用していると思われる。

SD224（51～64）　杭・食膳具・容器等が多数出土し、うち杭10点、篦1点、箸2点、蓋1点を図化

した。杭はいずれも直接地中に打ち込まれた状態で出土し、そのほかの木製品は溝覆土中から出土した。

51～60は杭である。51・56は建築材を転用した杭である。角形部材の片端を加工し、先端部を作出している。末端部にほぞ穴がある。52は角形部材の先端部を片側からのみ削り、杭として用いている。裏面にほぞ穴がある。53～55・57は丸木材を使用した杭である。55は、上端部を槍先状に加工している。先端部は欠損。58・59は角材を使用した杭である。59は現存長で151cmである。ほかの杭と比べ、1.5～2倍の長さがある。60は先端部を作出していない。部材を無加工のまま地中に打ち込んで杭として使用している。表面にほぞ穴がある。

61は篦である。柄の末端が穿孔されている。62・63は箸である。64は蓋である。3つの部材で構成され，表面に木釘痕を残す。

SK202（65～67）　漆器椀が2点、結物側板1点が覆土中から出土した。65・66は漆器椀である。ともに口縁部・高台部を破損している。65は表面・内面が赤漆塗りで、高台内面は黒漆塗りである。66は表面・高台内面褐色漆塗りで、内面は赤漆塗りである。67は結物側板で、断面形は内歪する。先端部片側が切り落とされている。

Ⅸ層（68）　68は蓋で3つの部材で構成されている。腐食が著しい。

Ⅹa層（69）　69は漆器椀で口縁部・高台部ともに破損している。全面赤漆塗りである。

Ⅹa－1層（70）　70は箸の先端部破片である。表面を削って整形されている。

Ⅹa－3層（71・72）　71は棒状木製品である。長さ23.5cm、幅4.5mmである。形状・長さ・加工法は本遺跡出土の箸と類似する。しかし、幅を比較すると箸が平均3mmなのに対し、71はやや幅広い。そのため棒状木製品とした。72は棒状木製品の先端部破片である。幅は1.5mmと細いが、加工法は本遺跡出土の箸と類似する。

SK221（73）　73は覆土中から出土した角材で、側面形状は五角形である。

SK222（74～77）　板材が4点出土した。いずれも土坑壁面を覆う側板として出土した。74～76は、幅約5cm厚さ1cm弱の板材である。いずれも表面の腐食が著しい。77の板材は、中央に長さ6cm弱の細長い穿孔がある。

Ⅺ層（78）　78は箸で長さ23.8cmである。表面全体を削っている。

5　木　　簡（図版29・41）

木簡で文字が確認できたものは、試掘調査10T排土一括で1点、本発掘調査2T2・ⅩⅢ層出土の1点である。釈文中の記号「／」は文中の改行やスペースを示す。表・裏は便宜的に付けたものである。

試掘調査10T（42）　42は四隅が面取りされた長方形の板材で中央部両脇に釘孔と見られる穿孔がある。表裏両面に墨書されている。内容から荷札木簡と考えられる。釈文は以下の通りである。

（表）「（一久）／□／蝋／播磨屋／六右衛門殿／さか河や／与太兵衛

（裏）皆かけ／拾五□〔貫か〕六百□〔目か〕／□村□」

「一久」は荷主を示す荷印とみられる。蝋の右の1字は不明である。荷のあて先が「播磨屋六右衛門」と考えられる。「さか河や与太兵衛」がこの木簡の差出人と考えられ、船積みされた地の問屋名である。

「皆かけ」は計量法の一種で「拾五□六百□」が荷の重量となる。荷のあて先の播磨屋は明暦2（1656）年地子帳には、本五之町東側に「はりまや孫右衛門」「はりまや三右衛門」、本五之町西側に「はりまや瀬

兵衛」の名がある。明和８（1771）年新潟町絵図（第10図）には本六之町東側に「播磨屋六郎右衛門」の名がある。木簡の出土層位が明確でなく、時期も明確でないので断定は困難であるが、位置的には本六之町東側の「播磨屋六郎右衛門」が最も近く、名前の類似性もあり、可能性は最も高いと考えられる。

本発掘調査2T（36）　36は2T2・Ⅻ層出土で荷札木簡の可能性が高い。墨痕が薄く、判読できた文字は少ない。釈文は以下の通りである。

（表）「□／［　　］

（裏）［　　］／□〔わ〕かさや［　　］

表とした面の１字目には「荷印」が書いてあると見られるが、以下の文字は不明である。荷札とすれば、商品名と数量・単位などが記されると推測される。裏面は２行書きで１行目は不明であるが、２行目には「□〔わ〕かさや」と記されている。以下は「名前＋行」などと記されていると考えられる。木簡が出土したⅫ層は、最下層であることから移転直後の生活面と考えられる。第Ⅱ章2Cでも述べたが2Tの位置については、移転直後は「わかさや」「長岡」「うるしや」の３家の屋敷の可能性があったが、この「わかさや」の木簡の文字から2Tは「わかさや」の屋敷である可能性が高まった。後の明和８年時点で2Tの位置が若狭屋であることは文献上確認されている。

6　金属製品（図版44～46）

金属製品には、鏡・小柄・刃物類・煙管・釘・分銅・匙・円盤・銭貨など多種多様なものがある。

鏡（1）　懐中鏡である。全体にかなり腐植が進んでおり、膨れも見られる。鏡面は出土当初は輝きが残っていたが、時間がたつごとに曇りが進んでいる。背面には棚から下がる葡萄の絵柄と「金雨河内大将藤原光村」の銘が鋳されている。背面に小さな鈕が２か所あり、孔に繊維が残っていたことから糸を通していたことが分かっている。この糸で財布などに縫いつけたと見られる。金属組成の分析は行っていないが、緑青が付着していることから銅または銅の化合物と見られる。

小　柄（2・3）　いずれも5Tから出土した銅製の小柄で無文である。小柄は刀の刀装具である小刀の柄である。X線写真を撮影したところ、基部が残存していることが判明した。3は煙管の吸口（17）と共に出土した。

刃　物（4）　4は工作用または文房具として使用するような刀子の刃部である。

包　丁（5）　5は包丁で、形体から菜切包丁と考えられる。

煙　管（6～17）　煙管には完形品はなく、吸管部分が欠損している。時期的には18世紀から19世紀頃のものである。6～10は銅製の雁首である。銅板を鍛造し、管状に成形し金属蝋（真鍮蝋や銀蝋など）で蝋付けするため継ぎ目が残る。きざみタバコを入れる火皿の6～9は別作りである。10は緑青が顕著で火皿が別作りかは観察できないが、高さが2.3cmと最も高いことから18世紀前半頃のものの可能性がある。6は雁首から火皿まで直線的に作られていることから最も新しく、1900年代の可能性が高い。11～17は吸口で3Tから出土した11～15は銅製、5Tから出土した16・17は真鍮製である。吸口も雁首同様に金属板を鍛造し成形しており継ぎ目が見える。14・17は肩が付く形で、11・13に吸管の竹の一部が残存している。

釘（18～25）　18～25は和釘で鍛冶により鉄板を切り、打って成形したもので断面は方形である。18が最小である。19・20は指物などの結合に使用されたもので、木質部が錆びの影響を受け付着して

いる。21は先端部が二股に分かれていることから特殊な用途か。

匙（26・27） いずれも銅製の匙で薄い板を切り出して成形している。

火 箸（28）鉄製の火箸である。上部に突起があり、指を掛けるようになっている。

工 具（29）鉄製で三角形の木製の柄が付くようである。工具としたが、類例がなく詳細は不明である。柄以外の欠損部はない。

輪金具（30） 鉄製の輪金具である。鉄の棒を曲げて輪状にしており、端部は結合していない。

分 銅（31） 天秤用の銅製の長方形の分銅である。鈕が一部欠損しており、重さは61.78gで17匁に相当する。1面に歯型分銅の模様が鋳出されている。もう一面にも何かが鋳出されているようだが、不鮮明である。

円 板（32・33） 32の素材は銀と見られ周囲に微細なキザミが入る。銭の一種かとも思われるが詳細は不明である。33の素材は鉛の可能性がある。

雁首銭（34～38） 全て3T1～4グリッドの範囲から出土しており、若狭屋の屋敷範囲である。銅製である。雁首銭は煙管の火皿部分を平らに潰して、銭の緡に混ぜたとも緡縄の固定に用いられたともいう。

銭 貨（39～69） 銭貨は試掘調査では、7T・Ⅶ層から寛永通寶（新・寛永）が1枚、7Tから出土した木製品（図版28－20）に銭種不明の銭が1枚溶着している。10T一括から寛永通寶（新・寛永）が1枚出土している。本発掘調査では、2Tから寛永通寶が18枚（古・寛永7、新・寛永5、文銭2、不明4）、雁首銭の可能性のあるもの1枚、銭種不明7枚で計26枚出土している。3Tでは、寛永通寶が95枚（古・寛永30、新・寛永31、文銭10、波銭1、不明23）、洪武通寶1枚、至道元寶1枚、雁首銭5枚、銭種不明50枚、計152枚出土している。5Tでは、寛永通寶が10枚（古・寛永3、新・寛永2、文銭2、不明3）、淳化元寶1枚、永楽通寶1枚、銭種不明5枚で計17枚出土している。試掘調査分、雁首銭と合わせ計197枚出土している。中国からの渡来銭は4枚で、ほか大部分は寛永通寶である。銭種は第3表に示した。3Tから全体の約77％が出土している。3Tの中でも1～4グリッドの若狭屋の屋敷範囲から集中して出土している。

銭種		数量	備考
寛永通寶	古・寛永通寶	40	
	新・寛永通寶	55	内「文銭」14、4文「波銭」1
	寛永通寶・寛永通宝か	30	
中国銭	至道元寶	1	北宋995年初鋳
	洪武通寶	1	明1368年初鋳
	淳化元宝	1	北宋990年初鋳
	永楽通寶	1	明1408年初鋳
その他	銭種不明	62	
	雁首銭	6	
合計		197	

第3表 銭貨集計表

第Ⅴ章　自然科学分析

1　テフラ分析

黒 澤 一 男・長 友 純 子・中村賢太郎（パレオ・ラボ）

A　試料と分析方法

テフラ分析は、本遺跡において、2Tから採取された2試料（2Tジオスライサー、2T2Ⅴ層）と、3Tから採取された4試料（3T2北壁、3T7Ⅶ層、3T・SK95・3層、3T・P96・2層）の計6試料（第4表）を用い、以下の手順で分析をおこなった。

採取地点	層位
3T2北壁	灰層
3T7	Ⅶ層
3T・SK95	3層
3T・P96	2層
2T2	Ⅴ層
2Tジオスライサー採取	別層

第4表　テフラ分析試料一覧

(1) 各試料について自然含水状態で秤量し、テフラ分析試料とした。また一部の試料もしくは別の試料を乾燥器中で乾燥した後、再秤量して含水比を求めた。

(2) 1φ（0.5mm：30メッシュ）、2φ（0.25mm：60メッシュ）、3φ（0.125mm：120メッシュ）、4φ（0.063mm：250メッシュ）の4枚のふるいを重ね、流水下で電磁式ふるい振とう機を用いて、湿式ふるい分けをおこなった。各ふるいの残渣について、それぞれを乾燥・秤量して粒度組成としてあらわし、試料の乾燥重量中における粒径4φ以上の砂粒分の重量％を含砂率とした。

(3) 4φの残渣（粒径0.125～0.063mm）については、重液（テトラブロモエタン、比重2.96）を用いて重鉱物（有色鉱物）と軽鉱物（無色鉱物）に分離した。

(4) 分離した重軽鉱物について封入剤レークサイトセメントを用いてプレパラートを作成した。それらを偏光顕微鏡下で鉱物粒子を同定、計数し、鉱物組成を求めた。重鉱物は、ジルコン、斜方輝石（主にしそ輝石）、単斜輝石（主に普通輝石）、角閃石（ホルンブレンド）、磁鉄鉱とチタン鉄鉱、不透明鉱物（その他の不透明粒子を含む）に分類し、軽鉱物は火山ガラスと長石類に分類した。なお、軽鉱物中に含まれる未分解のローム粒子や風化粒子については試料の洗浄のしかたによって含有率が異なる場合があるので、計数の対象から除いた。また、火山ガラスの形態については、町田・新井［2003］の分類基準に従い形態分類をおこなった。

(5) それぞれの試料について火山ガラスの屈折率測定をおこなった。測定は、温度変化型屈折率測定装置を用いて屈折率（n）を測定し、その結果を範囲（range）であらわした。

B　鉱物分析結果

堆積物の鉱物分析をおこなった結果を第5表、第15図に示し、以下にそれぞれについて述べる。

堆積物中の砂粒分の割合（含砂率）は、2Tジオスライサーで最も低く1.0％となり、その他の試料では15～44％となった。

砂粒分の粒度組成は、2Tジオスライサーと3T・P96・2層では4φ残渣が62％以上の高い値を示し、2T2Ⅴ層と、3T2北壁、3T7Ⅶ層では3φ残渣と4φ残渣の合計は61％以上となった。逆に3T・SK95・3層では1φ残渣と2φ残渣がそれぞれ32％以上の高い値を示した。

重・軽鉱物比については、全体を通して軽鉱物が89％以上となり、3T・SK95・3層においては軽鉱物が99.5％と非常に高い値をとる。

重鉱物は、斜方輝石、単斜輝石を主体とする組成である。斜方輝石は全試料において39～49％の高い含有率を示す。単斜輝石の含有率は25～44％となり、3T2北壁において44.1％と最も高い値となる。角閃石の含有量は14～26％となり、2Tジオスライザーにおいて26.3％と最も高い値となる。磁鉄鉱はおおむね10％以下の含有量となる。

軽鉱物は、いずれの試料においても長石が93％以上の高い値を示す。

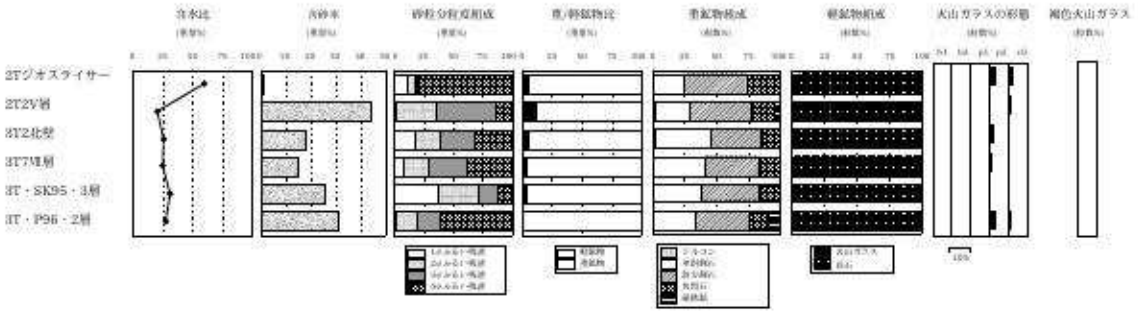
火山ガラスの形態は、いずれの試料でもスポンジ状（p2）が最も多く、次いで破砕型（c0）が検出されている。

試料番号	含水率（重量％）	含砂率（重量％）	砂粒分の粒度組成（重量％）			
			1φ	2φ	3φ	4φ
1	60.3	1.0	11.8	5.9	0.0	82.4
2	20.5	43.9	0.7	35.0	50.0	14.3
3	26.3	18.0	17.6	20.7	28.9	32.8
4	24.9	15.0	7.1	21.5	32.7	38.8
5	30.8	25.1	37.1	32.9	17.8	12.2
6	27.4	30.8	1.7	17.5	18.6	62.2

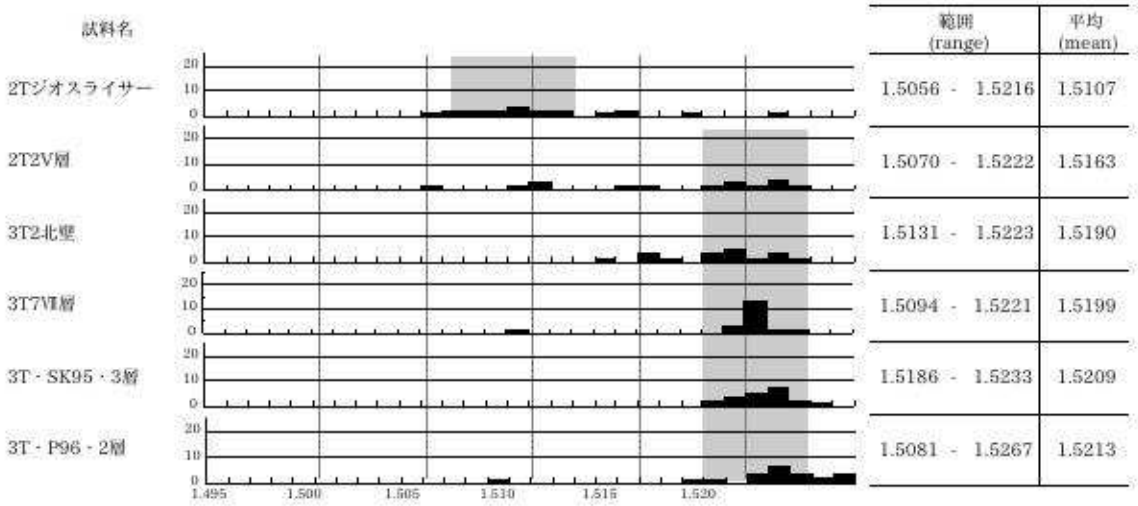
試料番号	軽鉱物組成（粒数）		淡褐色火山ガラス含有量（粒数％）	火山ガラス形態分類（粒数）				
	長石 Vg	火山ガラス Vg		平板状 b1	Y字状 b2	繊維状 p1	スポンジ状 p2	破砕型 c0
1	185	13	0.5	1	-	-	7	5
2	356	11	0.3	-	1	1	4	5
3	246	10	0.4	-	-	-	8	2
4	350	10	-	-	-	-	7	3
5	295	4	-	-	-	-	2	2
6	368	21	0.3	2	-	-	14	5

試料番号	重・軽鉱物組成（重量％）		重鉱物組成（粒数）					
	重鉱物	軽鉱物	ジルコン Zi	単斜輝石 Cpx	斜方輝石 Opx	角閃石 Hor	磁鉄鉱 Mag	不明 Opq
1	5.7	94.3	1	44	87	47	-	334
2	10.4	89.6	3	46	79	30	9	176
3	4.2	95.8	4	97	86	31	2	9
4	3.1	96.9	-	80	80	34	-	198
5	3.7	96.3	-	58	70	26	1	179
6	0.5	99.5	2	62	78	26	19	218

第5表　テフラ分析結果



第15図　堆積物の鉱物組成



範囲 (range)	平均 (mean)
1.5056 - 1.5216	1.5107
1.5070 - 1.5222	1.5163
1.5131 - 1.5223	1.5190
1.5094 - 1.5221	1.5199
1.5186 - 1.5233	1.5209
1.5081 - 1.5267	1.5213

第16図　火山ガラスの屈折率測定結果（縦軸：測定粒数、横軸：屈折率）

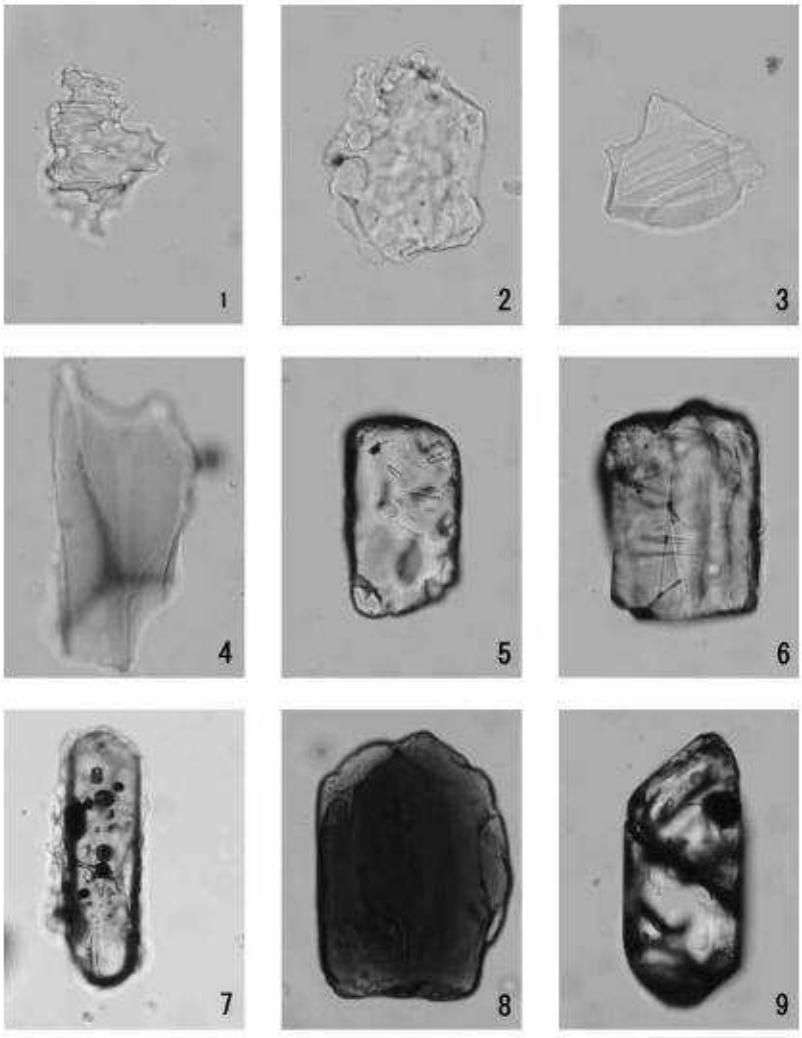
C　火山ガラス屈折率測定結果

屈折率の測定はそれぞれの試料において特徴的に認められる火山ガラスを対象におこなった。屈折率測定の対象としたものは、いずれの試料においてもスポンジ状（p2）の火山ガラスである。その測定結果を第16図に示す。

屈折率の測定値より、大きく2つのタイプに分けられる。それらは範囲1.506～1.512を中心とするタイプ（2Tジオスライサー）と範囲1.518～1.523を中心とするタイプ（2Tジオスライサー以外の5試料）である。

D　おわりに

今回の分析において、いずれの試料においても火山ガラスの含有量が低く、指標テフラを検出することができなかった。また重鉱物プレパラート中に不透明粒子が多く、岩片などの堆積物が多く混ざっていることから河川の影響により二次的に堆積したものと考えられ、本遺跡が隣接している信濃川の影響により二次堆積したと考えられる。また、火山ガラスの屈折率値は拡散しており、火山ガラスの起源を特定するにはいたらず、複数のテフラが混ざり合って二次堆積したものと考えられる。



1　軽石型スポンジ状火山ガラス　（3T・P96・2層）
2　軽石型スポンジ状火山ガラス　（2Tジオスライサー）
3　急冷破砕型火山ガラス　（2Tジオスライサー）
4　褐色火山ガラス　（3T・P96・2層）
5　単斜輝石　（3T2北壁）
6　斜方輝石　（2T2Ⅴ層）
7　火山ガラス付き斜方輝石　（3T7Ⅶ層）
8　角閃石　（3T・P96・2層）
9　ジルコン　（3T2北壁）

第17図　堆積物中に含まれる鉱物類（スケールは0.1mm）

2　珪藻化石群集

黒 澤 一 男（パレオ・ラボ）

A　はじめに

珪藻は淡水から海水に至るほとんどすべての水域に生息し、水域生態系の一次生産者として重要な位置を占めている。微小（0.01～0.5mm程度）ながら珪酸体からなる殻を形成するため、化石として地層中によく保存される。また種類ごとに様々な水域に適応し生息するため古環境の指標としてもよく利用されている。

ここでは採取された試料を用いて珪藻化石群集を調べ、その堆積環境について検討する。

B　試料及び分析方法

分析には、2Tから採取された4試料（XIII層・XIV層・XVII層・XX層）、3Tから採取された3試料（XVI層・XVII層・XVIII層）、5Tから採取された3試料（XI層・XIII層・XIV層）の計10試料を用いて、以下の珪藻分析をおこなった。

(1) 試料を湿潤重量で約1～2g程度取り出し、秤量した後にトールビーカーに移し、30％過酸化水素水を加え、加熱・反応させ、有機物の分解と粒子の分散を行った。

(2) 反応終了後、水を加え、1時間程してから上澄み液を除去し、細粒のコロイドを捨てた。この作業は上澄み液が透明になるまで7回以上繰り返し行った。

(3) ビーカーに残った残渣は遠心管に回収した。

a　マイクロピペットを用い、遠心管から適量を取り、カバーガラスに滴下し、乾燥した。乾燥後にマウントメディア（封入剤）で封入し、プレパラートを作成した。

b　各プレパラートを光学顕微鏡下400～1000倍で観察し、珪藻化石200個体以上について同定・計数を行った。なお，珪藻化石が少ない試料に関してはプレパラート全面について精査した。

C　珪藻化石の環境指標種群について

珪藻化石の環境指標種群は、主に小杉［1988］および安藤［1990］により設定された環境指標種群に基づいた。小杉［1988］は汽水～海水域における環境指標種群，安藤［1990］は淡水域における環境指標種群を設定した。なお環境指標種群以外の珪藻種については、淡水種は広布種として、海水種と汽水種は不明種として扱った。また、破片であるため属レベルで同定した分類群は不明種として扱った。以下に小杉［1988］と安藤［1990］において設定された環境指標種群の概要を記す。

外洋指標種群（A）	塩分が35‰以上の外洋水中を浮遊生活する種群。
内湾指標種群（B）	塩分が26～35‰の内湾水中を浮遊生活する種群。
海水藻場指標種群（C1）	塩分が12～35‰の水域の海藻や海草（アマモなど）に付着生活する種群。
海水砂質干潟指標種群（D1）	塩分が26～35‰の水域の砂底に付着生活する種群。
海水泥質干潟指標種群（E1）	塩分が12～30‰の水域の泥底に付着生活する種群。
汽水藻場指標種群（C2）	塩分が4～12‰の水域の海藻や海草に付着生活する種群。
汽水砂質干潟指標種群（D2）	塩分が5～26‰の水域の砂底に付着生活する種群。

汽水泥質干潟指標種群（E2）	塩分が2～12‰の水域（塩性湿地など）の泥底に付着生活する種群。
上流性河川指標種群（J）	河川上流の渓谷部に集中して出現する種群。
中～下流性河川指標種群（K）	中～下流域、すなわち河川沿いの河成段丘、扇状地および自然堤防、後背湿地といった地形が見られる部分に集中して出現する種群。
最下流性河川指標種群（L）	最下流域の三角州の部分に集中して出現する種群。
湖沼浮遊性指標種群（M）	水深が1.5m以上で、水生植物が水底には生息していない湖沼に生息する種群。
湖沼沼沢湿地指標種群（N）	湖沼における浮遊生種としても、沼沢湿地における付着生種としても優勢な出現が見られ、湖沼・沼沢湿地の環境を指標する可能性が大きい種群。
沼沢湿地付着生指標種群（O）	水深が1m内外で、植物が一面に繁茂しているところおよび湿地において付着状態で優勢な出現が見られる種群。
高層湿原指標種群（P）	ミズゴケを主とした植物群落および泥炭地の発達が見られる場所に出現する種群。
陸域指標種群（Q）	前述の水域に対して、陸域を生息域として生活している種群（陸生珪藻）。

D　珪藻化石群集の特徴（第18図・第6表）

本遺跡において検出された珪藻化石は、77分類群26属60種3亜種である。これらの珪藻種から設定された環境指標種群は、広布種を含め5種群である。以下に地点ごとにこれら種群の出現状況の特徴と堆積環境について述べる。

1）2T

・Ⅰ帯（XX層・XⅦ層）

検出された珪藻殻数は3個、6個と少ないため、珪藻化石より環境を推定することはできない。

・Ⅱ帯（XV層）

堆積物1g中の珪藻殻数は9.62×10^4個、完形殻の出現率は約16％と低くなる。この試料からは沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*が特徴的に検出され、中～下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*や沼沢湿地付着生指標種群の*Gomphonema acuminatum*が随伴して検出されている。

これらのことから堆積環境は河川に近接する沼沢地もしくは湿地的環境であると推定される。

・Ⅲ帯（XIII層）

珪藻殻数が検出されなかったため、珪藻化石より環境を推定することはできない。

2）3T

・Ⅰ帯（XVⅡ層）

検出された珪藻殻数は2個と少ないため、珪藻化石より環境を推定することはできない。

・Ⅱ帯（XVⅢ層）

堆積物1g中の珪藻殻数は1.80×10^5個、完形殻の出現率は約45％となる。2TのⅡ帯と同様に、この試料からは沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*が特徴的に検出され、中～下流性河川指標種群の

Cymbella turgidula や沼沢湿地付着生指標種群の *Cymbella aspera* などが随伴して検出されている。

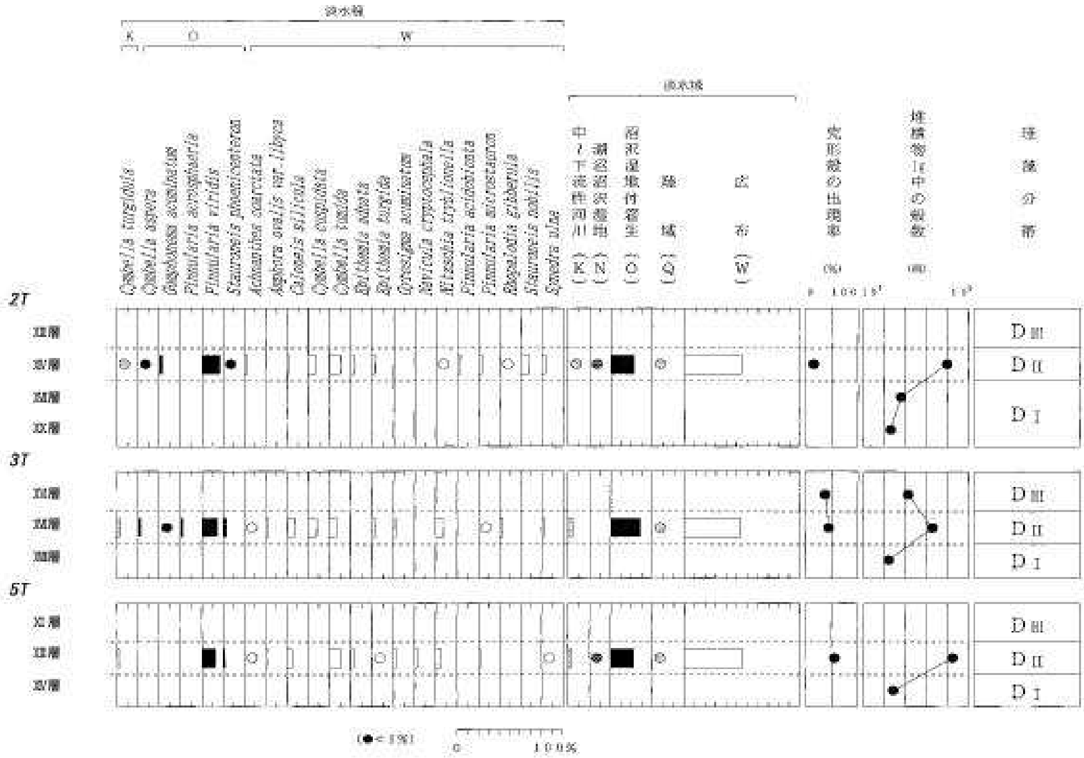
これらのことから堆積環境は河川に近接する沼沢地もしくは湿地的環境であると推定される。

・Ⅲ帯（XVI層）

検出された珪藻殻数は24個とやや少なく，広布種が多いものの，陸域指標種群や沼沢湿地付着生指標種群が少量ながら検出されている。このことからジメジメとした陸域環境もしくは湿地環境が考えられる。

分類群	種群	2T				3T			5T		
		[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]	[illegible]
Actinoptychus senarius	?	–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
Achnanthes coarctata	K	–	4	–	–	–	1	–	–	2	–
A. inflata	K	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
A. spp.	?	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Amphora ovalis var. libyca	K	–	–	–	–	–	2	–	–	5	–
Caloneis bacillum	K	–	–	–	–	–	–	–	–	–	3
C. silicula	K	–	3	–	–	1	1	–	–	11	–
C. spp.	?	–	–	–	–	–	–	–	–	4	–
Cocconeis placentula	M	–	–	–	–	–	–	1	–	3	–
Cyclotella spp.	?	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
Cymbella aspera	O	–	1	–	–	–	2	–	–	1	–
C. cistula	O	–	5	–	–	–	1	–	–	4	–
C. cuspidata	M	–	13	–	–	–	6	–	–	–	–
C. minuta	M	–	–	–	–	–	–	1	–	2	–
C. naviculiformis	O	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
C. tumida	K	–	16	1	–	–	6	–	–	26	–
C. turgidula	K	–	2	1	–	–	2	–	–	6	–
C. spp.	?	–	3	–	–	–	–	–	–	1	–
Diploneis elliptica	O	–	–	–	–	8	1	–	–	3	–
D. finnica	K	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
D. ovalis	K	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–
Epithemia adnata	K	–	4	1	–	–	–	–	–	6	–
E. turgida	K	–	5	–	–	–	2	–	–	2	–
Eunotia praerupta var. bidens	O	–	–	–	–	–	1	–	–	1	1
E. spp.	?	–	–	–	–	1	1	–	–	–	–
Fragilaria capucina	K	–	1	–	1	–	–	–	–	3	1
Frustulia rhomboides var. saxonica	O	–	–	1	–	–	–	–	–	–	–
F. vulgaris	K	–	–	–	–	1	–	–	–	5	–
Gomphonema acuminatum	O	–	4	–	–	–	1	–	–	–	–
G. angustatum	K	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
G. augur	K	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
G. clevei	K	–	1	–	–	2	–	–	–	1	–
G. parvulum	K	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–
G. sphaerophorum	K	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
G. truncatum	K	–	–	–	–	1	–	–	–	1	–
G. spp.	?	–	–	–	–	–	1	–	–	6	–
Gyrosigma acuminatum	K	–	–	–	–	–	1	–	–	5	–
G. parkerii	K	–	2	–	–	–	–	–	–	8	–
G. spp.	?	–	11	–	–	1	1	–	–	15	–
Hantzschia amphioxys	Q	–	3	–	–	–	–	–	–	–	–
Melosira ambigua	?	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–
M. distans	?	–	2	–	–	–	–	–	–	–	–
M. italica	K	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
M. spp.	?	–	1	–	–	–	–	–	–	4	–
Navicula americana	W	–	1	–	–	–	1	–	–	–	–
N. bryophila &	W	–	–	–	–	2	–	–	–	–	–
N. cryptocephala	W	–	–	–	–	–	–	–	–	7	–
N. cuspidata	W	–	1	–	–	–	1	–	–	–	–
N. [illegible]	W	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
N. viridula	W	–	–	–	–	–	1	–	–	2	–
N. spp.	?	–	1	–	–	3	–	–	–	2	–
Neidium iridis	O	–	–	–	–	1	–	–	–	4	–
N. spp.	?	–	1	–	–	1	1	–	–	–	–
Nitzschia palea	W	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
N. tryblionella	W	–	1	–	–	–	3	–	–	11	–
N. spp.	?	–	–	–	–	–	–	–	–	4	–
Pinnularia acidobiata	W	–	8	–	–	–	–	–	–	–	–
P. acrosphaeria	O	–	–	–	–	–	2	–	–	–	–
P. cardinaliculus	W	–	3	–	–	–	–	–	–	1	–
P. gibba	O	–	1	–	–	–	1	–	–	1	–
P. interrupta	W	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
P. major	W	–	–	–	–	–	1	–	–	–	–
P. microstauron	W	–	7	1	–	–	3	–	–	3	–
P. subcapitata	O	–	–	–	–	–	–	–	–	1	–
P. viridis	O	–	27	–	–	2	10	–	–	27	–
P. spp.	?	–	11	–	1	–	2	–	–	1	–
Rhoicosphenia abbreviata	K	–	–	–	–	–	–	–	–	2	–
Rhopalodia gibba	K	–	–	–	–	1	–	–	–	3	–
R. gibberula	K	–	1	–	–	–	2	–	–	–	–
Stauroneis anceps	W	–	–	–	–	1	–	–	–	1	–
S. nobilis	W	–	13	–	–	–	–	–	–	–	–
S. phoenicenteron	O	–	1	–	–	–	2	–	–	4	–
S. spp.	?	–	5	–	–	1	–	–	–	–	–
Surirella minuta	K	–	–	–	–	–	–	–	–	3	–
S. spp.	?	–	1	–	–	–	–	–	–	3	–
Synedra ulna	K	–	1	–	1	–	2	–	–	3	–
Tabellaria flocculosa	O	–	1	1	–	–	–	–	–	–	–
Unknown	?	–	1	–	–	–	–	–	–	–	–
不定または不明　（？）		–	–	–	–	–	–	–	–	–	1
中～下流性河川　（K）		–	8	1	–	–	3	–	–	6	–
湖沼沼沢湿地　（N）		–	8	–	–	–	–	–	–	2	–
沼沢湿地付着生　（O）		–	35	1	–	8	20	–	–	45	1
陸　域　（Q）		–	3	–	–	6	1	–	–	3	–
広　布　種　（W）		–	87	4	2	9	18	2	–	117	2
不　明　（？）		–	32	–	1	6	8	–	–	36	–
珪　藻　殻　数		0	168	6	3	24	72	2	8	202	4

第6表　珪藻化石産出表（種群は小杉［1988］または安藤［1990］に基づく）



第18図　珪藻化石分布図（3%以上の分類群を表示）

3）5T

・Ⅰ帯（XIV層）

検出された珪藻殻数は４個と少ないため、珪藻化石より環境を推定することはできない。

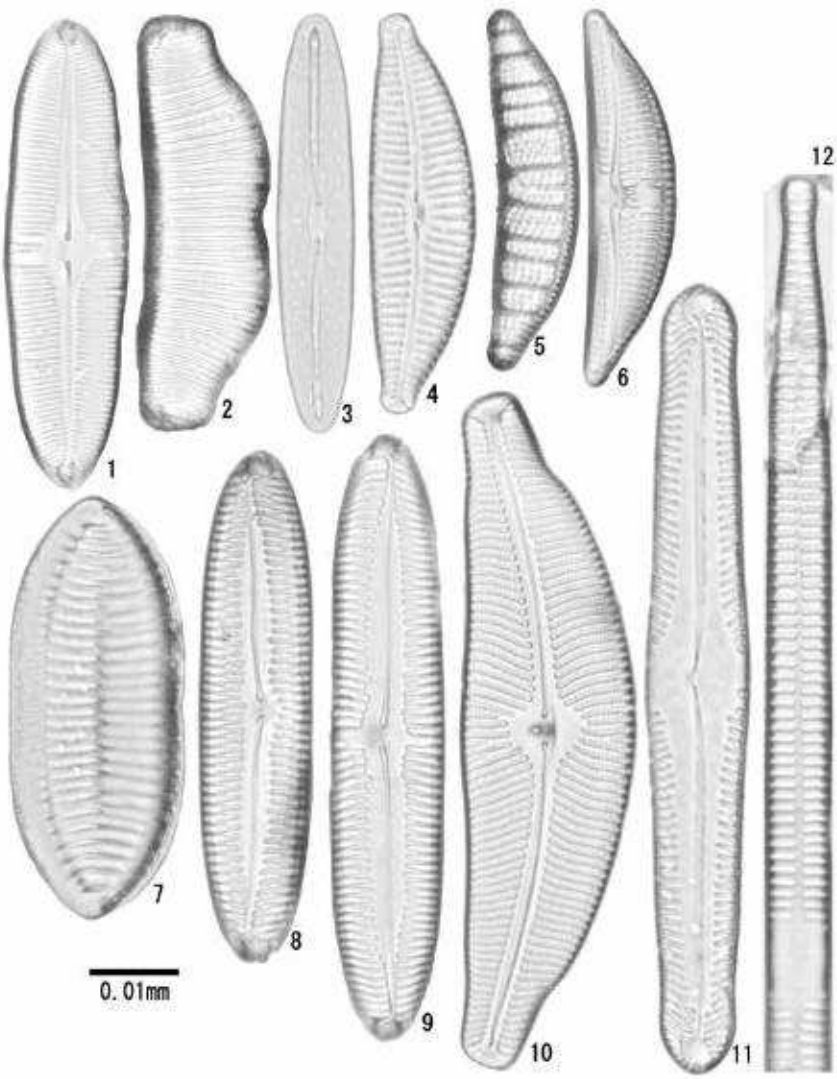
・Ⅱ帯（XIII層）

堆積物1g中の珪藻殻数は1.98×10^4個、完形殻の出現率は約56％となる。2TのⅡ帯や3TのⅡ帯と同様に、この試料からは沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*が特徴的に検出され、中～下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*が随伴して検出されている。

これらのことから堆積環境は河川に近接する沼沢地もしくは湿地的環境であると推定される。

・Ⅲ帯（XI層）

珪藻殻数が検出されなかったため、珪藻化石より環境を推定することはできない。



1 *Caloneis silicula*　2 *Eunotia praerupta* var. *bidens*
3 *Frustulia vulgaris*　4 *Cymbella turgidula*
5 *Epithemia adnata*　6 *Amphora ovalis* var. *libyca*
7 *Nitzschia tryblionella*　8・9 *Pinnularia viridis*
10 *Cymbella tumida*　11 *Pinnularia gibba*
12 *Synedra ulna*

（6:3T XII層，1～5・7～12:5T XIII層）

第19図　珪藻化石顕微鏡写真

E 考　　察

堆積物試料を用いて珪藻分析を行った結果について考察する。

分析試料には砂と粘土があり、2Tと3T、5Tのそれぞれに粘土が1試料ずつあり、残りは砂である。珪藻の検出はこの堆積物の粒度に対応しており、粘土試料からは比較的検出されているものの、砂試料からはほとんど検出されていないという結果となった。珪藻殻は砂粒子より微小で、砂の堆積するような環境下では堆積しづらい。そのため、砂試料中に珪藻殻は希薄であったと考えられ、その堆積環境は、やや流れのある河川環境の可能性が考えられる。

粘土試料については3試料とも沼沢湿地付着生指標種群の*Pinnularia viridis*が特徴的に検出され、中～下流性河川指標種群の*Cymbella turgidula*が随伴するという結果になった。それにより推定される堆積環境は、洪水など河川の水位が増した際に河川水をかぶるような河川の後背地にある湿地が考えられる。

分析した試料以外の層位において砂と粘土が繰り返し堆積していることが堆積物の観察によって明らかにされている。今回の珪藻分析より得られた堆積環境に類似した環境が繰りかえし起こったと考えられる。

F　おわりに

本遺跡から採取された堆積物試料中の珪藻化石を検討した結果、それぞれの地点で層位の違いはあるものの、粘土層堆積時は河川の後背地にある湿地環境と考えられた。また層序を考慮すると、後背地から河川へと交互に移り変わっていると考えられ、頻繁に信濃川が流路をかえていた可能性が考えられる。

3　寄生虫卵分析

鈴木　茂（パレオ・ラボ）

A　はじめに

本遺跡で、検出された土坑の用途等を判断するための基礎資料を得る目的で覆土が採取された。以下にはこの覆土について行った寄生虫卵分析の結果・考察を示す。

B　試料と分析方法

試料はSK129（1～3層）とSK134（1・2層）の2つの土坑より採取された5試料である。各試料について、SK129の1層はにぶい黄褐色の砂で、褐灰色の粘土ブロックが斑状に多く混入している。2層は褐灰色の砂で、やはり粘土ブロックが混入している。3層は褐灰色の砂で、有機質の灰黄褐色粘土が多く混入している。SK134の1層は鈍い黄褐色の砂、2層は褐灰色の砂で、両層とも灰黄褐色の粘土ブロックが混入している。これら5試料について以下のような手順にしたがって寄生虫卵分析を行った。

体積を測定した各試料を遠沈管にとり、10％の水酸化カリウム溶液を加え20分間湯煎する。水洗後、0.5mm目の篩にて植物遺体などを取り除き、傾斜法を用いて粗粒砂分を除去する。次に46％のフッ化水素酸溶液を加え20分間放置する。水洗後、比重分離（比重2.1に調整した臭化亜鉛溶液を加え遠心分離）を行い、浮遊物を回収し、水洗する。水洗後、酢酸処理を行い、続けてアセトリシス処理（無水酢酸9：1濃硫酸の割合の混酸を加え3分間湯煎）を行う。水洗後、残渣にグリセリンを加え保存用とする。この残渣よりマイクロピペットを用いて計測してプレパラートの作成を行い、検鏡はプレパラート全面について行った。

C　寄生虫卵分析結果

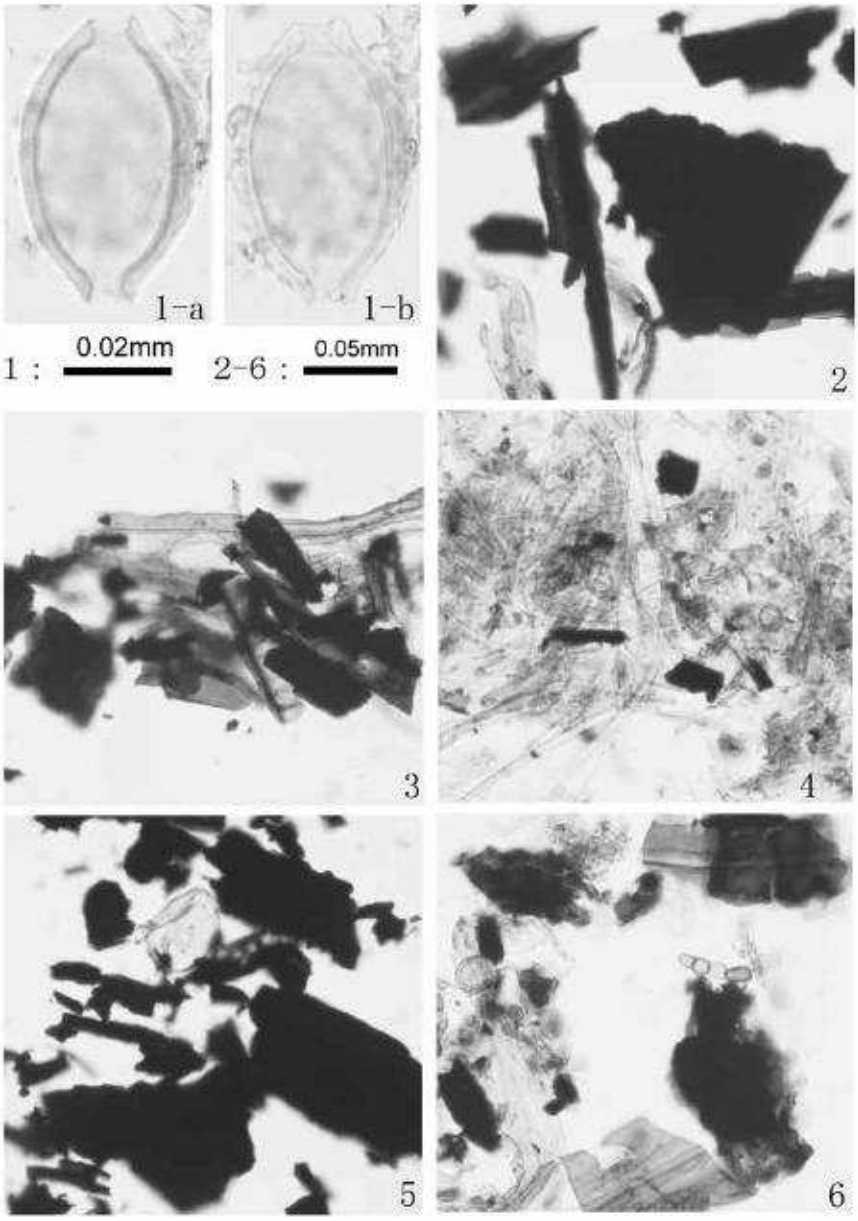
観察の結果、SK134の2層試料より1ccあたり13個体の寄生虫卵（鞭虫卵）が認められた。しかしながら他の4試料からは1個体も寄生虫卵は検出されなかった。なお花粉化石が全試料で観察されており、そのうち有用植物としてはソバ属やベニバナ属が得られている。

D　糞便について

上記したようにSK134の2層試料より若干の寄生虫卵（鞭虫卵）が観察された。ここで寄生虫卵個数に

ついて示すと、試料1cc中に1,000個以上の寄生虫卵があれば糞便の可能性があると考えられている［金原1997］。SK134の2層試料からは試料1cc中13個であり、金原［1997］に従えば寄生虫卵が検出された試料について糞便である可能性は低いと判断されよう。しかしながら試料は砂が卓越しており、この砂によって糞便の密度が薄められている可能性も考えられる。また近世においては廃棄する際かなりきれいにしている可能性も考えられる。

以上のように寄生虫卵分析では用途としてトイレである可能性は低い結果となったが、遺構の形状等、多方面からの検討のうえその用途について判断されるのが望ましいと考える。



1：鞭虫卵（SK134　2層）
2：プレパラートの状況（SK129　1層）
3：プレパラートの状況（SK129　2層）
4：プレパラートの状況（SK129　3層）
5：プレパラートの状況（SK134　1層）
6：プレパラートの状況（SK134　2層）

第20図　寄生虫卵分析試料の顕微鏡写真

4　木製品の樹種同定

植田弥生（パレオ・ラボ）

A　はじめに

ここでは、近世の町跡で使用されていた木製品の樹種同定結果を報告する。近世の地方都市で利用されていた木製品の樹種利用はあまり知られていないので、基礎資料の蓄積としてこの調査は実施された。

B　試料と方法

近世の木製品は部材を組み合わせて作成したものが多い。従ってできるだけ樹種利用の詳細を記録するために、可能な限り各部材の切片を作成し、組織学的に検討した。

木製品から材の３方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取り、スライドガラスに並べ、ガムクロラールで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。

材組織標本は、新潟県埋蔵文化財センターに保管されている。

C　結　　果

同定結果の一覧を第７表に、第８表では器種ごとに検出樹種を集計した。

部材なども含め樹種調査した試料数合計148点から検出された主要な分類群は、イヌガヤ・モミ属・アカマツ・マツ属複維管束亜属・マツ属単維管束亜属・スギ・ヒノキ・サワラ・ヒノキ属・アスナロ・ヒノキ科の針葉樹11分類群、クリ・ケヤキ・モクレン属・トチノキ・ハリギリ・トネリコ属の落葉広葉樹６分類群であった。全体的にはアスナロが30点と最も多く、次に多いのはスギの29点、ヒノキ科の19点、アカマツの14点、モクレン属の10点である。アスナロを含む可能性が高いヒノキ科と合わせると合計49点で、全体の約３割を占めていた。検出数が多いアスナロとスギは、板・曲物・箸・礎板などいろいろな木製品に利用されていた。

針葉樹材が合計108点、広葉樹材が合計29点、樹皮・タケ亜科・不明繊維が合計11点であり、全体的に針葉樹材が非常に多く利用されている。広葉樹材は、漆器・下駄・杭に多く利用されていた。

注目される樹種利用がいくつかある。同定No.83の弓形の加工材はタモ網としたが、縄文時代より弓への利用が知られているイヌガヤであった。同定No.77の曲物底板と同定No.78の板はモクレン属であり、ヒノキ科やスギの針葉樹材が利用されることの多い器種にモクレン属の材が使われていた。また下駄や杭にモクレン属が多い点も特徴的であった。漆器にはブナ属が多かった。

樹種記載

(1) イヌガヤ　*Cephalotaxus harringtonia*（Knight）K.koch　イヌガヤ科　第21図 1a-1c（同定No.83）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなり、樹芯部（髄）がある針葉樹の枝材である。仮道管にらせん肥厚があり、分野壁孔は小さなトウヒ型やヒノキ型、１分野に１～２個ある。

(2) モミ属　*Abies*　マツ科　第21図 2a-2c（同定No.91）

仮道管・放射柔細胞からなり、樹脂細胞はない針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかである。放射柔細胞の壁は厚く放射断面において細胞壁に数珠状肥厚があり、上下端の細胞はときに山形になる。分野壁孔は小さなスギ型やヒノキ型、１分野に１～４個が雑然と配置している。

(3) アカマツ　*Pinus　densiflora*　Sieb. et Zucc.　マツ科　第21図 3a-3c（同定No.22）

垂直と水平の樹脂道がある針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかである。分野壁孔は窓状、放射組織の上下端には放射仮道管があり、その内壁には先の鋭く尖った鋸歯状肥厚が顕著である。

(4) マツ属単維管束亜属　*Pinus* subgen. *Haploxyon*　マツ科　第22図　4a-4c（同定No.126）

前述のアカマツが属するマツ属複維管束亜属とは異なり、放射仮道管の内壁は平滑で肥厚が見られない。そのほかの形質は、アカマツと同様である。

(5) マツ属複維管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科

マツ属複維管束亜属にはアカマツとクロマツが属し、放射仮道管内壁の肥厚の形状により、アカマツは鋭利な鋸歯状をなすことで、クロマツは比較的ゆるやかな鋸歯状をなすことで区別される。同定No.28は、細胞壁が不朽しているため判断することができず、亜属の同定レベルに留めた。

(6) スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科　第22図 5a-5c（同定No.113）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の仮道管の壁は厚い。分野壁孔は大きく、孔口は楕円形に大きく開いたスギ型、1分野に主に2個が水平に配置している。

(7) ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. ヒノキ科 第22図 6a-6c（同定No.92）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。早材から晩材への移行は、急で晩材部の量が少ないものと、緩やかで晩材の量は多いものがある。分野壁孔は大きく孔口はやや斜めに細く開いたヒノキ型、1分野に主に2個が水平に整然と配列する。

(8) サワラ *Chamaecyparis pisifera* （Sieb. et Zucc.）Emdl. ヒノキ科　第23図 7a-7c（同定No.35）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔は大きなヒノキ型で、孔口の開口の幅と壁孔縁の幅がほぼ同じで、1分野に主に2個が水平に整然と配列する。孔口の開口がヒノキより大きく水平に近いことからサワラと同定した。

(9) ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科

細胞壁の保存が悪いため分野壁孔の形状について、ヒノキとサワラの識別が出来なかった試料である。

(10) アスナロ *Thujopsis dolabrata* sieb. et Zucc. ヒノキ科　第23図 8a-8c（同定No.43）

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。分野壁孔は小さなヒノキ型、1分野に1～4個あり、配置は雑然としている。放射柔細胞内には褐色の内容物が多い。

(11) ヒノキ科 Cupressaceae

仮道管・放射組織・樹脂細胞からなる針葉樹。樹脂道や仮道管にらせん肥厚は無く、放射柔細胞壁も平滑である。分野壁孔の外形は丸いことからヒノキ科の材であることがわかる。しかし細胞壁が不朽しており分野壁孔の型は確認できず、これ以上は分類群を絞ることができなかった試料である。しかしアスナロに類似すると思われる試料が多かった。

(12) 針葉樹 conifer

仮道管がおもな構成要素であるが、細胞の不朽が進み、同定の根拠となる形態が観察できなかった針葉樹材である。

(13) ブナ属 *Fagus* ブナ科　第23図 9a-9c（同定No.119）

丸みをおびた小型の管孔が密在し除々に径を減じてゆき、晩材では極めて小型となり分布数も減る散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は同性に近い異性、1～3細胞幅のものと細胞幅が広く背も高い広放射組織がある。

(14) クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科　第24図 10a-10c（同定No.104）

年輪の始めに中型～大型の管孔が配列し除々に径を減じてゆき、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

(15) ケヤキ *Zelkova serrata* （Thunb.）Makino ニレ科 第24図 11a-11c（同定No.88-2）

年輪の始めに中型～大型の管孔が1～2層配列し、その後は小型の管孔が集合して塊状・接線状に配列

報告No.	同定No.	調査年度	調査区	グリッド	所属層位	遺構略称	遺構No.	層位	器種	形状	木取り	樹種	遺存状況	備考
1	57	04	3T		Ⅱb～Ⅴ				板材		柾目	スギ	一部欠損	
2	61	04	3T		Ⅵ				蓋	円形	流れ柾目	スギ		
												木釘1:タケ亜科		
												木釘2:タケ亜科?		
												木釘3:タケ亜科?	完形	
3	59	04	3T		Ⅵ				蓋？	半円形	柾目	スギ	一部欠損	表面・縁辺腐食
	60	04	3T		Ⅵ				角材		流れ柾目	スギ	一部欠損	先端に穿孔
4	62	04	3T		Ⅵ				蓋？	円形	板目	アカマツ	3分割	中央と両脇に計3か所穿孔
	63	04	3T		Ⅵ				加工材		流れ柾目	スギ	一部欠損	
5	58	04	3T		Ⅵ				蓋取っ手		柾目	スギ	完形	
6	100	04	3T		Ⅵ				板材		流れ柾目	スギ	縁辺一部欠損	表面に焼け跡
7	64	04	4T		Ⅱb～Ⅴ				桶蓋	円形	板目	スギ	完形	縁際に1か所穿孔
8	118	04	5T		青砂～Ⅸ				漆器	椀	横木取り・板目取り	ブナ属	口縁部・高台部欠損	
9	65	04	5T		青砂～Ⅸ				箸		柾目	ヒノキ科	完形	表面腐食
10	119	04	6T		Ⅱ				漆器	鉢	横木取り・板目取り	ブナ属	[illegible]	
11	70	04	6T		Ⅸ				桶蓋		流れ柾目	ヒノキ?	破片	
12	71	04	6T		Ⅸ				下駄	差歯式	柾目	モクレン属(本体)	破片	
												モクレン属(前歯)		
												モクレン属(後歯)		
13	76	04	6T		Ⅸ				板材		板目	スギ	破片	
14	75	04	6T		排土				底板？		流れ柾目	スギ	破片	
15	73	04	6T		排土一括				栓	円錐形	柾目	ヒノキ科	完形	
16	74	04	6T		排土一括				栓	円錐形	柾目	ヒノキ科	完形	
17	66	04	6T		排土一括				下駄	差歯式	柾目	トチノキ?（本体）	破片，歯一箇所遺存	黒漆塗り
												モクレン属（歯）		
18	72	04	6T		排土一括				加工材	棒状	柾目	サワラ	完形	断面L字型
19	79	04	7T		Ⅱb				桶蓋		柾目	クリ	破片3点，内2点接合	両端に穿孔あり
												タケ亜科（木釘1）		
												タケ亜科?(木釘2)		
20	77	04	7T		Ⅱb				蓋	半円形	柾目	モクレン属	破片，表面虫食い顕著	[illegible]，両縁付近に切れ込み2か所あり
21	78	04	7T		Ⅱb				板材		柾目	モクレン属	一部欠損，表面虫食い顕著	縁際に切れ込み1か所あり
22	2	04	7T						部材			スギ	完形	
23	91	04	8T		Ⅻ				曲物底板	円形	柾目	モミ属	完形	1か所桜皮綴りか所あり
												樹皮（桜皮綴り）		
24	92	04	8T		Ⅻ				曲物底板	円形	柾目	ヒノキ	完形	中央に小穴
25	84	04	8T		Ⅻ				桶蓋	半円形	板目	スギ	完形	表面と合わせ面に釘穴2か所ずつあり
												タケ亜科（木釘）		
26	90	04	8T		Ⅻ				下駄	歯削出し	柾目	モクレン属	半欠	黒漆塗り
27	93	04	8T		Ⅻ				下駄	差歯式	柾目	ハリギリ（本体）	完形	
										差歯式		ケヤキ（前歯）		
										差歯式		ケヤキ（後歯）		
28	89	04	8T		Ⅻ				部材	角材	板目	ヒノキ科	完形	1か所ほぞ作り出し
29	83	04	8T		Ⅻ				漁労具	たも網	丸木	イヌガヤ	完形	枝の両端を尖頭形に加工
30	80	04	8T		Ⅻ				加工材	断面5角形	ミカン割り	アスナロ	完形，2分割	ほぞ穴2か所，建築部材？
31	81	04	8T		Ⅻ				加工材	棒状	柾目	ヒノキ科	完形	縁辺の一方が弧状
												針葉樹（木釘）		
32	82	04	8T		Ⅻ				加工材	棒状	柾目	ヒノキ属	完形	片端を片刃状に加工
33	87	04	8T		排土一括				底板？	半円形	柾目	スギ	完形	合わせ面に釘穴4か所
34	86	04	8T		排土一括				板材	棒状	柾目	スギ	完形	中央・両端3か所に穿孔
35	94	04	8T		排土一括				角材		半割	スギ	2分割	角面取り
36	85	04	8T		排土一括				部材	鋸歯状	板目	スギ	完形	中央と両端に9か所
37	88	04	8T						下駄	差歯式	柾目	ハリギリ（本体）	本体一部欠損，歯一部遺存	
												ケヤキ（前歯）		
												環孔材（後歯）		
38	120	04	9T		Ⅴ～Ⅷ				漆器	椀	横木取り・板目取り	ブナ属	3分割	
39	113	04	9T		Ⅷ				板材		流れ柾目	スギ	完形	5か所に金具埋め込み
40	114	04	9T		Ⅷ				杭	かまぼこ形	半割	アスナロ	末端部欠損	先端部片刃状加工
41	67	04	9T		青砂				底板？		板目	スギ?	一部欠損	
42	124	04	10T		排土一括				木錘		柾目	スギ	完形	
43	68	04	11T		Ⅴ・Ⅵ				曲物側板		柾目	ヒノキ科	破片，桜皮綴箇所あり	
												樹皮（桜皮綴り）	破片，桜皮綴箇所あり	
44	69	04	11T		Ⅴ・Ⅵ				指物	L字型	流れ柾目	スギ（1:板）	破片	2枚の板を釘でL字型に打ち付け
												スギ（2:側板）		
												木釘:タケ亜科		
1	1	06	2T	3・4	Ⅱ	SD	1	4	礎板		板目	スギ	表面腐食著しい	
2	3	06	2T	1・2	Ⅲ	SD	14		礎板		板目	スギ	片端欠損	
3	95	06	2T	2	Ⅱ	SD	14	4	礎板		ミカン割り	ヒノキ	完形	そろばん1
4	96	06	2T	2	Ⅲ	SD	14	4	礎板		ミカン割り	スギ	完形（破片14点）	そろばん2
5	97	06	2T	2	Ⅲ	SD	14	4	礎板		ミカン割り	ヒノキ属	完形	そろばん3
6	99	06	2T		Ⅶ	礎板	197		柱？	角材	丸木	ヒノキ科	破片2点	床柱？
7	4	06	2T	1・2	Ⅶ	SD	136	3	木簡？		柾目	アスナロ	片端欠損，3点	

第7表　木製品の樹種同定結果一覧（1）

報告No.	同定No.	調査年度	調査区	グリッド	所属層位	遺構略称	遺構No.	層位	器種	形状	木取り	樹種	遺存状況	備考
8	5	06	2T	1・2	Ⅶ	SD	136	3	不明木製品	木錘？	丸木	アカマツ	完形	
9	106	06	2T	1	Ⅶ	SD	136		板材		流れ柾目	アスナロ	末端部一部欠損	
10	108	06	2T	1	Ⅶ	SD	136		部材		柾目	アスナロ	一部欠損	末端にほぞ作出
11	109	06	2T	1	Ⅶ	SD	136		部材		柾目	ヒノキ科	一部欠損	両端にほぞ作出
12	107	06	2T	1	Ⅶ	SD	136		部材		柾目	アスナロ	一部欠損	中央にほぞ穴、末端にほぞ作出
13	23	06	2T		Ⅶ	SX	196		部材		柾目	アカマツ	破片	表面に合わせ溝、木口・側面に等間隔で小孔
14	28	06	2T		Ⅶ	SX	196	中央	部材		流れ柾目	マツ属複維管束亜属（2本体） ヒノキ科（2個部） 不明繊維（3紐）	両端欠損、本体他14点	表裏にほぞ穴、ほぞ遺存
15	24	06	2T		Ⅶ	SX	196		部材		板目	アカマツ	破片	
16	20	06	2T		Ⅶ	SX	196		部材		柾目	アカマツ	破片（3点、接合）	裏面に合わせ溝あり
17	27	06	2T		Ⅶ	SX	196		部材		柾目	アカマツ	破片	束柱
18	22	06	2T		Ⅶ	SX	196		部材		板目	アカマツ	破片（本体他10点）	
19	30	06	2T		Ⅶ	SX	196	中央	部材		流れ柾目	アカマツ	[illegible]	表面に長方形金具穴、繊維紐付着
20	29	06	2T		Ⅶ	SX	196	中央	板		流れ柾目	アカマツ 不明繊維（紐）	[illegible]	表面に長方形金具穴、繊維紐付着
21	21	06	2T		Ⅶ	SX	196		部材		柾目	アカマツ	破片	中心に釘貫通跡あり
22	25	06	2T		Ⅶ	SX	196		部材		板目	アカマツ	破片	束柱
23	26	06	2T		Ⅶ	SX	196		部材		板目	アカマツ	破片	束柱
24	6	06	2T		Ⅷ	P	151	2	板材	薄板	流れ柾目	ヒノキ科	縁辺一部腐食、表面風化	片端に切り込み
25	98	06	2T		Ⅹ	SK	153		加工材	板材	板目	ヒノキ科	風化顕著	
26	7	06	2T		Ⅺ	P	160	礎板	礎板		流れ柾目	ヒノキ科	2分割、非接合1点	
27	8	06	2T		Ⅺ	杭	167		杭		柾目	ブナ属	片端縮植	杭入形
28	9	06	2T		Ⅺ	杭	168		杭		柾目	ブナ属	片端縮植	杭入形
29	10	06	2T		Ⅺ	杭	257		杭		柾目	ブナ属	片端縮植	杭入形
30	32	06	2T		Ⅻ	柱根	200		柱根		丸木	ヒノキ科	一部欠損	
31	31	06	2T		Ⅻ				角材		丸木	アカマツ	一部欠損	柱根200の西側
32	13	06	2T		Ⅻ	柱根	200		角材	先端片刃状	流れ柾目	アスナロ	一部破損、破片5点（非接合）	中央に金属棒打ち込み
33	12	06	2T	4	Ⅻ				楔		柾目	アスナロ	完形	
34	11	06	2T	4	Ⅻ				棒状木製品	先端部尖頭形	板目	ヒノキ	完形	
35	33	06	2T		ⅩⅢ	柱根	199		柱根		丸木	ヒノキ科	一部欠損	
36	121	06	2T	2	ⅩⅢ				木簡		板目	スギ	破片	
37	14	06	2T	1	ⅩⅢ				箸	粗製	柾目	アスナロ	先端欠損	
38	16	06	2T	4	ⅩⅢ				箸		板目	アスナロ	片端欠損	
39	15	06	2T	2	ⅩⅢ				板材	薄板	柾目	アスナロ	縁辺一部破損、表面風化	
40	18	06	2T	6	ⅩⅢ				板材	薄板	柾目	アスナロ	破片	表・側面に平刃鑿痕
41	19	06	2T		ⅩⅣ				板材	板	板目	アスナロ	縁辺・裏面腐食	黒漆塗り
42	17	06	2T	4	ⅩⅢ				加工材		板目	アスナロ	破片、風化顕著	中央にコの字型抉り込み
43	34	06	3T		Ⅴ	SX	110		板材		柾目	アカマツ	先端部欠損	
44	35	06	3T	10	Ⅶ				板材		柾目	サワラ	先端部破片、中央で折れ	中央に約1cmの穿孔
45	36	06	3T		Ⅷs	SK	157	2	杭	角形	柾目	ヒノキ科	両端部欠損	先端部断面台形状
46	123	06	3T	1	Ⅷ质砂				木簡？		柾目	スギ	2分割	
47	122	06	3T	1	Ⅷ质砂				指物蓋		柾目	トネリコ属	破片	縁辺面取り、表面に剥離の絵
48	37	06	3T		Ⅹ	杭	189		杭	丸形	丸木	マツ属単維管束亜属	末端部欠損	先端部3面＋面取り加工、断面方形
49	38	06	3T		Ⅹ	杭	190		杭	角形	柾目	ヒノキ科	表面風化、末端部欠損	先端部6面加工
	125	06	3T		Ⅱ	SD	27	礎板	被熱	礎板		アスナロ	破片・炭化	
	126	06	3T		Ⅲb	礎板	145	礎板	被熱	礎板		マツ属単維管束亜属	破片・炭化	
	127	06	3T		Ⅳ	SD	71	礎板	被熱	礎板		アスナロ	破片・炭化	
50	50	06	5T	5	Ⅳ	P	201		杭	角形	柾目	アスナロ	末端部欠損	先端部4面加工、方形ほぞ穴2か所あり、建築部材転用？
51	105	06	5T	2	Ⅳ	SD	224	杭1	杭	角形	柾目	アスナロ	末端部一部欠損	先端部4面加工、中央にほぞ穴、側面に抉り2か所、建築部材転用？
52	43	06	5T	5	Ⅳ	SD	224	杭4	杭	角形	柾目	アスナロ	末端部欠損	先端部1面加工、片刃状
53	102	06	5T	5	Ⅳ	SD	224	杭10	杭	丸形	丸木	モクレン属	先端部欠損	先端部5面加工
54	101	06	5T	3	Ⅳ	SD	224	杭11	杭	丸形	丸木	クリ	完形	先端部6面加工、先端部被熱、表面に樹皮遺存
55	111	06	5T	3	Ⅳ	SD	224	杭12	杭	丸形	丸木	モクレン属	末端欠損	末端部楔形削り出し
56	110	06	5T	3	Ⅲ	SD	224	杭17	杭	角形	丸木	アスナロ	末端欠損	末端ほぞ穴あり、先端部4面加工
57	104	06	5T	5	Ⅳ	SD	224	杭25	杭	丸形	丸木	クリ	末端部欠損	先端部2面加工、片刃状
58	103	06	5T	1	Ⅳ	SD	224	杭30	杭	角形	柾目	ヒノキ	末端部欠損	先端部4面加工
59	112	06	5T		Ⅳ	SD	224	杭38	杭	角形	柾目	ヒノキ科	中央・末端一部欠損	先端部4面加工、2点
60	49	06	5T		Ⅳ	SD	224	杭46	杭	角形	片半割	アスナロ	末端部欠損	ほぞ穴2か所あり、先端部4面加工、建築部材転用？
61	39	06	5T	1	Ⅳ	SD	224	1	箸		柾目	アスナロ	完形	
62	40	06	5T	1	Ⅳ	SD	224	1	箸		柾目	アスナロ	完形	
63	41	06	5T	1	Ⅳ	SD	224	1	箸		柾目	アスナロ	完形	
64	42	06	5T	5	Ⅳ	SD	224	1	蓋？		柾目	アスナロ	一部欠損、3分割	3枚ともアスナロ
65	115	06	5T		Ⅴ	SK	202	1	漆器	椀	横木取り・柾目取り	ブナ属	[illegible]	
66	116	06	5T		Ⅴ	SK	202	1	漆器	椀	横木取り・柾目取り	モクレン属	[illegible]	
67	51	06	5T	5	Ⅴ	SK	202	1	結物側板		柾目	スギ	完形	
68	52	06	5T	6	Ⅸ				蓋？		柾目	アスナロ	3分割	
69	117	06	5T	5	Ⅹa				漆器	皿	横木取り・柾目取り	ブナ属	口縁部・高台部欠損	
70	44	06	5T	5	Ⅹa-1				箸		柾目	スギ	破片、2分割	
71	45	06	5T	5	Ⅹa-3				箸		柾目	スギ	完形	
72	46	06	5T	5	Ⅹa-3				箸		柾目	ヒノキ	先端部破片	
73	47	06	5T	6	Ⅺ	SK	221	2	角材	断面5角形	流れ柾目	アスナロ	完形	
74	54	06	5T		Ⅺ	SK	222		板材		柾目	アスナロ	破片	北側板
75	55	06	5T		Ⅺ	SK	222		板材		柾目	アスナロ	片端一部破損	南側板、中央に釘穴1か所
76	56	06	5T		Ⅺ	SK	222		板材		柾目	ヒノキ科	破片	南側板
77	53	06	5T		Ⅺ	SK	222		板材		柾目	アスナロ	両端一部破損	西側板
78	48	06	5T	5	Ⅺ				箸		柾目	ヒノキ科	表面風化	先端部尖頭形に削りだし

第7表　木製品の樹種同定結果一覧（2）

樹種＼器種		板材	部材	棚板	角材	加工材	組合せ材	接合材	曲物		結物	蓋	底板	指物	漆器		箸	箆	栓	下駄		杭				楔	礎板		柱根・柱	棒状木製品	木簡	不明木製品	たも網	木釘	紐	樹皮	合計
									側板	底板	側板				椀・皿	盆				本体	歯	丸杭	角杭	蒲鉾形	A形			そろばん									
針葉樹	アスナロ	7	2		2	2						2					4	1					5	1		1	2				1						30
	ヒノキ科	2	3			2			1								2		2				3				1		3								19
	ヒノキ									1		1					1						1					1		1							6
	サワラ	1				1																															2
	ヒノキ属					1																						1									2
	スギ	5	2		2	1					1	5	3	2			2										2	1			3						29
	アカマツ	2	9		1								1																			1					14
	マツ属複維管束亜属		1																																		1
	マツ属単維管束亜属																					1					1										2
	イヌガヤ																																1				1
	モミ属									1																											1
	針葉樹																																	1			1
落葉広葉樹	ブナ属														4	1									3												8
	モクレン属	1										1			1					2	4	1															10
	クリ											1										2															3
	ケヤキ																				3																3
	ハリギリ																			2																	2
	トチノキ?																			1																	1
	トネリコ属													2																							2
	環孔材																				1																1
	樹皮																																			2	2
	タケ亜科																																	6			6
	不明繊維																																		2		2
合計		18	17	0	5	7	0	0	1	2	1	10	4	4	5	1	9	1	2	5	8	4	9	1	3	1	6	3	3	1	4	1	1	7	2	2	148

第８表　器種別の検出樹種集計

する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、主に５～８細胞幅の紡錘形、上下端に大型結晶細胞があり、道管との壁孔は小型で交互状である。

(16) モクレン属　*Magnolia* モクレン科　第24図　12a-12c（同定No.90）

小型の管孔が単独または２～数個が複合して散在する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は主に単穿孔であるが階段穿孔も見られる。放射組織は異性、１～２細胞幅、上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きく階段状または対列状に整然と配列している。

(17) トチノキ　*Aesculus turbinata* Blume　トチノキ科　第25図　13a・13c（同定No.66）

小型の管孔が単独または２～数個が複合して散在する散孔材。道管の壁孔は交互状に接合して配列、穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は確認できていないが、放射断面において平伏細胞からなる同性のようであり、道管と放射組織の壁孔はやや大きく円形で交互状に密在する。

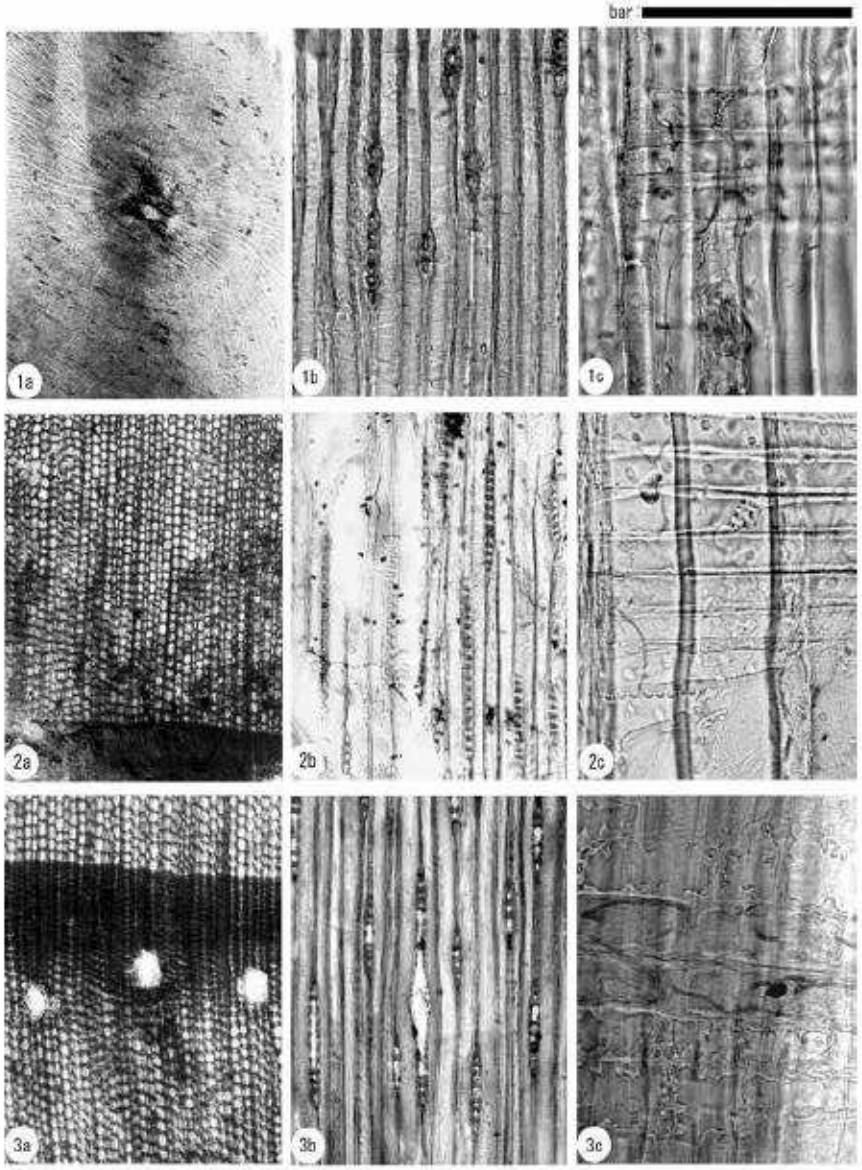
(18) ハリギリ　*Kalopanax pictus*（Thunb.）Nakai　ウコギ科　第25図　14a-14c（同定No.93）

年輪の始めに非常に大型の管孔が１層配列し、孔圏外では急に径を減じて小型の管孔が多数集合して接線状・塊状に分布する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚はない。放射組織は異性、おもに３～６細胞幅の紡錘形、上下端の１～２層に方形細胞や直立細胞があり、道管との壁孔は大きく交互状である。

(19) トネリコ属　*Fraxinus*　モクセイ科　第25図　15a-15c（同定No.119）

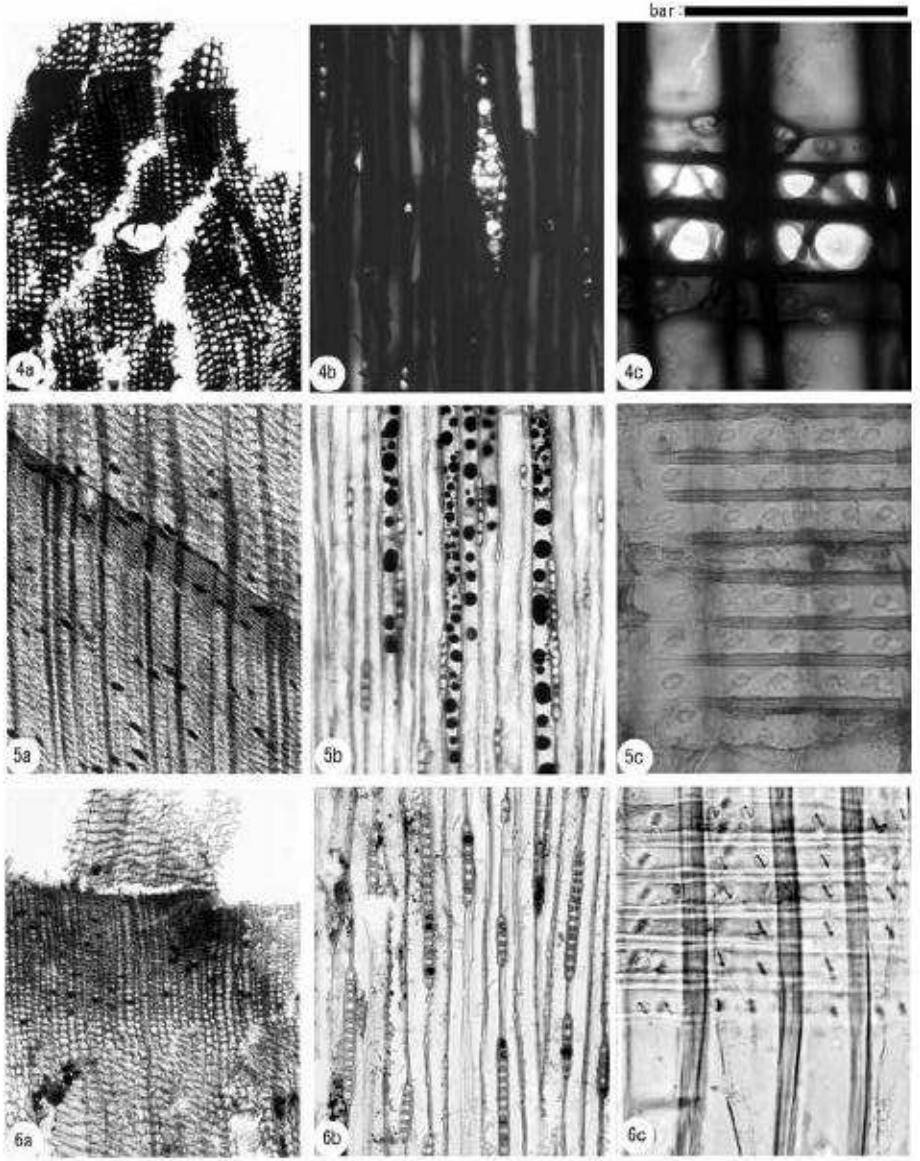
大型の管孔が１～２層配列し、その後は単独または２～３個が放射方向に複合した小型で厚壁の管孔が分布する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔である。放射組織は同性、１～２細胞幅である。

(20) タケ亜科　Gramineae subfam. Bambusoideae　イネ科　第26図　16a（同定No.61-2）



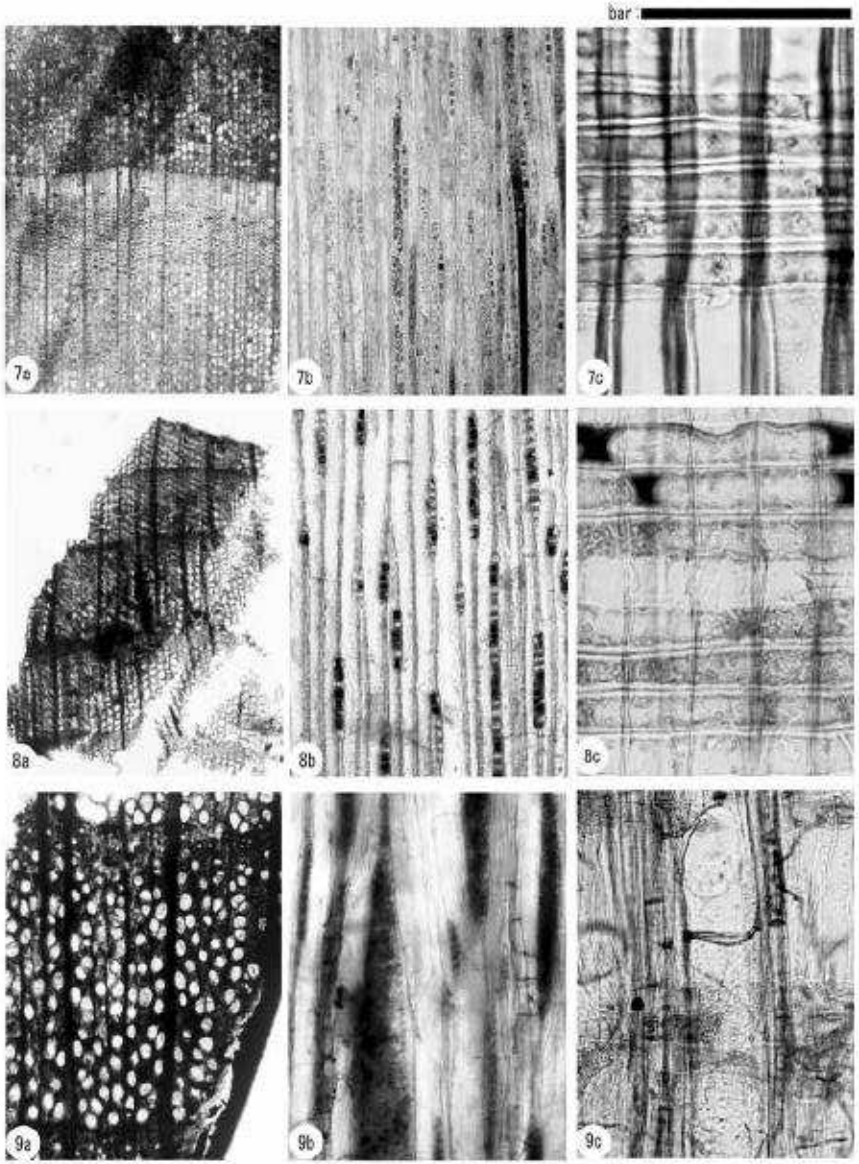
1a～1c：イヌガヤ（同定No.83）
2a～2c：モミ属（同定No.91）
3a～3c：アカマツ（同定No.22）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面
bar:a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.1mm.

第21図　木製品材組織の顕微鏡写真（1）



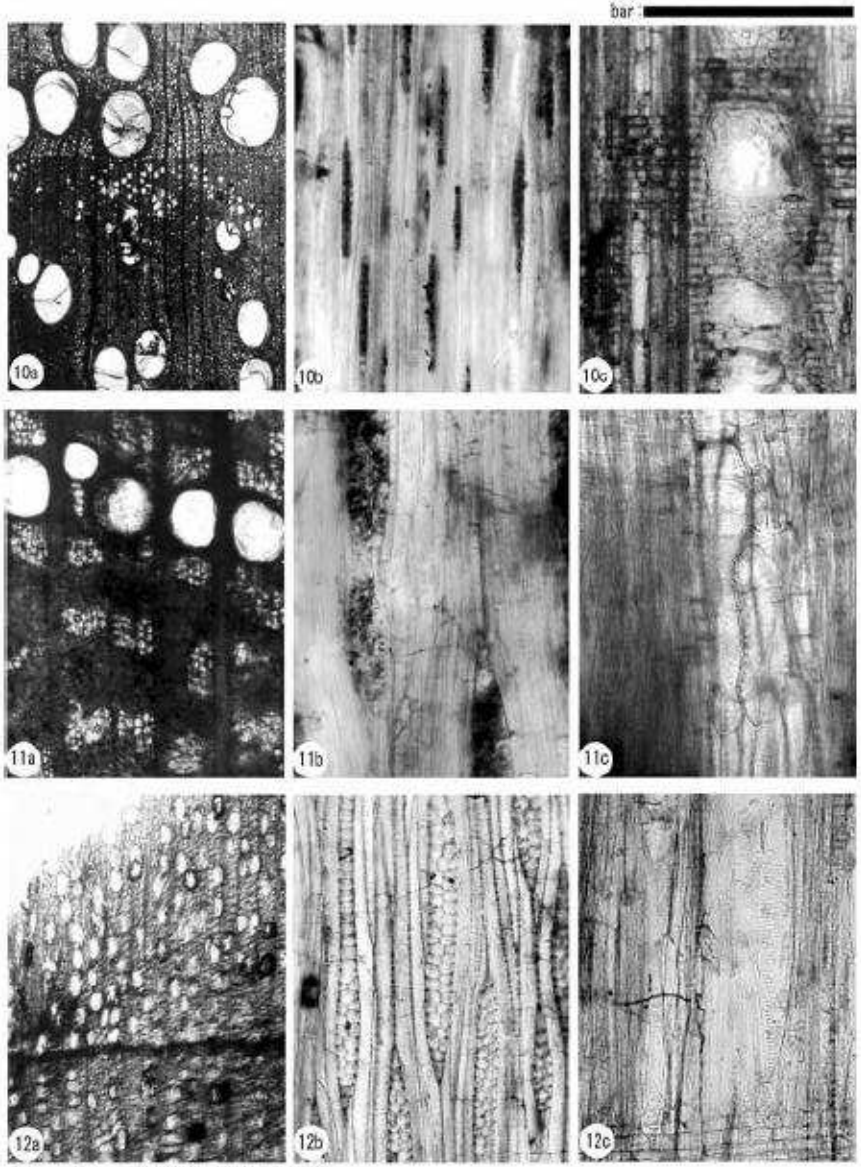
4a～4c：マツ属単維管束亜属（同定No.126）
5a～5c：スギ（同定No.113）
6a～6c：ヒノキ（同定No.92）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面
bar：a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.1mm.

第22図　木製品材組織の顕微鏡写真（2）



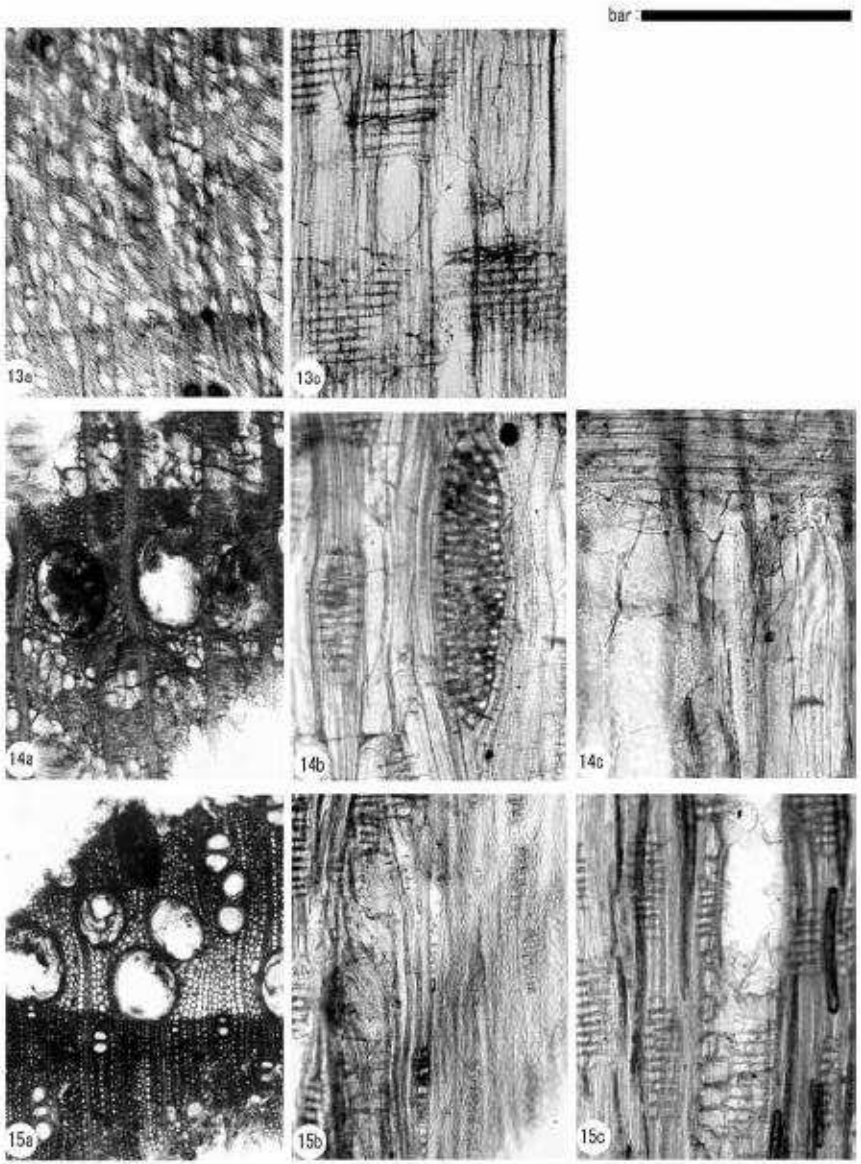
7a～7c：サワラ（同定No.35）
8a～8c：アスナロ（同定No.43）
9a～9c：ブナ属（同定No.119）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面
bar：a=1.0mm, b=0.4mm, 7c・8c=0.1mm, 9c=0.2mm.

第23図　木製品材組織の顕微鏡写真（3）



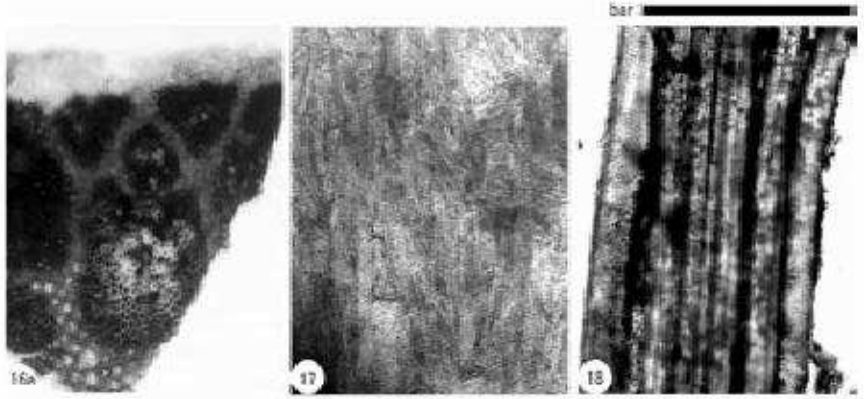
10a～10c：クリ（同定No.104）
11a～11c：ケヤキ（同定No.88-2）
12a～12c：モクレン属（同定No.90）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面
bar：a=1.0mm, 10b・11b=0.4mm, 12b・c=0.2mm.

第24図　木製品材組織の顕微鏡写真（4）



13a・13c：トチノキ（同定No.66）
14a～14c：ハリギリ（同定No.93）
15a～15c：トネリコ属（同定No.119）
a：横断面　b：接線断面　c：放射断面
bar：a=1.0mm, b=0.4mm, c=0.2mm.

第25図　木製品材組織の顕微鏡写真（5）



16a：タケ亜科（同定No.61-2）
17：樹皮（同定No.68-2）
18：不明繊維（同定No.29）
a：横断面
bar：16a・18=0.4mm, 17=0.2mm.

第26図　木製品材組織の顕微鏡写真（6）

維管束は多数が配列する不整中心柱である。維管束の周囲は厚壁の繊維細胞からなる維管束鞘が厚く取り囲み、稈の外周に位置する維管束鞘は特に厚く発達している。タケ亜科は、大形となる竹類と小型の笹類を含む分類群であるが、維管束鞘の発達が非常に顕著であることから竹類の稈（茎部）を利用していることが判る。しかしその種類までは特定できない。

(21) 樹皮 Bark 第26図 17（同定No.68-2）

曲物を結合する桜皮縛りとされている素材である。表面の細胞を採取して観察した結果、縦長で不揃いの細胞から構成されていた。充分な組織的な検討はできていないが、同定No.68とNo.91の桜皮縛りの素材は、樹皮の組織に類似していた。種類までは特定できない。

(22) 不明繊維 Fiber 第26図 18（同定No.29）

紐を構成する繊維であるが、特徴的な形質は認められなかった。

D 考　　察

新潟県内も含め北陸一帯では、縄文時代以来近世に至る長期間に亘りスギ材の多用が特徴として知られている［山田1993］。近世の樹種利用に関する情報は少ないが、金沢市江戸町遺跡［鈴木・能城1992］や江戸城周辺の遺跡［松葉1999］で、スギよりもヒノキ属の利用が増えマツ属も増加し、全国的にもヒノキをはじめとするヒノキ科の利用が増える傾向が知られている［山田1993］。当遺跡の調査結果でも、北陸一帯の特徴であるスギが多く、マツ属も多く見られた。しかし、ヒノキ属（ヒノキとサワラが属する）は以外と少なく、その代わりにアスナロおよびアスナロを多く含む可能性の高いヒノキ科が多いのが特徴的であった。新潟県周辺には、ヒノキよりアスナロが多く分布している［中川1994］。当遺跡は地方都市であることから、遠距離からヒノキ材やヒノキの製品を搬入するよりも、周辺植生のアスナロを利用していたのであろう。

5　漆器の塗膜分析

藤根　久（パレオ・ラボ）

A はじめに

本遺跡では江戸時代の漆器が出土している。ここでは、漆器塗膜の薄片を作成し光学顕微鏡による塗膜構造の観察、赤外分光分析による漆の確認、元素分析を行った。

B 試料と方法

試料は、漆器6試料である（第9表）。各漆器は、2mm角程度の塗膜部分を採取した後、エポキシ樹脂で

試料No.	同定No.	器　種	調査区	層　位	塗膜の特徴	塗膜分析位置
1	115	漆器椀	5T	V層	外面褐色、内面赤色	内面
2	116	漆器椀	5T	V層	外面褐色、内面赤色	内面a、外面b
3	117	漆器皿	5T	Xa層	外面赤色、内面赤色	外面
4	118	漆器椀	5Tr	約2m下	外面黒色、内面黒色	内面
5	119	漆器皿？	6Tr	3	外面赤色、内面黒色	内面
6	120	漆器椀	9Tr	約1.5m下	外面褐色、内面赤色	内面

第9表　塗膜分析を行った漆器と分析の詳細

包埋し厚さ30μm前後の薄片を作成した。塗膜薄片は、光学顕微鏡を用いて塗膜構造について観察した。

元素分析は、作成した薄片についてエネルギー分散型X線マイクロアナライザー日本電子(株)製JSM-5900LVとJES-2200を用いて元素分析を行った。測定条件は、電圧30kV、分解能3.0nm、Si（Li）検出器、測定時間300秒である。分析は、主な塗膜層について点分析を行った。なお、定量計算は、FP法（ファンダメンタルパラメータ法）で計算した。

漆の同定は、典型的な部分において手術用メスなどを用いて0.2mm角程度を薄く削り取った。採取した試料は、押しつぶして厚さ1mm程度に裁断した臭化カリウム（KBr）結晶板に挟んで、油圧プレス器を用いて約7トンで加圧整形した。測定は、フーリエ変換型顕微赤外分光光度計（日本分光（株）製FT/IR-410、IRT-30-16）を用いて透過法により赤外吸収スペクトルを測定した。

C　結　　果

各漆器の塗膜薄片の光学顕微鏡観察および元素分析は，以下の通りである。

試料No.1（同定No.115）：塗膜はc1層のみである。下地層（b層）は剥離したため確認できない。塗膜は黒色を呈する。元素分析では、2か所において鉄（FeO）が高いことから赤色顔料はベンガラである（第27-1図）。なお、水銀（HgO）は検出されない（水銀は誤差が大きく含まれていない）。なお、塗膜表層部分では、若干ケイ素（SiO_2）が検出されているが鉱物が混入しているものと考えられる。

試料No.2（同定No.116）：内側塗膜（2a）では、塗膜2層（c1層・c2層）と下地層（b層）からなる。

試料No.	同定No.	器　種	分析位置No.	塗膜層位	C	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	SO_3	Cl	K_2O	CaO	TiO_2	FeO	HgO	total
1	115	漆器椀	1	塗膜表層	49.78	1.26	0.32	-	32.16	-	-	-	0.18	0.08	0.21	16.02	-	100.01
			2	塗膜c1層	67.50	0.18	-	0.14	8.16	-	-	0.00	0.27	0.33	0.16	22.90	0.37	100.01
2	116	漆器椀	a-1	塗膜c2層	48.97	0.88	0.47	0.37	1.93	-	0.42	0.07	0.09	0.02	0.05	46.74	-	100.01
			a-2	塗膜c1層	61.57	1.05	0.04	0.22	1.44	-	0.83	0.04	0.19	0.09	0.02	34.52	-	100.01
			b-1	塗膜表層	48.20	0.15	0.24	0.89	6.03	-	8.86	0.14		0.68	-	34.81	-	100.00
			b-2	塗膜c1層	96.60	0.39	0.09	-	0.61	-	1.08	0.28	0.24	0.39	0.02	0.32	-	100.02
3	117	漆器皿	1	塗膜c1層	70.77	-	0.30	0.35	5.45	-	0.66	-	0.03	0.27	-	22.17	-	100.00
			2	塗膜c2層上部	78.14	-	0.64	1.11	1.17	-	1.89	0.12	0.00	6.57		10.35	-	99.99
			3	塗膜c2層下部	86.17	0.72	0.49	0.70	0.92	-	2.07	0.46	0.00	2.23	0.02	6.20	-	99.98
4	118	漆器椀	1	塗膜c2層	69.53	0.01	0.03	0.43	6.61	0.23	0.38	0.04	0.01	0.24	-	22.45	0.04	100.00
			2	下地層	69.04	1.18	1.97	2.03	1.16	-	1.91	0.12	0.37	13.09	0.07	9.06	-	100.00
5	119	漆器皿？	1	塗膜c2層	76.77	0.26	0.31	0.61	1.55	-	6.19	-	0.12	0.33	-	0.59	13.27	100.00
			2	塗膜c1層	67.37	0.75	0.21	0.26	0.79	-	0.09	-	0.13	0.16	-	30.14	0.09	99.99
6	120	漆器椀	1	塗膜c1層	50.62	-	0.21	0.70	9.24	-	0.29	0.11	0.11	0.85	0.06	37.81	-	100.00

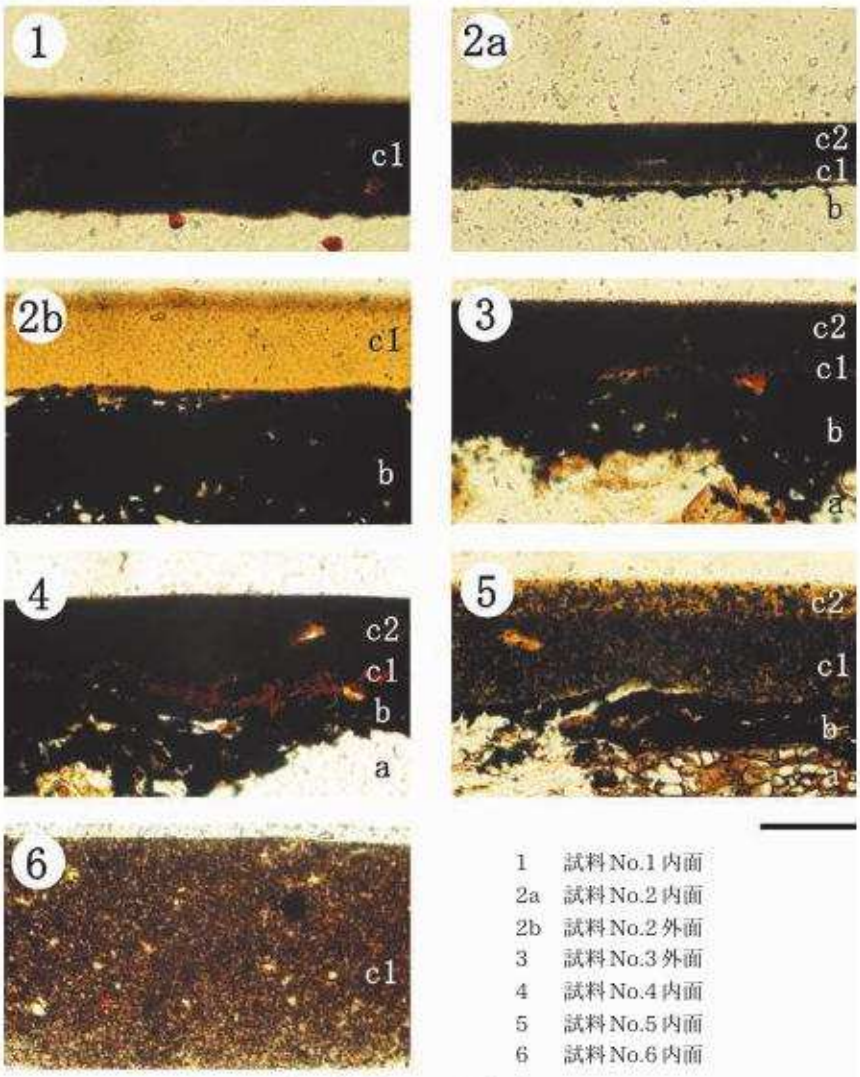
第10表　漆器塗膜の元素分析結果（EDS分析によるFP法；単位%）

吸収No.	生漆	
	位置	強度
1	2927.41	73.0322
2	2856.06	78.1035
3	1714.41	83.8187
4	1625.70	86.6236
5	1455.99	84.2618
6	1351.86	86.0764
7	1276.65	83.9931
8	1211.08	84.5896
9	1091.51	86.6437
10	800.31	93.7247
11	727.03	93.7629

第11表　生漆の赤外線吸収位置と強度

試料No.	同定No.	器　種	塗膜分析位置	塗膜観察および元素分析結果		
				塗膜構造	下地層	その他
1	115	漆器椀	内面（赤色）	c1層	－	c1層（ベンガラ）
2	116	漆器椀	内面a（赤色）	c1・c2層	炭粉	c2層（ベンガラ）
			外面b（褐色）	c1層	炭粉	
3	117	漆器皿	外面（赤色）	c1・c2層	炭粉	c2層（ベンガラ）
4	118	漆器椀	内面（黒色）	c1・c2層	炭粉	
5	119	漆器皿？	内面（黒色）	c1・c2層	炭粉	
6	120	漆器椀	内面（赤色）	c1層	－	c1層（水銀朱）

第12表　各漆器の塗膜構造と材料



1　試料No.1内面
2a　試料No.2内面
2b　試料No.2外面
3　試料No.3外面
4　試料No.4内面
5　試料No.5内面
6　試料No.6内面

第27図　漆器塗膜薄片の顕微鏡写真（スケール：50μm）

c2層は、細粒の黒色粒子が密に混入し、c1層は透明褐色の漆層である。元素分析では、c2層において鉄（FeO）が高いことから赤色顔料はベンガラである。下地層（b層）は、黒色を呈し、炭化粒子からなる（第27-2a図）。外側塗膜（2b）は、下地層と概ね1層（c1層）の塗膜層からなる（第27-2b図）。元素分析では、鉄（FeO）が高く検出されるもののベンガラは含まれていない。下地層（b層）は、黒色を呈し、炭化粒子からなる。

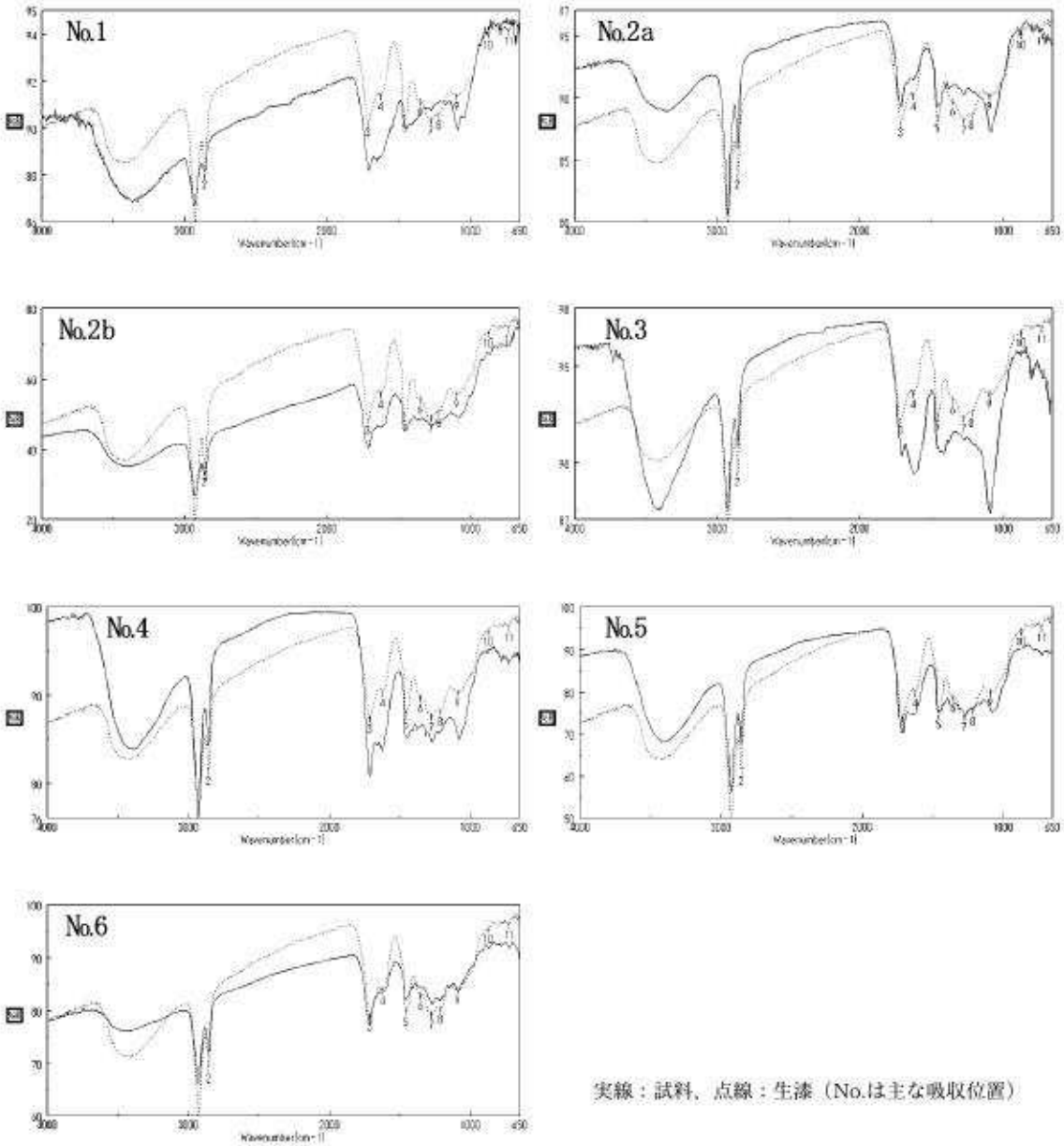
試料No.3（同定No.117）：塗膜2層（c1層・c2層）と下地層（b層）および木胎（a）からなる。c2層は、細粒の黒色粒子が混入し、c1層は透明褐色の漆層である（第27-3図）。元素分析では、c2層において鉄（FeO）が高いことから赤色顔料はベンガラである。下地層（b層）は、黒色を呈し、炭化粒子からなる。

試料No.4（同定No.118）：塗膜2層（c1層・c2層）と下地層（b層）および木胎（a）からなる。c2層は、黒色を呈し、c1層は透明褐色の漆層である（第27-4図）。元素分析では、c2層において鉄（FeO）が高いことから赤色顔料はベンガラである。下地層（b層）は、黒色を呈し、炭化粒子からなる。

試料No.5（同定No.119）：塗膜2層（c1層・c2層）と下地層（b層）および木胎（a）からなる。c2層は、細粒の黒色粒子がやや混入し、c1層は細粒の黒色粒子が密に混入する（第27-5図）。元素分析では、c2層において水銀（HgO）が検出されていることから赤色顔料は水銀朱である。c1層は、鉄（FeO）が高いことから赤色顔料はベンガラである。下地層（b層）は、黒色を呈し、炭化粒子からなる。

試料No.6（同定No.120）：塗膜1層のみである。c1層は、細粒の黒色粒子が混入する（第27-6図）。元素分析では、鉄（FeO）が高いことから赤色顔料はベンガラである。

第28図に、生漆とともに、各試料の赤外吸収スペクトル図を示す。縦軸は透過率（%R）、横軸が波数（Wavenumber（cm-1）；カイザー）である。なお、スペクトルは、ノーマライズしてあり、吸収スペクト



第28図　漆器塗膜と赤外分光スペクトル図（縦軸は透過率，横軸が波数を示す）

ルに示した数字は、生漆の赤外吸収位置を示す。第11表には、生漆の吸収位置とその強度を示す。

赤外分光分析を行った結果，いずれの試料も、生漆の成分である吸収ピークと同様の吸収が見られることから漆と同定される。なお、試料No.3では、吸収No.9において漆膜の劣化にともなうゴム質の大きな吸収が見られた。

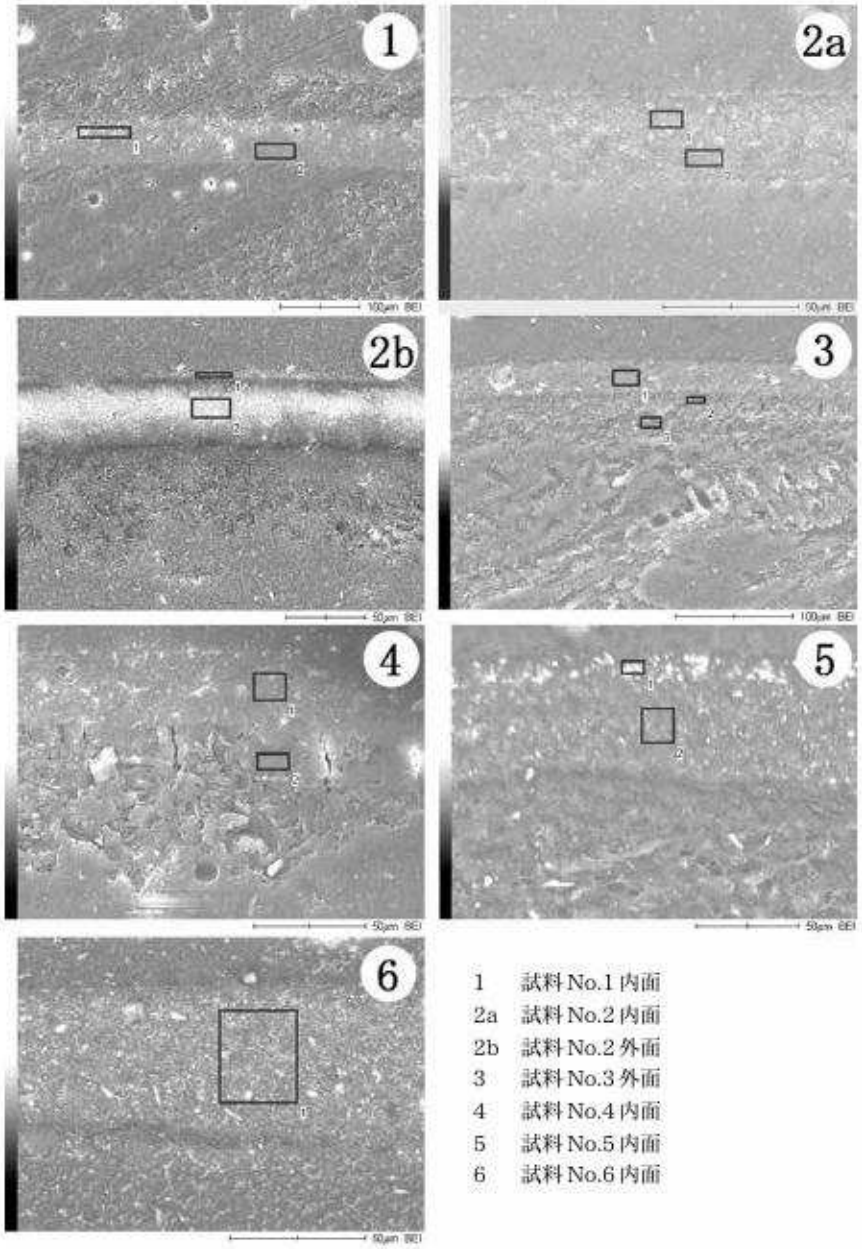
D　考　　察

漆器の塗膜分析を行った結果，塗膜は1層および2層からなり、下地層が確認できた試料では炭粉であった。また，赤色を呈する塗膜は、3試料においてベンガラであり、1試料において水銀朱であることが確認された。

日本橋一丁目遺跡の調査では，江戸時代前期頃の町屋跡関連の遺構から漆器資料が多く出土しているが，

文様の施されていない内面赤色・外面黒色の漆器の場合、内面の塗膜構造では多くが漆1層-下地-木胎（タイプⅠ）で漆層中にベンガラが混ぜてあり、外面の塗膜構造では漆2層-下地-木胎（タイプⅡ）で漆層中には混ぜものはない［北野2003］。また、内面および外面がいずれも黒色の場合は、塗膜構造はタイプⅠが多い。

ここで検討した漆器では、内面の漆2層とした試料のc1層は、いずれの試料も下地層との間の不連続な間層であることから、北野［2003］の示したタイプⅠに相当することが考えられる。



1　試料No.1内面
2a　試料No.2内面
2b　試料No.2外面
3　試料No.3外面
4　試料No.4内面
5　試料No.5内面
6　試料No.6内面

第29図　漆器塗膜の二次電子像と点分析位置

日本橋一丁目遺跡から出土した漆器類の赤色顔料にはベンガラの利用が顕著である。近世漆器の色漆顔料は、幕府朱座を中心とした統制物資であった朱に比較して、江戸時代中期以降の人造ベンガラの工業生産化により、廉価で一量産体制が確立するベンガラの方が一般的となるようである［北野2003］。

ここで検討した赤色顔料は、3試料においてベンガラが使用され、水銀朱の利用は試料No.6のみであったことから（第12表）、こうした時代背景を反映したもの思われる。

引用文献

町田　洋・新井房夫　2003『新編火山灰アトラス』　東京大学出版会　p.336

安藤一男　1990　「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』　42　p.73-88

小杉正人　1988　「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』　27　p.1-20

金原正明　1997　「自然科学的研究からみたトイレ文化」『トイレの考古学』　大田区立郷土博物館　p.197-216

松葉礼子　1999　「溜池遺跡・汐留遺跡・墨田区三遺跡から出土した木製品の樹種から類推される近世江戸城周辺の木材消費」『植生史研究』7（2）　p.59-70

中川重年　1994　「検索入門 針葉樹」　保育社　p.188

鈴木三男・能城修一　1992　「金沢市江戸町出土木製品の樹種」『特別名勝兼六園（江戸町推定位）発掘調査報告』石川県立埋蔵文化財センター　p.68-72

山田昌久　1993　「日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成－用材から見た人間・植物関係史」『植生史研究』特別第1号　p.242

北野信彦　2003　「第1節　日本橋一丁目遺跡出土漆器資料の材質と製作技法」『日本橋一丁目遺跡報告書』　三井不動産株式会社・東京急行電鉄株式会社・東急不動産株式会社・日本橋一丁目遺跡調査会　p.398-405

第Ⅵ章　ま　と　め

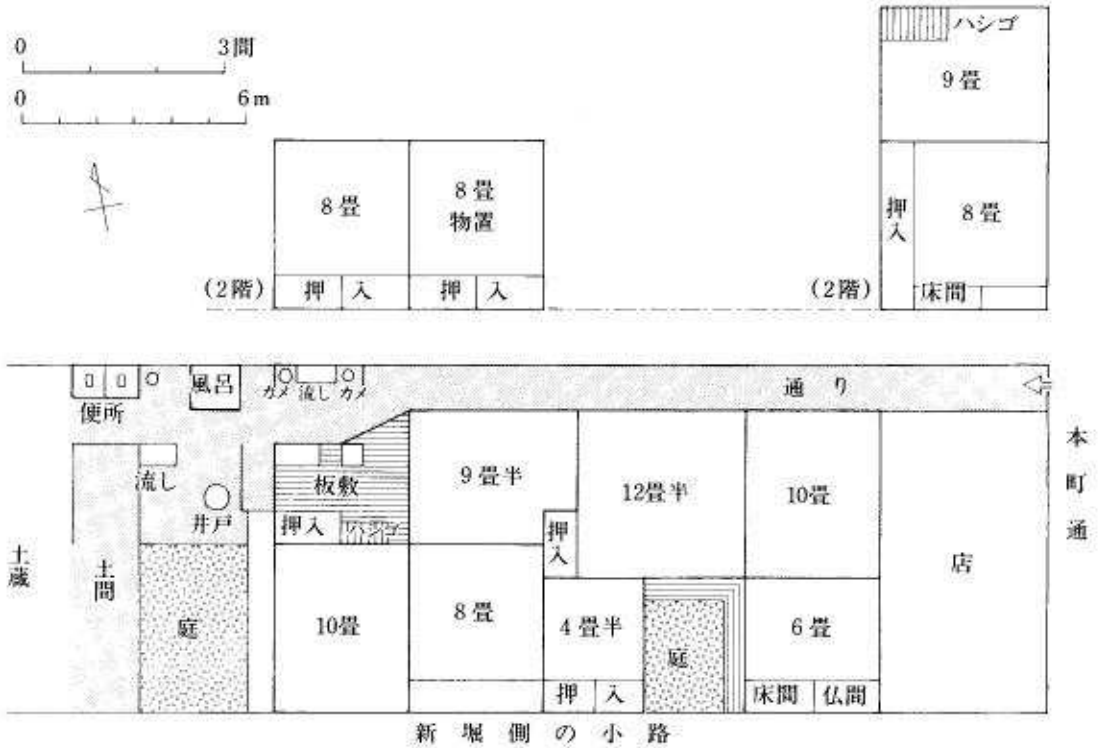
1　遺構について

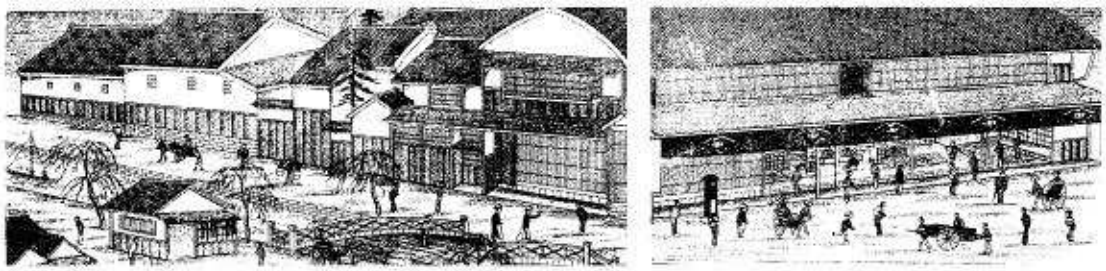
近世新潟町の町並み等については、天保２（1831）年に長谷川雪旦が描いた『北国一覧写』（第30図）から一部がわかる。本町通りに面して「海（廻）船問屋」、「おろし（卸）問屋」が立ち並び、店の裏には蔵が建っている。手前の堀は片原堀（現東堀通）で、小船を使って荷物の上げ下ろしをする様子も見える。2Tではこのような荷揚げ場の発見を目指したが、検出できなかった。船を製造あるいは修理している様子も描かれている。堀の両側には柳が植えられ、小路ごとに橋が架かる。屋根は切妻で妻入と平入が混在し、瓦葺きではなく板葺きで石の重しが載せられている。注目すべきは、小路と通りの堺や屋敷堺で柵のようなものが複数描かれていることである。柵があるため通りぬけは出来ないようになっている。この絵では柵しかみえないが、実際はその下に排水溝が掘られていた可能性がある。5Tで東西方向に検出されたSD224と杭はこのような堺の施設に相当すると考えられる。3Tで南北方向に検出されたSD31、SD79、SD86のような素掘りの溝は、通し屋敷を分割するときの屋敷堺と考えられるが、この絵には見えない。検出された溝の多くは、屋敷地の長軸に平行、または、直交して掘削され、南北方向の溝はＮ－３～17°－Ｅまであるが－13°－Ｅが最も多い。広小路と直交する本町通が約13°東傾するのと一致する。東西方向の溝はＮ－77～85°－Ｗまであるが、Ｎ－80～83°－Ｗに集中する。また、蔵の壁の上部は漆喰などの土壁のようだが、下半部は縦、横、格子状に描かれているものがある。縦に描かれたものは、板を縦に並べ打ちつけた竪羽目板、横に描かれたものは下見板、格子に描かれたものは石材の可能性がある。3Tで検出されたSK28、SK30から出土した長方形の石材は、このような蔵の地覆石や壁材の可能性もある。絵をそのまま信じることには注意が必要であるが、調査結果との照合は必要な作業となろう。

次に町屋の間取りについてであるが、幕末期の田辺忠蔵家のものがわかっており、参考となる（第31図）。この家は本町通五ノ町（現本町通八番町）と新堀の角地にあった通し屋敷で薬問屋を営んでいた。立地など今回の調査区と共通する部分がある。間口は５間１尺で小路に面していない側に表から入る幅４尺の通り土間があり、これが通路になっている。通り土間は台所付近で広くなり、そこに水回りが設けられている。流しの両脇にあるカメは水甕で、井戸から汲んだ水を入れていた。井戸を持たない家は水売りから買っていた。2Tで検出されたSK129内の甕なども水甕の可能性がある。ただし、位置が流しを作るような場所か、猶検討が必要であろう。流しと風呂、便所は一列に配置されていることから、この外側に排水溝がつくられていたと考えられる。竈はないが、焜炉、火鉢などが使用されたのであろう。囲炉裏もこの図には見えない。3Tで検出されたSK61から多数の焜炉、火鉢が出土している。近世の竈は切石や板材の上に台座を作り、その上に粘土で竈を作るものがあり、遺構で検出されている例はわずかである。田辺家の屋根は明治13年の大火の後、瓦葺きになっている。このように通りに面した家は大小を別にして、ひとつの母屋に店・居宅・使用人部屋を配置し、さらに奥に土蔵を建てるのが基本であった。店・中の間・茶の間は畳敷きで台所は板敷きが普通であった。坪庭が通風と採光のために２か所設けられている。屋敷地が細長いため、奥まったところには蔵や借家などが建てられた。借家の間取りは不明であるが、

第30図　天保2（1831）年に描かれた新潟町（長谷川雪旦『北国一覧写』）

［『新潟市史通史編2』から転載（新潟県立図書館所蔵）］





上：新潟町会所文書「明治十一年家屋坪数調」（新潟市郷土資料館所蔵）から作成　下：明治23年『北越商工便覧』から

第31図　幕末期町屋の間取り［『新潟市史通史編2』から転載］

『星霜雑記』によれば土間があり、部屋の間仕切は葭簀（よしず）であったという［新潟市史通史編２1997］。

第32図　小澤邸

このような資料の精査により検出された遺構の用途が明確になるものもあると考えられ、今後は可能な限り屋敷地全域の調査が必要となろう。今回のように通し屋敷の可能性がある2T・3Tの基本層序の統一さえ困難ということは避けられるのではないだろうか。新潟市には、明治13年頃に建てられた小澤邸（第32図）も調査区近くの上大川前通十二番町に残存している。ほかにも下町と呼ばれる地域には町屋が多数残っており、これらの建築史的な調査と発掘調査の結果によって、近世から近代・現代に続く町屋の変遷をたどることが可能になるのではないか。広小路堀地点は道路が西へ延伸する予定であるので、今後の調査地点の選定が重要となろう。近世新潟町跡の範囲は広大（明暦元年に移転した当初に町割された範囲：南北約2,200m、東西約1,100m）であることから、継続した調査によって日本海側有数の湊町である新潟町の姿が明らかになるものと期待される。

2　陶磁器について

近世新潟町跡の2T・3Tの層順と出土した陶磁器の時期は必ずしも一致せず、5Tについてはほぼ一致すると前述したが、具体的に示すと第13・14表のようになる。その層から出土した陶磁器の大半がそ

2T 基本層序と遺物の時期

層序	包含層遺物中心時期	遺構遺物時期	備考
盛砂	現代		
Ⅰ	現代		
Ⅰ'	現代		
ⅡS－1	近代～現代		
ⅡS－2			
Ⅱ			
ⅢS－1		19C中～後半	
ⅢS－2			
Ⅲ			
ⅣS－1	19C前半	18C末～19C初頭	
ⅣS－2			
Ⅳ－1			
Ⅳ－2			
Ⅳ－3			
Ⅴ	19C前半		
Ⅵ－1	18C末		
Ⅵ－2			
Ⅶ	17C後半～18C前半	18C前半	
Ⅷ	17C後半～18C前半	17C後半～18C前半	
Ⅸ	—		
Ⅹ	18C後半	17C後半～18C前半	
Ⅺ		17C中	
Ⅺ－1	17C後半		
Ⅺ－2			
Ⅻ	17C後半		

3T　基本層序と遺物の時期

層序	包含層遺物中心時期	遺構遺物時期	備考
Ⅰ	近代から現代		
Ⅱ	19C幕末直前	19C	小杯多い、料理屋か
砂			
ⅢaS	18C後半～19C初頭		
灰			火山灰
Ⅲa			
Ⅲ			噴砂か
Ⅲb			
ⅣS	18C中～18C後半（1780まで）	18C後半～19C初頭	
Ⅳ			
Ⅴ	17C後半（大橋Ⅲ～Ⅳ層）	17C後半～18C前半	
ⅥS-1	18C中	17C後半（70％）、18C後半有	
ⅥS-2			
Ⅵ			
ⅦS	17C中～19C	18C	
Ⅶ			
Ⅷ	18C前半	18C	
Ⅸ	—		
Ⅹ		17C後半	

第13表　基本層序と遺物の時期（1）（2T・3T参考資料）

の時期にあたるが、前後の時期の陶磁器が少なからず含まれる状態である。2T・3Tについては、盛土したときの撹乱と地震の影響などが考えられることから、参考程度に止める。5Tについては同じく盛土ではあるが、乱れはほとんどない。近世陶磁器の編年は、産地の窯資料および城下町や大都市のような大消費地でのみ可能といわれるが、新潟町も今後の資料の蓄積によっては可能となろう。

また、今回は狭小なトレンチ調査であったため、陶磁器の産地割合などは集計していないが、今後は他遺跡と比較する上でも必要となろう。

5T　基本層序と遺物の時期

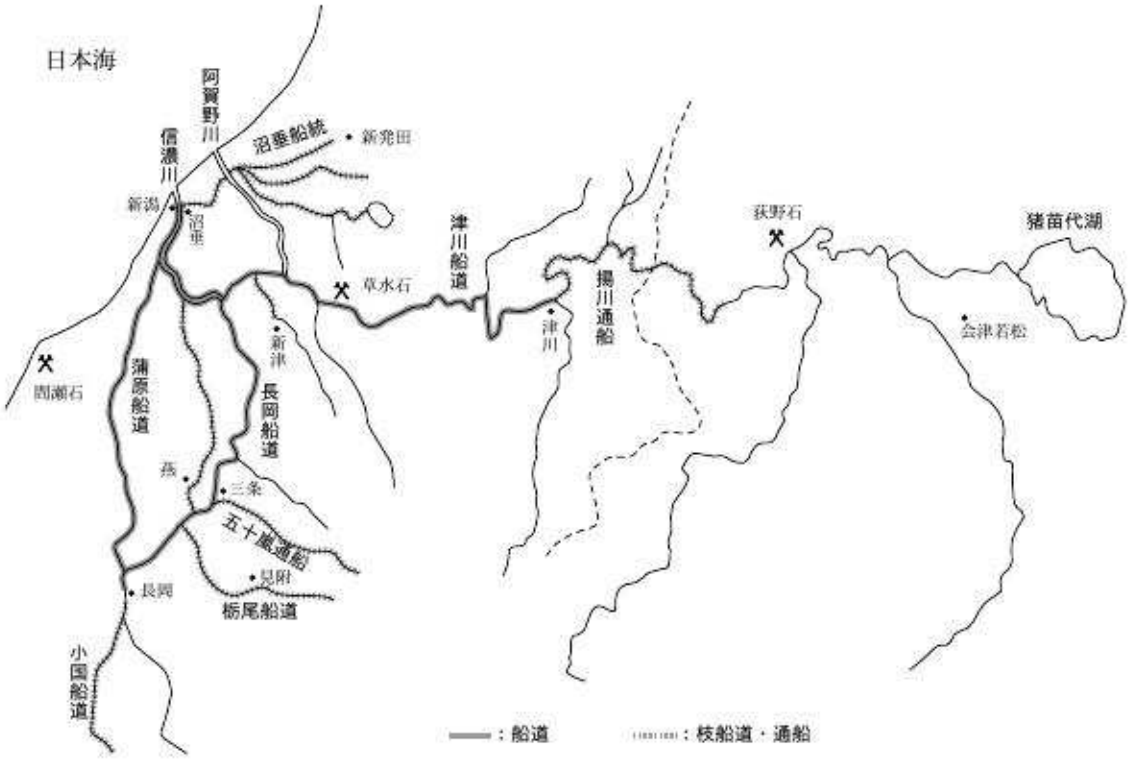
層序	包含層遺物中心時期	遺構遺物時期	備考
Ⅰ	18C中心		
Ⅱ	17C後半～18C(～19C)		
Ⅲ	18C～19C（19中心）		
Ⅳ	18C後半～19初頭か？		
Ⅴ	—		
Ⅵ	18C前半まで		
Ⅶa	18C初頭		
Ⅶb			
Ⅶc			
Ⅷ	17C後半～末		
Ⅸa	17C後半	17C中	
Ⅸb			
Ⅹa－1	17C後半		
Ⅹa－2			
Ⅹa－3			
Ⅹb			
Ⅺ	17C中（移転直後）		
Ⅻ	—		

第14表　基本層序と遺物の時期（2）

3　礎石の石材とその流通について

今回の調査では、多数の礎石等が検出された。そしてその使用石材には、特定の石材を使用する傾向が見られた。そこで倉田征雄氏（(株) 石六石材店）に使用石材についてご教示いただいたところ、これらの礎石は新潟周辺の特定の石切場から切り出され、遺跡へ持ち込まれていることが判明した。以下に判明した産地を挙げる。

礎石に使用された石のうち、方形切石には明緑色の緑色凝灰岩と濃緑色の緑色凝灰岩の２種類の石材が使用されていた。明緑色の緑色凝灰岩は福島県耶麻郡高郷村荻野産（現喜多方市）の荻野石、濃緑色の緑



第33図　石材産地と近世船道活動域図（「新潟の舟運」から改変）

色凝灰岩は新潟県岩室村間瀬産（現新潟市）の間瀬石である。高郷村荻野は阿賀野川上流の、只見川と日橋川合流点の下流側左岸に位置し、荻野石は現在も採掘されている。岩室村間瀬は、日本海沿岸の弥彦山西山麓一帯で、文化年間の頃に（1804～1830）石山が発見され、柏原庄屋の浦山・宮山を切り開き、石材を産出したのが始まりであるという［岩室村史1974］。現在は採掘されていない。本発掘調査の期間中に、5Tが面する東堀通広小路堀交差点で下水道工事が行われ、その際昭和39年に埋め立てられた堀割りの護岸の一部が検出された。護岸石を回収したが、これも間瀬石であった（図版91－参考資料）。

そのほか、礎石には凝灰岩・花崗岩・閃緑岩・角閃石等の石材も使用されていた。このうち花崗岩は、新潟県旧安田町草水産（現阿賀野市）の草水石である。安田町草水は五頭山麓の末端部の阿賀野川右岸、新潟平野との境付近に位置し、明治初頭にはすでに採掘が行われていたという。現在も採掘は続いており、旧新潟県庁などにも使用されている［安田町史1997］。

これらの石は、石切り場が河川沿い・海岸付近に存在するため、その搬送には船の使用が想定される。江戸時代、越後平野に所領をもつ諸藩は、年貢米輸送と物資の調達のため、船道・通船等の河川舟運の整備に努めた。出土した礎石もこうした河川や、海路で運ばれたと考えられる。荻野石・草水石の産地は阿賀野川沿いに存在するため、阿賀野川舟運で運ばれたと思われる。当時、新潟と会津領小川荘（東蒲原郡）を結ぶ津川船道と呼ばれる舟運業者が存在し、この舟運では、会津から年貢米のほか、材木や薪炭類を船や筏で新潟まで運んだ。また、新潟からは塩などを津川河岸まで運び、それから馬に積み替えて会津まで運んだという［新潟市史通史編1　1995］。間瀬石は、地元の小回り船による海上での沿岸搬送が想定されよう。

そのほか、笏谷石（越前石）も少量出土しており、これは、福井県福井市足羽山山麓で2001年まで採掘されていた。船体の安全確保を兼ねて石材を商品とした一例である［牧野1989］。

このように出土した石材の産地から、これまで判明していた流通に関する文書資料を裏づける貴重な調査例となった。

要　　約

1　近世新潟町跡広小路堀地点は、新潟県新潟市中央区上大川前通十番町1,863番地、同本町通十番町1,862番地、東堀前通九番町1,392番地ほかに所在する。遺跡は信濃川河口近くの左岸の中州に立地し、標高0.5mである。

2　調査は一般国道7号万代橋下流橋事業に伴い、平成18年6月1日～10月31日まで実施した。調査面積は755m^{2}である。

3　調査の結果、明暦元（1655）年に現在地に移転したとされる、日本海側有数の湊町である近世新潟町跡の町屋の遺構・遺物が検出された。

4　遺物包含層は10層前後有り、全て盛土であった。また、複数の整地層を検出した。

5　遺構は溝や、土坑、建物の一部と考えられる礎石や礎板、柱根、ピット、杭、性格不明遺構が検出された。溝の一部は屋敷境になるものがあり、現在の町境と重複する。

6　遺物は17世紀から19世紀までの肥前系陶磁器を中心に多数出土している。瀬戸・美濃や須佐唐津、堺、京・信楽、中国製磁器（青花、色絵・粉彩）も少数出土している。土製品では、土人形や泥面子、箱庭道具、管状土錘が出土している。石製品では硯、碁石、石臼が出土している。多量の木製品が出土しているが、木簡や箸状木製品、椀、曲物、下駄、たも網、杭等が出土している。金属製品では小柄、煙管、銭貨、鏡、分銅等が出土している。

7　新潟市の中心部にある近世新潟町跡は、市街化が進み現代の建物などで破壊されていると考えられていたが、良好な状態で遺存していることが明確になった。

引用・参考文献

秋田裕毅　2002　『ものと人間の文化史　104　下駄』 法政大学出版局

新井市史編集委員会　1971　『新井市史下巻』 新潟県新井市

石村真一　1997　『ものと人間の文化史　82-1　桶・樽1』 法政大学出版局

岩室村史編纂委員会　1974　『岩室村史』 新潟県岩室村

大橋康二　1994　『古伊万里の文様』 理工学社

大橋康二ほか　1988　『古伊万里』別冊太陽No.63　株式会社平凡社

大原　剛　1987　「新井の銘石－千草石－」『上越の大地をさぐる』 高田平野団体研究グループ編　上越新聞社

小島正裕ほか　2000　『東京都埋蔵文化財センター調査報告 第79集 汐留遺跡Ⅱ』 東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター

小村　弋　1979　『わが町の歴史　新潟』 株式会社文一総合出版

小村　弋編　1976　『近世越後・佐渡史の研究』 名著出版

九州近世陶磁学会編　2000　『九州陶磁の編年』 九州近世陶磁学会

佐賀県立九州陶磁文化館編　1984　『北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁』 佐賀県立九州陶磁文化館

坂井陽一　1991　「1地学 第1章地形」『新潟市史 資料編12 自然』 新潟市

柴田光男　1969　『日本刀小刀図鑑』 光芸出版

高橋　保　2006　『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第157集 住吉遺跡』 新潟県教育委員会・(財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

滝沢規朗ほか　2006　「一般国道7号萬代橋下流橋事業試掘調査」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報平成16年度』 (財) 新潟県埋蔵文化財調査事業団

津川町史編纂委員会　1969　『津川町史』 新潟県津川町

鶴巻康志ほか　1997　『新発田城跡発掘調査報告書Ⅱ』 新潟県新発田市教育委員会

福田敏一ほか　2003　『東京都埋蔵文化財センター調査報告 第125集 汐留遺跡Ⅲ』 東京都生涯学習文化財団東京都埋蔵文化財センター

新潟市　1998　『新潟湊の繁栄』 新潟市歴史双書1　新潟市

新潟市　2001　『新潟の堀と橋』 新潟市歴史双書5　新潟市

新潟市郷土資料館編　1979　『新潟市史読本』 新潟市郷土資料館

新潟市郷土資料館編　1997　『新潟市における災害の歴史』 新潟市郷土資料館

新潟市史編さん原始古代中世史部会編　1994　『新潟市史 資料編1 原始 古代 中世』 新潟市

新潟市史編さん近世史部会編　1990　『新潟市史　資料編2 近世 (1)』 新潟市

新潟市史編さん近世史部会編　1995　『新潟市史　通史編1 原始 古代 中世 近世 (上)』 新潟市

新潟市史編さん近世史部会編　1997　『新潟市史　通史編2 近世 (下)』 新潟市

新潟市歴史博物館編　2004　『にいがた街の記憶』 新潟市歴史博物館

新潟市歴史博物館編　2006　『新潟の舟運』 新潟市歴史博物館

新潟市　2006　『新潟市合併記念事業 81万人の港町・新潟』資料集　新潟市

新潟古砂丘グループ　1979　「砂丘と平野」『アーバンクボタ』17　久保田鉄工株式会社

牧野隆信　1989　『北前船の研究』 法政大学出版局

南憲一・新潟大学積雪地域災害研究センター編　2002　『新潟市域災害年表』 新潟大学積雪地域災害研究センター

村上伸之　2006　「肥前　生産に関わる技術の成立と展開を中心に」『江戸時代のやきもの－生産と流通－』 記念講演会・シンポジウム資料集 (財) 瀬戸市文化振興財団』埋蔵文化財センター

安田町史編纂委員会　1997　『安田町史　民俗編』 新潟県安田町

渡辺哲也　2000　「Ⅵ応用地質2.3地震災害」『新潟県地質図説明書 (2000年版)』新潟県商工労働部商工振興課

遺構観察表

遺物の数量は破片数、カッコ内の数字は報告番号である

調査区	グリッド	遺構番号		層位	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)	方向	磁器	陶器	土師	土製品	石製品	木製品	金属製品	備考
2T	3,4	SD	1	ⅡS		箱状	(345)	84	36	N－13°－E	50(1,2)	31	4		3(1,2)	2(1)	1	
2T	2	礎石	128	Ⅱ			25	20							1(3)		1	
2T	5,6	SD	3	ⅢS上面		V字状	(126)	11	3	N－13°－E	3(1,2)	1						
2T	1,2	SD	2	ⅢS		台形状	(144)	26	5	N－9°－E	1	2						
2T	3	SK	4	Ⅲ上面	方形	台形状	(162)	(134)	65		74(1,2)	93(4)	9		3		16(18,41)	
2T	6	P	16	Ⅲ上面	円形	弧状	35	29	5								2	
2T	4	P	17	Ⅲ上面	楕円形	台形状	46	36	8									
2T	6	P	18	Ⅲ上面	円形	台形状	13	13	6									
2T	6	P	21	Ⅲ上面	円形	U字状	9	8	13									
2T	4	P	22	Ⅲ上面	円形	台形状	(41)	34	6		1							
2T	4	SK	23	Ⅲ上面	方形	台形状	(86)	(65)	8		1	2					2(42)	
2T	5	P	10	Ⅲ	方形	台形状	53	(29)	9			1					1(6)	
2T	6	P	11	Ⅲ	円形	台形状	30	30	5								1	
2T	1,2	SD	14	Ⅲ		台形状	(275)	71	28	N－3°－E	33	15	6		3(6,7)	5(2~5)		
2T	6	礎石	35	Ⅲ	楕円形	弧状	55	51	27									
2T	1	礎石	38	Ⅲ			22	18										
2T	2	礎石	40	Ⅲ			30	19	40						2(4,5)			
2T	4,6	SD	127	Ⅲ		箱状	204	(22)	16	N－82°－W							3(19,20)	
2T	1	礎石	143	Ⅲ			13	9										
2T	4	SK	12	ⅣS上面	方形	台形状	(73)	58	5			3					1(43)	
2T	6	礎石	36	ⅣS上面	楕円形	弧状	59	47	9			1			2(8)			
2T	3	SK	37	ⅣS上面	方形	台形状	(77)	(60)	12		2(2)		3					
2T	4	礎石	39	ⅣS上面	方形	台形状	69	62	31						1(9)			
2T	6	P	41	ⅣS上面	円形	台形状	13	11	4									
2T	6	P	42	ⅣS上面	円形	台形状	13	12	5									
2T	4	P	43	ⅣS上面	円形	弧状	12	12	4									
2T	4	P	50	ⅣS上面	円形	台形状	8	6	6									
2T	6	SD	58	ⅣS上面		箱状	(66)	5	2	N－76°－W								
2T	4	P	59	ⅣS上面	円形	階段状	10	9	3									
2T	3,4	P	60	ⅣS上面	円形	弧状	18	15	4									
2T	3	P	65	ⅣS上面	円形	台形状	14	13	3									
2T	3	P	66	ⅣS上面	円形	弧状	(20)	16	3									
2T	3	P	67	ⅣS上面	円形	弧状	15	14	4									
2T	4	P	74	ⅣS上面	円形	弧状	14	14	5									
2T	1	P	75	Ⅳ上面	方形	弧状	68	60	8		1				5(5,7,8,9)	1		
2T	2	礎石	144	Ⅳ			19	8										
2T	1	礎石	80	Ⅵ	不定形	階段状	96	67	45						8(10~13)			
2T	6	P	97	Ⅵ	楕円形	弧状	15	12	4									
2T	5	P	98	Ⅵ	楕円形	台形状	20	14	3									
2T	4	P	99	Ⅵ	円形	弧状	21	18	2									
2T	4	P	100	Ⅵ	楕円形	弧状	25	20	3									
2T	3	P	101	Ⅵ	楕円形	台形状	20	10	3									
2T	4	P	102	Ⅵ	楕円形	台形状	19	13	3									
2T	4	SD	103	Ⅵ		台形状	(25)	14	3	N－6°－E								
2T	4	SD	104	Ⅵ	不整形	V字状	77	19	12	N－8°－E								
2T	4	SD	105	Ⅵ		箱状	(80)	4	2	N－80°－W								
2T	1	SK	129	Ⅶ	円形	箱状	49	46	31			28(4)				3	1	
2T	4	P	130	Ⅵ	円形	台形状	27	21	7									
2T	3	P	131	Ⅵ	円形	U字状	(19)	(10)	37						1(14)			
2T	2	礎石	115	Ⅶ			42	23	15									
2T	2	礎石	116	Ⅶ			17	12	6						1(15)			
2T	3	礎石	122	Ⅶ			43	25	9									
2T	1	礎石	123	Ⅶ			25	21	11									
2T	1	SK	134	Ⅶ	円形	U字状	(42)	(36)	30			7						
2T	1~4	SD	136	Ⅶ		V字状	(288)	(237)	58	N－13°－E	58(13)	69(7,11)	27(6)	5(8~12)	4(16~19)	3(17~22)	4(21,23)	
2T	4,6	SX	196	Ⅶ	不明	不明	192	(14)	57							10(13~22)		
2T	6	礎敷	197	Ⅶ			172	15	11							1(6)		
2T	6	杭	258	Ⅶ														
2T	1	P	161	Ⅷ	長方形	階段状	(113)	(67)	32		5(13)	12	2			8(24)		
2T	1	SK	146	Ⅷ	不整形	弧状	(135)	(130)	14		7(13)	31(11)	3			39	4(22,48)	
2T	3~6	SK	153	X中	方形	箱形	(197)	(186)	8		1	9				1(25)		
2T	6	P	159	XI	不整形	弧状	30	28	5									
2T	5	P	160	XI	円形	台形状	58	57	23		1				1(21)	1(26)	1	
2T	6	P	161	XI	方形	台形状	14	13	4							7		
2T	5	P	162	XI	円形	U字状	10	9	8									
2T	3	P	163	XI	不整形	弧状	40	30	3									
2T	3	P	164	XI	不整形	台形状	(38)	30	5									
2T	5	杭	167	XI												1(27)		
2T	3	杭	168	XI												1(28)		
2T	4	杭	169	XI														
2T	4	杭	170	XI												11		
2T	3	杭	171	XI														
2T	5	杭	172	XI												1		
2T	6	杭	173	XI												1		
2T	4	SX	178	XI	不整形	弧状	(140)	91	7		2	2	1					
2T	6	杭	257	XI												1(29)		
2T	3	杭	198	XII												1		
2T	3	杭	179	XII中												1		
2T	4	礎石	253	XII～XIII			25	19										
2T	4	P	152	XIII	円形	箱	21	21	6							1		
2T	2	柱根	199	XIII	円形	台形状	最も258に同じ	最も258に同じ	最も258に同じ							1(35)		
2T	2	柱根	200	XIII												3(30)		
2T	1	杭	251	XIII												1		
2T	4	杭	252	XIII												6		

観察表

調査区	グリッド	遺構番号		層位	平面形	断面形	長径(cm)	短径(cm)	深度(cm)	方向	縄器	胸郭	土器	土製品	石製品	木製品	金属製品	備考
2T	4	礫石	254	XIII			26	19							1(22)			
2T	2	礫石	255	XIII			34	20							1(23)			杭根260の下
2T	2	礫石	256	XIII	円形	台形状	(41)	(40)	24						1(24)			
2T	4	礫石	259	XIII			25	15										
2T	2	SX	260	XIII	不整形	台形状	(20)	(29)	9		1	3						
2T	5	P	261	XIII	円形	台形状	30	28	7									
2T	3	礫石	262	XIII			37	22										
2T	3	礫石	263	XIII			31	13							1(25)			
3T	2	P	20	II	円形	箱状	52	47	48									
3T	8	SD	27	II		台形状	274	41	26	N-79°-W		1			1(26)	1(125)		
3T	2	P	45	II	楕円形	台形状	44	34	(18)									
3T	1	P	47	II	円形	箱状	−	−	46									
3T	4,6	SK	61	II	−	箱状	180	(121)	66		101	226(18)	45(123)	1			(49)	
3T	10	P	7	III a 上面	楕円形	台形状	60	40	14		2							
3T	6～10	SD	8	III a 上面		−	(440)	(26)	20	N-77°-W	10	5		1				
3T	7	SK	9	III a 上面	−	台形状	112	(52)	17		5	3						
3T	1,3	SK	13	III a 上面	−	弧状	(148)	(60)	12					1(24～26)			(50)	
3T	5,6	SD	15	III a 上面		−	(204)	(63)	20	N-8°-E	1	3					(7)	
3T	6	P	19	III a 上面	円形	台形状	84	80	16		3	4(22)						
3T	3,4	P	24	III	−	階段状	−	−	13		1	1						
3T	2	P	25	III	−	箱状	83	(68)	40		4(26)	6	3	2(49)			(23)	
3T	1	SK	26	III	−	台形状	100	(60)	35		5(34)	4	2(23)					
3T	7,8	SK	28	III	方形	台形状	125	101	26		2	3			2(28,29)			
3T	9,10	SD	29	III		弧状	101	41	12	N-85°-W	1		4(20)					
3T	7,8	SK	30	III	−	台形状	114	86	26		1(75)	3(45)	1		1(30)			
3T	3,4	SD	31	III		階段状	(140)	(60)	17	N-13°-E	2	2(24,28)					(51)	
3T	7～10	SD	32	III		弧状	197	48	17	N-80°-W	3	3	1	1(27)		1		
3T	10	礫石	33	III	楕円形	平円状	60	44	22				6		1(27)			
3T	9	P	34	III	円形	弧状	33	32	10									
3T	3～6	P	44	III	長方形	台形状	(76)	(45)	8									
3T	5,6	SD	51	III	−	−	(112)	25	(28)	N-6°-E								
3T	6,8	SX	54	III b 中	−	−	(96)	(24)	10									
3T	3～6	礫板	62	III b														
3T	9,10	SD	145	III b		−	(323)	(47)	44	N-17°-E		6	1			1(126)		
3T	4	礫石	192	III b			42	(28)										
3T	7	SD	6	IV 上面	−	−	(56)	60	−	N-13°-E		44						
3T	9,10	SD	48	IV 上面		−	(293)	84	54	N-7°-E	12	28(31)	29				(24)	
3T	8	P	49	IV 上面	楕円形	弧状	93	40	12			1						
3T	3,4	P	52	IV 上面	長方形	弧状	62	35	6							5		
3T	1	P	53	IV 上面	−	弧状	50	(26)	9									
3T	7	SD	55	IV 上面		箱状	(72)	(31)	16	N-80°-W								
3T	4	P	63	IV 上面	楕円形	台形状	(42)	35	16									
3T	6	礫石	64	IV 上面		箱状	−	−	19						1(31)			
3T	7～10	SK	68	IV 上面	長方形	箱状	212	109	28		2	8					(1)	
3T	5,7	SK	69	IV 上面	−	台形状	112	(53)	27		3							
3T	2,4	SD	70	IV 上面		箱状	(94)	44	24	N-16°-E		1						
3T	5,6	SD	71	IV 中		箱状	(235)	38	23	N-15°-E	2					1(127)		
3T	8	P	72	IV 中	円形	台形状	28	28	4									
3T	6	P	76	IV 中	−	−	(40)	28	(20)									
3T	6	P	77	IV 中	−	弧状	27	(26)	3									
3T	7	P	5	IV	−	−	24	12	−									
3T	2	SK	46	IV	方形	弧状	58	57	7		1	1						
3T	4	礫石	56	IV											1(32)			
3T	3	P	57	IV	−	台形状	62	(30)	12									
3T	2,4	SK	73	IV	−	−	(100)	96	22			1					(11)	
3T	6	SD	78	IV		−	100	(66)	(8)	N-12°-E								
3T	3,4	SD	79	V 上面		台形状	(126)	82	34	N-12°-E	4	5	1		1(35)		(56)	
3T	2	P	82	V 上面	円形	箱状	30	26	27		1							
3T	1,2	SX	83	V 上面	不整形	弧状	104	88	4			1						
3T	3,4	SD	86	V 上面		−	(120)	(14)	−	N-12°-E		1						
3T	3,5	P	87	V 上面	円形	弧状	36	34	5									
3T	6	P	89	V 上面	方形	弧状	40	(34)	5									
3T	2,4	P	90	V 上面	不整形	階段状	62	58	14								(57)	
3T	1,2	SD	81	V		−	(198)	(25)	(7)	N-9°-E	1	1	3					
3T	6,8	SX	84	V	−	弧状	186	(68)	23									
3T	7,8	SX	85	V	−	弧状	(108)	92	6		1							
3T	6	礫石	88	V														
3T	3,4	SD	91	V		箱状	(82)	26	12	N-11°-E			1					
3T	6	P	92	V	楕円形	階段状	34	25	8									
3T	6	SX	94	V	−	弧状	(92)	(76)	7			1						
3T	5,7,8	SK	95	V	方形	台形状	122	(97)	42		7	6	4				(58)	
3T	9,10	P	96	V	−	台形状	74	65	10		2	1						
3T	8,10	P	106	V	円形	台形状	48	44	5									
3T	8	P	107	V	−	弧状	−	−	28									
3T	6	礫石	108	V											1(36)			
3T	6	礫石	109	V														
3T	7,8,9,10	SX	110	V	−	−	(235)	228	(50)		80	44(46)	15	1(4)	1	10(43)	(59)	
3T	2	P	111	V	−	台形状	65	(40)	14			1						
3T	6	P	183	V	方形	V字状	13	12	37									
3T	6	P	184	V	方形	−	14	13	−									
3T	6	P	185	V	方形	−	11	8	−									
3T	8	P	186	V	方形	−	12	11	−									
3T	3	P	93	VI 上面	−	台形状	72	(22)	14		1		1					
3T	2	P	112	VI 上面	楕円形	箱状	18	13	13									
3T	3	P	113	VI 上面	−	箱状	47	(22)	23		1		1					
3T	6	P	114	VI 上面	長方形	弧状	82	62	7		3		1					

調査区	グリッド	遺構番号		層位	平面形	断面形	長径（cm）	短径（cm）	深度（cm）	方向	磁器	陶器	土器	土製品	石製品	木製品	金属製品	備考
3T	2,4	SK	117	Ⅵ上面	楕円形	弧状	88	50	22		1（53）							
3T	4	P	118	Ⅵ	長方形	台形状	105	83	（53）		2	5	2		1	2	（68）	
3T	1,3	SK	119	Ⅵ	－	弧状	122	（58）	20								（61）	
3T	2,4	SK	120	Ⅵ	長方形	箱状	115	73	42		23（55）	36（54,57）	47（56）	2（2,5）	2（38）	13	（62～67）	
3T	8	P	121	Ⅵ	楕円形	箱状	20	14	16									
3T	8	P	124	Ⅵ	円形	U字状	17	16	30									
3T	5	P	125	Ⅵ	円形	－	65	60	27		5	4	13	1（6）	1（39）		（69）	
3T	5	P	126	Ⅵ	長方形	－	70	50	36			1	4		1（40）		（70）	
3T	8	P	132	Ⅶ上面	－	台形状	26	（10）	12									
3T	8	P	133	Ⅶ上面	－	台形状	46	（35）	8									
3T	3,5	P	135	Ⅶ上面	－	－	64	（15）	（16）		1	1	2					
3T	3,4	P	142	Ⅶ上面	楕円形	弧状	75	65	9		3	4	1					
3T	6	P	137	Ⅶ	円形	U字状	14	12	20									
3T	6	P	138	Ⅶ	円形	－	10	8	－							1		
3T	6	P	139	Ⅶ	楕円形	V字状	12	10	7									
3T	6	P	140	Ⅶ	－	弧状	40	（12）	6						1（41）			
3T	4	P	148	Ⅶ	円形	半円状	20	20	7									
3T	3	P	149	Ⅶ	－	－	40	（24）	（5）									
3T	3	P	150	Ⅶ	－	－	46	（20）	（10）		3				1			
3T	3	P	141	Ⅷ上面	－	台形状	（58）	50	25		4	1					（75）	
3T	8	P	154	Ⅷ上面	楕円形	箱状	24	18	8									
3T	7	P	155	Ⅷ上面	楕円形	－	18	14	－									
3T	5	P	156	Ⅷ上面	－	－	140	（72）	（38）		3	4	3				（30）	
3T	6	SK	157	Ⅷ上面	不整形	弧状	156	110	34		10	12	5		1	1（45）		
3T	4	P	158	Ⅸ上面	円形	台形状	57	49	24			2（79）				8		
3T	8	P	165	Ⅸ	円形	弧状	23	22	5									
3T	8	P	166	Ⅸ	円形	V字状	16	14	15									
3T	4	SK	174	Ⅸ	－	台形状	102	（76）	35				1				（76）	
3T	7,8	SX	175	Ⅸ	－	台形状	143	（82）	10			2						
3T	2	SX	176	Ⅸ	－	箱状	44	（15）	4									
3T	1	焼土	177	Ⅸ	－	－	60	（14）	－									
3T	2	P	195	Ⅸ	円形	U字状	22	18	23									
3T	4,6	SK	180	Ⅹ上面	－	－	115	（73）	11		1	3						
3T	2	P	181	Ⅹ上面	円形	半円状	44	43	17									
3T	2	SD	182	Ⅹ	－	－	（123）	16	13	N－83°－W								
3T	4	SK	187	Ⅹ	長方形	弧状	108	72	17		1	1（76）				1		
3T	6	SX	188	Ⅹ	不整形	半円状	114	74	28		3		1			1		
3T	1	杭	189	Ⅹ							1					1（48）		
3T	1	杭	190	Ⅹ												1（49）		
3T	4	杭	191	Ⅹ														
3T	6	P	193	Ⅹ	－	－	－	－	－									
3T	6	P	194	Ⅹ	円形	U字状	22	17	26									
5T	1,3,5	SD	224	Ⅳ		箱状	（600）	（83）	30	N－83°－W	[illegible]	46（87）	11		1（42）	14（51～64）	（16,29,81）	
5T	1,2	P	201	Ⅳ	円形	台形状	（43）	（17）	37			2				3（50）		
5T	3,5,6	SK	202	Ⅴ	不整形	弧状	（288）	（55）	7		5（93）	7	2			3（65～67）	（27）	
5T	6	SK	203	Ⅵ	円形	箱状	（47）	（40）	47		4							
5T	6	P	204	Ⅵ	楕円形	半円	（20）	（14）	9				1					
5T	6	P	205	Ⅵ	楕円形	弧状	18	15	4						1（19）			
5T	3	P	228	Ⅶa上面	不整形	V字状	88	（33）	21									
5T	1	SD	233	Ⅶa上面		台形状	（30）	25	10	N－82°－W								
5T	6	P	227	Ⅶa中	楕円形	箱状	25	19	25		1							
5T	5	SK	231	Ⅶa中	長方形		（65）	（29）										
5T	5	P	232	Ⅶb上面	楕円形	漏斗状	44	（18）	32									
5T	3	P	236	Ⅶb上面	方形	箱状	11	10	12									
5T	3	SD	230	Ⅷ上面		台形状	127	（25）	10	N－80°－W		1						
5T	6	礎石	206	Ⅸ			26	25	15						1（44）			
5T	2	SK	207	Ⅸ	不明	台形状	（111）	（90）	17		11（102）	1						
5T	1	P	209	Ⅸ	円形	台形状	（19）	（14）	7									
5T	2	P	220	Ⅸ	楕円形	半円状	（39）	（11）	19		1	1（107）						
5T	3	P	234	Ⅸa上面	不整形	V字状	64	（36）	19		1							
5T	3,5	P	240	Ⅸa	円形	V字状	61	（44）	36		7	1						
5T	3	P	238	Ⅸb	不整形	弧状	（83）	（40）	7									
5T	5	P	239	Ⅸb	不整形	不明	（53）	49	28		1（106）				1（45）			
5T	5	SD	241	Ⅸb		漏斗状	（82）	（44）	30	N－81°－W	1	1	3			7		
5T	2	P	208	Ⅹ	円形	台形状	16	16	7									
5T	4	P	210	Ⅹ	円形	階段状	21	18	9									
5T	4	P	211	Ⅹ	円形	弧状	16	14	6									
5T	6	P	212	Ⅹ	楕円形	台形状	20	15	7									
5T	6	P	213	Ⅹ	方形	箱状	40	35	12		1							
5T	6	P	214	Ⅹ	方形	台形状	46	36	8									
5T	5,6	SD	215	Ⅹ		半円状	（38）	28	13	N－13°－E								
5T	6	礎石	229	Ⅺ上面	長方形	台形状	（60）	42	30						1			
5T	6	P	216	Ⅺ	円形	階段状	12	11	11									
5T	6	P	217	Ⅺ	楕円形	階段状	15	8	12									
5T	4	P	218	Ⅺ	楕円形	台形状	14	7	4									
5T	3,5	SK	219	Ⅺ	不整形	階段状	102	76	9									
5T	6	SK	221	Ⅺ	長方形	台形状	158	135	28		[illegible]	5（109）			2（46）	13（73）	（10）	
5T	4	SK	222	Ⅺ	長方形	台形状	103	（64）	25		10	4	1			4（74～77）		
5T	4	SK	223	Ⅺ	円形	台形状	（33）	（60）	10		2							
5T	6	P	235	Ⅺ	円形		11	9										
5T	6	P	237	Ⅺ	方形		12	9										
5T	4	P	242	Ⅻ	楕円形	弧状	40	33	9									
5T	2	柱根	243	Ⅻ												1		
5T	2	礎石	244	Ⅻ			24	17							1（47）			
5T	4	礎石	245	Ⅻ			32	27	4						1			

土器・陶磁器観察表（試掘調査）

1　年代について　世紀は小文字の c）とした。初頭、前期、中期、後期、末期はそれぞれ頭文字を充てた。
2　生産地については、系の文字を省略した。肥前系：肥前、瀬戸・美濃系：瀬・美、京・信楽系：京・信、唐津系：唐佐。
3　胎土の色調表示は「新版標準土色帖」を使用した。（農林水産省農林水産技術会議事務局監修　（財）日本色彩研究所　）
4　口縁端部に塗った鉄錆は「口紅」とする。
5　文様の描線は省略した。文様の位置は外面は外、内面は内、内面中央は見込とした。

図版番号	報告番号	調査区	層位	種別	器種	産地	年代	口径（cm）	底径（cm）	高さ（cm）	器形・調整・釉薬・胎土、文様等	備考
24	1	4T	Ⅵ・Ⅶ	陶器	擂鉢			38.0	－	－	片口擂鉢	
24	2	5T	下青砂～Ⅸ	磁器	椀	肥前	18c末～19c 前	9.9	3.5	5.6	染付、外：農夫文、草文見込：コンニャク印判五弁花文	
24	3	5T	下青砂～Ⅸ	磁器	椀	肥前	18c末～19c 前	8.1	3.2	5.5	染付、外：ほおずき文、見込：蝶	被熱。
24	4	5T	下青砂～Ⅸ	磁器	蓋	肥前	18c末～19c 前	10.0	4.0	2.9	染付被用蓋、外：一重網目文、草花文、内：四方襷文、見込：草文	
24	5	5T	下青砂～Ⅸ	磁器	皿	肥前	18c末～19c 前	13.9	7.1	2.7	染付、内：蛇の目釉剥ぎ、唐草文、見込：コンニャク印判五弁花文	畳付け砂付着。
24	6	5T	下青砂～Ⅸ	磁器	皿	肥前	18c中～後	17.6	10.0	6.0	染付、内：竹林文、扇文、見込：五弁花文、外：蔓草文、銘：満福	
24	7	5T	下青砂～Ⅸ	磁器	皿	肥前	19c	13.8	9.3	3.8	染付、蛇の目凹形高台、内：亀甲文、草花文、見込：目夜船文、外：源氏香文、底部：左に墨書「上マ（部）」	
24	8	6T	Ⅴ？	磁器	椀	肥前	18c	11.6	5.0	6.3	青磁（外）染付、内：四方襷文、見込：コンニャク印判五弁花文、銘：二重方形枠満福	Ⅱb層か
24	9	6T	Ⅶ	磁器	皿	瀬か関西	19c～	10.3	5.9	2.4	染付輪花、内：草花文、外：宝文	被熱、22とセット？
24	10	6T	Ⅸ	磁器	椀	肥前	18c	8.9	3.6	4.5	染付、外：松林文、見込：文様有	3個1セット？
24	11	6T	Ⅸ	磁器	椀	肥前	18c	9.2	（3.7）	（4.2）	染付、外：松林文、岩文	3個1セット？
24	12	6T	Ⅸ	磁器	椀	肥前	18c	9.1	－	－	染付、外：松林文、土坡文	3個1セット？
24	13	6T	Ⅸ・一括	磁器	椀	肥前	19cか	10.0	3.8	5.0	染付、外：籠子文5個	
24	14	6T	Ⅹ・一括	磁器	徳利		18c末～19c 前	4.0	－	－	染付、外：山水文、草文	
24	15	6T	一括	磁器	蓋	肥前	18c後	10.3	5.8	2.9	染付被用蓋、外：山水文、船文、見込：コンニャク印判五弁花文	
24	16	6T	一括	磁器	小杯	瀬・美	19c	6.8	3.4	5.0	染付、外：文字、櫛歯文	
24	17	6T	一括	磁器	小杯	瀬・美	19c	6.0	2.6	4.4	染付、ヘラケズリ、外：文字、櫛歯文、銘：「佐川」	
24	18	6T	一括	磁器	皿	肥前	18c末～19c 前	13.4	7.1	3.7	染付、内：草花文、見込：コンニャク印判五弁花文か、外：蔓草文、銘：有	
25	19	6T	一括	磁器	皿	瀬・美	19c	7.7	3.3	2.2	染付型打ち、外：花文	
25	20	6T	一括	磁器	皿	中国・景徳鎮	明末	－	5.8	－	青花、内：芙蓉文、外：文様有。	ガラス釉。
25	21	6T	一括	磁器	皿	中国	清（～1650）	－	－	－	色絵・粉彩、内：草花文、銘：「□（大か）□（清か）□□（年号）□□（年製）」などが入る	
25	22	6T	一括	磁器	皿	瀬か関西	19c～	9.7	5.4	3.9	染付輪花、内：草花文、外：宝文	9とセット？
25	23	6T	一括	磁器	皿	肥前	18c前	－	7.3	－	染付、内：草花文、見込：五弁花文、外：蔓草文、銘：「大明年製」	
25	24	6T	一括	陶器	鉢	肥前	18c	19.6	7.6	8.0	ロクロケズリ、蛇の目釉剥ぎ、内外白化粧上ハケメ、鉄釉	
25	25	6T	一括	磁器	皿	肥前	18c	5.5	2.6	1.7	染付紅皿、外：文様有	
25	26	6T	一括	陶器	重箱	不明	19c	6.8	4.4	（5.2）	底部：3箇所糸切り、輪穴有、茶褐色釉。	
25	27	6T	一括	土器	火鉢？	在地？	18c末～19c 前	－	20.7	－	外：ヘラナデ、底外：ミガキ、内面：指頭圧痕、胎土：長石、移植人。	
25	28	7T	Ⅱa～Ⅵ	磁器	皿	瀬・美	19c	8.1	3.9	2.2	染付型打ち内皿、内：獅子文、雷文	新発田城Ⅱで同類有。
25	29	7T	Ⅶ？	磁器	椀	肥前	18c	－	4.7	－	外：蔓草文？、見込：コンニャク印判五弁花文	
25	30	8T	Ⅱa～Ⅱb	磁器	小杯			6.3	2.6	3.6	白磁型打ち、十六弁菊花文大小、口紅	遺構。
25	31	8T	Ⅴ？	陶器	壺	不明		－	5.2	－	外：無釉、内：透明釉、底外：左墨書「ケケ」	外面全体にスス付着。
25	32	9T	Ⅱb	磁器	椀	肥前	18c末～19c 前	11.4	5.7	6.2	染付、外：草花牡丹文？、内：四方襷文、見込：渦状松竹梅文	遺構。
25	33	9T	Ⅱb	磁器	御神酒徳利	肥前	18c末～19c	1.7	4.5	11.8	染付、幅：6.7cm、外：亀甲文・梅花文、草花文	
25	34	9T	Ⅴ？～Ⅶ	磁器	椀	肥前	18c末～19c 前	9.0	－	－	染付、外：文様有	遺構。
25	35	9T	Ⅴ？～Ⅶ・Ⅱb	磁器	椀	肥前	18c末～19c 前	5.8	6.5	6.6	染付広東椀、外：草花文、鳥文、見込：雲文	ガラス釉。口縁部被熱、底部被熱変形。
25	36	9T	Ⅴ？～Ⅶ	磁器	仏飯器	肥前	19c前	6.0	3.4	6.1	染付、外：斜格子文	
25	37	9T	下青砂	陶器	壺	越中瀬戸	19c	－	10.6	－	底部：3箇所糸切り、茶褐色釉、胎土：白色砂粒含む。	実測に転用。口縁部全周に敲打痕有。
25	38	9T	一括	磁器	瓶	肥前	18c前	4.5	－	－	染付、外：草花文	
26	39	10T	Ⅴ・青砂層	磁器	椀	肥前	18c後	10.8	3.5	4.8	染付、内外：花散文、斜格子文	
26	40	10T	一括	陶器	灯明受皿	信	19c	10.8	4.4	2.2	凸部釉剥ぎ、ロクロケズリ、	未使用。
26	41	11T	Ⅱb	磁器	小杯	肥前	19c	－	2.5	－	色絵（朱）、内外：文字文	
26	42	11T	Ⅱb	磁器	皿	肥前	18c前	－	7.6	－	染付、内：蔓唐草文、見込：五弁花文、銘：「大明化□□製」	
26	43	11T	下青砂	陶器	擂鉢	単	18c前～中	40.8	－	－	卸し目9本1単位、ヘラケズリ、胎土：白色粒子、砂含む、堅緻、にぶい赤褐色2.5YR4/3	
26	44	11T	Ⅴ・Ⅵ	陶器	椀	肥前	1620～1630年代	－	6.0	－	砂目、胎土：灰黄色、畳付け無釉・砂付着。	
26	45	11T	Ⅴ・Ⅵ	磁器	椀	肥前	18c前	－	4.4	－	染付、外：コンニャク印判草文、銘：「大明年製」	
26	46	11T	Ⅴ・Ⅵ	磁器	皿	肥前	18c前	13.5	7.2	4.2	染付、内：コンニャク印判五弁花文、外：蔓草文、銘：満福	
26	47	11T	Ⅴ・Ⅵ	磁器	皿	肥前	18c	14.4	8.4	4.5	染付輪花、内：草花文、扇文、外：蔓草文	
26	48	11T	Ⅴ・Ⅵ	陶器	鉢	肥前	18c前	35.2	－	－	ロクロケズリ、鉄釉、白化粧上ハケメ	

土器・陶磁器観察表（本発掘調査）

図版番号	報告番号	調査区	遺構	層位	グリッド	層位	種別	器種	産地	年代	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器形・調整・文様・釉薬・胎土等	同一個体	備考
30	1	2T	SK4	1		Ⅲ上面	磁器	碗	肥前	19c	10.4	3.8	6.0	染付端反碗、外：矢羽文、二重半円、内：雷文、見込：文様有	SD1・1、SD3・1、2T3・Ⅱ、2T3・ⅢS	
30	2	2T			3	Ⅳ	磁器	皿	肥前	19c	31.5	13.0	5.3	染付菱形輪花大皿、内：草花文、渦文、松文、見込：吾萩、太湖石、外：花唐草、蝶、銘：一重方形枠に寿	SD1・1、SD1・4、SD3・1、SK4・1、SK37・1、2T1・1、2T3・Ⅱ、2T3・ⅢS、2T3・Ⅲ、2T4・Ⅲ、2T排土	被熱。
30	3	2T			4	Ⅴ	磁器	皿	肥前（波佐見）	18c後	13.0	7.4	3.4	染付端反皿、口唇部口紅？黒色、内：山松文	2T1・Ⅳ	白いゴマ状灰付着。
30	4	2T	SK129			Ⅵ	陶器	甕	肥前	18c	—	24.5	—	鉄釉、外：沈線3条、粗い格子目文、内：粗い格子目文、見込：粗い格子目文、砂、底部外：砂付着。	SK146・3、SK4・1、2T4・1、2T4・Ⅱ、ⅡT4・Ⅲ、2T2・Ⅱ	
30	5	2T			3	Ⅵ	磁器	蓋	肥前	18c後	—	3.9	—	染付碗用蓋、外：水仙文		
30	6	2T	SD136			Ⅶ	土器	灯明皿			10.0	4.3	1.5	手づくね		油煙付着。
30	7	2T	SD136	3		Ⅶ	陶器	皿	肥前	18c前	13.6	4.4	4.1	京焼風陶器皿、内：蛇の目釉剥ぎ		見込：熔着。
30	8	2T			3	Ⅶ	陶器	皿	肥前	18c前	42.4	—	—	三島手、白化粧土		
30	9	2T			3	Ⅶ	陶器	灯明受皿			11.8	3.6	2.5	油受け口3か所、ロクロケズリ。		使用痕跡。
30	10	2T			6	Ⅸ	陶器	碗	肥前（内野山）	Ⅲ～Ⅳ？	11.8	—	—	端反碗、外：銅緑釉10Y6/2、内：透明釉掛け分け、胎土：浅黄色2.5Y8/4	2T6・Ⅶ	被熱。
30	11	2T			3	Ⅻ	陶器	碗	肥前（内野山）	～18c前	11.8	4.3	6.5	端反碗、外：銅緑釉、内：透明釉掛け分け、胎土：灰白色5Y8/1	SK146・1、SK146・2、SD136・3、2T3・Ⅶ	高台砂付着、被熱。
30	12	2T			4	Ⅻ	土器	灯明皿			2.9	3.2	2.4	片口付。		油煙付着。
30	13	2T			1	ⅩⅢ	磁器	碗	肥前	1680年代	8.9	4.5	5.5	染付、外：流水文	P151、SD136・3、SK146・1	高台砂付着。
30	14	2T			2	ⅩⅢ	磁器	碗	肥前（波佐見三股）	17c後	—	—	—	青磁碗、胎土：灰白色7.5Y8/1、青磁釉：オリーブ灰色10Y6/2		
30	15	2T			2	ⅩⅢ	陶器	碗	不明	17c初	—	—	—	天目碗、黒色釉、胎土：灰黄褐色2.5Y6/2		
30	16	2T			2	ⅩⅢ	磁器	皿	肥前（波佐見三股）	17c後	—	—	—	青磁輪禿皿、胎土：灰白7.5Y8/、青磁釉：オリーブ灰色10Y4/2		
30	17	2T			2	ⅩⅢ	磁器	鉢	肥前（波佐見三股）	17c後	—	—	—	青磁鉢、胎土：灰白色10Y8/1、青磁釉：オリーブ灰色10Y6/2、内：陰刻文		
31	18	3T	SK61	1		Ⅱ	陶器	鉢			33.4	12.6	11.5	口縁部外折れ、ロクロケズリ、オリーブ黄色釉5Y6/3ハケナデ、内：目痕5個、胎土：灰白色5Y7/2、ケズリ出し高台。		口縁部一部被熱。
31	19	3T	SK61	1		Ⅱ	土器	焙烙		18c末～19c初	19.4	14.3	7.2	持ち手付き、ロクロケズリ、胎土：石英、雲母含む。		未使用
31	20	3T	SK61	1		Ⅱ	土器	火鉢		19c	24.4	21.0	20.7	八角形、獅子持ち手付き、透、山水、城、楼閣、神社など風景8面型押し。	SD29・1、3T8・Ⅱ、3T4・排土、3T6	
31	21	3T			10	Ⅱ	磁器	小杯		19c・幕末	6.0	2.3	2.9	外：松葉文、内：松葉文、見込：網干		
31	22	3T	P19	1		Ⅲa上面	陶器	灯明受皿	肥前		10.1	4.7	2.6	鉄釉、内面受部釉剥ぎ、底部回転糸切り		未使用
31	23	3T	SK26	1		Ⅲa	土器	不明			—	—	—	ロクロケズリ、胎土：雲母混入、底部外面墨書「コン」		
31	24	3T	SD31	2		Ⅲa	陶器	碗	瀬	18c後	10.0	—	—	せんじ（腰折碗）、鉄絵草花文。		
31	25	3T	SD31	2		Ⅲa	陶器	皿	肥前	17c後～末	—	3.8	—	京焼風陶器皿、見込：山水文、高台内部：墨書「一」		
31	26	3T	P25			Ⅲa	磁器	皿		17c後	13.2	8.0	2.9	染付、口紅、内：梁界、大羽文、花文、外：蔓草文		
31	27	3T		9		Ⅲa	磁器	蓋		19c	10.0	5.4	2.9	染付広東碗用蓋、外：野菜文、内：蔓草文		
31	28	3T			3	Ⅲ	磁器	皿	肥前	1780年代	11.9	5.9	3.3	青磁染付端反小皿、内：松葉文、松ぼっくり文、外：青磁釉	3T4・Ⅲ、3T排土	高台：宗焼模倣
31	29	3T			6	Ⅲb	磁器	碗	肥前	18c後	9.9	4.0	4.9	染付、外：松文、梅文	3T7・Ⅲb	
31	30	3T			8	Ⅲb	陶器	灯明受皿			10.4	4.6	1.4	ロクロケズリ、胎土：緻密		器形は信楽の模倣、内：スス付着。
31	31	3T	SD48	1		Ⅳ上面	陶器	碗	京・信か	18c後～末	9.5	5.1	6.6	色絵筒碗、外：麻葉文、籠目文、梅文、菖蒲文か、蔓草文	3T10・Ⅲ	赤以外の顔料劣化し、地模様のみ残る。
31	32	3T			1	Ⅳ	陶器	碗	瀬	18c後	10.0	—	—	せんじ（腰折碗）、外：沈線3本わずかに入る。		
31	33	3T			1	Ⅳ	陶器	天目台			6.0	4.0	3.9	鉄釉、底部回転糸切り。		端部打ち欠き、蓋子に転用途中。
31	34	3T			1	Ⅳ	磁器	小杯			8.4	—	—	染付	SK26・1	
31	35	3T			1	Ⅳ	陶器	擂鉢	肥前	17c	29.0	—	—	口縁内側肥厚、口縁部のみ鉄釉。		
31	36	3T			2	Ⅳ	陶器	碗	肥前		8.8	4.0	6.6	口唇部口紅？部分的に残る、高台に砂付着。	3T4・Ⅳ	
31	37	3T			2	Ⅳ	磁器	碗	肥前（波佐見）		10.0	3.6	4.8	染付、外：菊文、草花文。		くらわんか手
32	38	3T			2	Ⅳ	磁器	碗	肥前	1770年代	10.1	4.0	5.3	染付、外：菊文、花文、銘：一重方形枠に崩れた渦福。		高台：宗焼模倣、被熱
32	39	3T			3	Ⅳ	磁器	碗	肥前	18c	10.6	—	—	染付、外：鶴文か		
32	40	3T			4	Ⅳ	陶器	擂鉢	肥前	1690～1780年	34.0	—	—	口縁部外側：断面三角形突帯、鉄釉、胎土：緻密、卸し目11条一単位。		
32	41	3T			4	Ⅳ	磁器	香合	肥前		4.1	3.0	1.3	香合身部分、色絵か、朱・緑わずかに残る。		
32	42	3T			5	Ⅳ	磁器	碗	肥前	18c前	—	5.0	—	染付、外：竹文、見込：コンニャク印判五弁花文、銘：「□［大か］明□［年か］製」		
32	43	3T			7	Ⅳ	磁器	鉢？	肥前	18c末	—	9.2	—	染付、蛇の目凹形高台、外：花唐草文、見込：唐草文。		
32	44	3T			7	Ⅳ	陶器	鉢	肥前	17c後	41.3	14.0	15.9	ロクロケズリ、白化粧土ハケヌリ、鉄釉		
32	45	3T			7	Ⅳ	陶器	灯明受皿	肥前		11.3	4.4	3.0	鉄釉、底部回転糸切り。	SK30・1	内面油煙付着。
32	46	3T	SX110	1		Ⅴ	陶器	擂鉢	備前	16c末～17c前	(29.3)	—	—	片口、卸し目10条以上		
32	47	3T			2	Ⅴ	磁器	碗	肥前	18c後	10.1	3.9	4.8	染付、外：水焚文、菊散らし文	3T1・Ⅰ、3T2・Ⅲ	
32	48	3T			2	Ⅴ	陶器	碗	肥前	18c	9.0	2.9	5.7	京焼風陶器碗、外：植物種子文？色絵鉄釉？	3T2・Ⅳ	

図版番号	報告番号	調査区	遺構	層位	グリッド	層位	種類	器種	産地	年代	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	器形・調整・文様・釉薬・胎土等	同一個体	備考
32	49	3T			3	V	陶器	椀	肥前	17c後	9.4	—	—	京焼風陶器色絵椀。外：山水文、見込：文様有。色絵朱・黒残る。	3T7・II、3T1・III、3T7・III、3T6・IV。	
32	50	3T			5	V	陶器	灯明受皿	備前？	17c後	10.4	4.4	2.3	ロクロケズリ、鉦受け口3か所。		内外面油煙付着。
32	51	3T			6	V	陶器	擂鉢	須佐		31.0	—	—	口縁部外折れ、放射状卸し目10条一単位、ロクロケズリ、胎土：明褐色7.5YR5/8	3T5・IV、3T6・IV	須佐唐津、焼成やや不良。
32	52	3T			9	V	磁器	小杯	肥前	1630～1650年代	7.1	2.8	4.1	染付、外：蘭文？	3T8・I、3T8・III、3T6・IIIb、3T9・IV	初期伊万里
32	53	3T	SK117	1		VI上面	磁器	皿	肥前	17c後	—	14.7	—	染付、蛇の目凹形高台、見込：蘭？文		上手
32	54	3T	SK120	7		VI	陶器	椀	肥前	17c後	8.6	—	—	染付、外：山水文		京焼風
32	55	3T	SK120	7・8		VI	磁器	椀	肥前	17c後	9.0	5.0	6.9	染付、外：型紙摺、藤文		上手
32	56	3T	SK120	7・8		VI	土器	灯明皿			9.6	2.7	1.5	手づくね	SK120・8	油煙付着、口縁部被熱して赤変。
32	57	3T	SK120	サブトレンチ		VI	陶器	皿	肥前	17c後	—	5.3	—	京焼風皿、内：山水文		京焼風
32	58	3T			1	VI	磁器	皿	肥前（波佐見）	17c後半～18c前	11.0	6.6	2.6	染付、内：蝶、見込：コンニャク印判五弁花文。		くらわんか手
32	59	3T			3	VI	磁器	皿	肥前	18c初	10.6	6.9	2.2	染付型打菊花手塩皿、見込：コンニャク印判		
32	60	3T			3	VI	陶器	椀	京・信	18c前	9.2	—	—	色絵椀、外：笹文、色絵朱・黒・黄残る。	3T3・VIS	
33	61	3T			4	VIIS	土器	灯明皿		18c	10.3	2.2	1.9	手づくね		油煙付着。
33	62	3T			1	VII	陶器	椀	肥前	18c前	11.4	5.6	8.5	呉器手椀		
33	63	3T			2	VII	磁器	椀	肥前	17c前	—	4.3	—	染付、見布高台、外：網目文。		初期伊万里
33	64	3T			6	VII	磁器	椀	肥前	18c中	9.5	3.8	5.6	染付、外：コンニャク印判、梅花文、紅葉文、銘：「大明年製」		
33	65	3T			6	VII	磁器	椀	肥前	18c	9.6	4.2	6.0	染付、外：荒磯文、花文、銘：「大明年製」	3T5・IV、3T6・IV、3T6・V、3T6・VI	
33	66	3T			6	VII	磁器	徳利	肥前	17c後	3.0	—	—	色絵、外：網目文、緑色劣化。		
33	67	3T			6	VII	磁器	香炉	肥前	18c	—	5.6	—	青磁筒形三足香炉、外：青磁釉、獅子脚三足付き	3T6・VI、3T4・焼土、3T5・焼土、3T6・南北サブトレンチ。	
33	68	3T			2	VIII	陶器	椀	肥前	17c後	10.7	—	—			京焼風
33	69	3T			2	VIII	陶器	皿	肥前	16c末	—	—	—	鉄絵、草文？		絵唐津、本遺跡最古。
33	70	3T			2	VIII	陶器	擂鉢	肥前	17c	(20.0)	—	—	口縁部外折れ、鉄釉口縁部のみ。		
33	71	3T			2	VIII	陶器	擂鉢	草本または明石	17c後～18c	24.6	—	—	口縁部外面のみ鉄釉、放射状卸し目21条一単位。		
33	72	3T			5	IX	磁器	椀	肥前	18c後	9.9	4.1	5.4	青磁染付色絵椀、口紅、外：青磁釉、色絵花文、見込：染付、色絵赤残る、岩、蝶、高台内：色絵、笹・緑残る。	3T2・V、3T3・V	珍品
33	73	3T			5	IX	磁器	鉢			8.6	3.6	5.2	白磁型打八角小鉢		
33	74	3T			5	IX	陶器	御神酒徳利？	肥前	18c	2.4	2.5	6.5	染付、底部回転糸切り、外：草文		
33	75	3T			7	IX	磁器	椀	肥前	19c	5.0	—	—	染付、外・内：亀甲文、氷裂文	3T9・III、SK30	
33	76	3T	SK187	1		X	陶器	椀	肥前	17c後	10.0	5.0	7.0	呉器手椀		
33	77	3T			1	X	磁器	皿	肥前	17c後	—	—	—	染付輪縁大皿？、墨弾、唐草文。		上手
33	78	3T			4	X	磁器	皿	肥前	17c前～中	—	(6.0)	—			初期伊万里
33	79	3T			5	X	陶器	灯明受皿	備前か		11.0	3.2	2.3	ロクロケズリ、火襷？、鉦受け口3か所	3T3・VIII、3T4・VIII、3T5・VIII、P158。	
33	80	5T			1	I	陶器	椀	京・信	18c中	9.0	3.4	6.5		5T5・（IIb）	
33	81	5T			5	II	磁器	皿	肥前	18c	12.2	7.4	2.7	染付、内：草花文、外：唐草文、銘：二重方形枠に福		
33	82	5T			1	III	磁器	椀	肥前		—	2.6	—	染付、内外：格子目文、丸窓草花文。		
33	83	5T			3	III	磁器	香炉	肥前	18c	8.9	—	—	白磁筒形香炉、内：無釉		
33	84	5T			3	III	土器	灯明皿			10.0	2.5	1.8	手づくね		油煙付着、地鎮？
33	85	5T	SD224	1		II～IV	磁器	皿	中国_州（漳州）	16c後～17c中	—	5.0	—	呉州手、内：草文？		
33	86	5T	SD224	1		II～IV	磁器	皿	肥前	17c後～18c初	13.1	5.3	4.9	染付、内：花？、見込：蛇の目釉剥ぎ、高い高台	5T5・（IIb）、5T3・IV	廉器
33	87	5T	SD224	1		II～IV	陶器	擂鉢	須佐		30.0	—	—	口縁部外折れ、ロクロケズリ、卸し目10条一単位	5T3・IV	
33	88	5T	SD224	1		II～IV	磁器	水滴	肥前	17c後～19c前	6.1	3.9	2.6	染付、型作り、びわの葉		
33	89	5T			3	IV	磁器	皿	肥前	17c後～18c	13.6	8.0	2.8	染付、内：草木文、外：唐草文、ハリ痕1か所、銘：「□□年製」		
33	90	5T			3	IV	陶器	皿	肥前	18c	20.8	6.4	6.7	京焼風端反皿、見込：蛇の目釉剥ぎ、目跡4か所		
33	91	5T			1	IV	磁器	壺	肥前	19c	—	7.4	—	内：無釉、蛇の目凹形高台	5T3・IV	油壺か。
33	92	5T			5	IV	磁器	皿	肥前	19c	4.8	1.4	—	白磁紅皿型打、日の放射紋		
33	93	5T	SK202	1		V	磁器	椀	肥前	17c後	8.6	5.5	5.8	染付、外：型紙摺り、雨降り文、雷雲文、銘：「大明年製」	SD224・1、5T：排土	
33	94	5T				V	陶器	椀	肥前	17c後～18c前	—	4.8	—	呉器手椀		
34	95	5T			6	V	磁器	椀	肥前	18c中	9.8	—	—	染付、外：印判草花文。		
34	96	5T			6	V	磁器	仏飯器	肥前	1690～1780	—	3.4	—	染付、底外：砂付着。		
34	97	5T			1	VIIa	磁器	皿	肥前	17c後～18c初	—	3.9	—	見込：蛇の目釉剥ぎ		廉器
34	98	5T				VII	磁器	小杯	肥前	17c	7.0	—	—			
34	99	5T				VII	磁器	皿	肥前	17c中～後	8.4	3.0	—	蛇の目高台、銘：一重方形枠に福。		
34	100	5T				VII	磁器	皿	肥前	1630～1640	—	—	—	白磁型打菊花変形？皿		初期伊万里
34	101	5T			3	IXa	磁器	椀	肥前	1610～	—	4.4	—	青磁染付、外：青磁釉、内：染付、梅文、山水文、銘：二重方形枠に渦福。		初期伊万里
34	102	5T	SK207	1		IX	磁器	皿	肥前	1610～	13.0	—	—	輪花風変形皿、口紅、内：草花文、蝶	5T2・IX	初期伊万里
34	103	5T			2	X	磁器	椀	肥前	18c？	11.5	—	—	染付、外：草花文		

図版番号	報告番号	調査区	遺構	層位	グリッド	層位	種別	器種	産地	年代	口径（cm）	底径（cm）	高さ（cm）	器形・調整・文様・釉薬・胎土等	同一個体	備考
34	104	5T			5	X上面	磁器	椀	肥前	17c後	9.1	—	—	染付、外：網目文、魚文？		
34	105	5T			5	X	磁器	小杯	肥前	1630～1640	6.9	2.9	3.2	染付、外：山水文、銘：「太明」	P239・2	初期伊万里
34	106	5T			2	X	陶器	擂鉢	肥前？		21.5	—	—	口縁部内折れ、口縁部のみ鉄釉。		
34	107	5T			2	X	陶器	灰吹			7.6	8.1	5.0	鉄釉	P220・1、5T6・X、13T	火落し転用品、底部刻線、口縁部被打欠有。
34	108	5T	SK221			XI	磁器	皿	肥前	1620～1630	12.5	5.6	2.9	染付、内：芝地文（輸出用）、高台砂付着		初期伊万里
34	109	5T	SK221	2		XI	陶器	皿	肥前	1620前後	11.4	5.2	2.7	溝縁皿、砂目、ヘラケズリ	5T3・X	初期伊万里
34	110	5T	SK221	2		XI	磁器	皿	肥前	18c後？	19.8	—	—	染付、蛸唐草、内：四方襷文	13T	
34	111	5T			1	XI	陶器	皿	肥前	18c	12.9	4.6	2.9	染付、内：草花文、家屋文？	5T1・Ⅳ、5T3・X	ゆがみ大
34	112	5T			2	XI	磁器	皿	肥前	1630～1640	13.2	6.5	2.6	白磁型打菊花皿	5T2・Ⅷ、5T6・XⅠ、13T	初期伊万里
34	113	5T			6	（Ⅱb）	磁器	皿	肥前	17c中	24.6	12.0	4.8	色絵、内：花文、雷文？、外：雲気文	5T5・X上面、試掘13T一括、Ⅱc～Ⅴ	古九谷様式、被熱
34	114	5T			3	（Ⅱb）	陶器	椀	肥前	17c末～18c前	9.7	5.2	6.2	京焼風陶器椀		
34	115	5T			5	（Ⅱb）	磁器	皿	肥前	19c前	23.4	16.1	3.0	輪花皿、内：蛸唐草文、膨歯文、見込：環状松竹梅文、外：唐草文、銘：「大明成化年製」、ハリ支え5か所		上手
34	116	5T			5	（Ⅱb）	陶器	擂鉢	在地～東北系		25.6	12.0	11.2	胎土：暗褐色7.5YR3/3長石、石英、砂含む、卸し目8条一単位。		

土製品観察表

図版番号	報告番号	調査区	グリッド	層位	遺構	層位	種別	素材	モチーフ	法量（cm、g）				備考
										長さ	幅	厚さ	重量	
35	1	3T	1	Ⅱ			箱庭道具	土器	祠？	（2.0）	3.85		—	型合後、中空、屋根赤彩、19C代か。
35	2	3T		Ⅵ	SK120	8	根付	陶器	翁	3.9	4.1	1.6	—	頭欠損、透明釉。
35	3	3T	2	Ⅱ			土人形	土器	尼？	1.6	1.7	1.4	—	底部中央竹串穴有、胎土：橙色5YR6/8
35	4	3T	9	Ⅴ	SX110	1	土人形	土器	相撲	（3.2）	（2.5）	1.3	—	型合後、雲母付着、胎土：にぶい黄橙色10YR7/4、赤彩？
35	5	3T		Ⅵ	SK120	7	土人形	土器	狛犬（阿形）	5.5	4.0	2.1	—	型合後、雲母付着、胎土：浅黄橙色7.5YR8/4、18c
35	6	3T		Ⅵ	P125	1	土人形	土器	馬乗り猿	（3.2）	（4.1）	1.9	—	上下欠損、型合後、雲母付着、胎土：にぶい黄橙色10YR7/4、1680年～
35	7	3T	6	Ⅵ			土人形	土器	猫	（3.2）	2.5	1.7	—	型合後、西行、雲母付着、にぶい褐色7.5YR6/3
35	8	5T	5	Ⅵ			土人形	土器	相撲	6.8	5.3	2.8		組相撲（布袋・大黒）完形、型合後、雲母付着、底φ4.0mm小孔有、橙7.5YR6/8
35	9	5T		Ⅰ			土人形	土器	福助	3.1	4.2	1.9		型押、雲母付着、橙7.5YR6/6、19C後半か。
35	10	2T		Ⅶ	SD136		面子	磁器		4.4	4.1	1.1		遺物集中地点、初期伊万里皿転用
35	11	2T		Ⅶ	SD136		面子	土器		2.9	2.8	0.4		遺物集中地点、土師器皿転用
35	12	2T		Ⅶ	SD136		面子	土器		3.6	3.4	0.4		遺物集中地点、土師器皿転用
35	13	3T	2	Ⅲ			面子	磁器		3.9	3.9	1.0		18c末、コンニャク印判菊花文
35	14	3T	3	Ⅳ			面子	磁器		3.0	3.1	0.5		碗口縁部～体部片転用
35	15	3T	8	Ⅰ			泥面子	土器	不明	1.7	1.6	0.4	1.2	にぶい橙色7.5YR7/4
35	16	3T	9	Ⅰ			泥面子	土器	丸に扇	1.5	1.6	0.6	1.3	橙色5YR7/6、雲母付着。
35	17	3T	7	焼土層			泥面子	土器	丸に若松	1.6	1.7	0.5	1.3	橙5YR7/8、雲母付着
35	18	3T	10	焼土層			泥面子	土器	丸に花？	1.5	1.6	0.4	1.0	橙色5YR7/8
35	19	3T		焼土層			泥面子	土器	巻物2	1.9	1.9	0.6	2.1	橙色5YR6/6、雲母付着
35	20	3T		焼土層			泥面子	土器	魚2	1.7	1.8	0.4	1.4	橙色5YR6/6、雲母付着
35	21	3T	4	Ⅱ			泥面子	土器	丸に鳥居・窓口	1.5	1.7	0.4	1.1	橙色5YR6/8、雲母付着
35	22	3T	4	Ⅱ			泥面子	土器	蝶	1.8	1.7	0.4	1.3	橙色5YR6/6、雲母付着
35	23	3T	10	Ⅱ			泥面子	土器	銭？	1.7	1.7	0.4	1.4	橙色7.5YR6/6
35	24	3T		Ⅲa	SK13	3	泥面子	土器	丸に田	1.6	1.5	0.4	1.1	にぶい黄褐色10YR7/4、雲母付着
35	25	3T		Ⅲa	SK13	3	泥面子	土器	不明	1.5	1.5	0.4	1.0	黄橙色7.5YR7/8、雲母付着
35	26	3T	3	Ⅲa	SK13	3	泥面子	土器	「千」	1.7	1.7	0.4	1.2	橙色5Y6/8、雲母付着
35	27	3T		Ⅲa	SD32	2	泥面子	土器	棒？	1.6	1.6	0.7	1.5	橙色5Y6/6
35	28	3T	3	Ⅲa			泥面子	土器	魚2	1.8	1.8	0.4	1.4	橙色7.5YR7/6
35	29	3T	2	Ⅲ			泥面子	土器	筍	1.8	1.7	0.5	1.5	橙色7.5YR6/6
35	30	3T	3	Ⅲ			泥面子	土器	瓢箪	1.8	1.8	0.6	1.7	橙色5YR6/6
35	31	3T	3	Ⅲ			泥面子	土器	矢羽	2.0	1.8	0.5	2.2	橙色5YR6/6
35	32	3T	3	Ⅲ			泥面子	土器	「ま」	1.7	1.7	0.4	1.2	橙色5YR6/8
35	33	3T	3	Ⅲ			泥面子	土器	「に」	1.6	1.7	0.4	1.3	橙色5YR6/8、雲母付着
35	34	3T	3	Ⅲ			泥面子	土器	不明	1.5	1.5	0.5	1.4	明赤褐色5YR5/6、雲母付着
35	35	3T	3	Ⅲ			泥面子	土器	松竹梅	1.7	1.6	0.5	1.4	橙色5YR7/8、雲母付着
35	36	3T	4	Ⅲ			泥面子	土器	大黒？	1.6	1.5	0.4	1.0	明赤褐色5YR5/6
35	37	3T	5	Ⅲ			泥面子	土器	車輪？	1.7	1.6	0.4	1.4	橙色5YR6/6、雲母付着
35	38	3T	9	Ⅲ			泥面子	土器	巻物2	1.7	1.7	0.5	1.4	明赤褐色5YR5/6、雲母付着
35	39	3T	3	Ⅲb			泥面子	土器	「た」	1.7	1.7	0.4	1.3	橙色5YR6/6
35	40	3T		排土			泥面子	土器	鳥？	1.9	1.9	0.5	2.2	橙色5YR6/6

図版番号	報告番号	調査区	グリッド	層位	遺構	層位	種別	素材	モチーフ	法量（cm、g） 長さ	幅	厚さ	重量	備考
35	41	5T	5	Ⅲ			泥面子	土器	花・トンボ？	1.7	1.7	0.4	1.4	灰黄褐色10YR4/2
35	42	3T	3	Ⅴ			玉	土器		1.1	1.1	1.0	1.0	橙色5YR6/6
35	43	5T	3	Ⅶ			太型土錘	土器		5.3	3.5	3.3	47.0	漁網用、手づくね、ナデ
35	44	5T	1	Ⅸb			太型土錘	土器		5.6	3.3	3.4	48.0	漁網用、5個一括出土、手づくね、表面剥落
35	45	5T	1	Ⅸb			太型土錘	土器		5.8	3.5	3.5	53.0	漁網用、5個一括出土、手づくね
35	46	5T	1	Ⅸb			太型土錘	土器		5.9	3.7	3.6	60.0	漁網用、5個一括出土、手づくね、面取り、ナデ、表面剥落
35	47	5T	1	Ⅸb			太型土錘	土器		6.0	3.6	3.5	54.0	漁網用、5個一括出土、手づくね、表面剥落
35	48	5T	1	Ⅸb			太型土錘	土器		6.2	3.4	3.3	50.0	漁網用、5個一括出土、手づくね、ナデ、表面剥落
35	49	3T		Ⅲa	P25		坩堝	土器		口3.7	—	高4.7	—	ガラス質物質全面に付着、ガラス玉の接着剤を溶融する道具か、ガラス玉は18C末以降普及する。手づくね、にぶい黄橙色10YR7/2
35	50	5T	1	Ⅶb			坩堝	土器		口3.6	底0.7	高1.6		手づくね

石製品観察表

図版番号	報告番号	調査区	グリッド	層位	遺構番号		層位	種類	細分	石材	遺存状況	長さ（cm）	幅（cm）	厚さ（cm）	重さ（kg）	被熱	備考
26	1	試掘5T		青砂～Ⅸ				硯	方硯	頁岩	完形	13.5		1.8	0.175		表面に多数の傷あり、裏面に抉り込み
26	2	試掘9T		Ⅱb				砥石		凝灰岩	完形	21.7	7.5	5.0	1.500		側面に平刃鑿跡あり
36	1	2T	3	ⅡS	SD	1	礎石1	礎石	角柱状切石	緑色凝灰岩	一部欠損	53.4	23.9	19.6	36.100		間瀬石
36	2	2T	4	ⅡS	SD	1	礎石2	礎石	角柱状切石	緑色凝灰岩	一部欠損	57.5	23.9	19.5	35.100		間瀬石
36	3	2T	1	Ⅱ	礎石	128		礎石	板状切石？	緑色凝灰岩	破片	25.9	19.7	6.4	4.500		荻野石
36	4	2T	2	Ⅲ	礎石	40	東石	礎石	角柱状切石	緑色凝灰岩	一部欠損	29.0	20.6	10.9	8.800		荻野石
36	5	2T	2	Ⅲ	礎石	40		礎石	角柱状切石	緑色凝灰岩	破片	42.4	16.3	16.0	12.500		荻野石
36	6	2T	1	Ⅲ	SD	14	礎石1（下）	礎石	角柱状切石	緑色凝灰岩	2分割	29.8+	19.5	15.5	10.900		間瀬石
36	7	2T	2	Ⅲ	SD	14	礎石2	礎石	角柱状切石	緑色凝灰岩	完形	65.6	24.3	20.6	45.500		間瀬石
36	8	2T	6	ⅣS	礎石	36		礎石	方形切石	緑色凝灰岩	完形	40.0	37.6	7.7	16.000	あり	荻野石
36	9	2T		ⅣS	礎石	39		礎石	加工石？	花崗岩	表面火はね	68.4	58.5	28.5	約100	あり	草水石？　表面被熱により剥離
37	10	2T	1	Ⅳ	礎石	80	根固め	砥石	自然礫転用	花崗岩	完形	16.3	15.4	6.4	2.000		
37	11	2T	1	Ⅳ	礎石	80	根固め	砥石	自然礫転用	安山岩	完形	17.7	11.3	6.3	1.700		
37	12	2T	1	Ⅳ	礎石	80	根固め	砥石	自然礫転用	花崗岩	完形	13.6	11.4	6.9	1.100		
37	13	2T	1	Ⅳ	礎石	80	根固め	砥石	自然礫転用	閃緑岩	完形	18.1	13.6	9.4	3.100		中央に敲打痕あり
37	14	2T	3	Ⅵ	P	131	礎盤石	不明石製品	円礫	安山岩	表面一部火はね	14.2	15.4	11.9	2.900	あり	
37	15	2T	2	Ⅶ	礎石	116		礎石	亜角礫	凝灰角礫岩	完形	16.1	10.5	6.9	1.900		表面中央に敲打痕
37	16	2T		Ⅶ	SD	136	1	砥石	切石	凝灰岩	完形	20.0	6.3	5.5	1.000		
37	17	2T		Ⅶ	SD	136		碁石	黒碁石	頁岩	完形	2.4	2.0	0.7	0.006		
37	18	2T		Ⅶ	SD	136		碁石	黒碁石	頁岩	完形	2.5	1.9	0.6	0.006		
37	19	2T		Ⅶ	SD	136		碁石	黒碁石	頁岩	完形	2.1	2.1	0.4	0.002		
37	20	2T	5	Ⅶ				石臼	下臼	花崗岩	一部欠損	29.3	28.8	11.2	14.200		臼面八分画
37	21	2T		ⅩⅠ	礎石	160		礎石	扁平円礫	輝石安山岩	完形	39.3	25.4	14.4	17.200		表面に磨痕
37	22	2T		ⅩⅢ	礎石	254		礎石	円礫	花崗岩	一部欠損	25.6	18.7	11.8	7.300		表面に磨痕
37	23	2T		ⅩⅢ	礎石	255		礎石	扁平楕円礫	花崗岩	一部欠損	34.6	17.5	10.1	8.700		表面に磨痕
37	24	2T		ⅩⅢ	礎石	256		礎石	扁平円礫	凝灰岩	一部欠損	24.4	25.9	10.1	8.600		
38	25	2T		ⅩⅢ	礎石	263		礎石	扁平楕円礫	砂岩	完形	36.2	21.9	11.5	12.300		表面に磨痕
38	26	3T	8	Ⅱ	SD	27	礎石1	礎石類	加工石	花崗岩	完形	40.7	25.1	18.6	23.800		草水石？
38	27	3T		Ⅲ	礎石	33		礎石	扁平円礫	輝石閃緑ひん岩	完形	32.5	32.3	18.1	25.100		表面に磨痕、千種石
38	28	3T	7	Ⅲa中	SK	28		礎石	角柱状切石	緑色凝灰岩	完形	90.5	17.3	14.2	35.000		荻野石
38	29	3T	7	Ⅲa中	SK	28		礎石類	角柱状切石	緑色凝灰岩	完形	51.1	19.0	14.6	23.500		荻野石
38	30	3T		Ⅲa中	SK	30		礎石類	角柱状切石	緑色凝灰岩	破片	16.1	10.9	5.6	0.929		荻野石
38	31	3T		Ⅳ上面	礎石	64		礎石	加工石	花崗岩	完形	39.1	23.9	17.4	11.100		草水石？表面中央に磨痕
38	32	3T	4	Ⅳ	礎石	56		礎石	円礫	凝灰岩	完形	29.8	21.9	15.5	11.300		表面に磨痕
39	33	3T	4	Ⅳ				硯	方形	粘板岩	一部欠損	7.7	3.5	0.6	0.290		
39	34	3T	4	Ⅳ				火打石		玉髄	破片	3.1	2.1	0.9	0.040		
39	35	3T		Ⅴ上面	SD	79	3	砥石	自然礫転用	花崗岩	完形	18.2	12.1	7.7	2.500		表面に磨痕
39	36	3T	6	Ⅴ	礎石	108		礎石	亜角礫	凝灰岩	一部欠損	24.3	29.6	15.5	15.100		
39	37	3T	8	Ⅴ				碁石	白碁石	凝灰岩	完形	2.0	1.8	0.7	3.000		表面風化、自然石の転用？
39	38	3T	2・4	Ⅵ	SK	120	サブトレンチ	磨石		軽石	完形	4.9	4.3	3.2	0.020		
39	39	3T		Ⅵ	P	125	1	火打石		玉髄	一部欠損	7.3	7.9	4.1	0.233		
39	40	3T		Ⅵ	P	126		碁石	黒碁石	頁岩	完形	2.2	2.1	0.4	0.003		
39	41	3T		Ⅶ	P	140		碁石	黒碁石	頁岩	完形	2.1	2.1	0.3	0.002		
39	42	5T	5	Ⅱ～Ⅳ	SD	224	1	石鉢	方形	凝灰岩	破片	15.8	22.5	13.9	1.600		
39	43	5T	5	Ⅴ				刻線痕のある礫		凝灰岩	完形	20.4	11.8	5.7	1.100		
39	44	5T	6	Ⅸb	礎石	206		礎石	円礫	凝灰岩	完形	25.5	22.2	16.0	11.900		表面に磨痕
39	45	5T		Ⅸb	P	239		礎石	扁平円礫	凝灰岩	完形	27.3	16.2	9.1	5.600		表面に磨痕
39	46	5T	6	ⅩⅠ	SK	221	2	磨石		軽石	完形	9.3	7.6	3.4	0.105		
39	47	5T	2	ⅩⅡ	礎石	244		礎石	亜角礫	凝灰岩	完形	23.3	20.9	12.9	6.200		

木製品観察表

実測番号は樹種漆器同定No.と同一である。

実測番号	報告番号	実測番号	調査年度	調査区	グリッド	層位	遺構番号		層位	種類	器種	木取り	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	遺存状況	備考
27	1	57	04	3T		Ⅱb				建築材	板材	柾目	スギ	39.2	9.3	1.4	一部欠損	下半部L字状に切り落とし
27	2	61	04	3T		Ⅵ				容器	蓋	流れ柾目	スギ	21.5	31.9	1.3	完形	5か所に木釘痕
27	3	59	04	3T		Ⅵ				容器	蓋?	柾目	スギ	22.3	11.0	1.0	破片	表裏・縁辺面食
27	4	62	04	3T		Ⅵ				容器	蓋?	板目	アカマツ	10.7	10.7	0.7	3分割	中央と両端に計3箇所穿孔
27	5	58	04	3T		Ⅵ				容器	蓋取っ手	柾目	スギ	23.3	1.5	3.1	完形	
27	6	100	04	3T		Ⅵ				建築材	板材	流れ柾目	スギ	61.9	17.6	1.3	縁辺一部欠損	表裏面に墨印
27	7	64	04	4T		Ⅱb～Ⅴ				容器	椀蓋	板目	スギ	15.4	15.8	1.7	完形	縁際に穿孔1箇所あり
27	8	118	04	5T		青修～IX				食器具	漆器椀	椀木取り・板目取り	ブナ属	-	-	2.9	口縁部・高台部欠損	
27	9	65	04	5T		青修～IX				食器具	箸	柾目	ヒノキ科	23.0	0.7	0.7	完形	表裏面横
27	10	119	04	6T		Ⅶ				食器具	漆器鉢	椀木取り・板目取り	ブナ属	-	9.4	3.9	胴部下位～底部のみ、中段で折れ曲がり	
27	11	70	04	6T		IX				容器	椀蓋	流れ柾目	ヒノキ	27.0	9.8	1.6	破片	
27	12	71	04	6T		IX				服飾具	差歯下駄	柾目	モクレン属	22.2	9.2	7.7	破片	表裏に焼印
27	13	76	04	6T		IX				建築材	板材	板目	スギ	34.9	14.6	3.1	破片	
27	14	75	04	6T		埋土				容器	底板?	流れ柾目	スギ	18.2	11.2	1.6	破片	
27	15	73	04	6T		排土一括				容器	柾	柾目	ヒノキ	7.8	3.2	3.2	完形	
27	16	74	04	6T		排土一括				容器	柾	柾目	ヒノキ	6.3	2.6	2.3	完形	
27	17	66	04	6T		排土一括上げ				服飾具	差歯下駄	柾目	トチノキ	16.1	8.7	4.1	破片、歯一箇所遺存	黒漆塗り
27	18	72	04	6T		排土一括				その他	加工材	柾目	サワラ	24.1	3.3	2.5	完形	断面L字型
28	19	79	04	7T		Ⅱb				容器	椀蓋	柾目	クリ	51.0	51.0	2.7	破片3点、内2点接合	両端に穿孔あり
28	20	77	04	7T		Ⅱb				容器	蓋	柾目	モクレン属	40.2	17.6	2.1	破片、表裏虫食い著しい	表裏に銭付着、両縁辺付近に切れ込み2箇所あり
28	21	78	04	7T		Ⅱb				建築材	板材	柾目	モクレン属	43.3	14.1	1.2	一部欠損、表裏虫食い著しい	縁際に切れ込み一箇所あり
28	22	2	04	7T						建築材	部材	半割	スギ	188.2	46.5	8.5	完形	2つの板材を接合
28	23	91	04	8T		XII				容器	曲物底板	柾目	モミ属	7.1	7.2	0.4	完形	一箇所樹皮綴り箇所あり
28	24	92	04	8T		XII				容器	曲物底板	柾目	ヒノキ	7.6	7.7	0.4	完形	中央に小穴
28	25	84	04	8T		XII				容器	椀蓋	板目	スギ	36.2	8.3	2.9	完形	表裏と合わせ面に釘穴2箇所ずつあり
28	26	90	04	8T		XII				服飾具	差歯下駄	柾目	モクレン属	21.2	5.9	5.2	半欠	黒漆塗り
28	27	93	04	8T		XII				服飾具	差歯下駄	柾目	ハリギリ	22.0	11.1	5.7	完形	
28	28	89	04	8T		XII				建築材	部材	板目	ヒノキ	10.6	6.2	2.9	完形	一箇所ほぞ作り出し
28	29	83	04	8T		XII				漁労具	たも網	丸木	イヌガヤ	48.0	19.8	1.2	完形	枝材の両端を尖頭形に加工
28	30	80	04	8T		XII				その他	加工材	ミカン割り	アスナロ	27.2	6.8	6.6	完形、2分割	ほぞ穴2箇所、建築部材?
29	31	81	04	8T		XII				その他	加工材	柾目	ヒノキ科	2.0	14.8	1.0	完形	底面に木釘痕3か所あり、蓋の取っ手?
29	32	82	04	8T		XII				その他	加工材	柾目	ヒノキ属	28.9	3.7	1.1	完形	片端を片刃状に加工
29	33	87	04	8T		排土一括				容器	底板?	柾目	スギ	28.8	15.7	1.5	完形	合わせ面に釘穴4箇所
29	34	86	04	8T		排土一括				建築材	板材	柾目	スギ	39.4	1.5	0.3	完形	中央・両端3箇所に穿孔
29	35	94	04	8T		排土一括				建築材	角材	半割	スギ	12.6	14.9	4.6	2分割	角面取り
29	36	85	04	8T		排土一括				建築材	部材	板目	スギ	41.4	5.9	1.4	完形	右側断面状、中央と両端に9箇所釘打ち込み跡あり
29	37	88	04	8T						服飾具	差歯下駄	柾目	ハリギリ	21.3	9.5	5.8	本体一部欠損、歯一部遺存	先端部両端・台端部右側を切断
29	38	120	04	9T		V～Ⅶ				食器具	漆器椀	椀木取り・板目取り	ブナ属	10.4	5.4	6.8	3分割	
29	39	113	04	9T		Ⅶ				建築材	板材	流れ柾目	スギ	99.2	21.0	5.8	完形	5箇所に金具埋め込み
29	40	114	04	9T		Ⅶ				建築材	杭	半割	アスナロ	94.6	13.5	6.9	末端部欠損	先端部片刃状加工
29	41	67	04	9T		青砂				容器	底板?	板目	スギ?	8.0	7.8	1.2	一部欠損	
29	42	124	04	10T						木簡	木簡	柾目	スギ	16.5	3.9	0.4	完形	表裏面全体に墨書
29	43	68	04	11T		V・VI				容器	曲物側板	柾目	ヒノキ科	5.2	12.3	0.6	破片	
29	44	69	04	11T		V・VI				容器	指物	流れ柾目	スギ	20.0	3.9	1.5	破片	2枚の板を木釘でL字型に打ち付け
40	1	1	06	2T	3・4	Ⅱ	SD	1	4	建築材	礎板	板目	スギ	175.0	23.8	5.8	表裏面食著しい	
40	2	3	06	2T	1・2	Ⅲ	SD	14		建築材	礎板	板目	スギ	248.6	33.0	6.4	片端欠損	表側の縁を面取り
40	3	95	06	2T	2	Ⅲ	SD	14	4	建築材	礎板	ミカン割り	ヒノキ	116.2	20.3	11.5	完形	そろばん1
40	4	96	06	2T	2	Ⅲ	SD	14	4	建築材	礎板	ミカン割り	スギ	118.3	19.9	13.2	完形（小破片14点）	そろばん2
40	5	97	06	2T	2	Ⅲ	SD	14	4	建築材	礎板	ミカン割り	ヒノキ属	113.0	19.8	11.5	完形	そろばん3
40	6	99	06	2T		Ⅶ	礎板	197		建築材	礎板	丸木	ヒノキ科	180.7	15.6	11.3	破片2点	表裏に墨多数あり
40	7	4	06	2T		Ⅶ	SD	136	3	木簡	木簡?	柾目	アスナロ	10.7	3.0	0.3	片端欠損（小破片3点）	
40	8	5	06	2T		Ⅶ	SD	136	3	工具	木錐?	丸木	アカマツ	6.3	3.9	3.3	完形	
40	9	108	06	2T	1	Ⅶ	SD	136		建築材	板材	流れ柾目	アスナロ	47.3	9.4	1.0	末端部一部欠損	
40	10	108	06	2T	1	Ⅶ	SD	136		建築材	部材	柾目	アスナロ	57.2	7.6	3.9	一部欠損	末端にほぞ作出
40	11	109	06	2T	1	Ⅶ	SD	136		建築材	部材	柾目	ヒノキ科	73.7	11.1	3.1	一部欠損	両端にほぞ作出
40	12	107	06	2T	1	Ⅶ	SD	136		建築材	部材	柾目	アスナロ	27.4	3.7	3.6	一部欠損	中央にほぞ穴、末端にほぞ作出
41	13	23	06	2T		Ⅶ	SX	196	再	建築材	部材	柾目	アカマツ	28.1	36.4	5.6	破片	表裏に合わせ痕、木口・側面に等間隔で小孔
41	14	28	06	2T		Ⅶ	SX	196	中央	建築材	部材	流れ柾目	マツ属	27.7	37.1	6.4	両端欠損（小破片14点）	表裏にほぞ穴、ほぞ遺存
41	15	24	06	2T		Ⅶ	SX	196	東	建築材	部材	板目	アカマツ	42.5	32.8	5.7	破片	
40	16	20	06	2T		Ⅶ	SX	196	再	建築材	部材	柾目	アカマツ	26.2	15.4	5.9	破片（3点）	表裏に合わせ痕あり

図版番号	報告番号	実測番号	調査年度	調査区	グリッド	層位	遺構番号		部位	種類	器種	木取り	樹種	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	遺存状況	備考
40	17	27	06	2T		Ⅶ	SX	196	西	建築材	部材	柾目		17.2	20.6	6.8	破片	東側
40	18	22	06	2T		Ⅶ	SX	196	東	建築材	部材	板目	アカマツ	19.2	24.3	6.1	破片（小破片10点）	
40	19	30	06	2T		Ⅶ	SX	196	中央	建築材	部材	流れ柾目	アカマツ	17.2	17.3	6.7	破片	表面に長方形釘穴、鋼鉄付着。
40	20	29	06	2T		Ⅶ	SX	196	中央	建築材	部材	流れ柾目	アカマツ	21.8	15.7	5.9	破片	表面に長方形釘穴、鋼鉄付着。
40	21	31	06	2T		Ⅶ	SX	196	東	建築材	部材	柾目	アカマツ	16.9	5.9	5.8	破片	中心に釘貫通跡あり
40	22	25	06	2T		Ⅶ	SX	196	西	建築材	部材	板目	アカマツ	20.3	7.3	5.8	破片	東側
40	23	26	06	2T		Ⅶ	SX	196	西	建築材	部材	板目	アカマツ	14.0	6.3	1.4	破片	東側
40	24	6	06	2T		Ⅶ	P	151	2	建築材	板材	流れ柾目	ヒノキ科	35.0	12.9	1.1	縁辺一部腐食、表面風化	片端に切り込み
41	25	98	06	2T		Ⅹ	SK	153	側板	建築材	板材	板目	ヒノキ科	169.0	11.1	1.5	風化著しい	
41	26	7	06	2T		Ⅺ	P	160	蓋板	建築材	蓋板	流れ柾目	ヒノキ科	22.0	13.2	1.0	2分割、非接合1点	
41	27	8	06	2T		Ⅺ	杭	167		建築材	杭	柾目	ブナ属	17.9	2.7	1.7	片端腐蝕	
41	28	9	06	2T		Ⅺ	杭	168		建築材	杭	柾目	ブナ属	14.6	2.8	2.1	片端腐蝕	
41	29	10	06	2T		Ⅺ	杭	257		建築材	杭	柾目	ブナ属	16.9	3.0	2.4	片端腐蝕	
41	30	32	06	2T		Ⅻ	柱根	200		建築材	柱根	丸木	ヒノキ科	31.3	12.8	10.6	一部欠損	
41	31	31	06	2T		Ⅻ				建築材	角材	丸木	アカマツ	32.6	12.2	13.1	一部欠損	先端部にほぞ穴
41	32	13	06	2T		Ⅻ				建築材	角材	流れ柾目	アスナロ	18.7	4.8	4.2	一部破損、破片5点	中央に金具貫通
41	33	12	06	2T	4	Ⅻ				工具	楔	柾目	アスナロ	5.8	2.1	1.3	完形	
41	34	11	06	2T	4	Ⅻ				その他	棒状木製品	板目	ヒノキ科	17.3	2.0	1.2	完形	
41	35	33	06	2T		ⅩⅢ	柱根	199		建築材	柱根	丸木	ヒノキ科	16.0	11.2	10.5	一部欠損	
41	36	121	06	2T	2	ⅩⅢ				木簡	木簡	板目	スギ	14.9	4.0	0.3	破片	表裏両面に墨書
41	37	14	06	2T	1	ⅩⅢ				食膳具	箸	柾目	アスナロ	20.7	0.6	0.6	先端欠損	
41	38	16	06	2T	4	ⅩⅢ				食膳具	箸	板目	アスナロ	17.4	0.7	0.8	片端欠損	
42	39	15	06	2T	2	ⅩⅢ				建築材	板材	柾目	アスナロ	25.2	8.5	0.5	縁辺一部破損、表面風化	黒漆塗り
42	40	18	06	2T	6	ⅩⅢ				建築材	板材	柾目	アスナロ	14.2	19.0	0.6	破片	表・側面に平刃鑿痕
42	41	19	06	2T		ⅩⅢ				建築材	板材	板目	アスナロ	9.0	11.9	0.6	縁辺・裏面腐食	黒漆塗り
42	42	17	06	2T	4	ⅩⅢ				その他	加工材	板目	アスナロ	20.2	6.8	0.6	破片、風化顕著	中央にコの字型抉り込み
42	43	34	06	3T		Ⅴ	SX	110		建築材	板材	柾目	アカマツ	30.2	14.0	1.5	先端部欠損	釘打ち込み痕2か所あり
42	44	35	06	3T	10	Ⅶ				建築材	板材	柾目	サワラ	15.1	9.3	0.9	先端部破片、真ん中で折損	中央に約1cmの穿孔
42	45	36	06	3T		Ⅷa	SK	157	2	建築材	杭	柾目	ヒノキ科	28.6	4.1	2.7	両端部欠損	先端部断面台形状
42	46	123	06	3T	1	Ⅷ黒砂				木簡	木簡?	柾目	スギ	4.5	3.4	0.2	2分割	
42	47	122	06	3T	1	Ⅷ黒砂				容器	指物蓋	柾目	トネリコ属	22.0	4.1	0.6	破片	縁辺面取り、表面に弁才船?の絵
42	48	37	06	3T		Ⅹ	杭	189		建築材	杭	丸木	マツ属	36.1	5.1	4.8	末端部欠損	先端部3面＋面取り加工、断面方形
42	49	38	06	3T		Ⅹ	杭	190		建築材	杭	柾目	ヒノキ科	23.3	1.7	1.3	表面風化、末端部欠損	先端部6面加工
42	50	50	06	5T	5	Ⅳ	P	201		建築材	杭	柾目	アスナロ	37.0	5.7	4.9	末端部欠損	先端部4面加工、片刃状ほぞ穴2箇所あり、建築部材転用品?
42	51	105	06	5T	2	Ⅳ	SD	224	杭1	建築材	杭	柾目	アスナロ	97.8	11.2	5.3	末端部一部欠損	先端部4面加工、中央にほぞ穴、側面に抉り2箇所、建築部材転用?
42	52	43	06	5T	5	Ⅳ	SD	224	杭4	建築材	杭	柾目	アスナロ	28.8	3.8	2.8	末端部欠損	先端部1面加工、片刃状
42	53	102	06	5T	5	Ⅳ	SD	224	杭10	建築材	杭	丸木	モクレン属	68.9	9.2	8.4	先端部欠損	先端部5面加工
42	54	101	06	5T	3	Ⅳ	SD	224	杭11	建築材	杭	丸木	クリ	56.8	8.5	8.5	完形	先端部6面加工、先端部被熱、表面に樹皮遺存
42	55	111	06	5T	3	Ⅳ	SD	224	杭12	建築材	杭	丸木	モクレン属	99.2	9.4	8.5	末端欠損	末端部筍形に削り出し
42	56	110	06	5T	3	Ⅲ?	SD	224	杭17	建築材	杭	丸木	アスナロ	97.5	8.5	8.3	末端欠損	先端部4面加工、末端ほぞ穴あり
42	57	104	06	5T	5	Ⅳ	SD	224	杭25	建築材	杭	丸木	クリ	73.7	7.0	7.0	末端部欠損	先端部2面加工、片刃状
43	58	103	06	5T	1	Ⅳ	SD	224	杭30	建築材	杭	柾目	ヒノキ	103.4	5.9	6.8	末端部欠損	先端部4面加工
43	59	112	06	5T		Ⅳ	SD	224	杭38	建築材	杭	柾目	ヒノキ科	150.4	5.8	4.9	中央・末端一部欠損	先端部4面加工、2点
43	60	49	06	5T		Ⅳ	SD	224	杭46	建築材	杭	片半割	アスナロ	38.7	11.0	5.4	末端部欠損	ほぞ穴1箇所あり、先端部未加工、建築部材転用品?
43	61	39	06	5T	1	Ⅳ	SD	224	1	食膳具	匙	柾目	アスナロ	21.1	2.7	0.8	完形	柄の末端に穿孔
43	62	40	06	5T	1	Ⅳ	SD	224	1	食膳具	箸	柾目	アスナロ	23.4	0.7	0.7	完形	
43	63	41	06	5T	1	Ⅳ	SD	224	1	食膳具	箸	柾目	アスナロ	25.2	0.7	0.7	完形	
43	64	42	06	5T	5	Ⅳ	SD	224	1	容器	蓋?	柾目	アスナロ	25.8	19.1	1.0	一部欠損、3分割	
43	65	115	06	5T		Ⅴ	SK	202	1	食膳具	漆器椀	横木取り・板目取り	ブナ属	-	-	5.2	口縁〜胴部上位・高台部欠損	
43	66	116	06	5T		Ⅴ	SK	202	1	食膳具	漆器椀	横木取り・板目取り	モクレン属	-	-	6.1	口縁〜胴部上位、高台部欠損、中央に折れ	
43	67	51	06	5T	5	Ⅴ	SK	202	1	容器	結物底板	柾目	スギ	22.3	6.0	1.1	完形	
43	68	52	06	5T	6	Ⅸ				容器	蓋?	柾目	アスナロ	36.0	19.0	1.5	3分割	
43	69	117	06	5T	5	Ⅹa				食膳具	漆器椀	横木取り・板目取り	ブナ属	-	-	3.6	口縁部・高台部欠損	
43	70	44	06	5T	5	Ⅹa-1				食膳具	箸	柾目	スギ	15.3	0.8	0.6	破片、2分割	
43	71	45	06	5T	5	Ⅹa-3				その他	棒状木製品	柾目	スギ	24.0	0.9	0.6	完形	
43	72	46	06	5T	5	Ⅹa-3				その他	棒状木製品	柾目	ヒノキ	8.7	0.6	0.4	先端部破片	
43	73	47	06	5T	6	ⅩⅠ	SK	221	2	建築材	角材	流れ柾目	アスナロ	14.4	3.0	3.6	完形	
43	74	54	06	5T		ⅩⅠ	SK	222	北側板	建築材	板材	柾目	アスナロ	52.5	4.8	0.6	破片	
43	75	55	06	5T		ⅩⅠ	SK	222	南側板	建築材	板材	柾目	アスナロ	43.8	4.9	0.9	片端一部破損	中央に釘穴1箇所
43	76	56	06	5T		ⅩⅠ	SK	222	南側板	建築材	板材	柾目	ヒノキ科	25.3	4.2	0.7	破片	
43	77	53	06	5T		ⅩⅠ	SK	222	西側板	建築材	板材	柾目	アスナロ	44.6	12.4	1.2	両端一部破損	
43	78	48	06	5T	5	ⅩⅠ				食膳具	箸	柾目	ヒノキ	24.6	0.7	0.5	表面風化	先端部尖頭形に削りだし

金属製品観察表

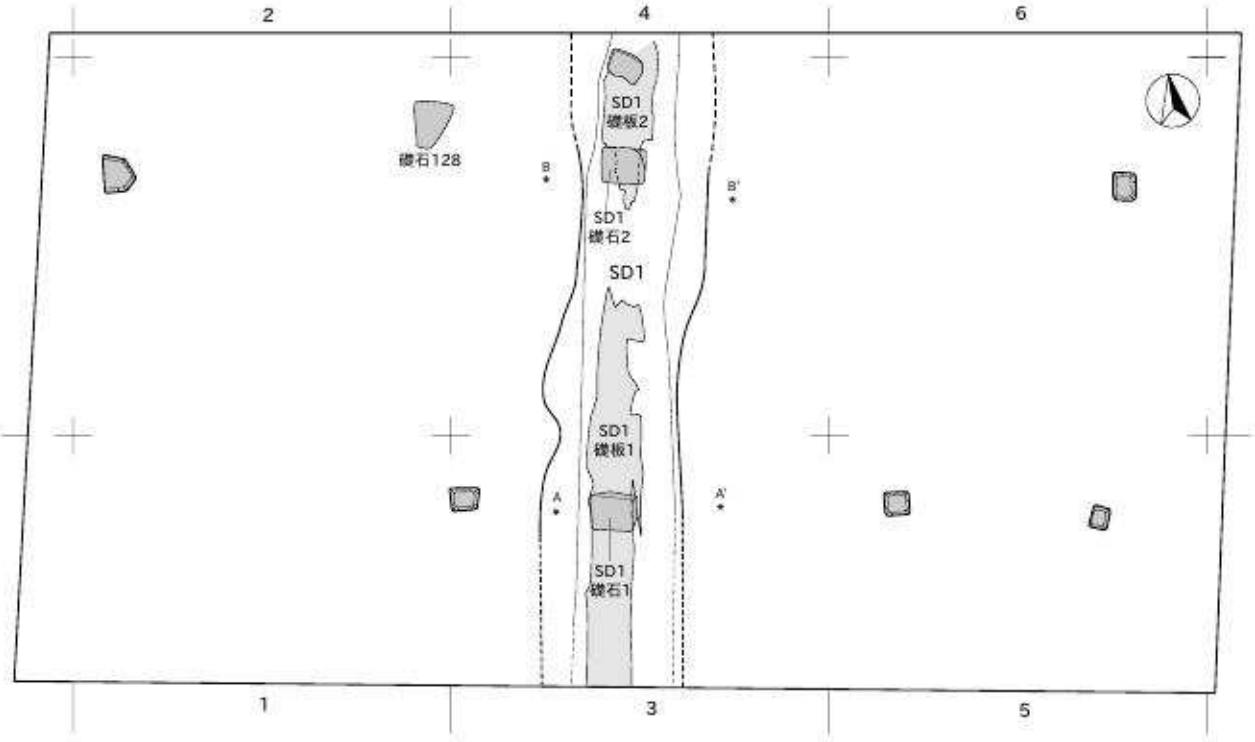
図版番号	報告番号	調査区	グリッド	層位	遺構	層位	種類	素材	法量（cm）				備考
44	1	3T			SK68	2	手鏡	銅	長9.4	幅6.2	厚0.8		鶴亀紋，銘：金剛河内大掾藤原光村，背面に紐通し穴2か所有，組紐痕残存
44	2	5T	3	Ⅳ			小柄	銅	長9.8	幅1.4	厚0.7	重量20.1	刀身欠損，柄残存。
44	3	5T	5	Ⅸa			小柄	銅	長9.7	幅1.4	厚0.5	重量24.3	刀身欠損，柄残存。
44	4	5T		Ⅰ			刃物	鉄	長8.7	幅3.4	厚1.1		
44	5	3T	1	Ⅴ			包丁	鉄	長18.9	幅4.2	厚0.4		木柄欠損。
44	6	2T	5	Ⅲ	P10	1	煙管・雁首	銅	全長3.8	高1.3	火皿外径1.4	小口内径1.0	
44	7	3T		Ⅲa上面	SD15		煙管・雁首	銅	全長―	高（0.9）	火皿外径1.7		
44	8	3T	2	Ⅲ			煙管・雁首	銅	全長2.6	高（2.6）	火皿外径1.3	―	
44	9	3T	4	Ⅲ			煙管・雁首	銅	全長5.4	高2.0	火皿外径1.5	小口内径	
44	10	5T		Ⅺ	SK221		煙管・雁首	銅	全長9.6	高2.3	火皿外径1.4	小口内径0.8	
44	11	3T		Ⅳ	SK73	1	煙管・吸口	銅	全長6.6	高（0.9）	火皿外径―	小口径0.2	中茎有
44	12	3T	1	Ⅳ			煙管・吸口	銅	全長6.3	高0.7	小口内径	吸口内径0.3	
44	13	3T	3	Ⅳ			煙管・吸口	銅	全長6.6	高（0.7）	小口内径	吸口内径0.1	中茎有
44	14	3T	3	Ⅶ			煙管・吸口	銅	全長5.8	高0.8	小口内径	吸口内径0.3	
44	15	3T	4	Ⅷ			煙管・吸口	銅	全長7.8	高さ（0.9）	小口内径	吸口内径0.3	
44	16	5T		Ⅱ－Ⅳ	SD224	1	煙管・吸口	真鍮	全長7.7	高0.8	火皿外径0.8	吸口内径0.3	
44	17	5T	5	Ⅸa			煙管・吸口	真鍮	全長6.1	高さ1.1	火皿外径―	幅1.1	
44	18	2T	3	Ⅲ上面	SK4	1	釘	鉄	長3.3	幅0.3	厚0.3		
44	19	2T		Ⅲ	SD127	―	釘	鉄	長13.6	幅1.6	厚0.7		指物・釘金具，木質部残存
44	20	2T		Ⅲ	SD127	1	釘	鉄	長14.9	幅2.2	厚0.5		指物・釘金具，木質部残存
44	21	2T		Ⅶ	SD136		釘	鉄	長6.1	幅4.4	厚0.6		先端二叉に分かれる。
44	22	2T		Ⅷ	SK146	1・2	釘	鉄	長7.9	幅1.7	厚0.5		角釘，途中から曲がる。
44	23	3T		Ⅲa	P25	1	釘	鉄	長（9.2）	幅1.1	厚0.9		角釘（目釘）
44	24	3T		Ⅳ上面	SD48	1	釘	鉄	長7.5	幅1.0	厚0.8		折釘
44	25	5T	6	Ⅸ			釘	鉄	長7.5	幅1.0	厚0.6		角釘（目釘）
44	26	3T	6	Ⅸ			鋲	銅	長12.4	幅0.8	厚0.1		1枚板加工
44	27	5T			SK202	1	鋲	銅	長4.7	幅1.2	厚0.5		1枚板加工
44	28	3T	2	Ⅷ			火箸	鉄	長18.2	幅1.2	厚0.8		
44	29	5T			SD224	1	工具？	鉄					三角形の柄が入る。
44	30	3T		Ⅶ上面	P156	2	輪金具	鉄	長6.7	幅2.8	厚1.6		切り込み1か所有。
44	31	5T	3	Ⅳ			分銅	銅	長3.4	幅1.6	厚1.6	重量61.78	表：方形枠に文字？有，右側面：蔵形分銅模様有，紐欠損，17匁目。
44	32	2T	4	Ⅻ			円盤	銀？	長2.4	幅2.0	厚0.3	重量9.66	周縁キザミ
44	33	2T		Ⅶ	SD136		円盤	鉛？	長2.2	幅2.1	厚0.4	重量10.0	

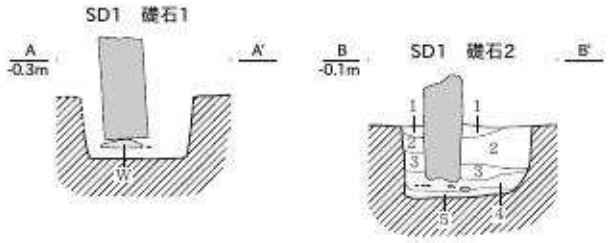
銭貨観察表

図版番号	報告番号	調査区	グリッド	層位	遺構	層位	種別	素材	法量（mm，g）				備考
									長	幅	厚	重量	
45	34	3T	4	Ⅲb			雁首銭	銅	16.6	16.6	1.9	1.1	
45	35	3T	4	Ⅲb			雁首銭	鉄	21.1	19.5	6.6	4.5	
45	36	3T	3	Ⅴ			雁首銭	銅	19.6	17.7	3.9	3.3	
45	37	3T	4	Ⅵ			雁首銭	銅	18.9	18.9	4.1	2.0	
45	38	3T	1				雁首銭	銅	18.3	15.5	2.3	2.1	
45	39	2T	6	ⅡS			銭貨	鉄	30.7	28.3	3.5	5.4	錆顕著，寛永通寶か？
45	40	2T	1	Ⅱ			銭貨	銅	25.4	25.4	1.2	3.6	2期新・寛永通寶「文銭」
45	41	2T		Ⅲ上面	SK4		銭貨	銅	24.4	24.3	1.3	2.8	新・寛永通寶
45	42	2T		Ⅲ上面	SK23	1	銭貨	銅	24.9	24.9	1.2	3.5	古・寛永通寶
45	43	2T		Ⅲ	SK12	1	銭貨	銅	23.7	23.7	1.4	2.5	新・寛永通寶
45	44	2T	1	Ⅲ			銭貨	銅	25.6	25.6	1.3	3.6	2期新・寛永通寶「文銭」
45	45	2T	2	Ⅲ			銭貨	鉄？	24.9	24.9	1.4	3.5	銭種不明，錆顕著
45	46	2T	6	Ⅳ			銭貨	銅	24.5	24.5	1.5	3.4	古・寛永通寶
45	47	2T	6	Ⅳ			銭貨	銅	24.1	24.1	1.1	2.7	古・寛永通寶
45	48	2T		Ⅷ	SK146	1	銭貨	銅	24.3	24.3	1.5	3.6	古・寛永通寶
45	49	3T		Ⅱ	SK61		銭貨	銅	25.0	24.5	1.4	2.4	古・寛永通寶
45	50	3T		Ⅲa上面	SK13	3	銭貨	銅	24.6	24.7	1.1	2.4	新・寛永通寶
45	51	3T		Ⅲa中	SD31	2	銭貨	銅	25.4	25.4	1.7	3.2	新・寛永通寶
45	52	3T	2	Ⅲa			銭貨	銅	24.4	24.5	1.3	3.1	古・寛永通寶
45	53	3T	2	Ⅲb			銭貨	銅	23.3	23.2	1.2	2.8	新・寛永通寶
45	54	3T	2	Ⅳ			銭貨	銅	25.1	25.1	1.1	2.2	2期新・寛永通寶「文銭」
45	55	3T	4	Ⅳ			銭貨	銅	24.5	24.5	1.3	3.3	「至道元寶」行書，北宋995年初鋳。
45	56	3T		Ⅴ上面	SD79		銭貨	銅	25.1	25.1	1.0	2.7	2期新・寛永通寶「文銭」
45	57	3T		Ⅴ上面	P90	2	銭貨	銅	24.1	24.3	1.2	3.3	古・寛永通寶，緑青，錆付着
45	58	3T		Ⅴ	SK95	3	銭貨	銅	24.7	24.6	1.2	3.1	古・寛永通寶
45	59	3T		Ⅴ	SX110	1	銭貨	銅	24.2	24.2	1.2	3.1	古・寛永通寶
45	60	3T	2	Ⅴ			銭貨	銅	25.6	28.0	5.0	12.9	寛永通寶4枚銹着
45	61	3T		Ⅵ	SK119	1	銭貨	銅	25.4	25.6	1.4	3.3	2期新・寛永通寶「文銭」
45	62	3T		Ⅵ	SK120	3	銭貨	銅	23.3	23.0	1.2	2.4	「洪武通寶」明1368年初鋳
45	63	3T		Ⅵ	SK120	3	銭貨	銅	24.8	24.8	1.4	3.5	2期新・寛永通寶「文銭」
45	64	3T		Ⅵ	SK120	3	銭貨	銅	24.3	24.3	1.0	2.5	古・寛永通寶
45	65	3T		Ⅵ	SK120	3	銭貨	銅	23.1	23.1	1.3	3.0	新・寛永通寶
45	66	3T		Ⅵ	SK120	7・8	銭貨	銅	25.1	25.0	1.4	3.8	古・寛永通寶
45	67	3T		Ⅵ	SK120	7・8	銭貨	銅	26.0	26.3	1.5	2.7	古・寛永通寶
45	68	3T		Ⅵ	P118	3	銭貨	銅	22.8	23.0	1.1	2.4	新・寛永通寶
45	69	3T		Ⅵ	P125	1	銭貨	銅	25.0	25.2	1.5	2.2	古・寛永通寶
46	70	3T		Ⅵ	P126	2	銭貨	銅	25.4	25.4	1.2	2.5	2期新・寛永通寶「文銭」
46	71	3T	2	Ⅶ			銭貨	銅	24.7	24.7	1.6	2.7	古・寛永通寶
46	72	3T	3	Ⅶ			銭貨	銅	25.4	25.4	1.2	3.0	寛永通寶「文銭」
46	73	3T	3	Ⅶ			銭貨	銅	25.4	25.5	1.6	3.0	2期新・寛永通寶「文銭」
46	74	3T	4	Ⅶ			銭貨	銅	24.6	24.6	1.5	4.3	古・寛永通寶
46	75	3T		Ⅷ上面	P141	1	銭貨	銅	24.6	24.5	1.4	3.3	古・寛永通寶
46	76	3T		Ⅸ	SK174	2	銭貨	銅	24.1	23.9	0.9	1.9	古・寛永通寶
46	77	3T	4	Ⅹ			銭貨	銅	25.4	25.4	1.2	3.1	古・寛永通寶
46	78	3T		排土			銭貨	真鍮	28.5	28.3	1.3	4.7	寛永通寶四文銭，波銭＝11波，明和6年（1769）初鋳
46	79	5T	5	Ⅱ			銭貨	銅	25.1	24.9	1.5	3.9	古・寛永通寶
46	80	5T	3	Ⅱ・Ⅲ			銭貨	銅	23.7	23.5	1.2	2.7	新・寛永通寶
46	81	5T		Ⅱ－Ⅳ	SD224	1	銭貨	銅	24.7	24.7	1.2	3.7	古・寛永通寶
46	82	5T	5	Ⅸb			銭貨	銅	24.9	24.7	1.0	2.5	「永楽通寶」明1408年初鋳
46	83	5T	1	（Ⅱb）			銭貨	銅	24.0	24.0	1.2	2.5	「淳化元寶」北宋990年初鋳
46	84	5T		不明			銭貨	銅	25.4	25.4	1.1	3.0	2期新・寛永通寶「文銭」
46	85	5T		不明			銭貨	銅	25.7	25.9	1.5	3.2	2期新・寛永通寶「文銭」

図　　版

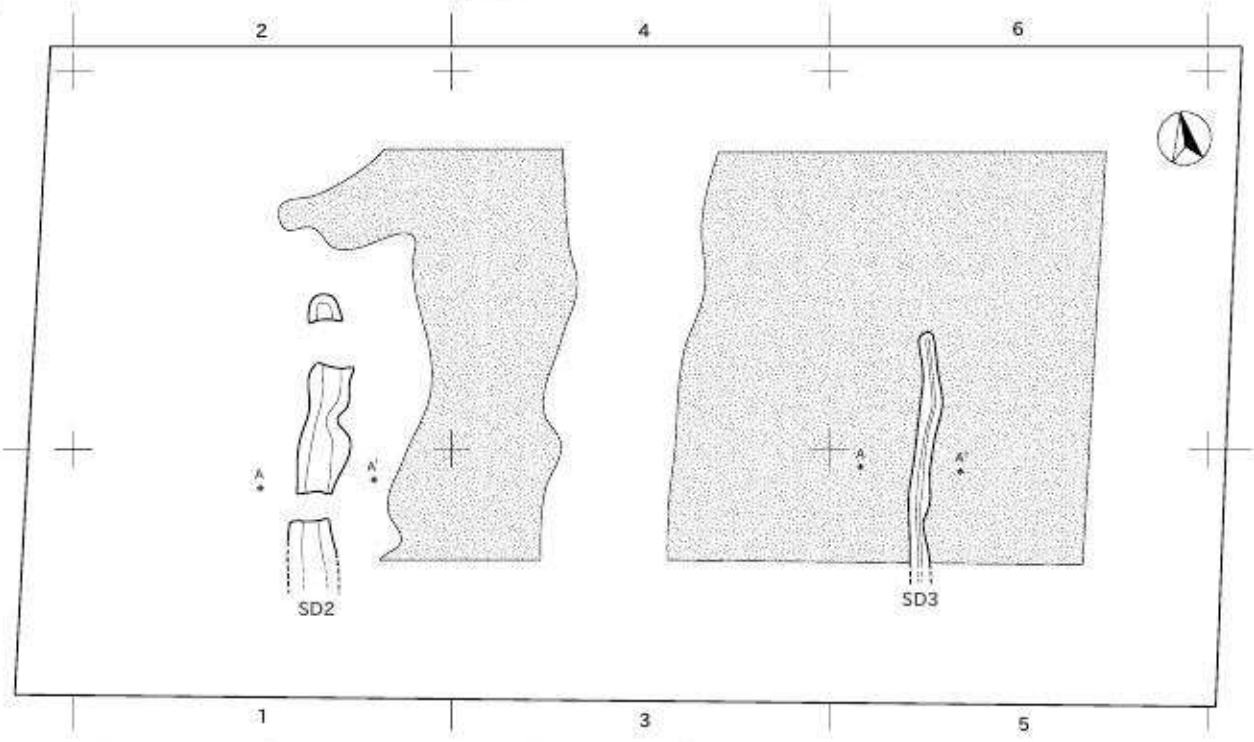
Ⅱ層





SD1
1　にぶい黄褐色土　灰黄褐色粘土ブロック状に少量含む。炭化物・焼土わずかに含む。粘性無、しまり無。
2　1層類似　黄色土ブロック状にわずかに含み、炭化物より多く含む。粘性有、しまり無。
3　灰黄褐色粘土　にぶい黄褐色砂・黒褐色粘土ブロック状に含む。炭化物わずかに含む。粘性有、しまり有。
4　灰黄褐色粘土　炭化物わずかに含む。粘性有、しまり有。
5　砂　粗砂。粘性有、しまり有。

ⅢS層



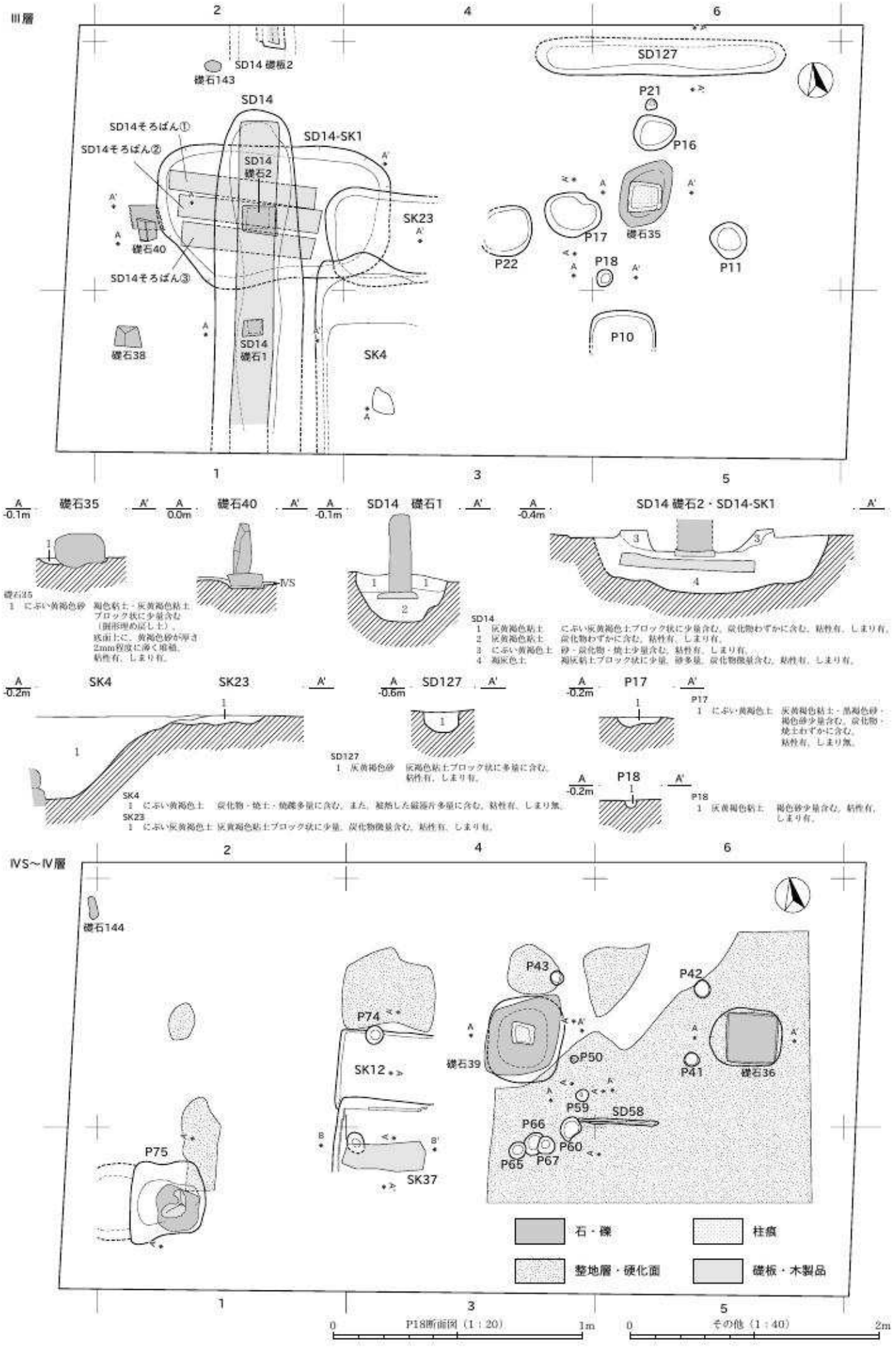
SD2
1　にぶい黄褐色粘土　砂多量含む。炭化物多量、焼土少量含む。粘性有、しまり有。

SD3
1　炭化物　砂含む。焼土少量含む。粘性無、しまり無。

石・礫　　柱痕
整地層・硬化面　　礎板・木製品

0　(1:40)　2m

2T遺構個別実測図（2） Ⅲ・ⅣS・Ⅳ層



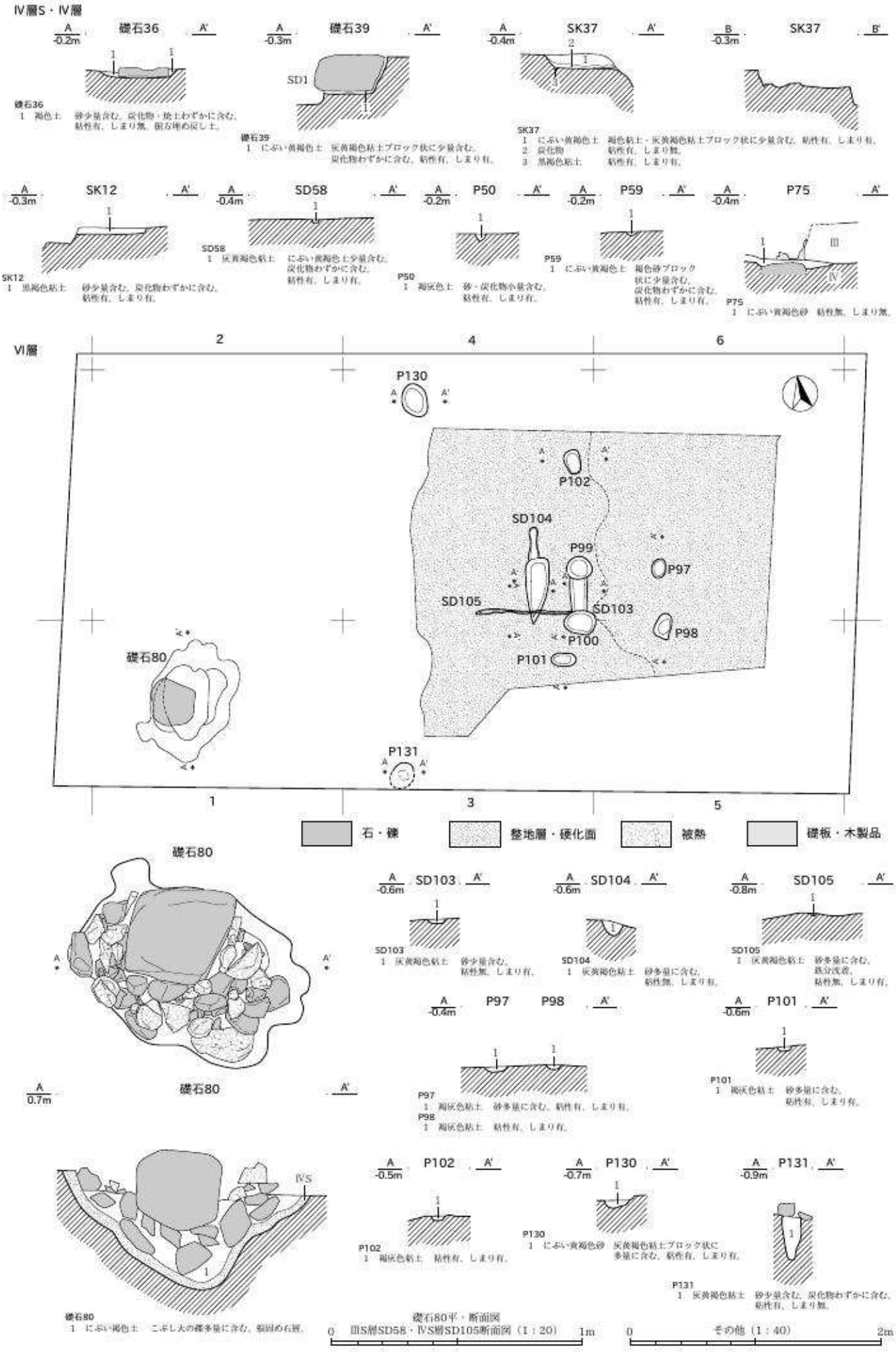
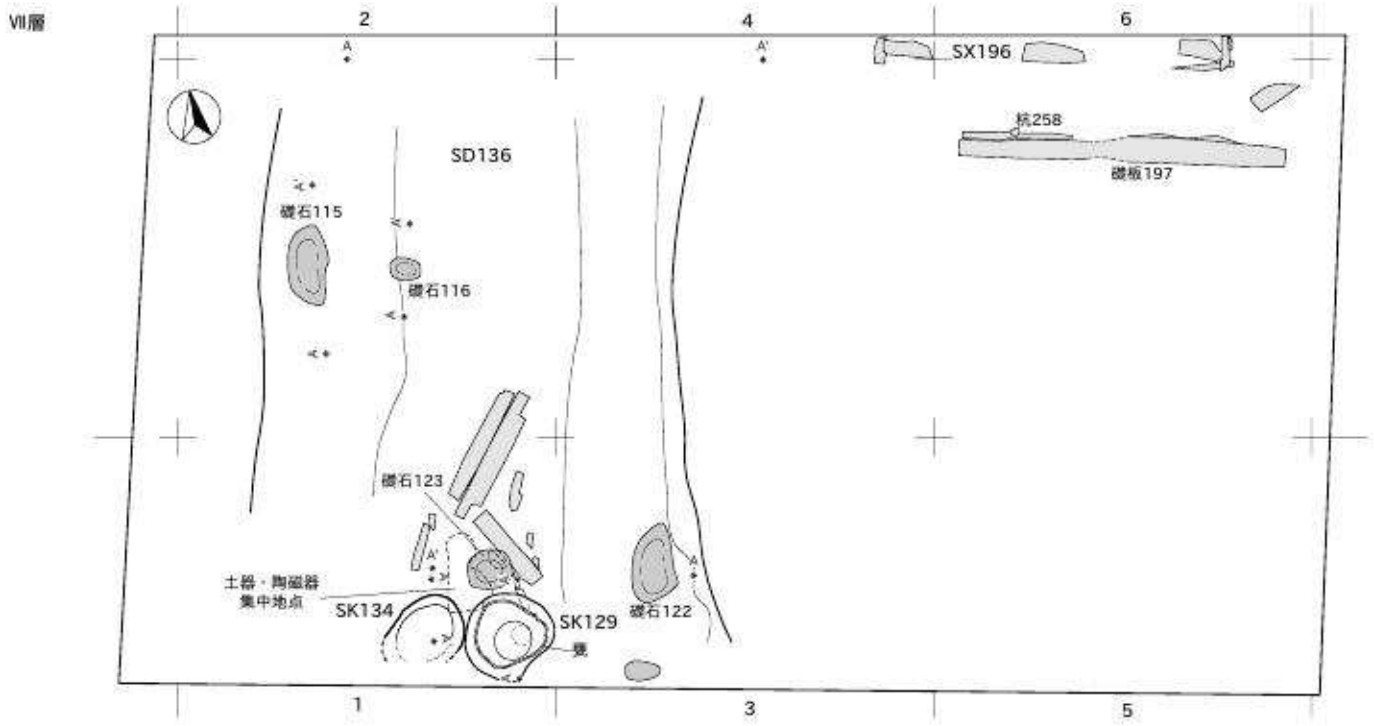
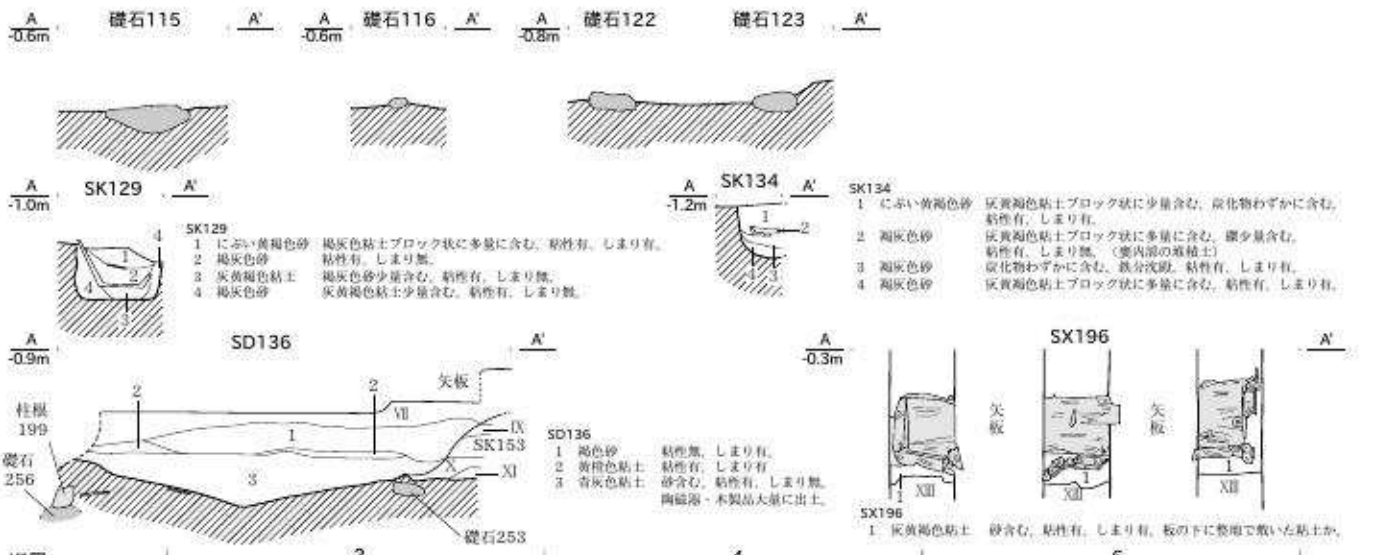
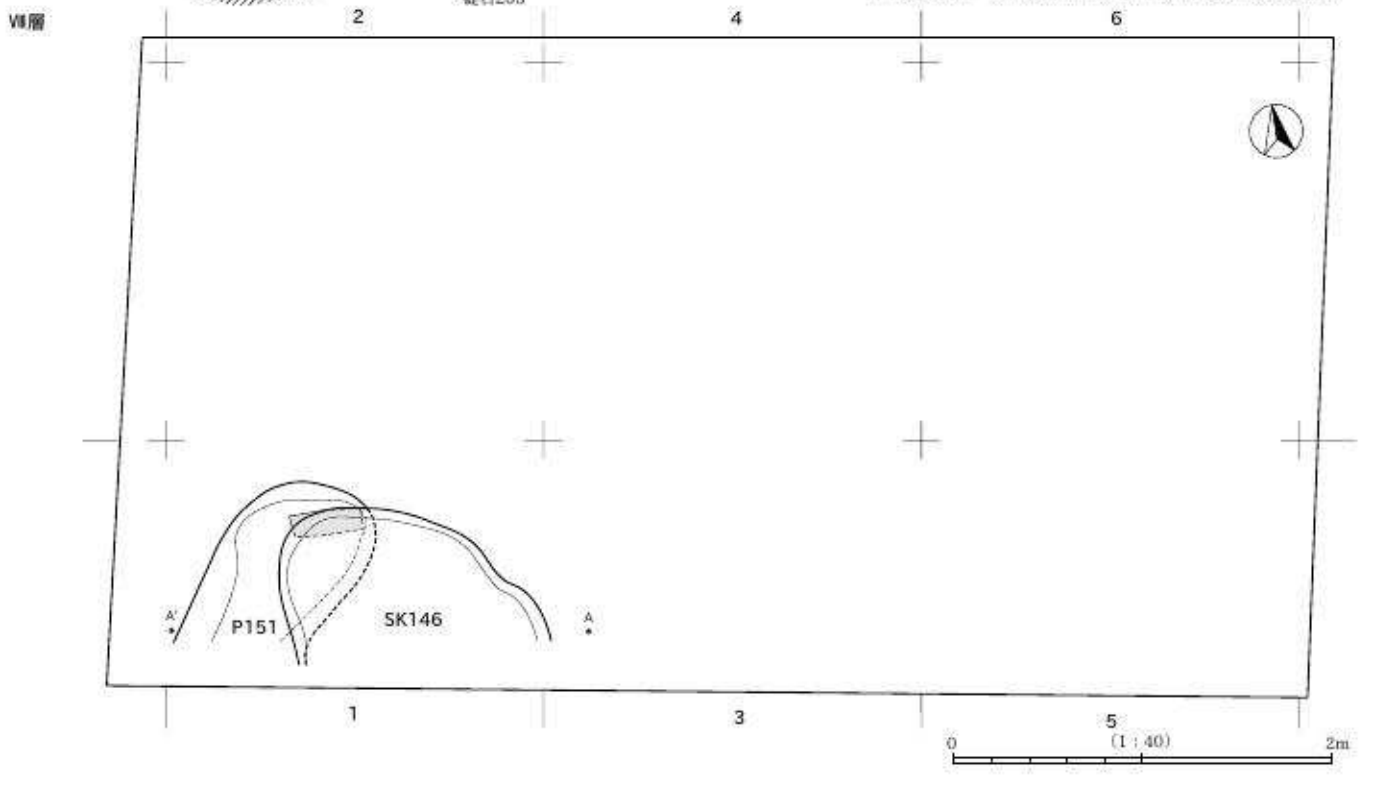

Ⅳ層S・Ⅳ層
礫石36
礫石39
SK37
SK12
SD58
P50
P59
P75
Ⅵ層
P130
P102
SD104
P99
P97
SD105
SD103
P98
P100
P101
礫石80
P131
石・礫
整地層・硬化面
被熱
礫板・木製品
SD103
SD104
SD105
P97
P98
P101
P102
P130
P131
礫石80平・断面図
Ⅲ S層SD58・ⅣS層SD105断面図（1：20）
その他（1：40）

図 版 4

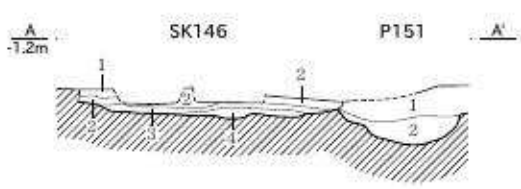
2T遺構個別実測図（4）　Ⅶ・Ⅷ層







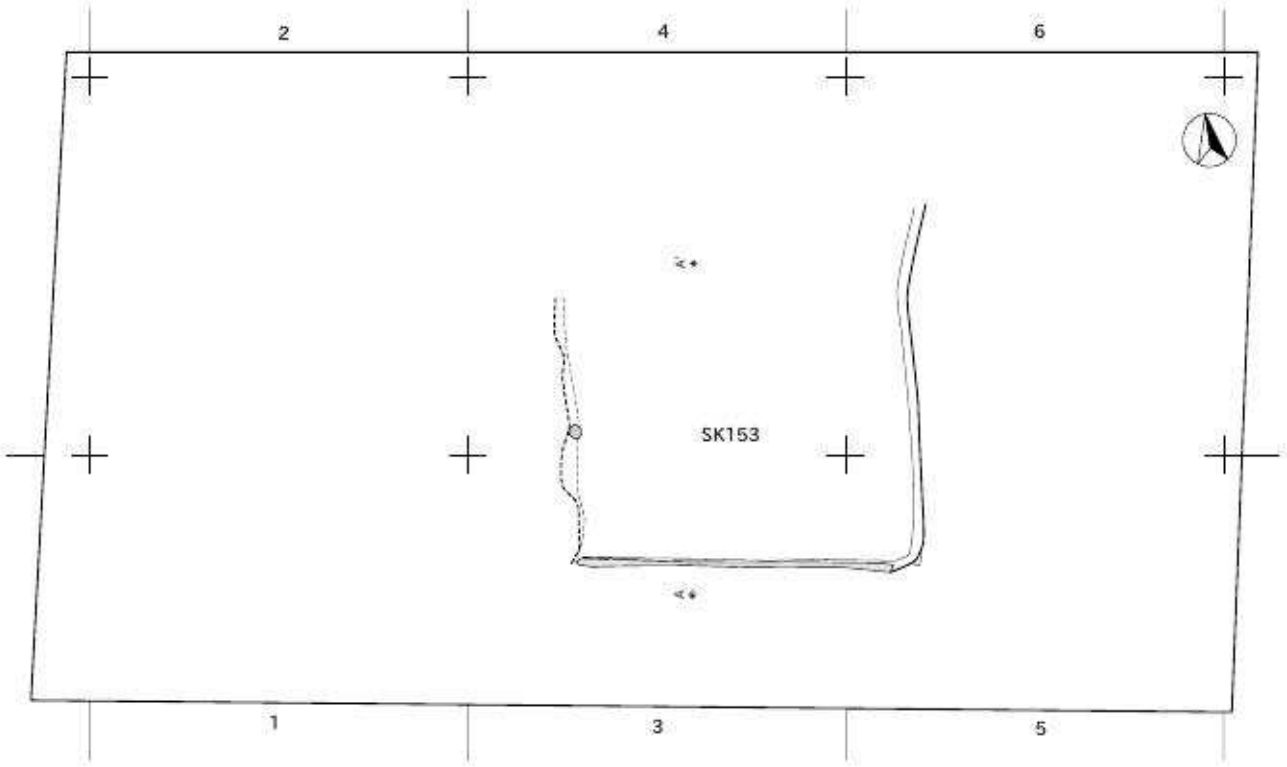
Ⅷ層

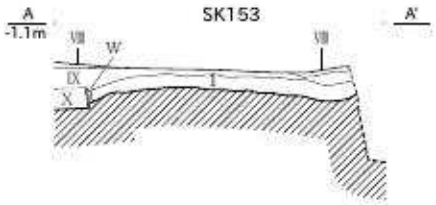


SK146
1　褐灰砂　粘性無、しまり無。
2　褐灰粘土　砂含む、しまり無。
3　褐灰粘土　砂含む、しまり無。
4　黒褐色砂　粘性無、しまり無。

P151
1　褐灰砂　粘性無、しまり有。
2　褐灰砂　粘土ブロック状に少量含む、粘性無、しまり有。

X層

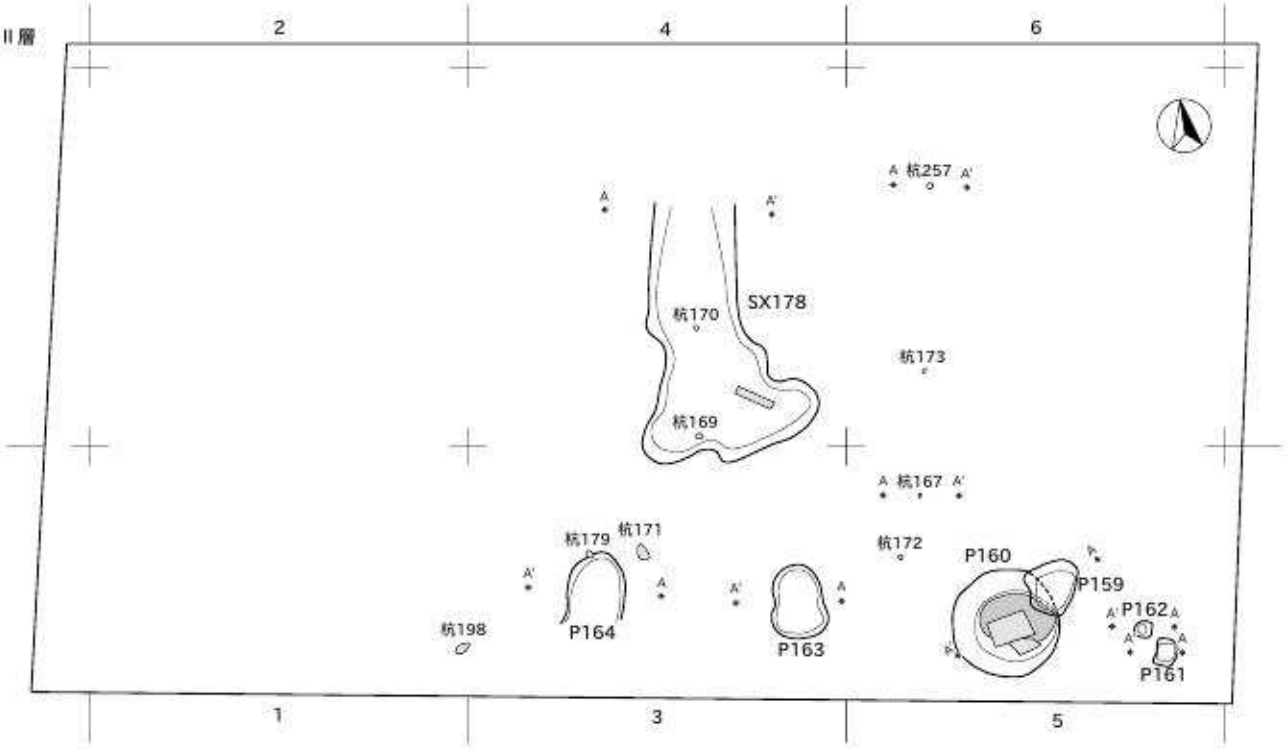




SK153
1　褐灰砂　砂含む、粘性無、しまり有。

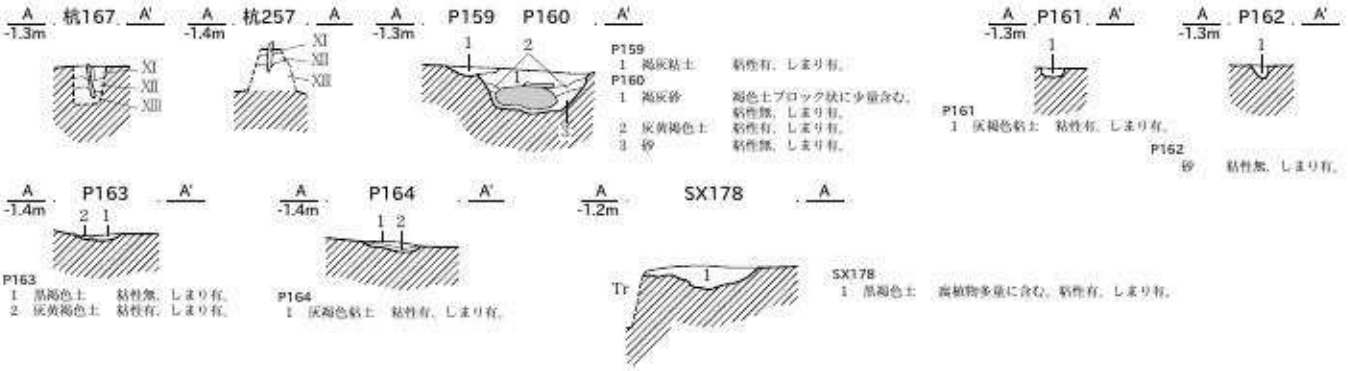
石・礫
礎板・木製品

XI～XII層

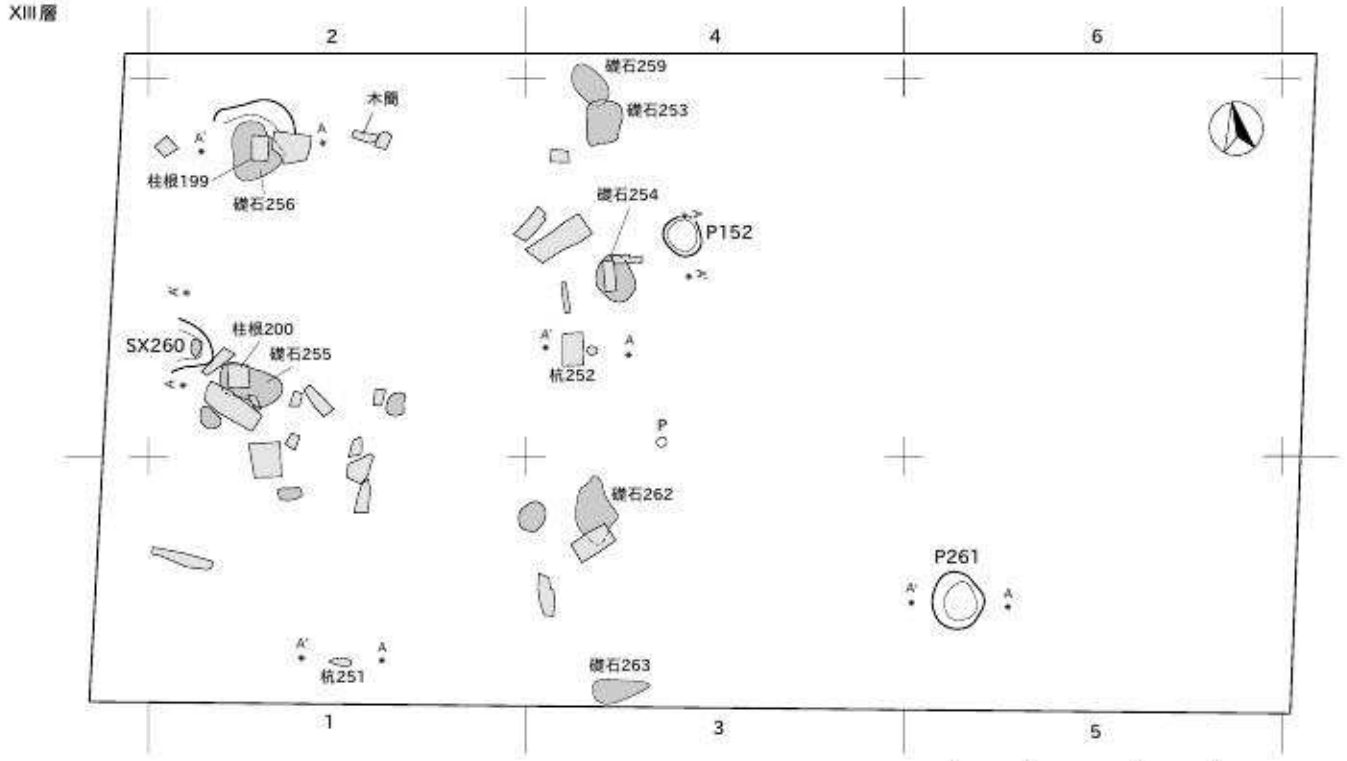


0　(1：40)　2m

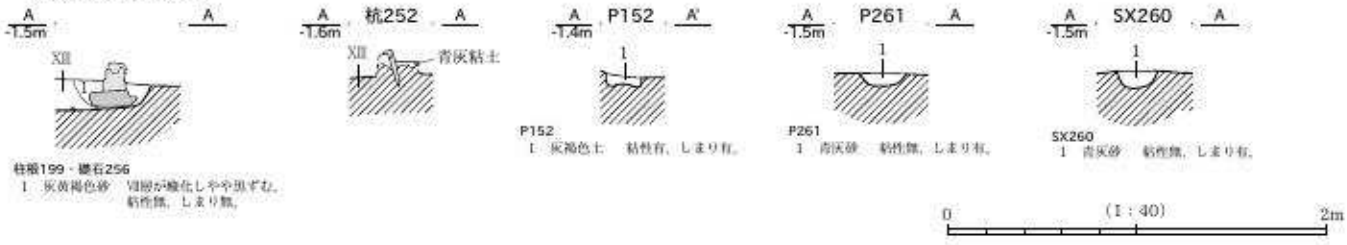
XI・XII層

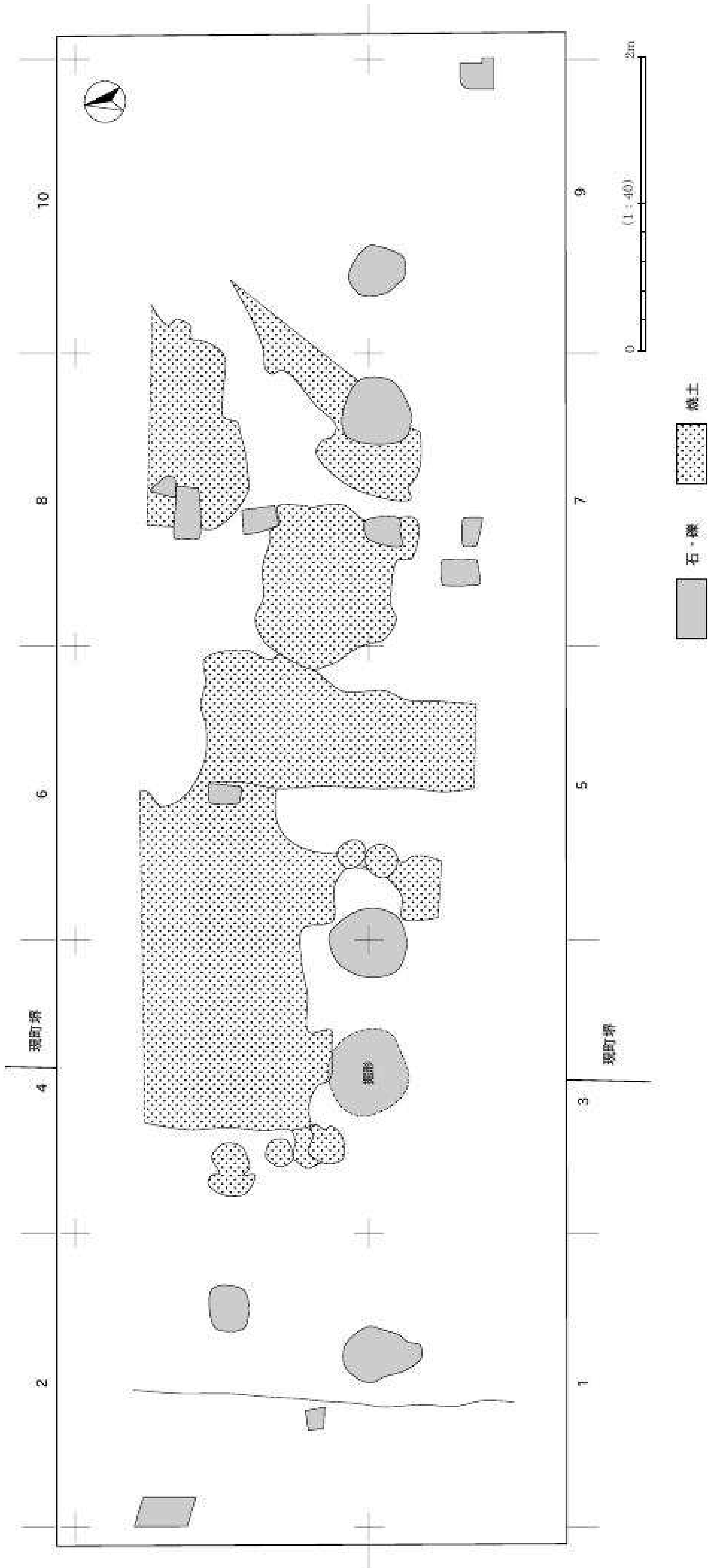


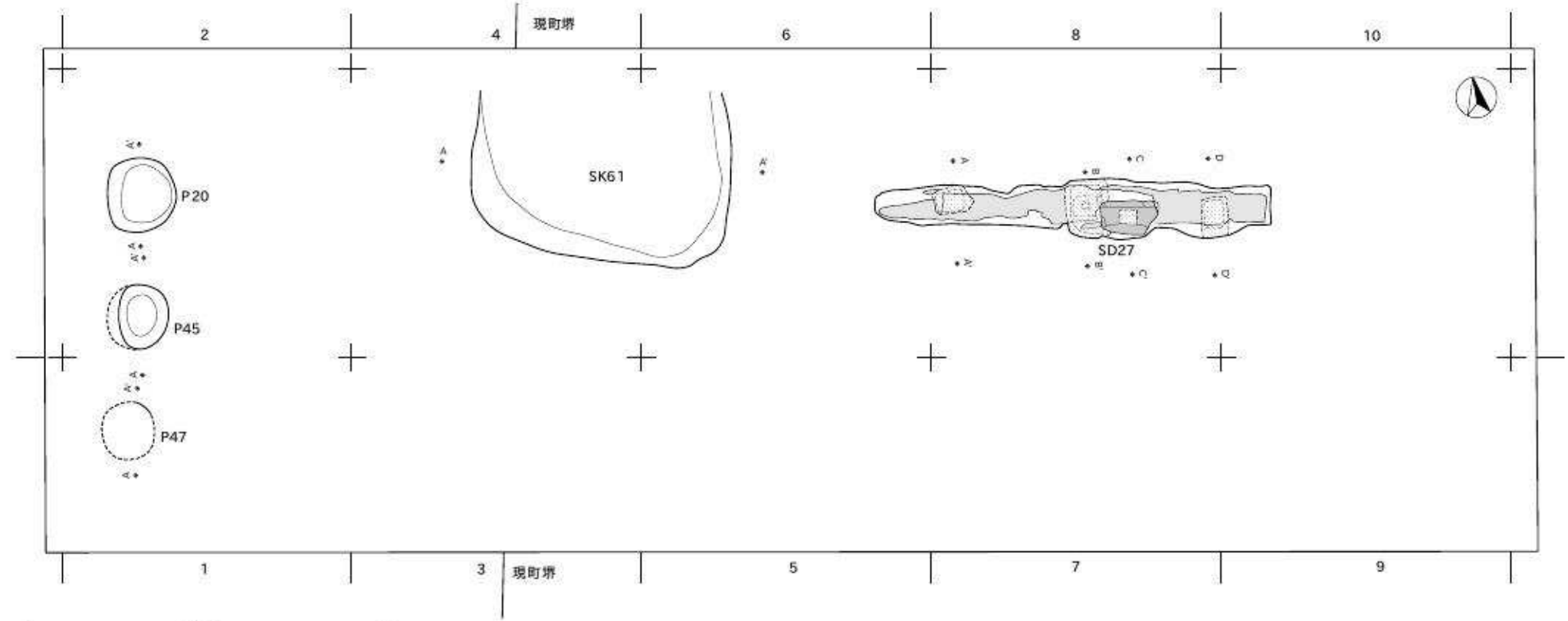
XIII層

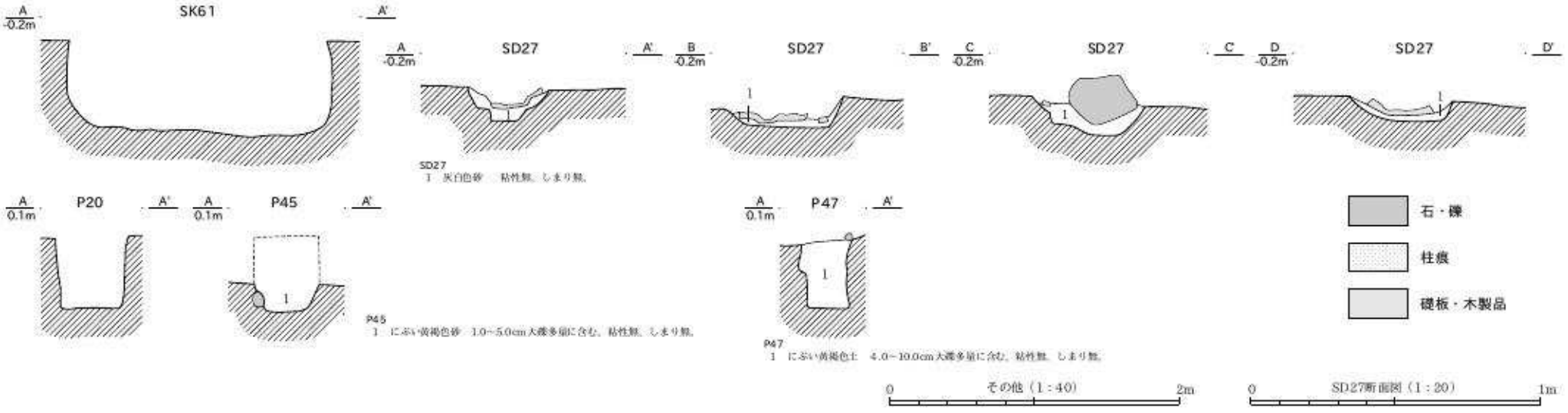


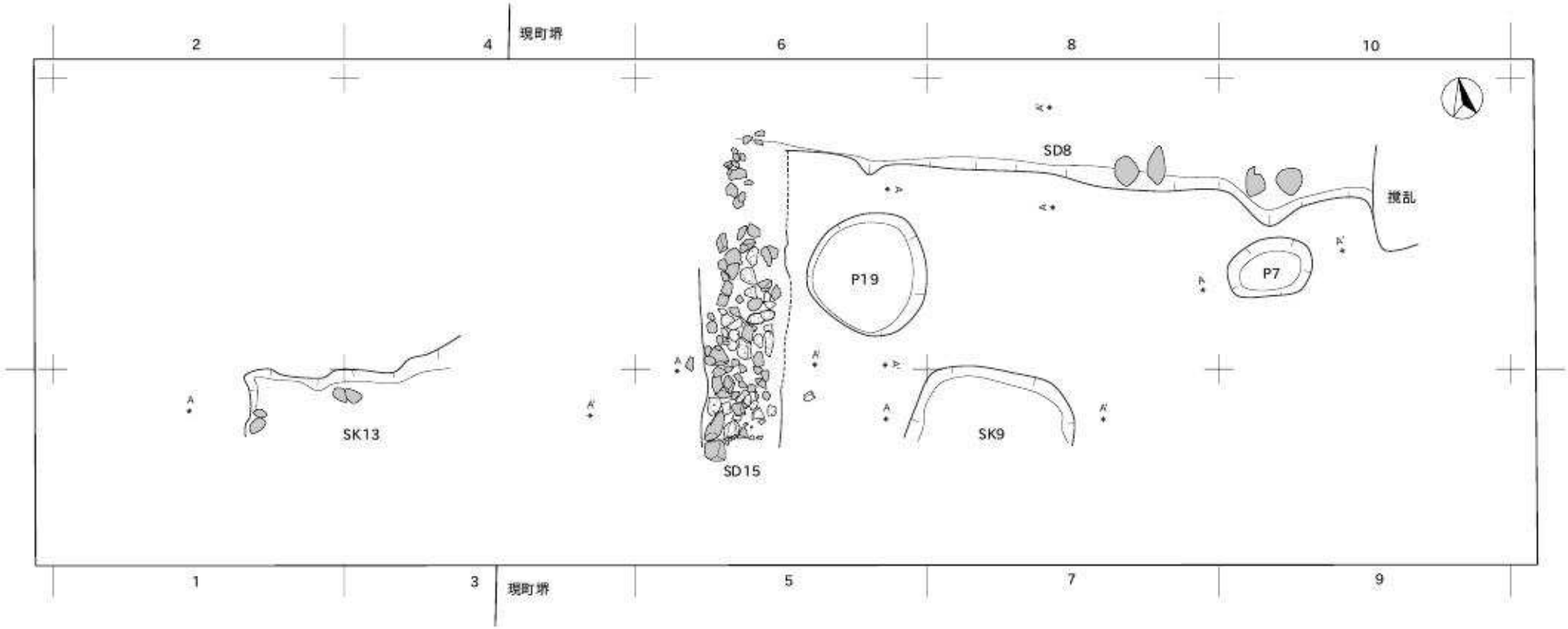
柱根199・礫石256

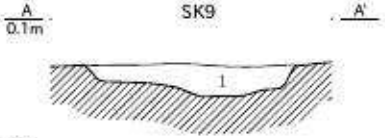



焼土
石・礫
現町界
(1：40)
2m

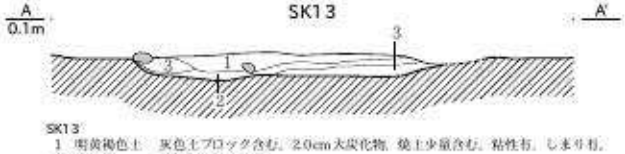

2
4
現町堺
6
8
10
1
3
現町堺
5
7
9
P20
P45
P47
SK61
SD27


SK61
SD27
SD27
SD27
SD27
P20
P45
P47
1 灰白色砂　粘性無、しまり無。
P45
1 にぶい黄褐色砂　1.0～5.0cm大礫多量に含む、粘性無、しまり無。
P47
1 にぶい黄褐色土　4.0～10.0cm大礫多量に含む、粘性無、しまり無。
石・礫
柱痕
礎板・木製品
その他（1：40）
SD27断面図（1：20）



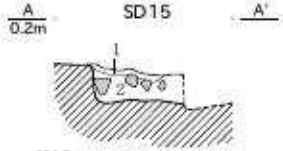


SK9
1　オリーブ灰色土　砂多量に含む、0.5～1.0cm大炭化物少量含む、粘性無、しまり有。

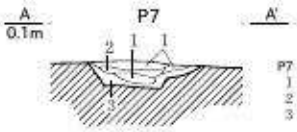


SK13
1　明黄褐色土　灰色土ブロック含む、2.0cm大炭化物、焼土少量含む、粘性有、しまり有。
2　炭化物　粘性無、しまり有。
3　黄褐色土　炭化物多量に含む、粘性有、しまり有。

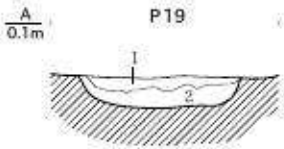
SD8
1　暗黄褐色土　砂、1.0～2.0cm大炭化物多量に含む、粘性無、しまり有。



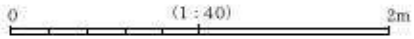
SD15
1　砂　粘性無、しまり有。
2　黄褐色土　粘性有、しまり有。

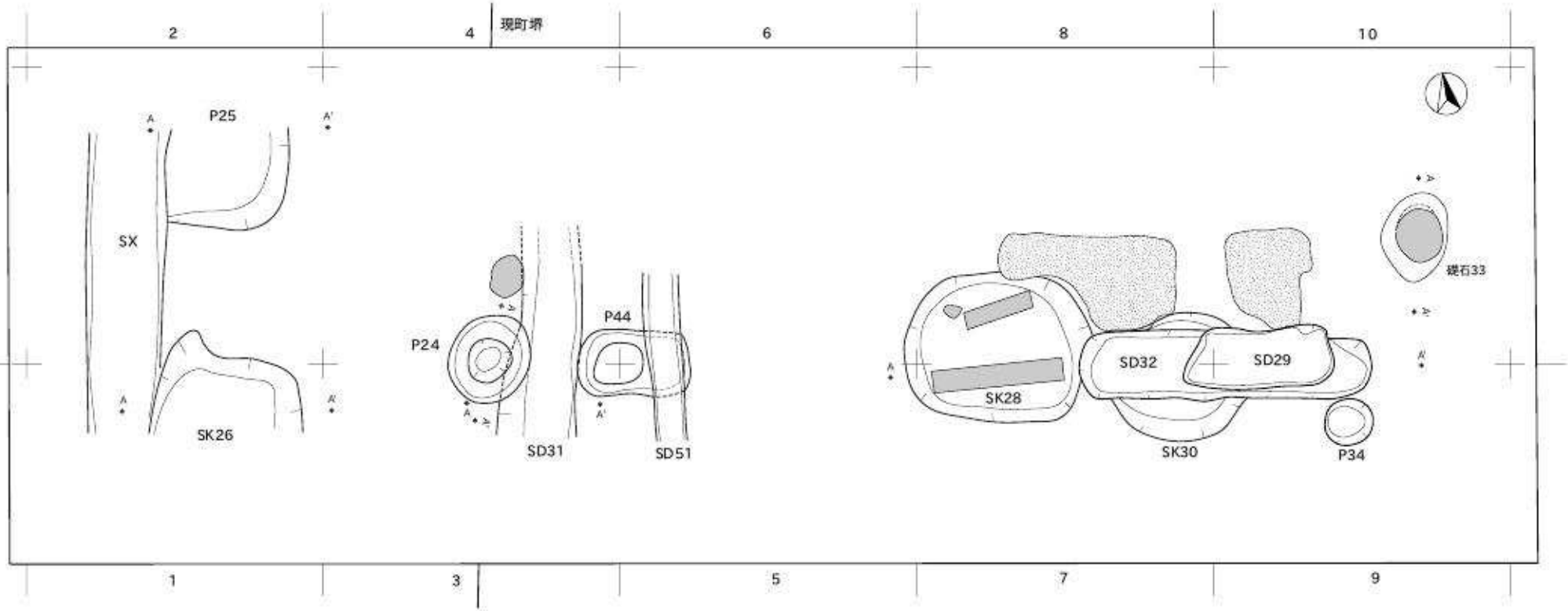


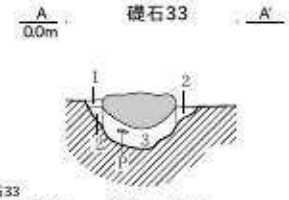
P7
1　にぶい黄褐色土　粘性有、しまり有。
2　褐灰色粗砂　粘性無、しまり有。
3　黒褐色土　1.0cm大炭化物多量に含む、粘性有、しまり無。



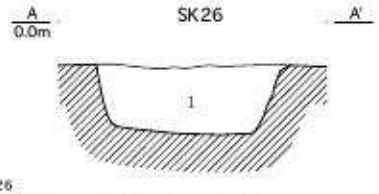
P19
1　灰色土　黄褐色土、0.5～1.0cm大炭化物少量含む、灰褐色土ブロック状に含む、粘性有、しまり有。
2　黄褐色土　粘性有、しまり有。



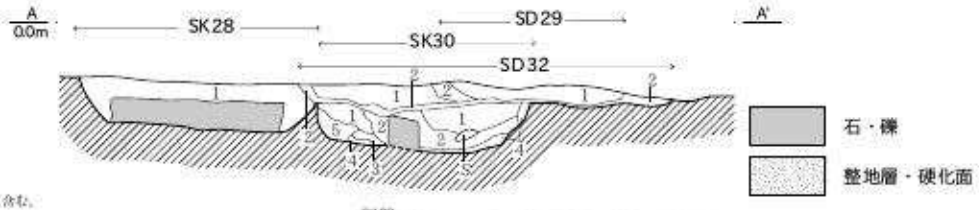




礎石33
1 灰白色砂　粘性無、しまり無。
2 にぶい黄色土　灰色土斑に含む。砂、炭化物少量含む。粘性無、しまり無。
3 暗赤灰色土　砂、焼土斑に含む。粘性無、しまり無。



SK26
1 明黄褐色土　黄褐色粘土ブロック状に含む。1.0～2.0cm大炭化物多量に含む。粘性無、しまり有。

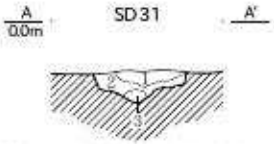


SK28
1 黄灰色土　砂、焼土少量含む。粘性有、しまり有。

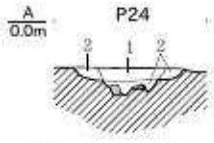
SD29
1 黄褐色土　砂少量含む。粘性有、しまり有。
2 にぶい黄色土　粘性無、しまり有。

SK30
1 にぶい黄色土　灰色土斑に含む。砂、炭化物少量含む。粘性無、しまり無。
2 灰黄色土　砂少量含む。粘性無、しまり無。
3 灰黄色砂　粘性無、しまり無。
4 明赤褐色砂　炭化物、焼土少量含む。粘性無、しまり有。
5 灰黄色土　炭化物、焼土多量含む。粘性有、しまり有。

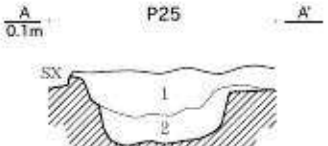
SD32
1 黄褐色土　灰褐色土斑に含む。砂少量含む。粘性無、しまり有。
2 灰褐色土　粘性有、しまり無。



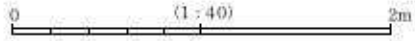
SD31
1 明黄褐色土　炭化物わずかに含む。粘性有、しまり有。
2 黄褐色土　炭化物多量に含む。粘性有、しまり有。
3 明黄褐色粘土　粘性有、しまり有。

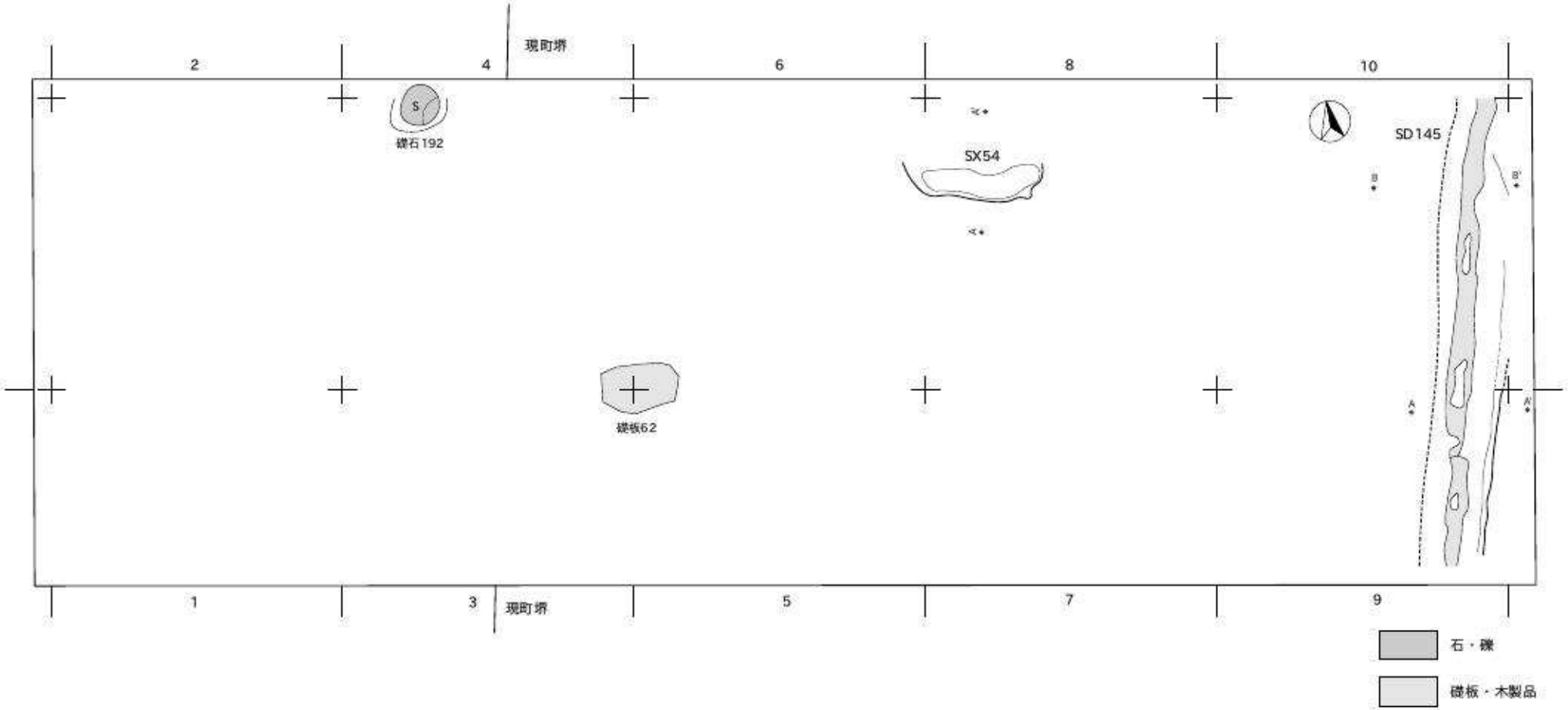


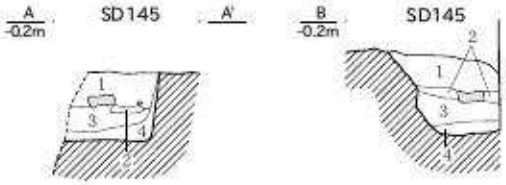
P24
1 灰褐色土　褐色土斑に含む。炭化物含む。粘性有、しまり有。
2 褐色土　炭化物少量含む。

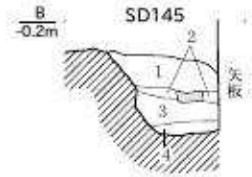


P25
1 にぶい黄褐色土　炭化物・焼土多量に含む。粘性有、しまり有。
2 にぶい黄褐色土　炭化物・焼土少量含む。粘性有、しまり有。

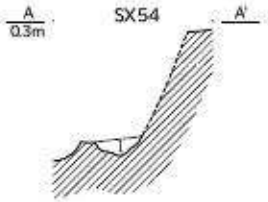






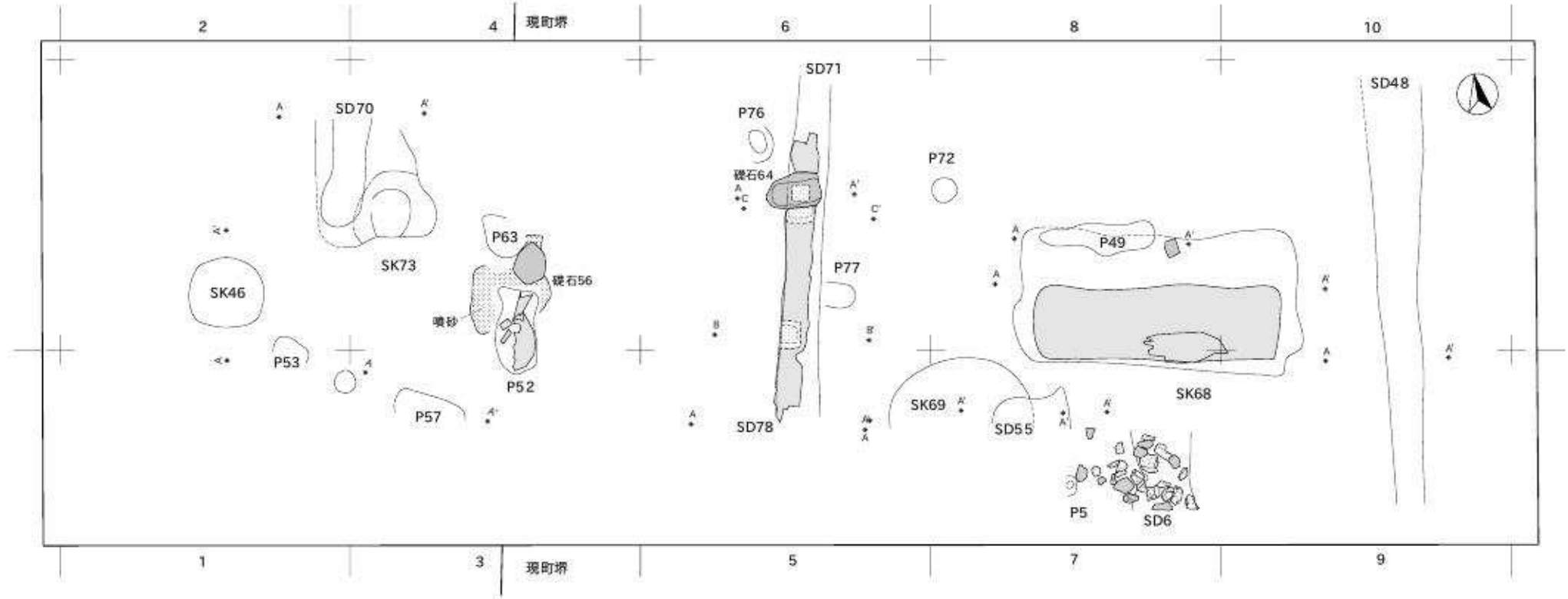


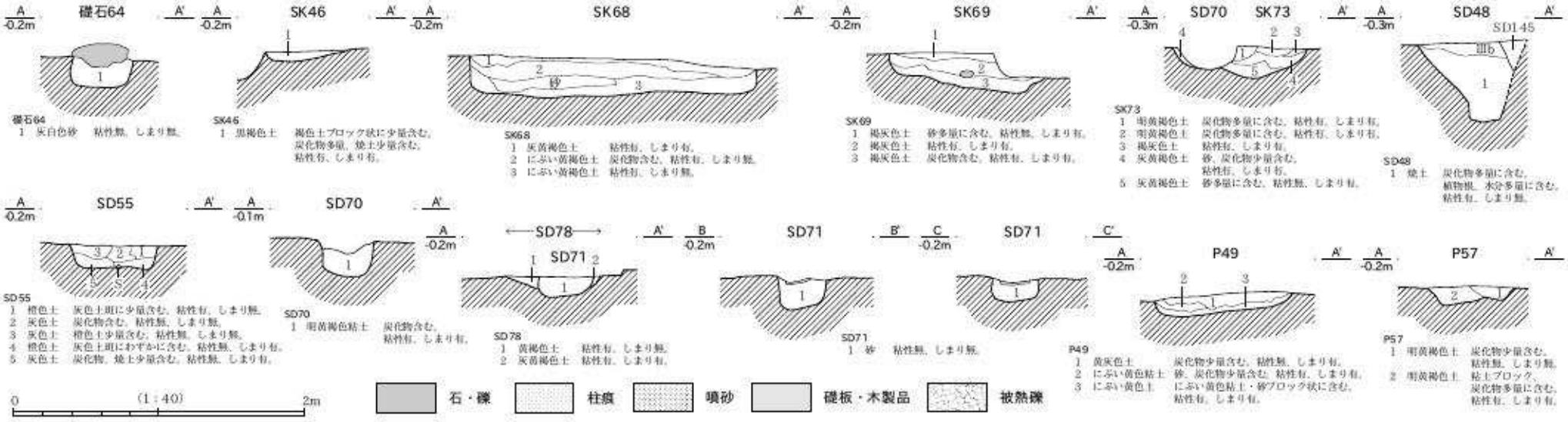
SD145
1 灰白色砂 粘性無、しまり有。
2 褐灰色土 粘性有、しまり有。
3 灰白色砂 粘性無、しまり有。
4 黄褐色土 粘性有、しまり有。



SX54
1 緑灰色粘土 粘性有、しまり有。

0 (1:40) 2m





礎石64
1 灰白色砂　粘性無、しまり無。

SK46
1 黒褐色土　褐色土ブロック状に少量含む、炭化物多量、焼土少量含む、粘性有、しまり有。

SK68
1 灰黄褐色土　粘性有、しまり有。
2 にぶい黄褐色土　炭化物含む、粘性有、しまり無。
3 にぶい黄褐色土　粘性有、しまり無。

SK69
1 褐灰色土　砂多量に含む、粘性無、しまり有。
2 褐灰色土　粘性有、しまり有。
3 褐灰色土　炭化物含む、粘性有、しまり有。

SK73
1 明黄褐色土　炭化物多量に含む、粘性有、しまり有。
2 明黄褐色土　炭化物多量に含む、粘性有、しまり有。
3 褐灰色土　粘性有、しまり有。
4 灰黄褐色土　砂、炭化物少量含む、粘性有、しまり有。
5 灰黄褐色土　砂多量に含む、粘性無、しまり有。

SD48
1 焼土　炭化物多量に含む、植物根、水分多量に含む、粘性有、しまり無。

SD55
1 橙色土　灰色土粗に少量含む、粘性有、しまり無。
2 灰色土　炭化物含む、粘性無、しまり無。
3 灰色土　橙色土少量含む、粘性無、しまり無。
4 橙色土　灰色土粗にわずかに含む、粘性無、しまり無。
5 灰色土　炭化物、焼土少量含む、粘性無、しまり有。

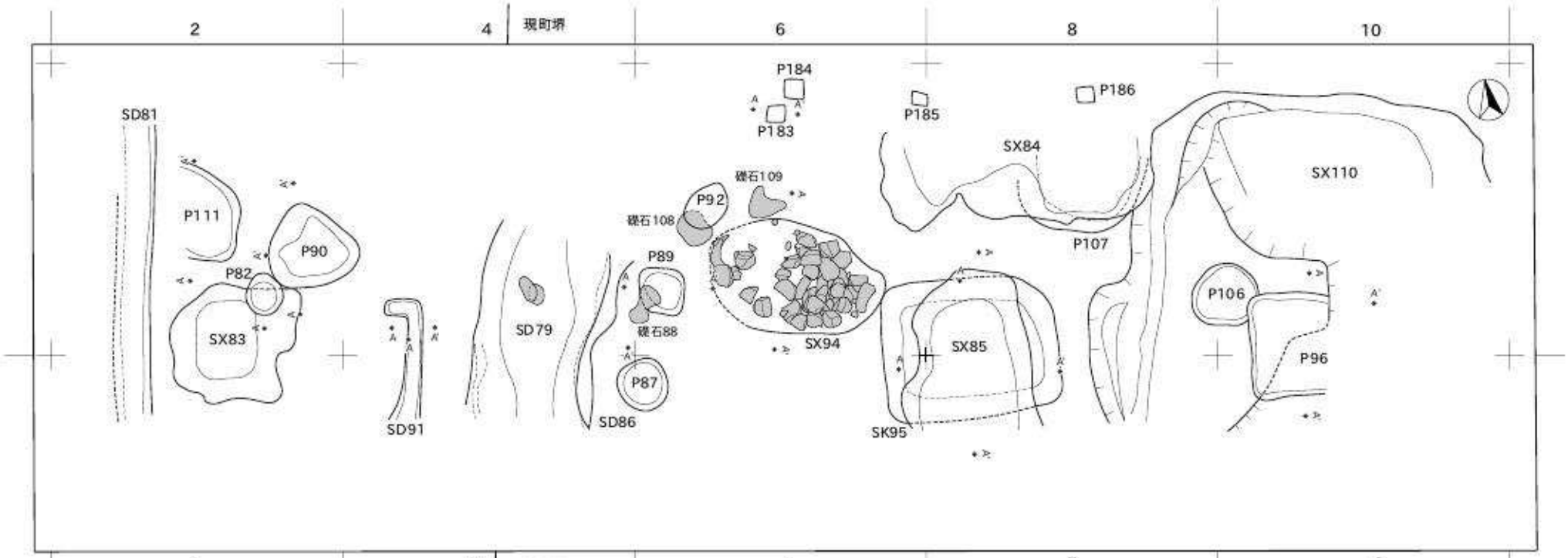
SD70
1 明黄褐色粘土　炭化物含む、粘性有、しまり有。

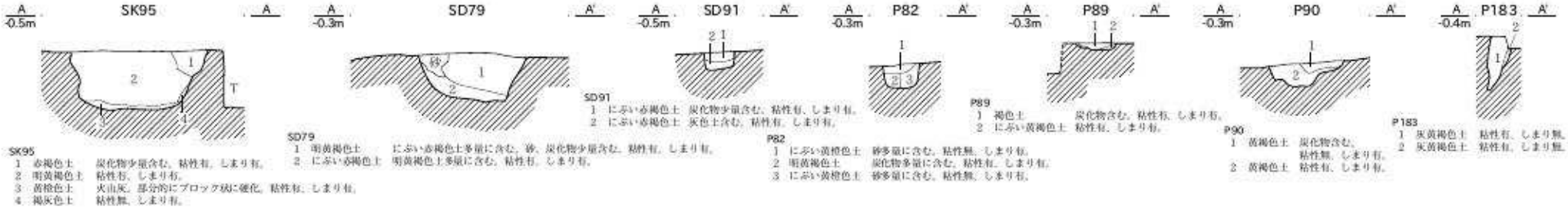
SD78
1 黄褐色土　粘性有、しまり無。
2 灰黄褐色土　粘性有、しまり有。

SD71
1 砂　粘性無、しまり無。

P49
1 黄灰色土　炭化物少量含む、粘性無、しまり有。
2 にぶい黄色粘土　砂、炭化物少量含む、粘性有、しまり有。
3 にぶい黄色土　にぶい黄色粘土・砂ブロック状に含む、粘性有、しまり有。

P57
1 明黄褐色土　炭化物少量含む、粘性無、しまり無。
2 明黄褐色土　粘土ブロック、炭化物多量に含む、粘性有、しまり有。





SK95
1 赤褐色土　炭化物少量含む、粘性有、しまり有。
2 明黄褐色土　粘性有、しまり有。
3 黄橙色土　火山灰、部分的にブロック状に硬化、粘性有、しまり有。
4 褐灰色土　粘性無、しまり有。

SD79
1 明黄褐色土　にぶい赤褐色土多量に含む、砂、炭化物少量含む、粘性有、しまり有。
2 にぶい赤褐色土　明黄褐色土多量に含む、粘性有、しまり有。

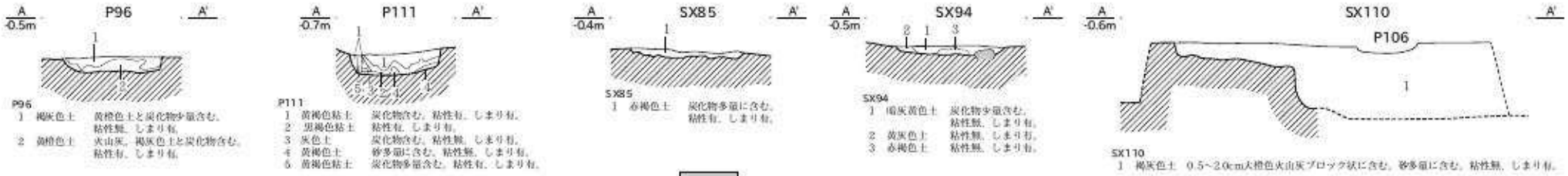
SD91
1 にぶい赤褐色土　炭化物少量含む、粘性有、しまり有。
2 にぶい赤褐色土　灰色土含む、粘性有、しまり有。

P82
1 にぶい黄橙色土　砂多量に含む、粘性無、しまり有。
2 明黄褐色土　炭化物多量に含む、粘性有、しまり有。
3 にぶい黄橙色土　砂多量に含む、粘性無、しまり有。

P89
1 褐色土　炭化物含む、粘性有、しまり有。
2 にぶい黄褐色土　粘性有、しまり有。

P90
1 黄褐色土　炭化物含む、粘性無、しまり有。
2 黄褐色土　粘性有、しまり有。

P183
1 灰黄褐色土　粘性有、しまり無。
2 灰黄褐色土　粘性有、しまり無。



P96
1 褐灰色土　黄橙色土と炭化物少量含む、粘性無、しまり有。
2 黄橙色土　火山灰、褐灰色土と炭化物含む、粘性有、しまり有。

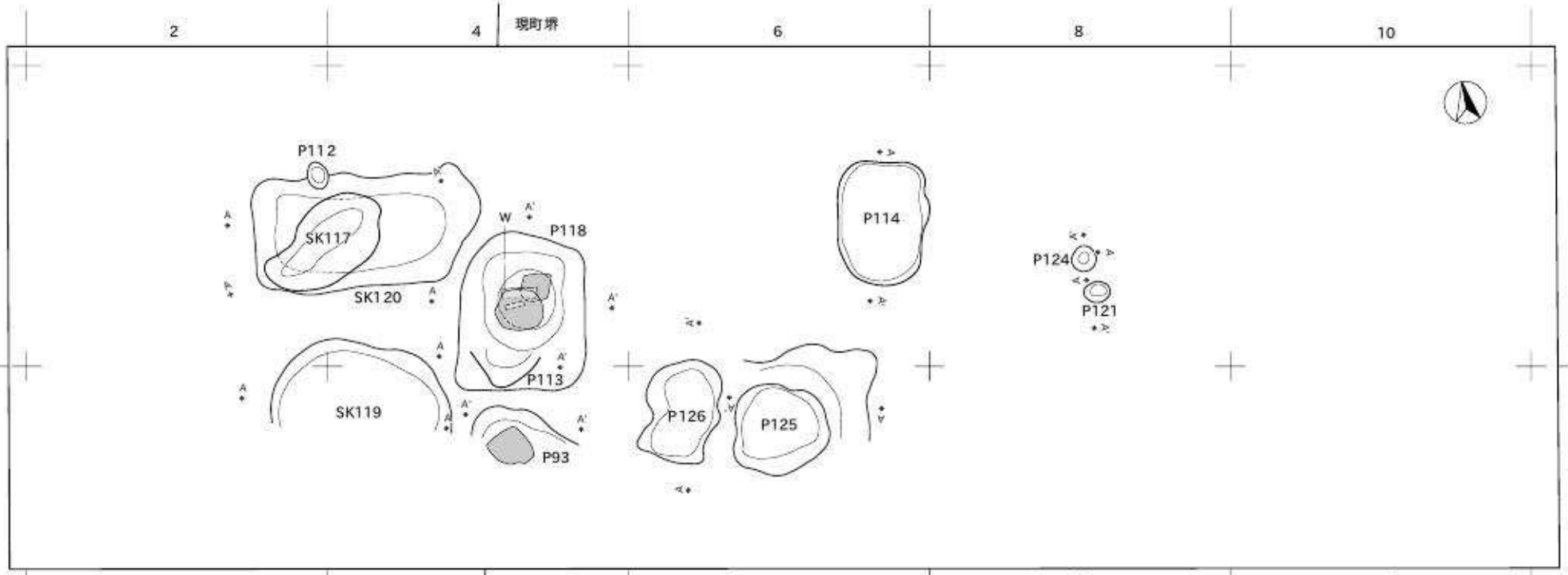
P111
1 黄褐色粘土　炭化物含む、粘性有、しまり有。
2 黒褐色粘土　粘性有、しまり有。
3 灰色土　炭化物含む、粘性無、しまり有。
4 黄褐色土　砂多量に含む、粘性無、しまり有。
5 黄褐色粘土　炭化物多量含む、粘性有、しまり有。

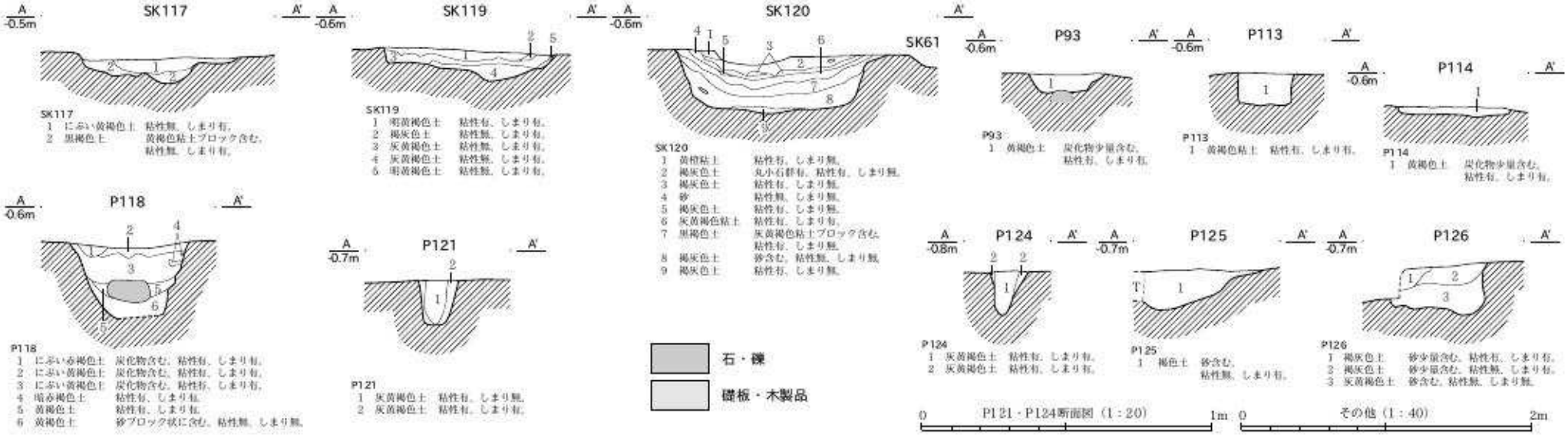
SX85
1 赤褐色土　炭化物多量に含む、粘性有、しまり有。

SX94
1 暗灰黄色土　炭化物少量含む、粘性無、しまり有。
2 黄灰色土　粘性無、しまり有。
3 赤褐色土　粘性無、しまり有。

SX110
1 褐灰色土　0.5～2.0cm大橙色火山灰ブロック状に含む、砂多量に含む、粘性無、しまり有。

0　その他（1：40）　2m
0　SD91断面図（1：20）　1m
石・礫





SK117
1 にぶい黄褐色土 粘性無、しまり有。
2 黒褐色土 黄褐色粘土ブロック含む。粘性無、しまり有。

SK119
1 明黄褐色土 粘性有、しまり有。
2 褐灰色土 粘性無、しまり有。
3 灰黄褐色土 粘性無、しまり有。
4 灰黄褐色土 粘性無、しまり有。
5 明黄褐色土 粘性無、しまり有。

SK120
1 黄橙粘土 粘性有、しまり無。
2 褐灰色土 丸小石群有、粘性有、しまり無。
3 褐灰色土 粘性有、しまり無。
4 砂 粘性無、しまり無。
5 褐灰色土 粘性有、しまり無。
6 灰黄褐色粘土 粘性有、しまり有。
7 黒褐色土 灰黄褐色粘土ブロック含む。粘性有、しまり無。
8 褐灰色土 砂含む、粘性無、しまり無。
9 褐灰色土 粘性有、しまり無。

P93
1 黄褐色土 炭化物少量含む。粘性有、しまり有。

P113
1 黄褐色粘土 粘性有、しまり有。

P114
1 黄褐色土 炭化物少量含む。粘性有、しまり有。

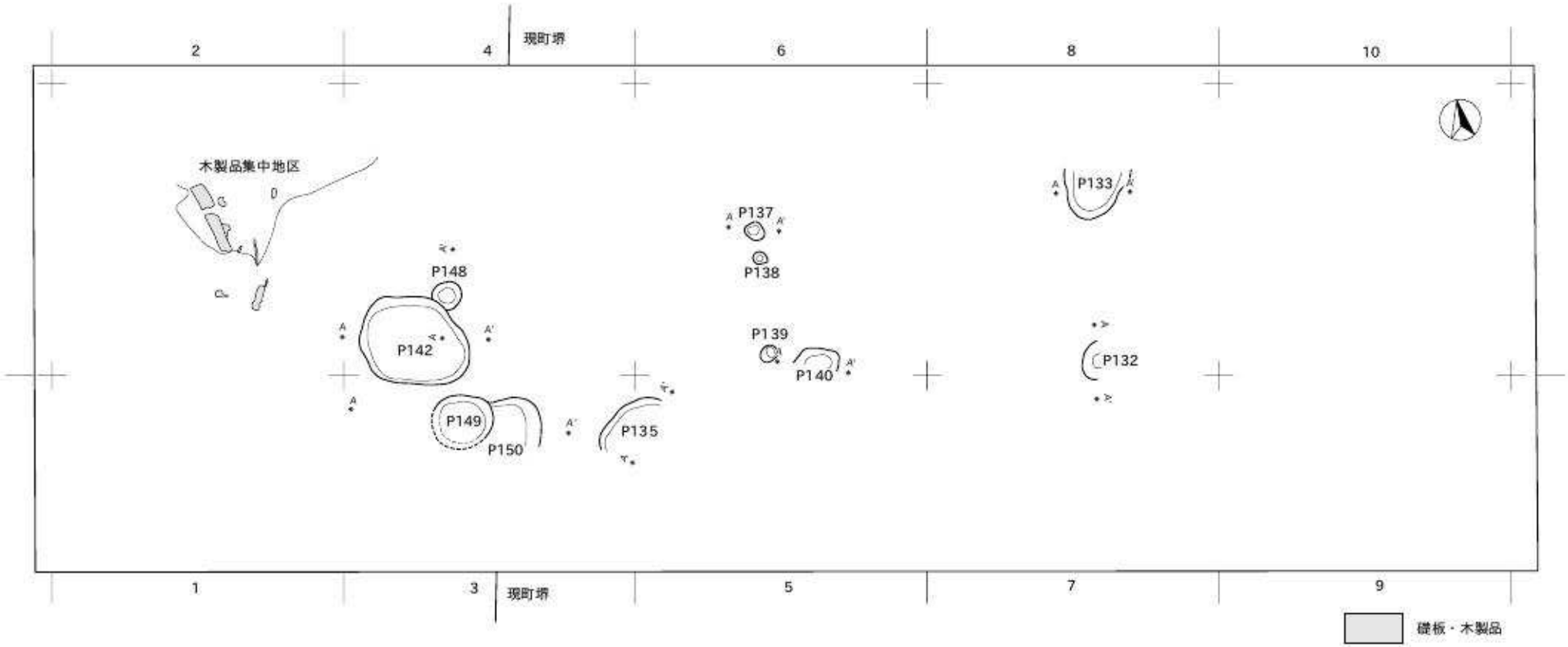
P118
1 にぶい赤褐色土 炭化物含む、粘性有、しまり有。
2 にぶい黄褐色土 炭化物含む、粘性有、しまり有。
3 にぶい黄褐色土 炭化物含む、粘性有、しまり有。
4 暗赤褐色土 粘性有、しまり有。
5 黄褐色土 粘性有、しまり有。
6 黄褐色土 砂ブロック状に含む、粘性無、しまり無。

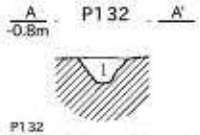
P121
1 灰黄褐色土 粘性有、しまり無。
2 灰黄褐色土 粘性有、しまり有。

P124
1 灰黄褐色土 粘性有、しまり有。
2 灰黄褐色土 粘性有、しまり有。

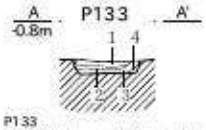
P125
1 褐色土 砂含む、粘性無、しまり有。

P126
1 褐灰色土 砂少量含む、粘性有、しまり有。
2 褐灰色土 砂少量含む、粘性無、しまり有。
3 灰黄褐色土 砂含む、粘性無、しまり無。

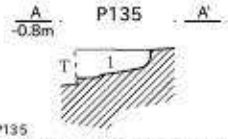




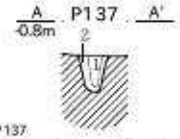
P132
1 黄灰褐色土　砂多量に含む、粘性無、しまり有。



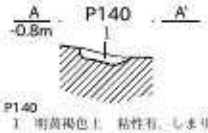
P133
1 橙色土　粘性無、しまり有。
2 褐灰色土　粘性有、しまり無。
3 橙色土　粘性無、しまり有。
4 褐灰色土　粘性有、しまり無。



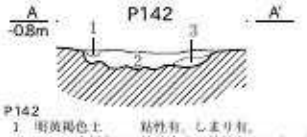
P135
1 褐灰色土　砂含む、粘性無、しまり有。



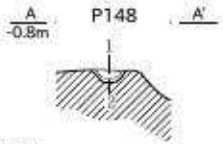
P137
1 褐灰色土　粘性有、しまり有。
2 明黄褐色土　粘性有、しまり有。



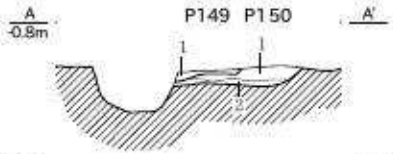
P140
1 明黄褐色土　粘性有、しまり有。



P142
1 明黄褐色土　粘性有、しまり有。
2 にぶい赤褐色土　被熱赤変、粘性有、しまり有。
3 明黄褐色土　粘性有、しまり有。



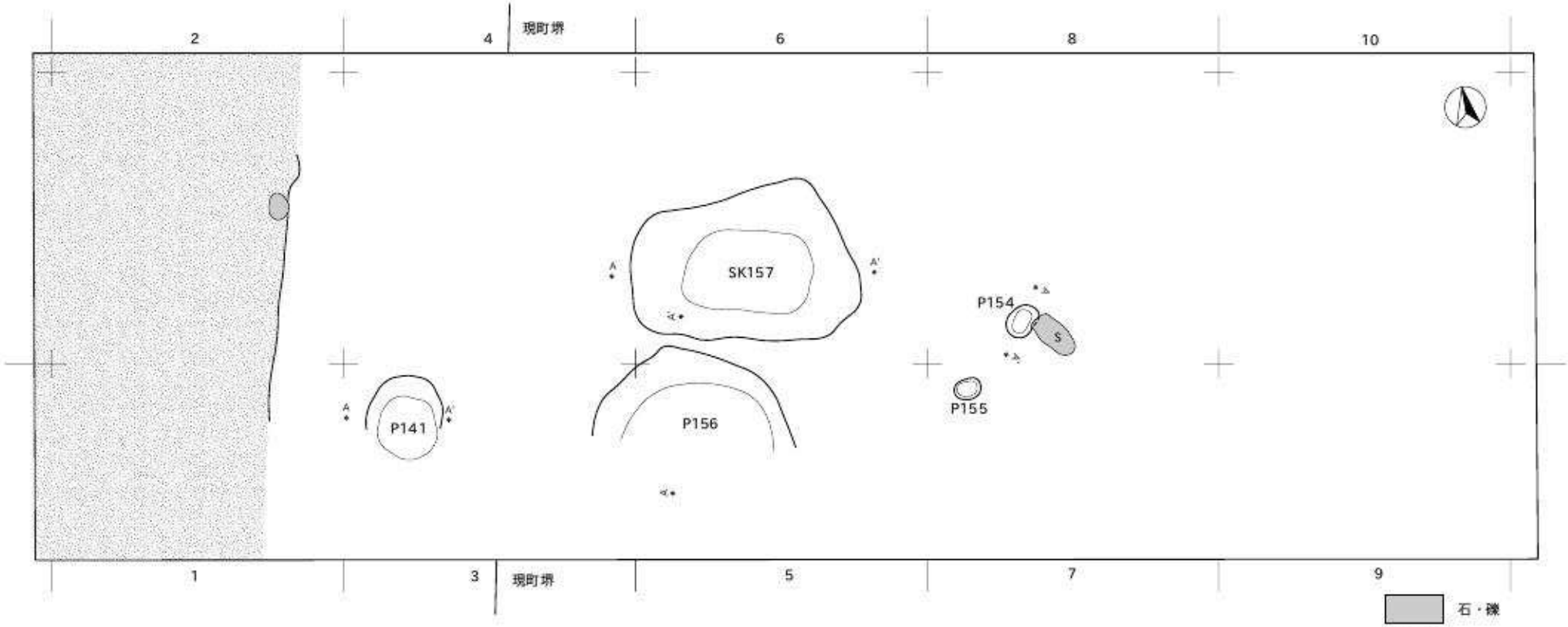
P148
1 灰褐色粘土　砂少量含む、粘性有、しまり有。
2 黄褐色粘土　粘性有、しまり有。

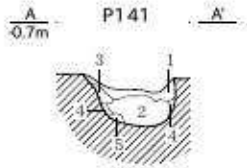


P149
1 黄褐色土　砂含む、粘性有、しまり無。

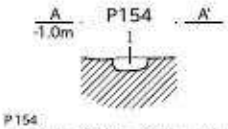
P150
1 黒褐色土　粘性有、しまり有。
2 黄褐色土　粘性有、しまり有。

0　(1:40)　2m

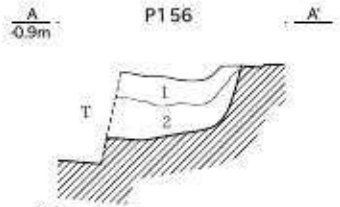




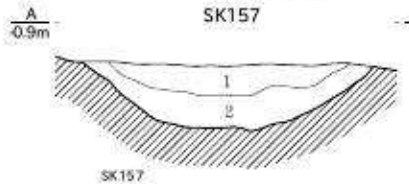
P141
1 灰黄褐色土 炭化物、0.5~2.0cm大橙色土含む、粘性有、しまり有。
2 明黄褐色土 粘性有、しまり有。
3 砂 粘性無、しまり無。
4 灰黄褐色土 粘性有、しまり有。
5 灰黄褐色土 砂含む、粘性無、しまり無。



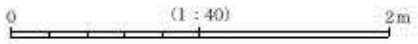
P154
1 オリーブ黒色土 粘性有、しまり有。

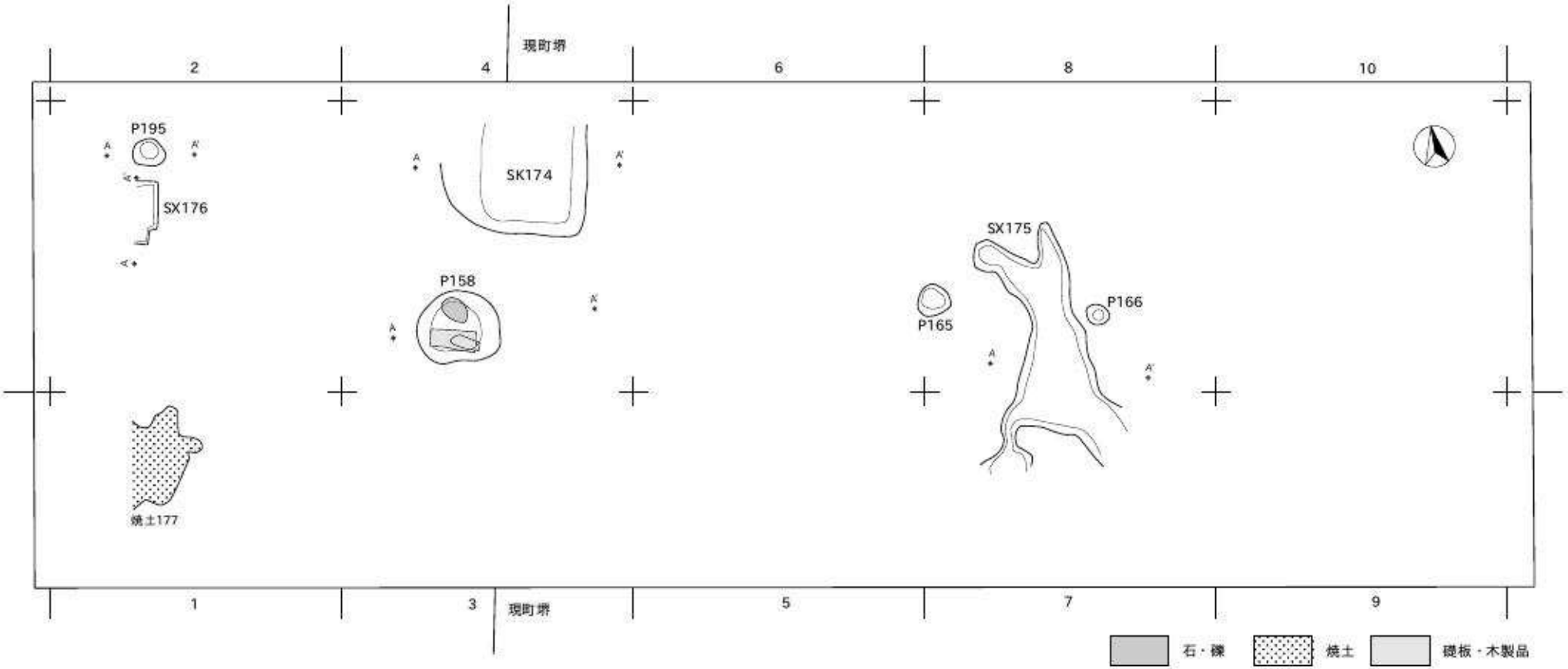


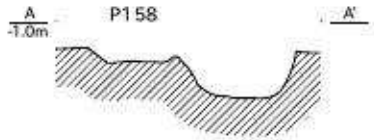
P156
1 褐灰色 炭化物少量含む、粘性有、しまり有。
2 灰色土 粘性有、しまり有。

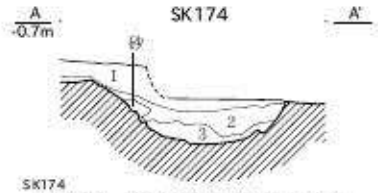


SK157
1 明黄褐色土 粘性有、しまり有。
2 褐灰色土 粘性有、しまり有。

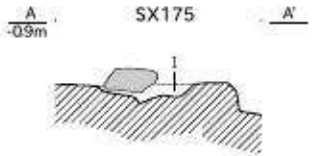






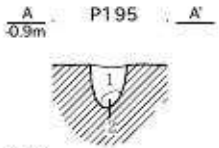


SK174
1　灰褐色土　炭化物少量含む。粘性有。しまり有。
2　褐灰色土　灰褐色土ブロック状に含む。粘性無。しまり無。
3　灰褐色土　粘性有。しまり有。

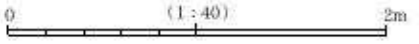


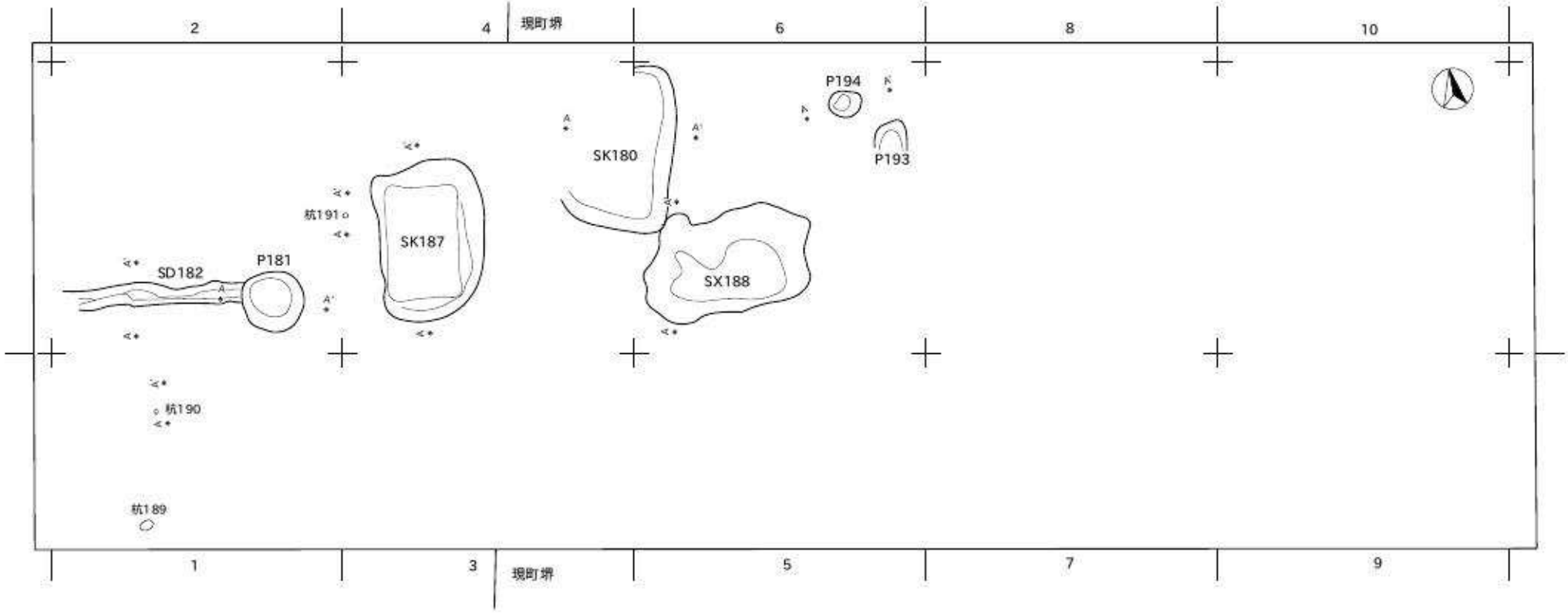
SX175
1　褐灰色　粘性無。しまり有。

SX176
1　褐灰色土　黒褐色土ブロック状に含む。
粘性有。しまり有。



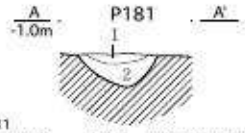
P195
1　褐灰色土　粘性無。しまり有。
2　黒褐色土　粘性無。しまり有。



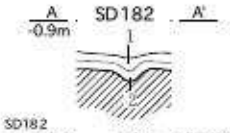


SK180
1 にぶい黄褐色土　炭化物、焼土含む。粘性有、しまり有。
2 にぶい黄橙色土　粘性有、しまり有。

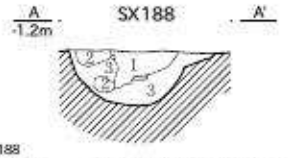
SK187
1 黄灰砂　黄褐色粘土ブロック少量含む。粘性無、しまり有。
2 黄褐色粘土　粘性有、しまり無。
3 褐灰色砂　粘性無、しまり無。



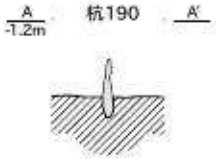
P181
1 灰色砂　褐色土、炭化物縞状に含む。粘性無、しまり有。
2 黄褐色粘土　砂多量に含む、粘性有、しまり有。

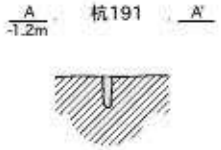


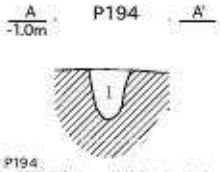
SD182
1 灰色砂　褐色土、炭化物縞状に含む。粘性無、しまり有。
2 黄褐色粘土　粘性有、しまり有。



SX188
1 褐色砂　黄褐色粘土少量含む、粘性無、しまり有。
2 黄褐色粘土　粘性有、しまり有。
3 褐色砂　黄褐色粘土ブロック状に含む。粘性無、しまり有。





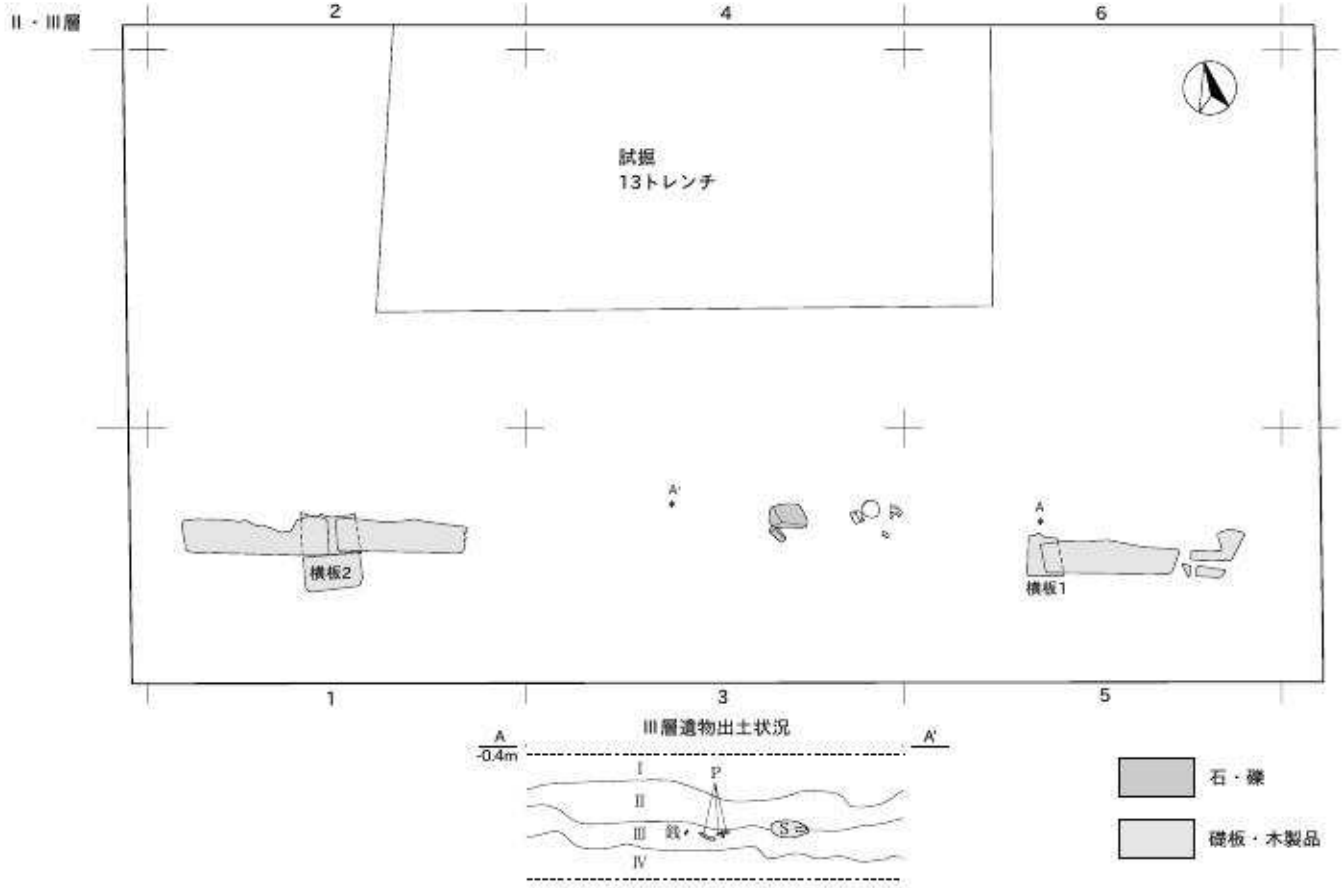


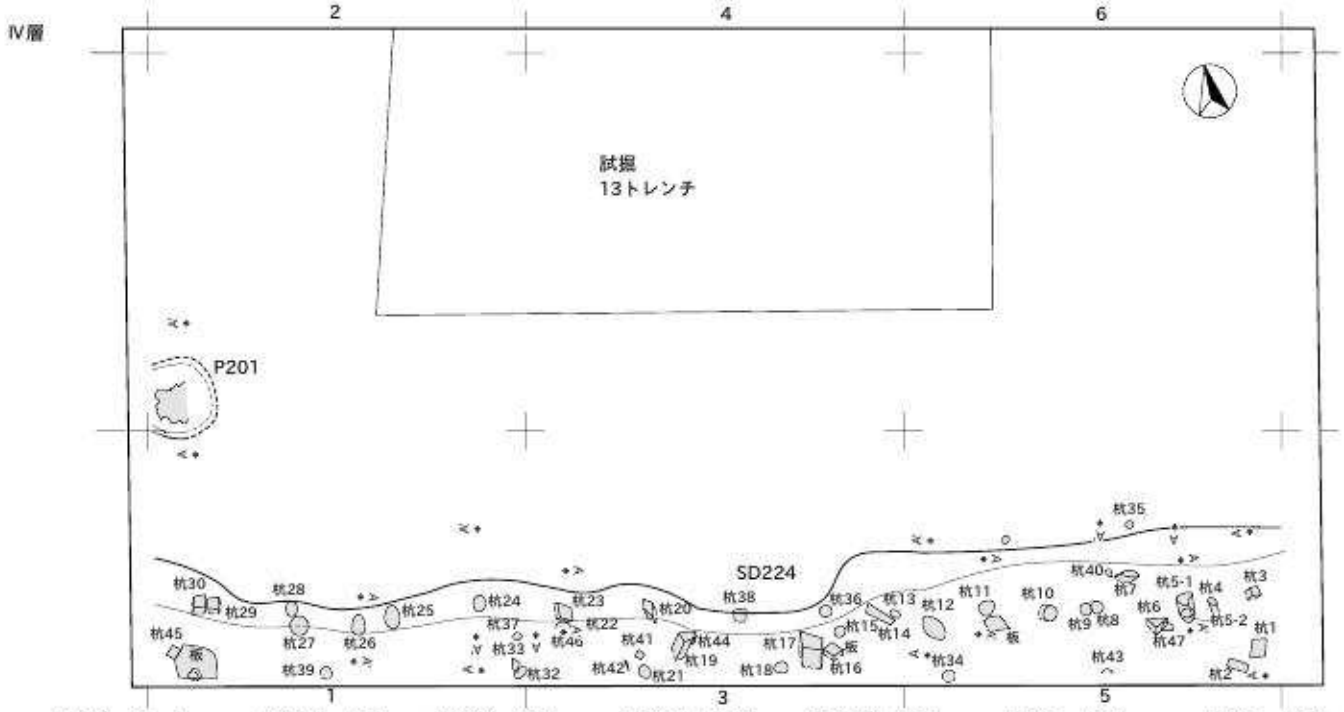
P194
1 褐灰色土　粘性有、しまり無。

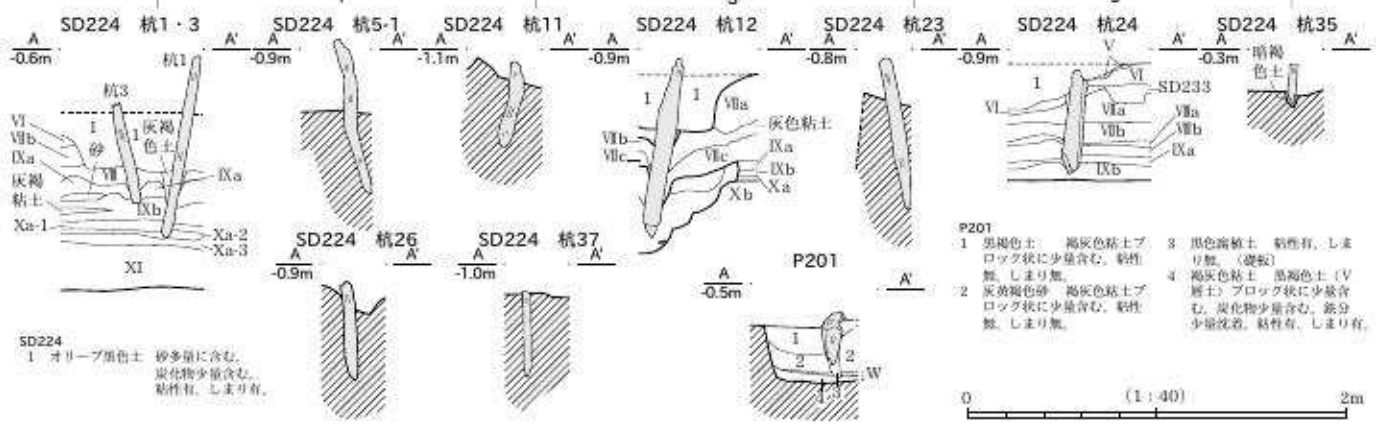
礎板・木製品

0　その他（1：40）　2m

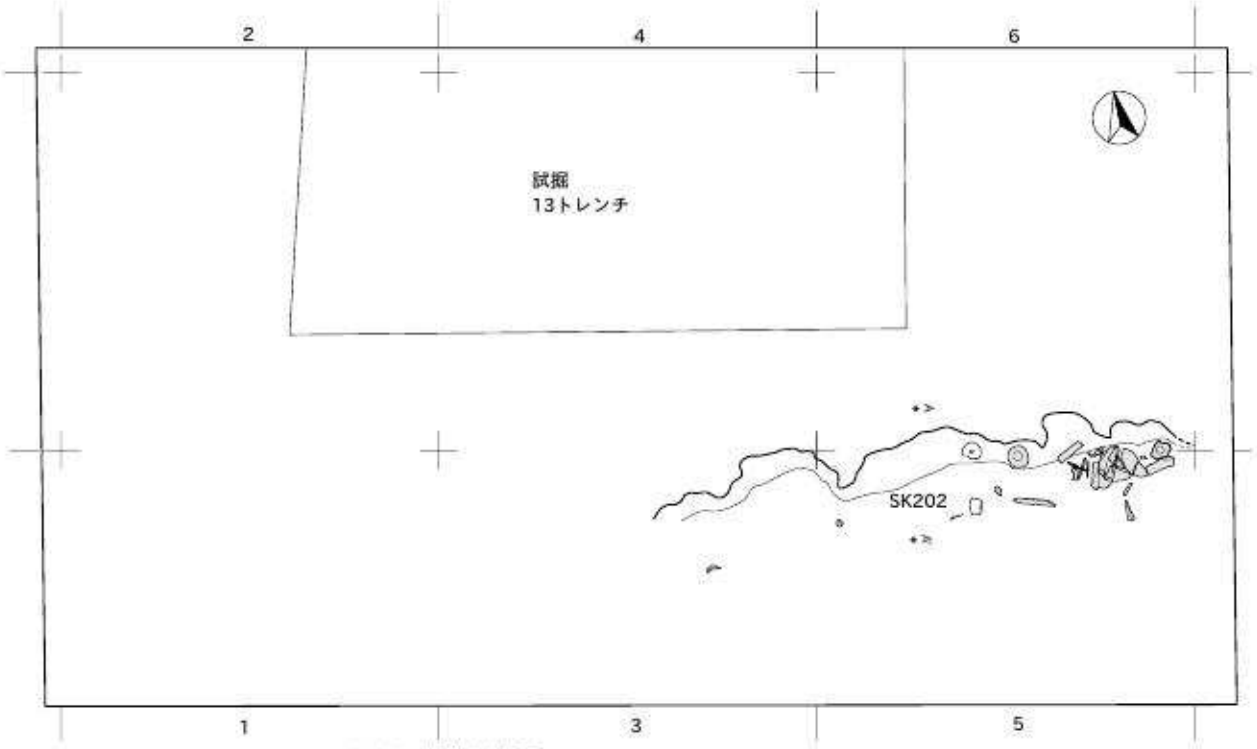
0　杭190・191断面図（1：20）　1m


Ⅱ・Ⅲ層
試掘
13トレンチ
横板2
横板1
Ⅲ層遺物出土状況
石・礫
礫板・木製品

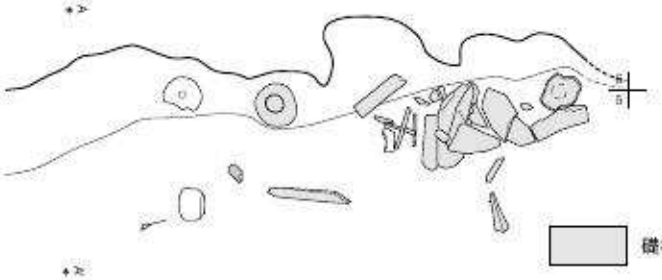

Ⅳ層
試掘
13トレンチ
P201
SD224

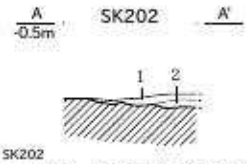

SD224 杭1・3
SD224 杭5-1
SD224 杭11
SD224 杭12
SD224 杭23
SD224 杭24
SD224 杭35
SD224 杭26
SD224 杭37
P201
SD233
SD224
1 オリーブ黒色土　砂多量に含む、炭化物少量含む、粘性有、しまり有。
P201
1 黒褐色土　褐灰色粘土ブロック状に少量含む、粘性無、しまり無。
2 灰黄褐色砂　褐灰色粘土ブロック状に少量含む、粘性無、しまり無。
3 黒色腐植土　粘性有、しまり無。（礎板）
4 褐灰色粘土　黒褐色土（Ⅴ層土）ブロック状に少量含む、炭化物少量含む、鉄分少量沈着、粘性有、しまり有。
0　(1：40)　2m

V層



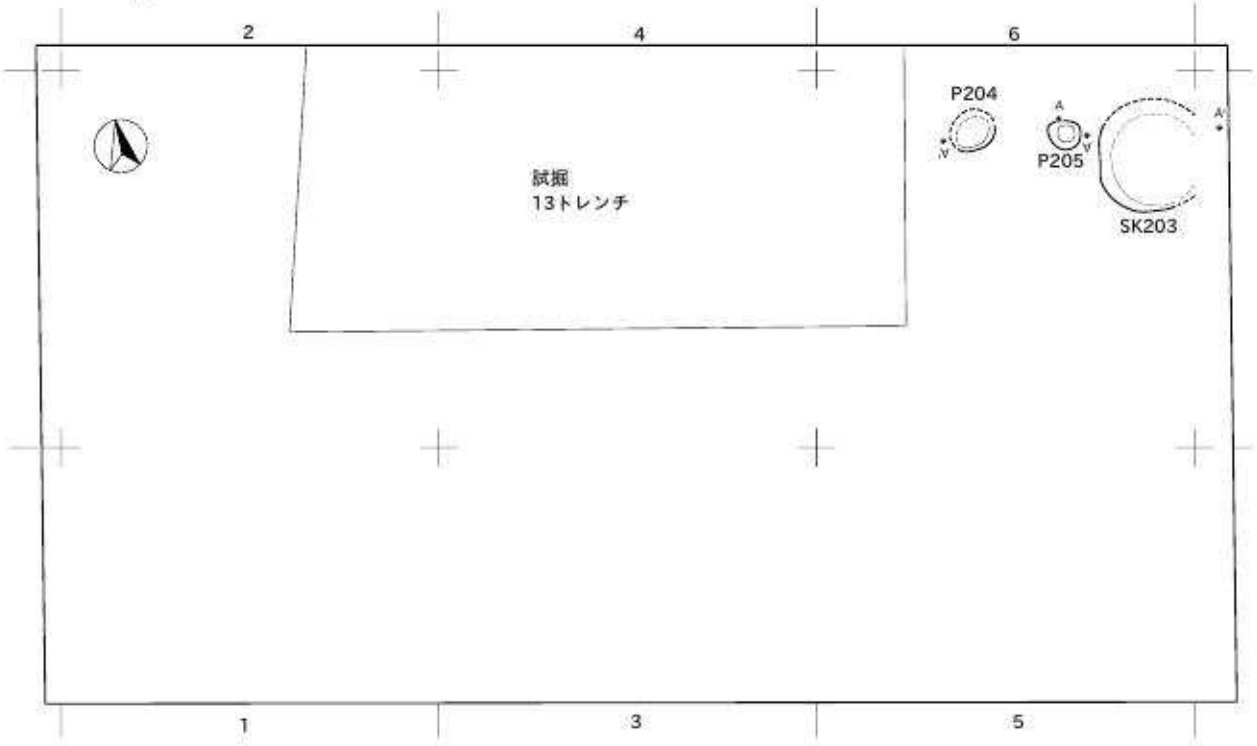
SK202　遺物出土状況

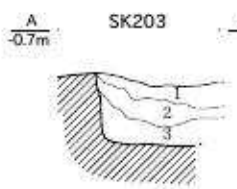




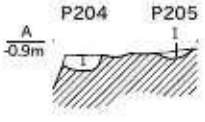
SK202
1　黒色砂　褐灰粘土ブロック状に少量含む、炭化物少量含む、粘性無、しまり有。
2　褐灰粘土　黒色砂ブロック状に少量含む、粘性有、しまり有。

VI層





SK203
1　灰黄褐色砂　灰黄褐色粘土ブロック状に少量含む、粘性有、しまり有。
2　黒褐色砂　灰黄褐色粘土ブロック状に少量含む、炭化物少量含む、粘性無、しまり無。
3　黒褐色砂　灰黄褐色粘土ブロック状に少量含む、炭化物少量含む、鉄分沈着顕著、粘性有、しまり無。

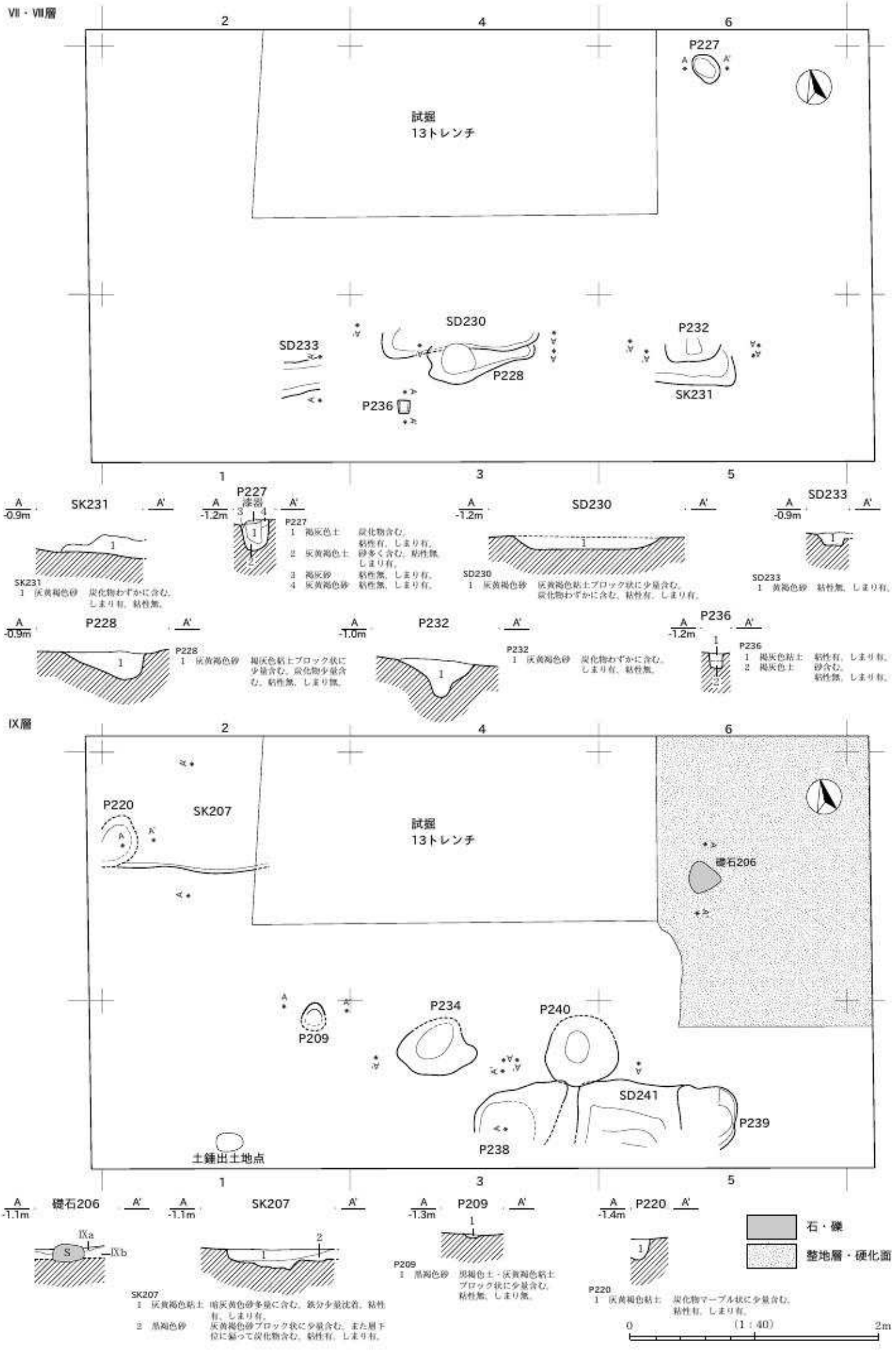


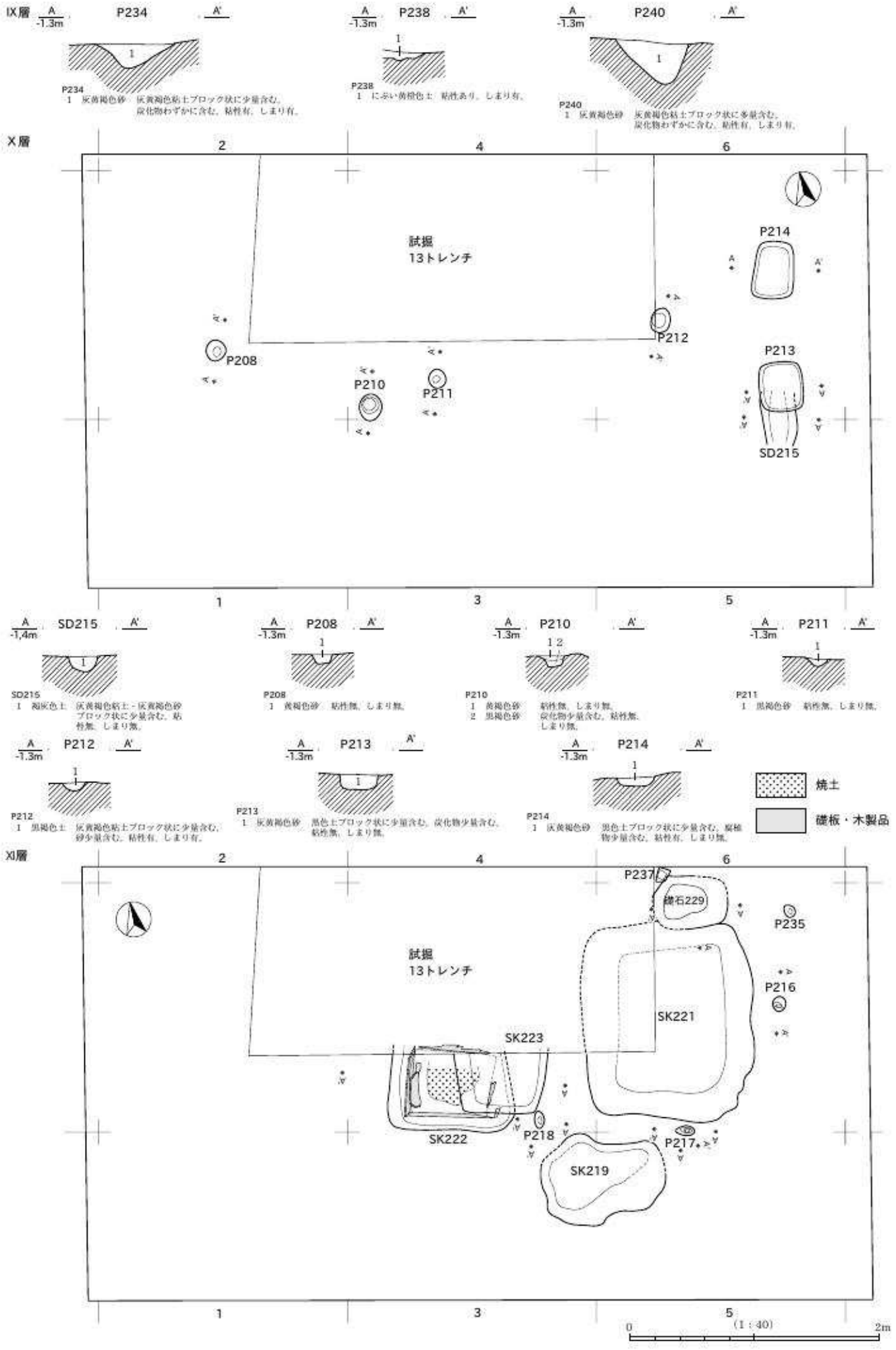
P204
1　灰黄褐色砂　褐灰粘土ブロック状に少量含む、炭化物少量含む、鉄分少量沈着、粘性有、しまり有。

P205
1　褐灰土　鉄分少量沈着、粘性有、しまり有。

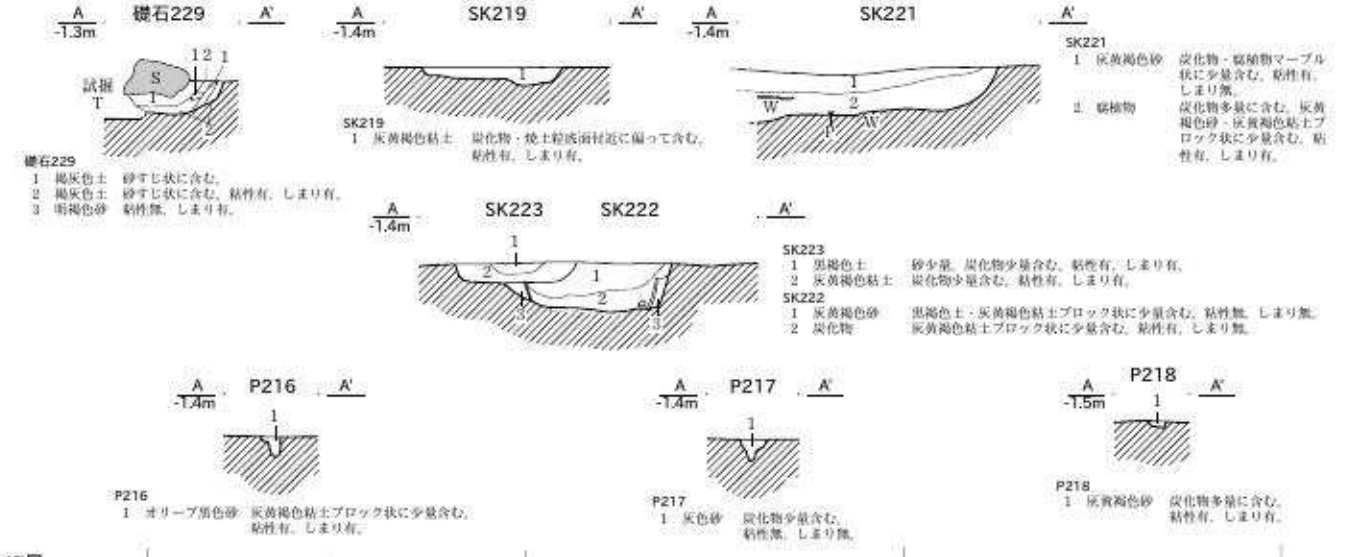
0　SK202遺物出土状況（1：20）　1m

0　（1：40）　2m

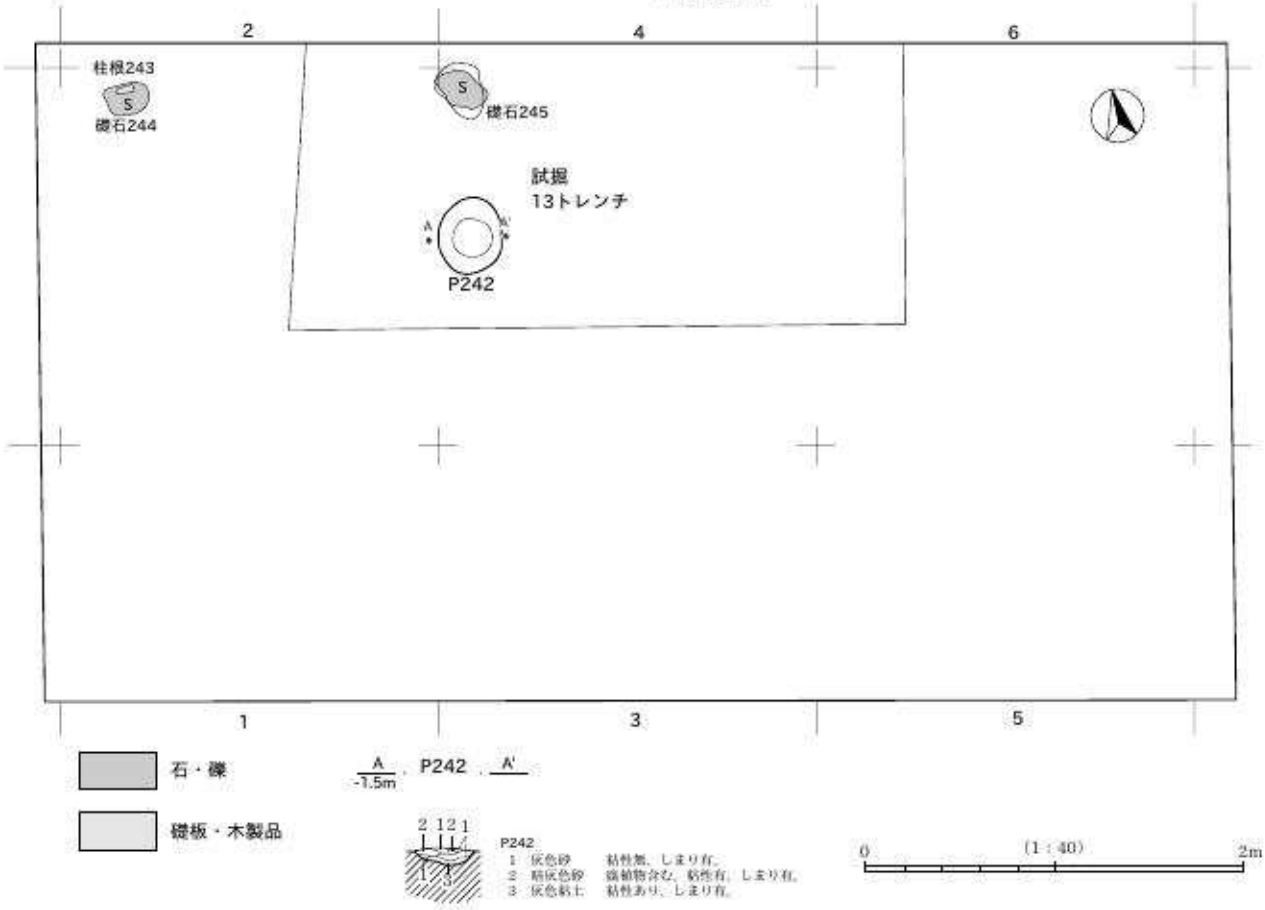

Ⅶ・Ⅷ層
2
4
6
P227
試掘
13トレンチ
SD230
SD233
P232
P228
SK231
P236
1
3
5
SK231
P227
漆器
SD230
SD233
P228
P232
P236
Ⅸ層
P220
SK207
磯石206
P209
P234
P240
SD241
P239
P238
土錘出土地点
石・礫
整地層・硬化面
0
(1：40)
2m


Ⅸ層
P234
P238
P240
P234 1 灰黄褐色砂　灰黄褐色粘土ブロック状に少量含む。炭化物わずかに含む。粘性有。しまり有。
P238 1 にぶい黄橙色土　粘性あり。しまり有。
P240 1 灰黄褐色砂　灰黄褐色粘土ブロック状に多量含む。炭化物わずかに含む。粘性有。しまり有。
Ⅹ層
試掘
13トレンチ
P208
P210
P211
P212
P213
P214
SD215
SD215 1 褐灰色土　灰黄褐色粘土・灰黄褐色砂ブロック状に少量含む。粘性無。しまり無。
P208 1 黄褐色砂　粘性無。しまり無。
P210 1 黄褐色砂　粘性無。しまり無。 2 黒褐色砂　炭化物少量含む。粘性無。しまり無。
P211 1 黒褐色砂　粘性無。しまり無。
P212 1 黒褐色土　灰黄褐色粘土ブロック状に少量含む。砂少量含む。粘性有。しまり有。
P213 1 灰黄褐色砂　黒色土ブロック状に少量含む。炭化物少量含む。粘性無。しまり無。
P214 1 灰黄褐色砂　黒色土ブロック状に少量含む。腐植物少量含む。粘性有。しまり無。
焼土
礫板・木製品
Ⅺ層
試掘
13トレンチ
P235
P237
礫石229
P216
SK221
SK223
SK222
P218
P217
SK219
0
(1：40)
2m

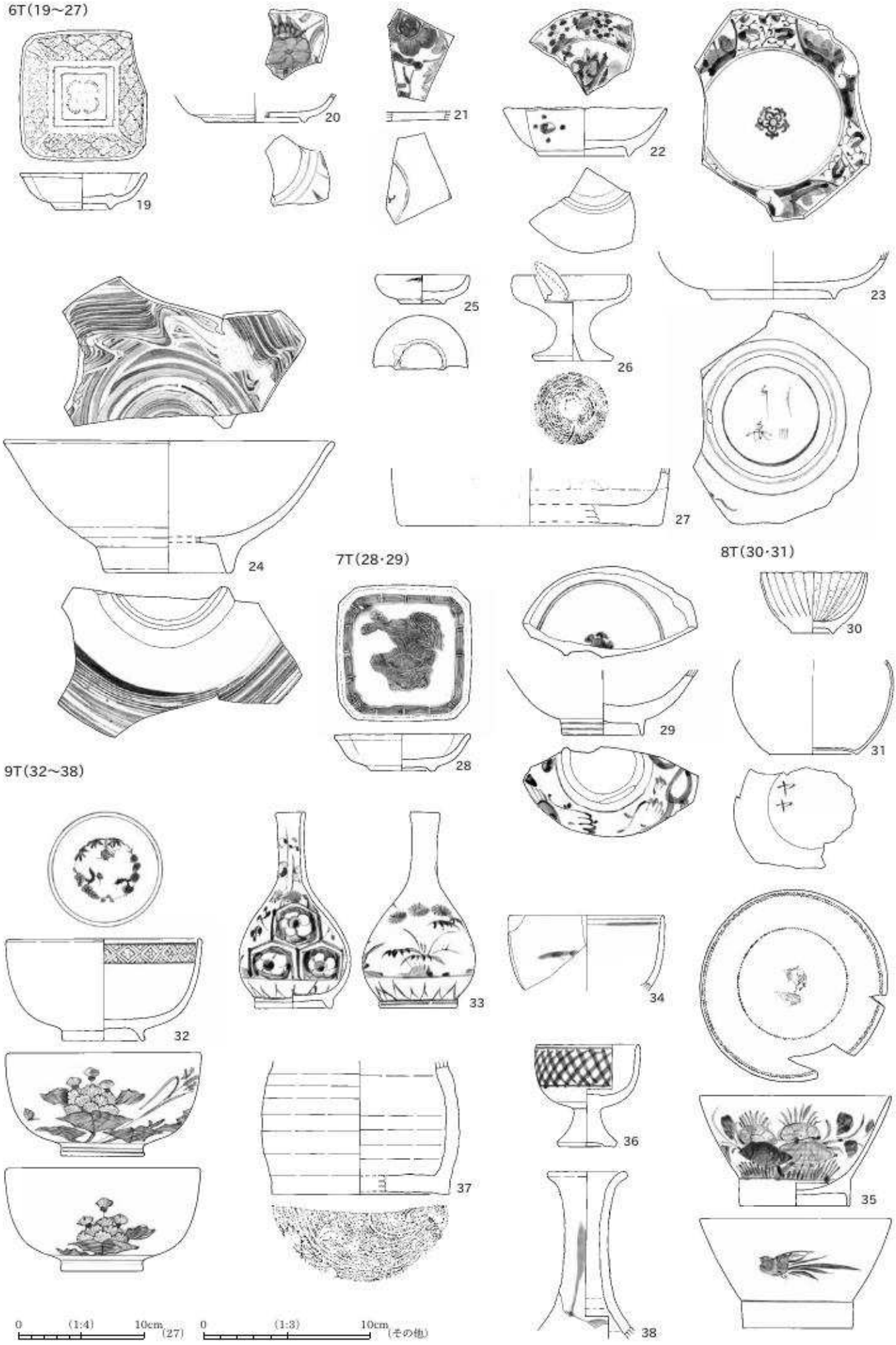
XI層

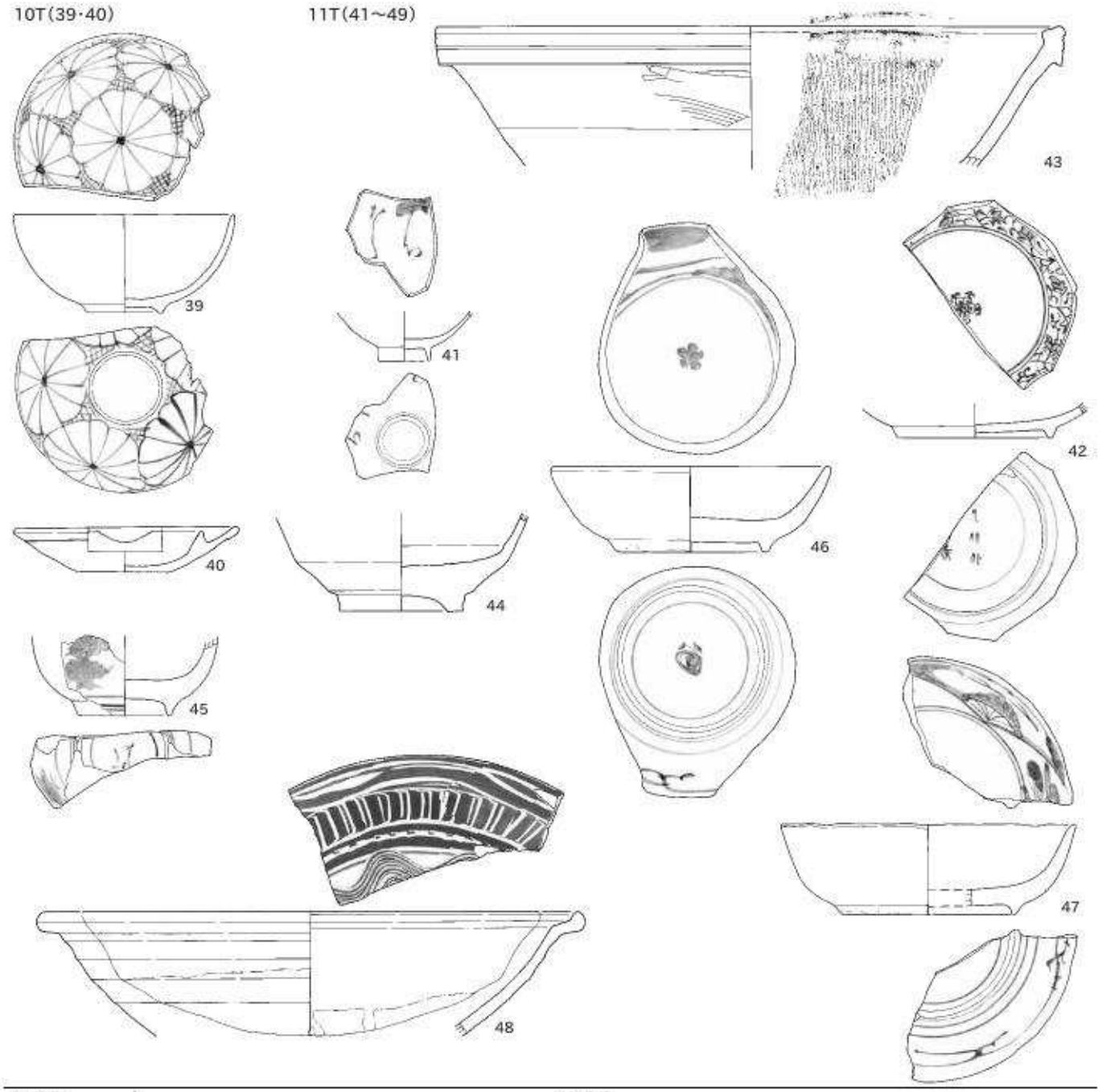

A -1.3m 礎石229 A'
試掘 T
礎石229
1 褐灰色土 砂すじ状に含む。
2 褐灰色土 砂すじ状に含む。粘性有、しまり有。
3 明褐色砂 粘性無、しまり有。
A -1.4m SK219 A'
SK219
1 灰黄褐色粘土 炭化物・焼土粒底面付近に偏って含む。粘性有、しまり有。
A -1.4m SK221 A'
SK221
1 灰黄褐色砂 炭化物・腐植物マーブル状に少量含む。粘性有、しまり無。
2 腐植物 炭化物多量に含む。灰黄褐色砂・灰黄褐色粘土ブロック状に少量含む。粘性有、しまり有。
A -1.4m SK223 SK222 A'
SK223
1 黒褐色土 砂少量、炭化物少量含む。粘性有、しまり有。
2 灰黄褐色粘土 炭化物少量含む。粘性有、しまり有。
SK222
1 灰黄褐色砂 黒褐色土・灰黄褐色粘土ブロック状に少量含む。粘性無、しまり無。
2 炭化物 灰黄褐色粘土ブロック状に少量含む。粘性有、しまり無。
A -1.4m P216 A'
P216
1 オリーブ黒色砂 灰黄褐色粘土ブロック状に少量含む。粘性有、しまり有。
A -1.4m P217 A'
P217
1 灰色砂 炭化物少量含む。粘性無、しまり無。
A -1.5m P218 A'
P218
1 灰黄褐色砂 炭化物多量に含む。粘性有、しまり有。

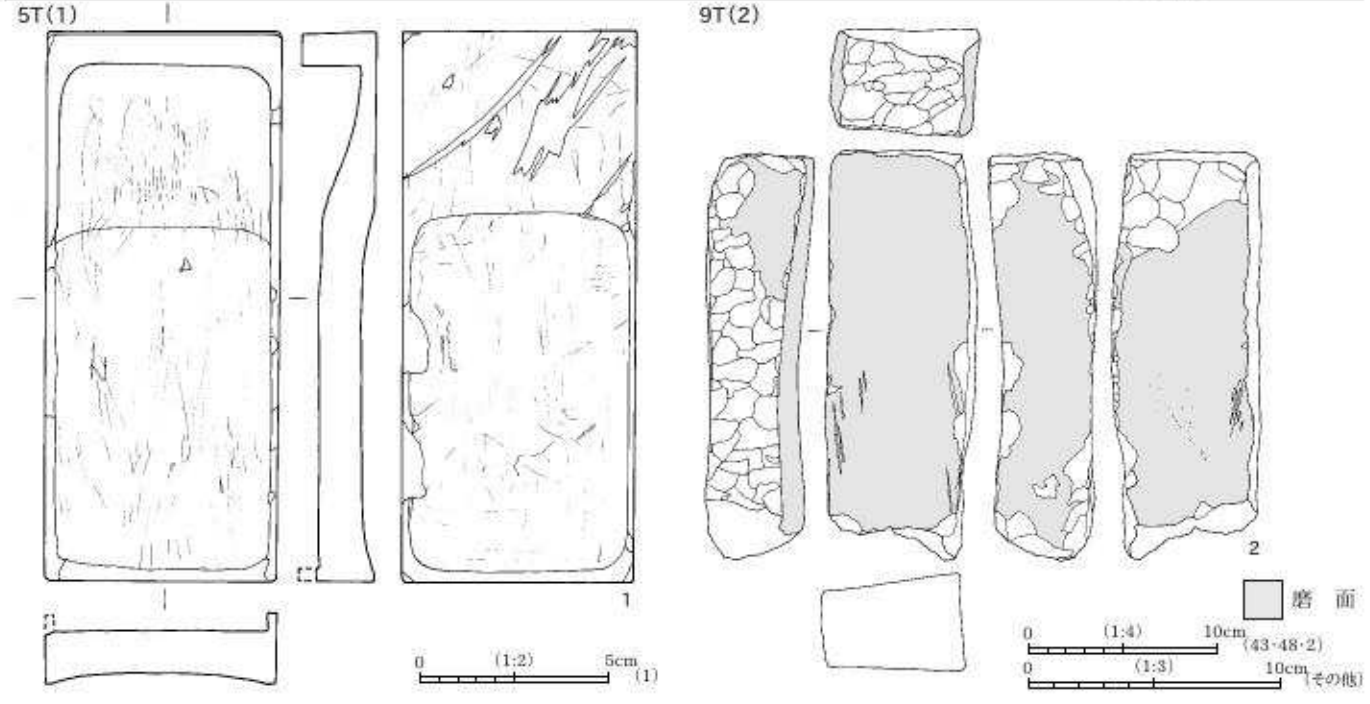
XII層

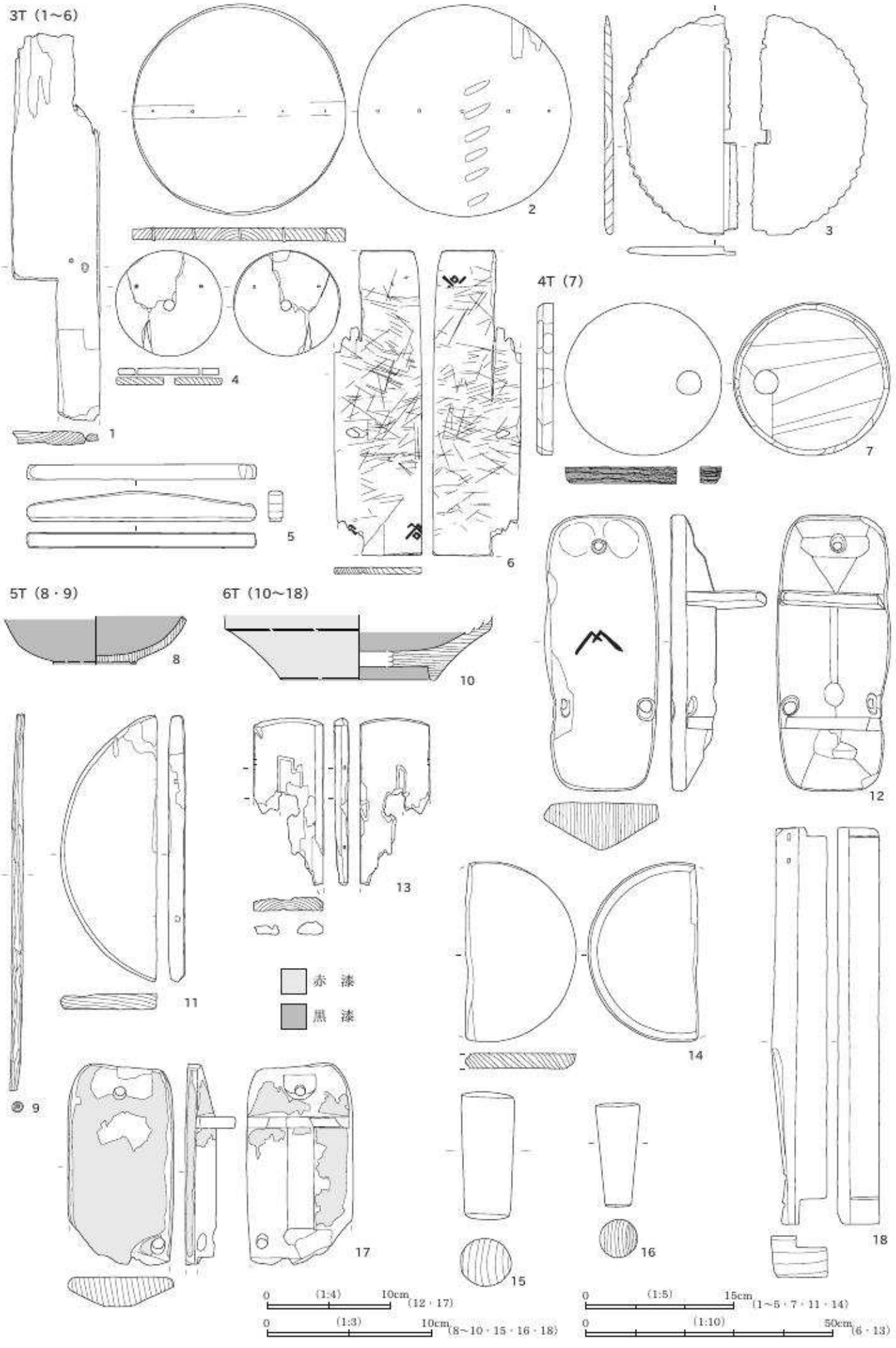

2
4
6
柱根243
礎石244
礎石245
試掘
13トレンチ
P242
1
3
5
石・礫
礎板・木製品
A -1.5m P242 A'
P242
1 灰色砂 粘性無、しまり有。
2 暗灰色砂 腐植物含む。粘性有、しまり有。
3 灰色粘土 粘性あり、しまり有。
0
(1：40)
2m

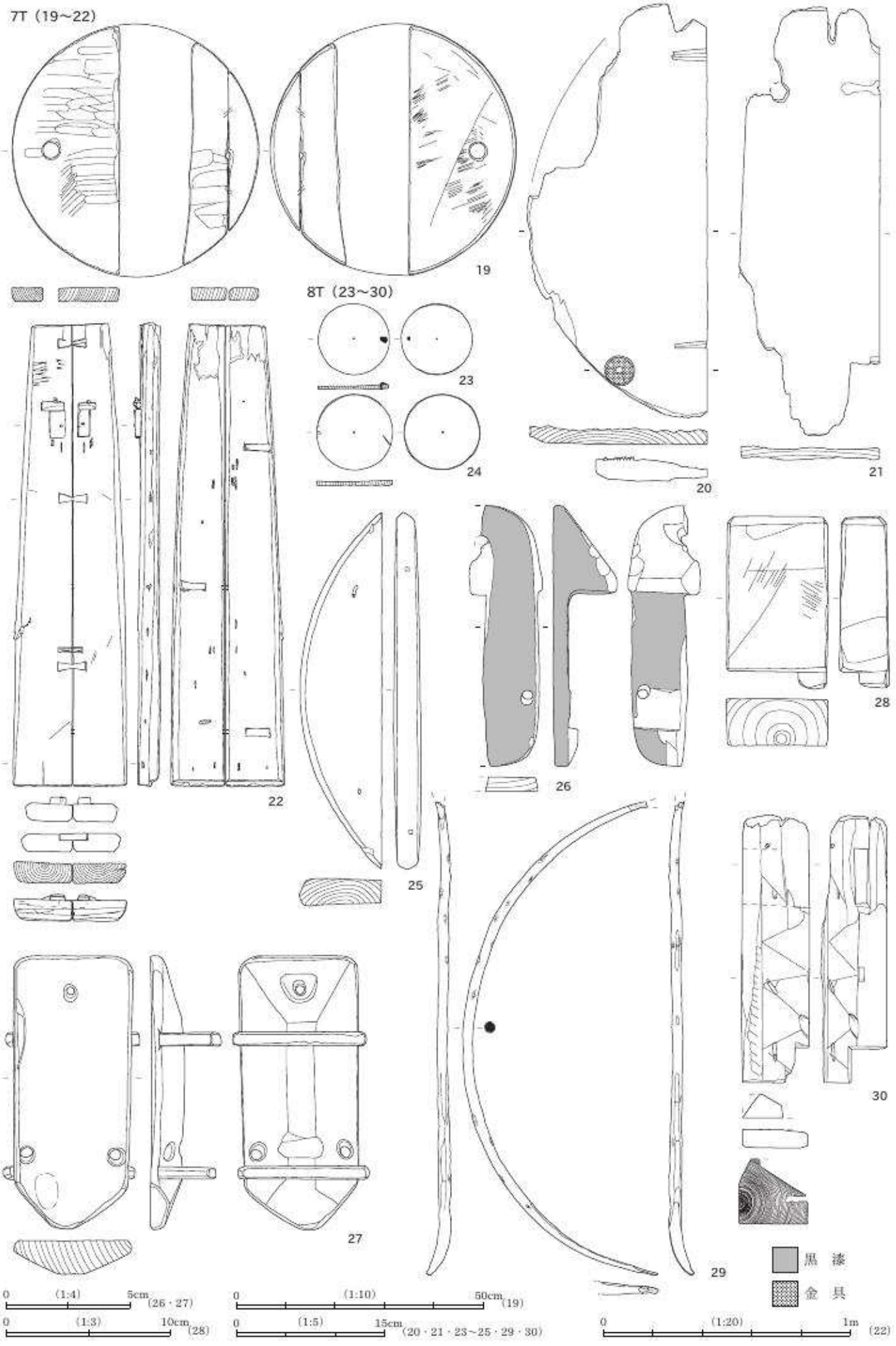
4T（1）
1
5T（2～7）
2
3
4
5
6T（8～18）
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
0 (1:4) 10cm（1）
0 (1:3) 10cm（その他）


6T(19～27)
19
20
21
22
23
24
25
26
27
7T(28･29)
28
8T(30･31)
29
30
31
9T(32～38)
32
33
34
35
36
37
38
0 (1:4) 10cm (27)
0 (1:3) 10cm (その他)

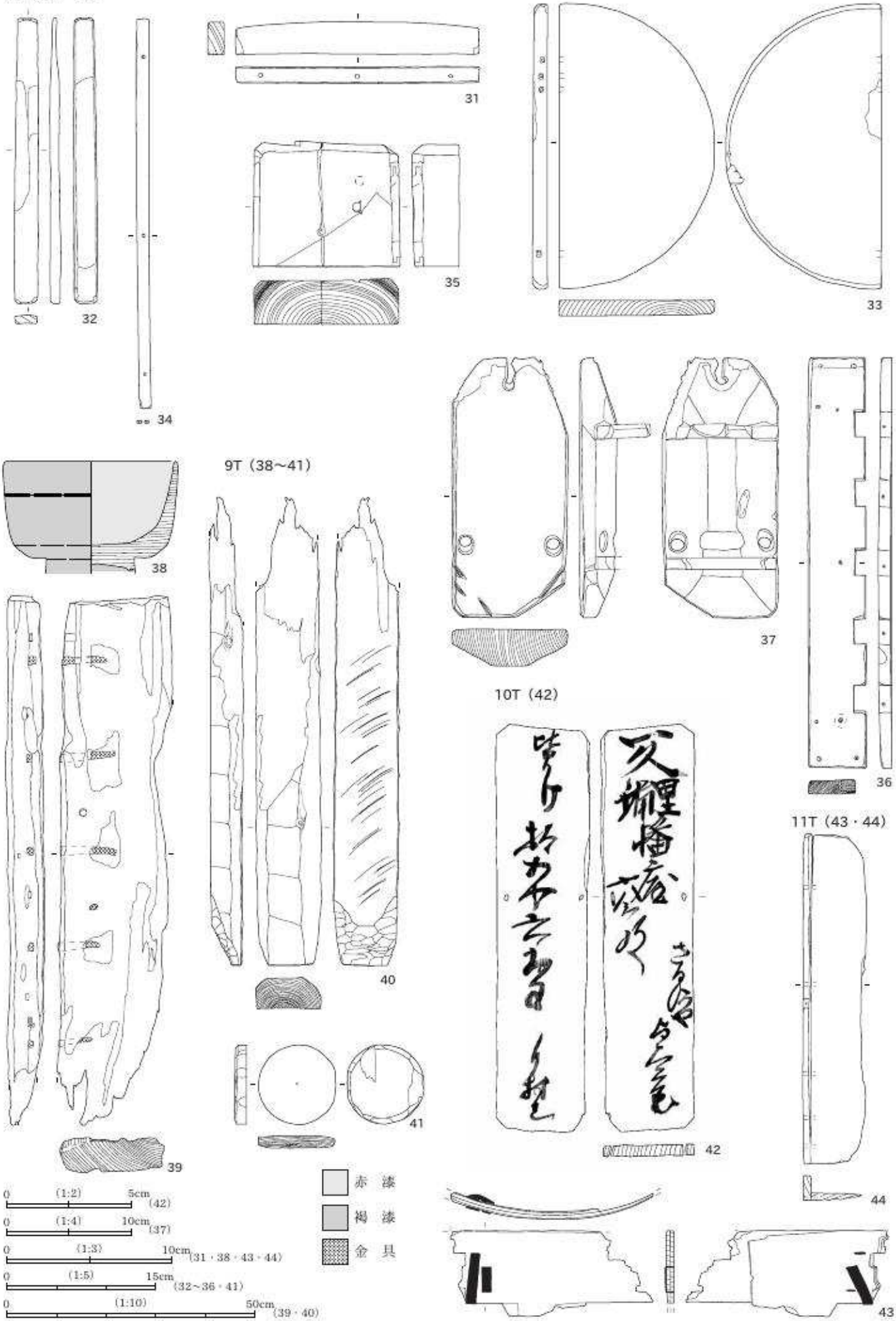

10T(39·40)
11T(41～49)
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48

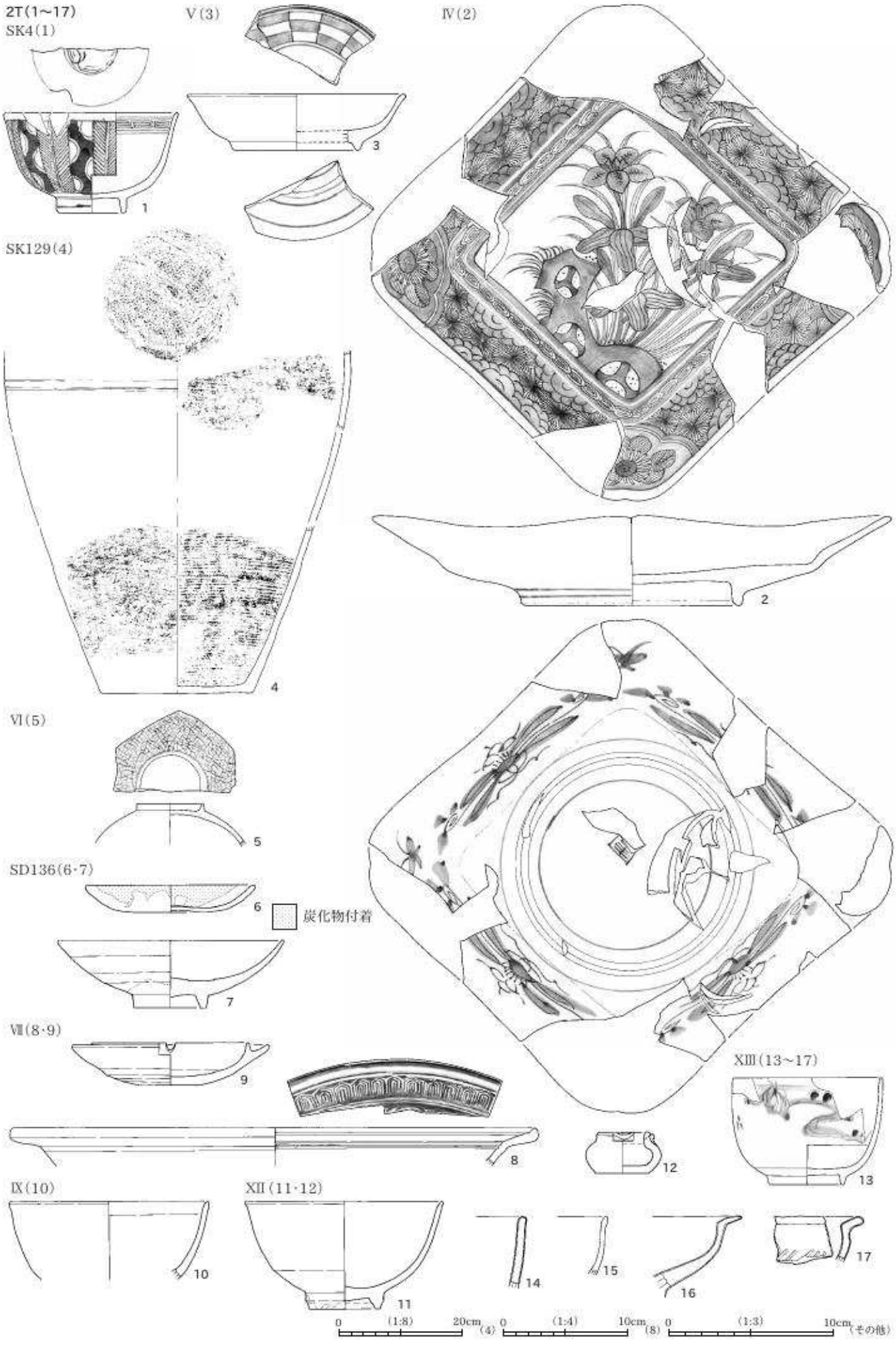

5T(1)
9T(2)
1
2
磨 面
0 (1:2) 5cm (1)
0 (1:4) 10cm (43·48·2)
0 (1:3) 10cm (その他)


3T（1～6）
4T（7）
5T（8・9）
6T（10～18）
赤　漆
黒　漆
0　(1:4)　10cm　(12・17)
0　(1:3)　10cm　(8～10・15・16・18)
0　(1:5)　15cm　(1～5・7・11・14)
0　(1:10)　50cm　(6・13)

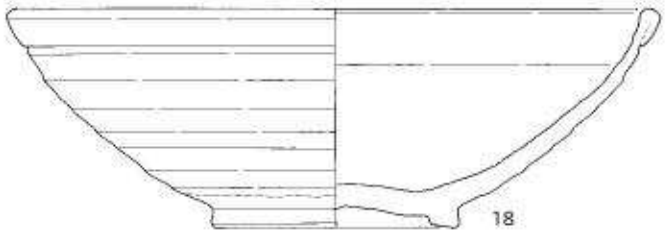

7T（19～22）
19
8T（23～30）
23
24
20
21
22
25
26
28
27
29
30
黒 漆
金 具
0 (1:4) 5cm (26・27)
0 (1:3) 10cm (28)
0 (1:10) 50cm (19)
0 (1:5) 15cm (20・21・23～25・29・30)
0 (1:20) 1m (22)

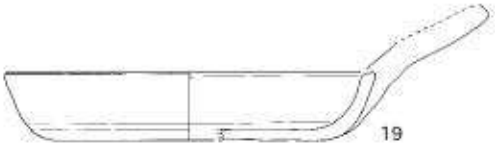
8T（31～37）


31
32
33
34
35
9T（38～41）
36
37
38
40
41
10T（42）
11T（43・44）
39
42
43
44
赤漆
褐漆
金具
0 (1:2) 5cm (42)
0 (1:4) 10cm (37)
0 (1:3) 10cm (31・38・43・44)
0 (1:5) 15cm (32～36・41)
0 (1:10) 50cm (39・40)

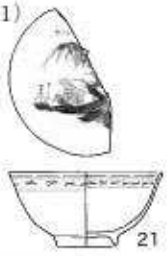

2T(1~17)
SK4(1)
V(3)
Ⅳ(2)
SK129(4)
Ⅵ(5)
SD136(6·7)
炭化物付着
Ⅶ(8·9)
Ⅸ(10)
Ⅻ(11·12)
XIII(13~17)
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
0 (1:8) 20cm (4)
0 (1:4) 10cm (8)
0 (1:3) 10cm (その他)

3T(18~37)
SK61(18~20)

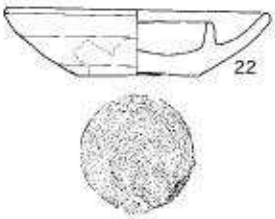

18


19

Ⅱ(21)


21

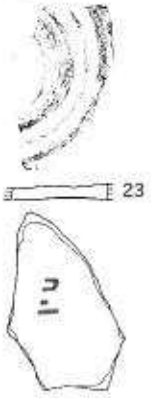
P19(22)

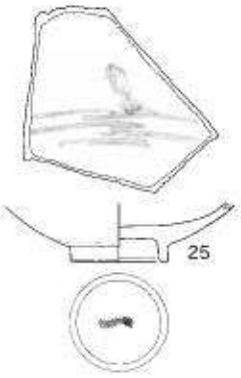

22

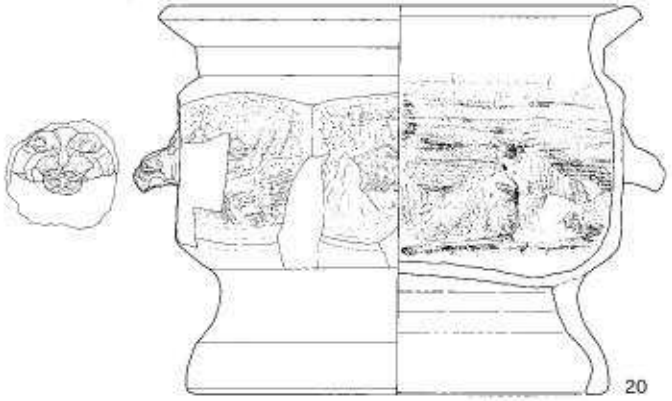
SD31(24·25)

24

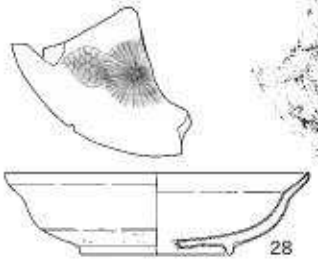
SK26(23)

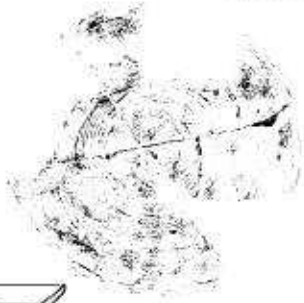

23


25

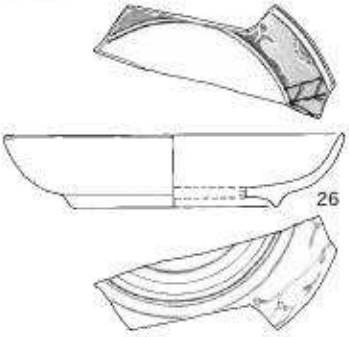

20

Ⅲ(28)

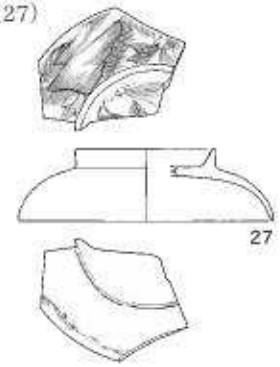

28



P25(26)

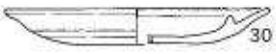

26

Ⅲa(27)


27

Ⅲb(29·30)

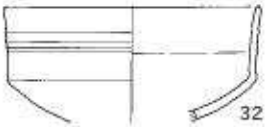
29

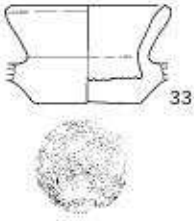

30

SD48(31)

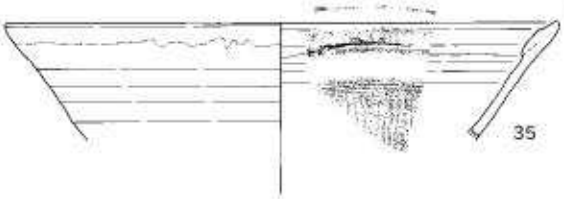
31

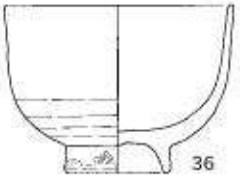
Ⅳ(32~37)

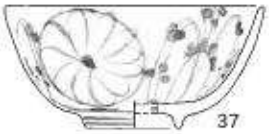

32


33

34

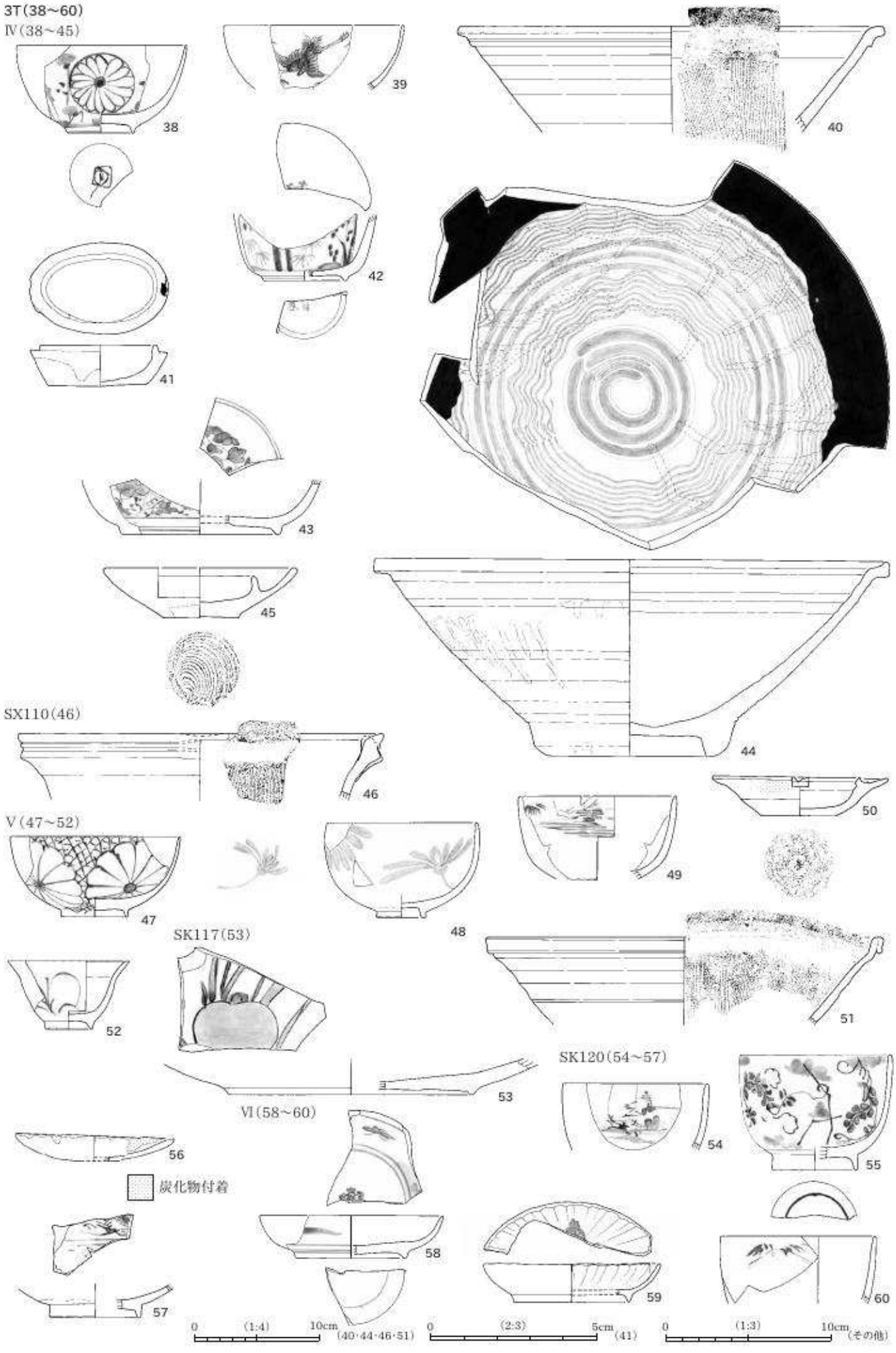

35

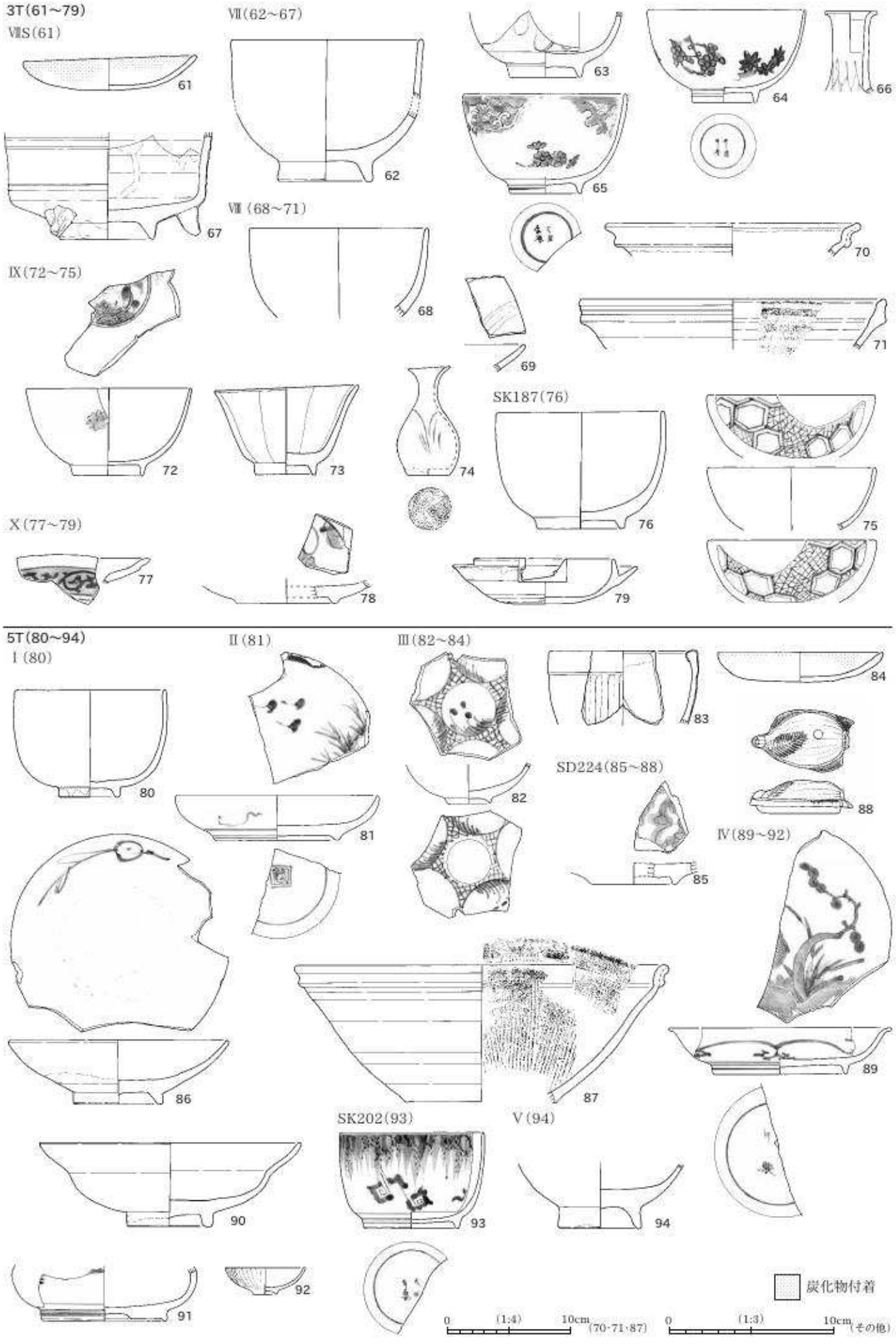

36

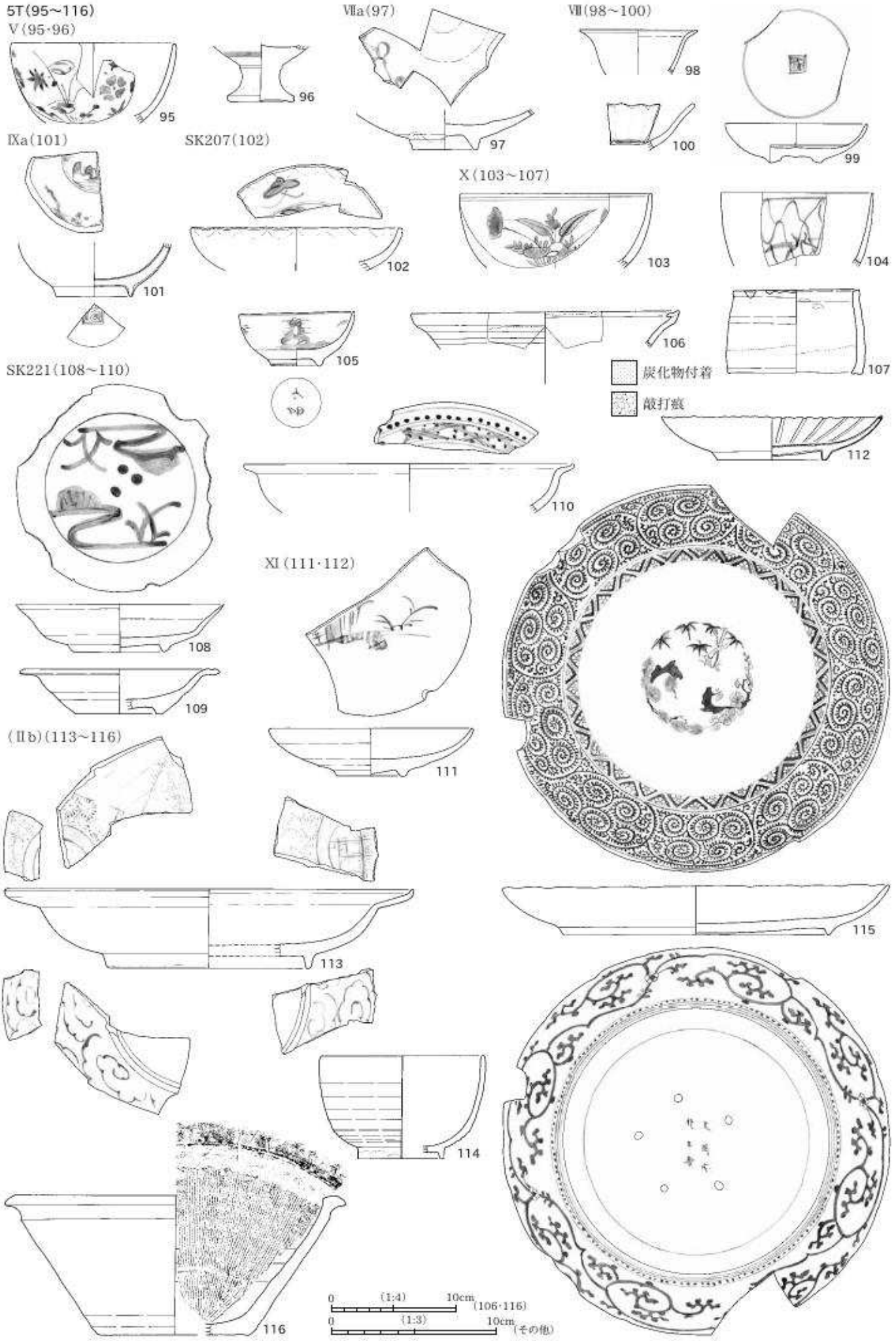

37

0　(1:4)　10cm　(18·20·35)

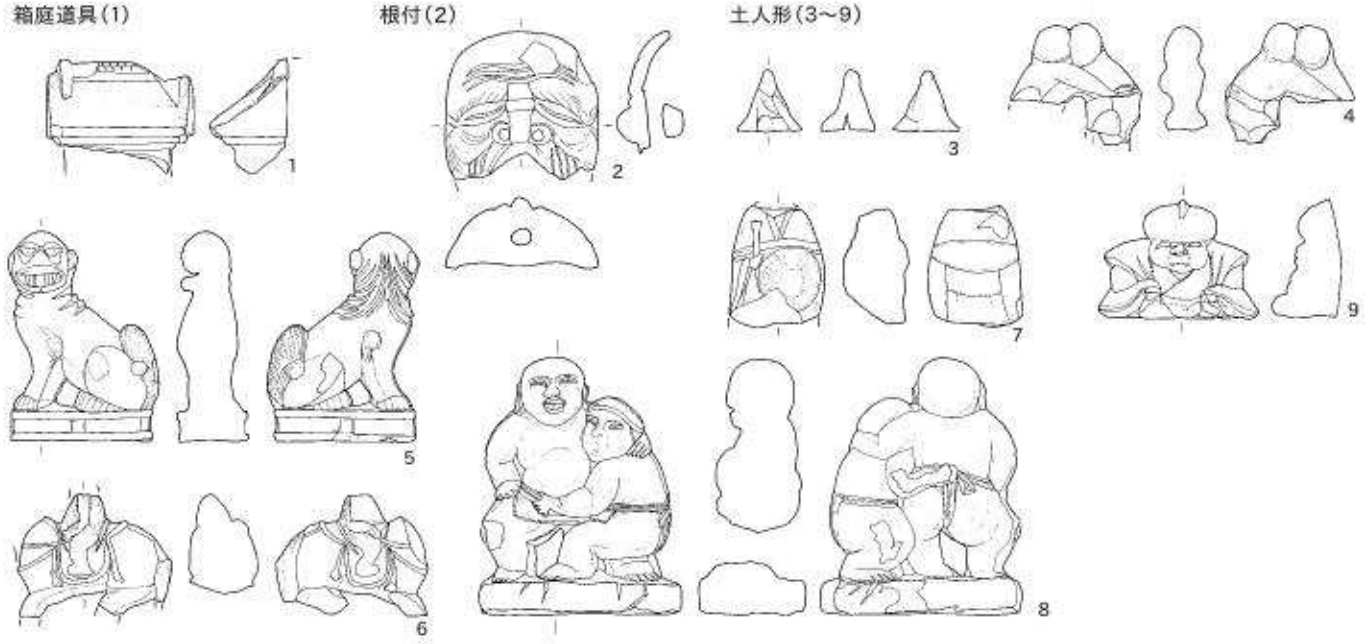
0　(1:3)　10cm　(その他)


3T(38~60)
Ⅳ(38~45)
38
39
40
42
41
43
45
44
SX110(46)
46
V(47~52)
47
48
49
50
SK117(53)
52
51
53
SK120(54~57)
54
55
Ⅵ(58~60)
56
炭化物付着
58
59
60
57
0 (1:4) 10cm (40·44·46·51)
0 (2:3) 5cm (41)
0 (1:3) 10cm (その他)

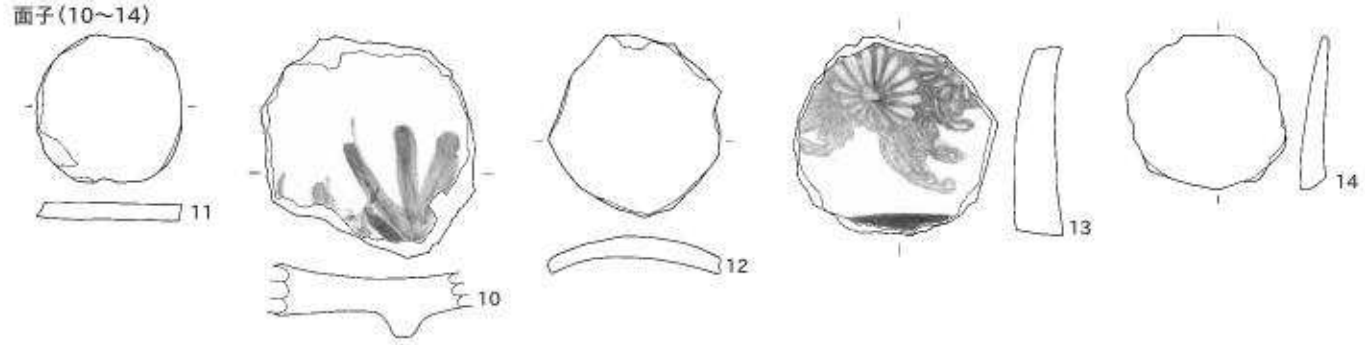

3T(61~79)
Ⅶ S(61)
61
Ⅶ(62~67)
62
63
64
65
66
67
Ⅷ(68~71)
68
69
70
71
Ⅸ(72~75)
72
73
74
SK187(76)
76
75
Ⅹ(77~79)
77
78
79
5T(80~94)
Ⅰ(80)
80
Ⅱ(81)
81
Ⅲ(82~84)
82
83
84
SD224(85~88)
85
88
Ⅳ(89~92)
86
87
89
SK202(93)
93
Ⅴ(94)
90
94
91
92
炭化物付着
0 (1:4) 10cm (70·71·87)
0 (1:3) 10cm (その他)


5T(95~116)
V(95·96)
95
96
VIIa(97)
97
VII(98~100)
98
100
99
IXa(101)
101
SK207(102)
102
X(103~107)
103
104
105
106
107
炭化物付着
敲打痕
SK221(108~110)
110
112
108
109
XI(111·112)
111
(IIb)(113~116)
113
115
114
116
0 (1:4) 10cm (106·116)
0 (1:3) 10cm (その他)

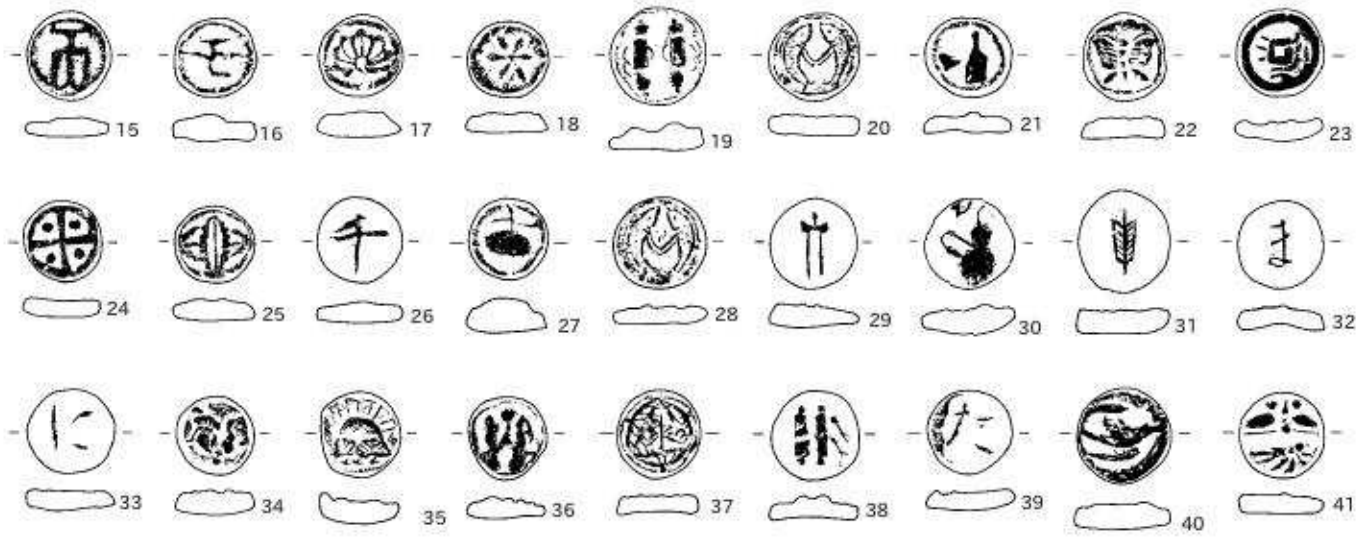
箱庭道具(1)　根付(2)　土人形(3～9)



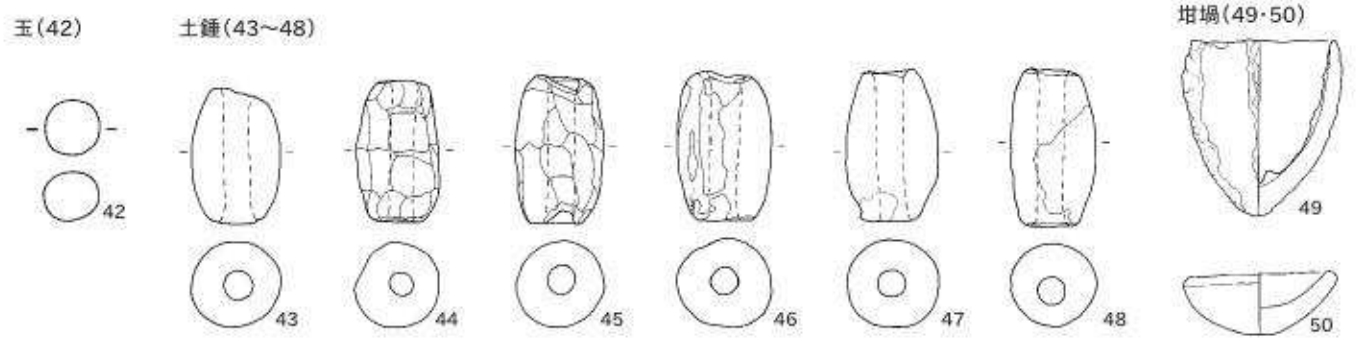
面子(10～14)



泥面子(15～41)

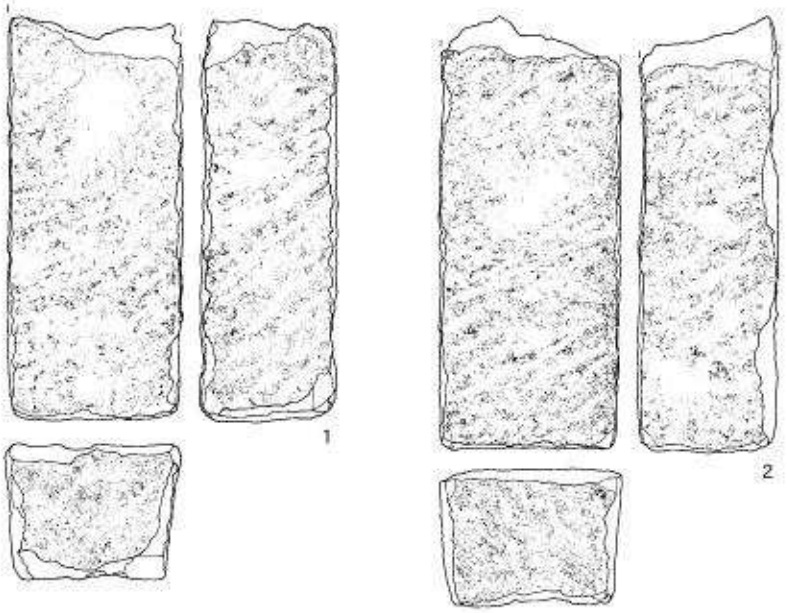


玉(42)　土錘(43～48)　坩堝(49･50)

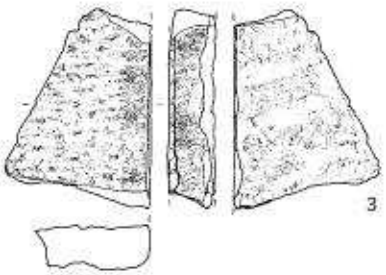


0 (1:2) 5cm (1～8･49･50)　0 (2:3) 5cm (10～42)　0 (1:3) 10cm (43～48)

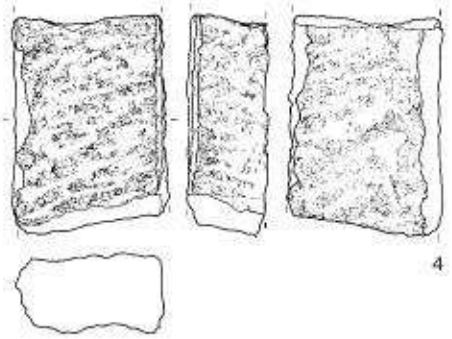
2T(1~9)　SD1(1·2)



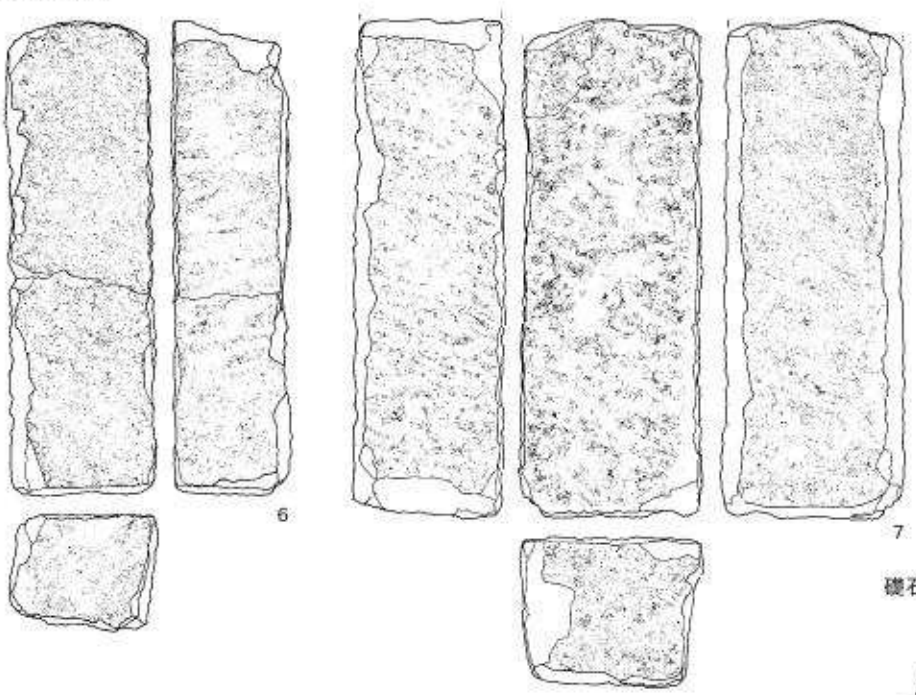
礎石128(3)

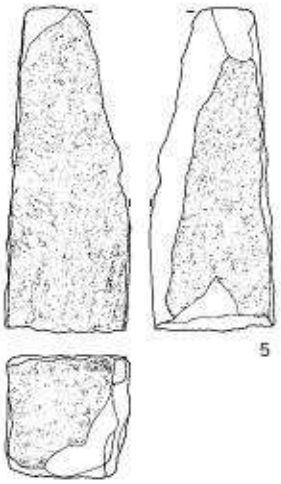


礎石40(4·5)

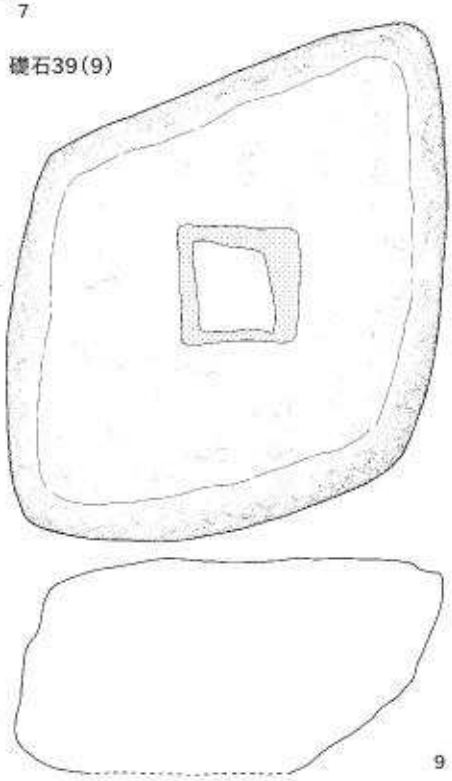


SD14(6·7)

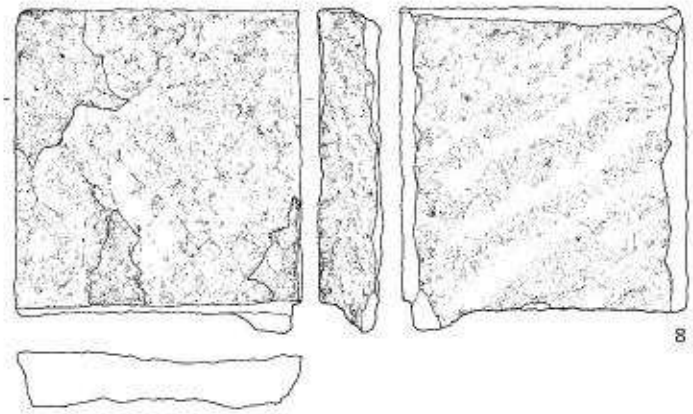




礎石39(9)

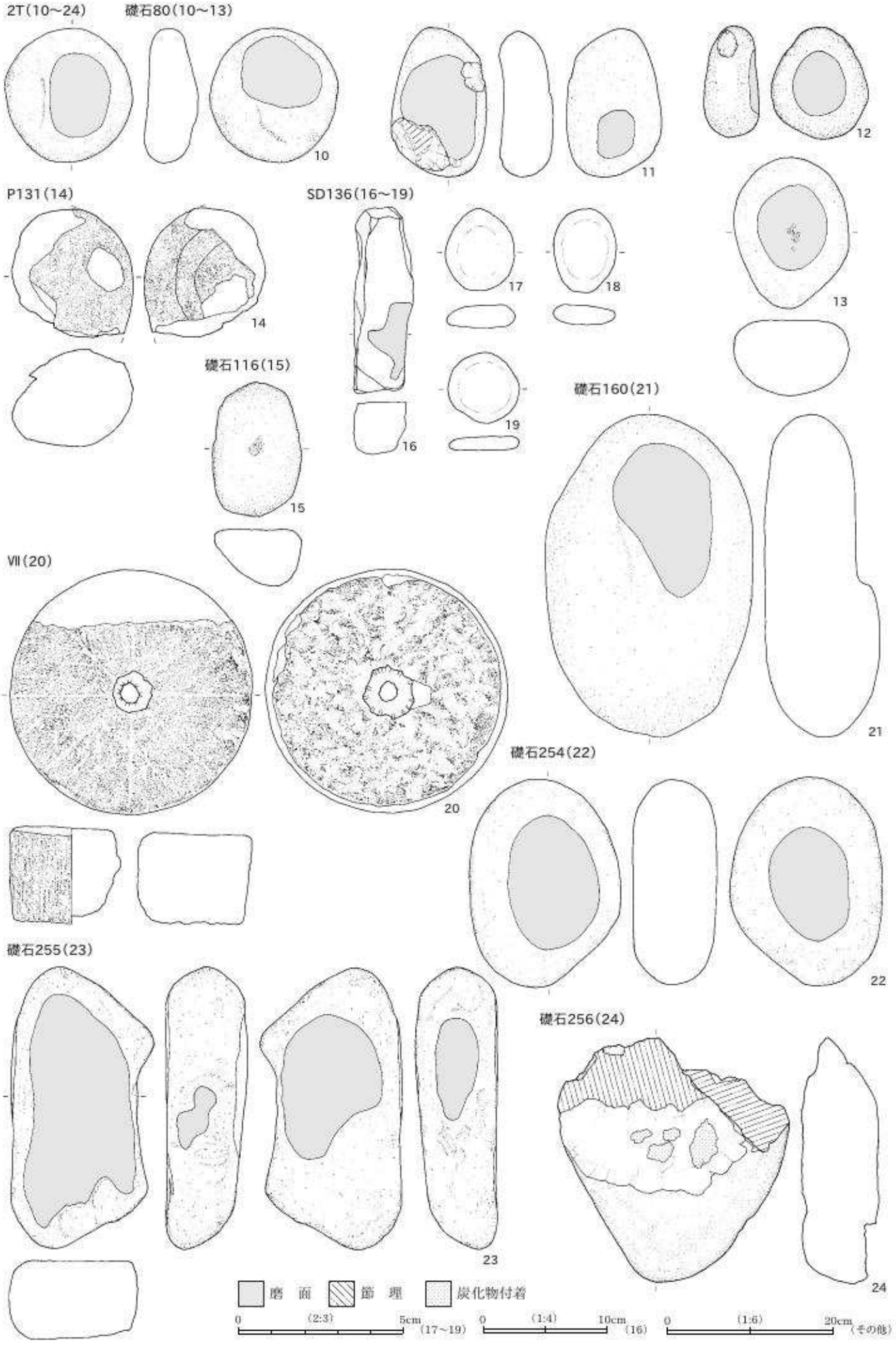


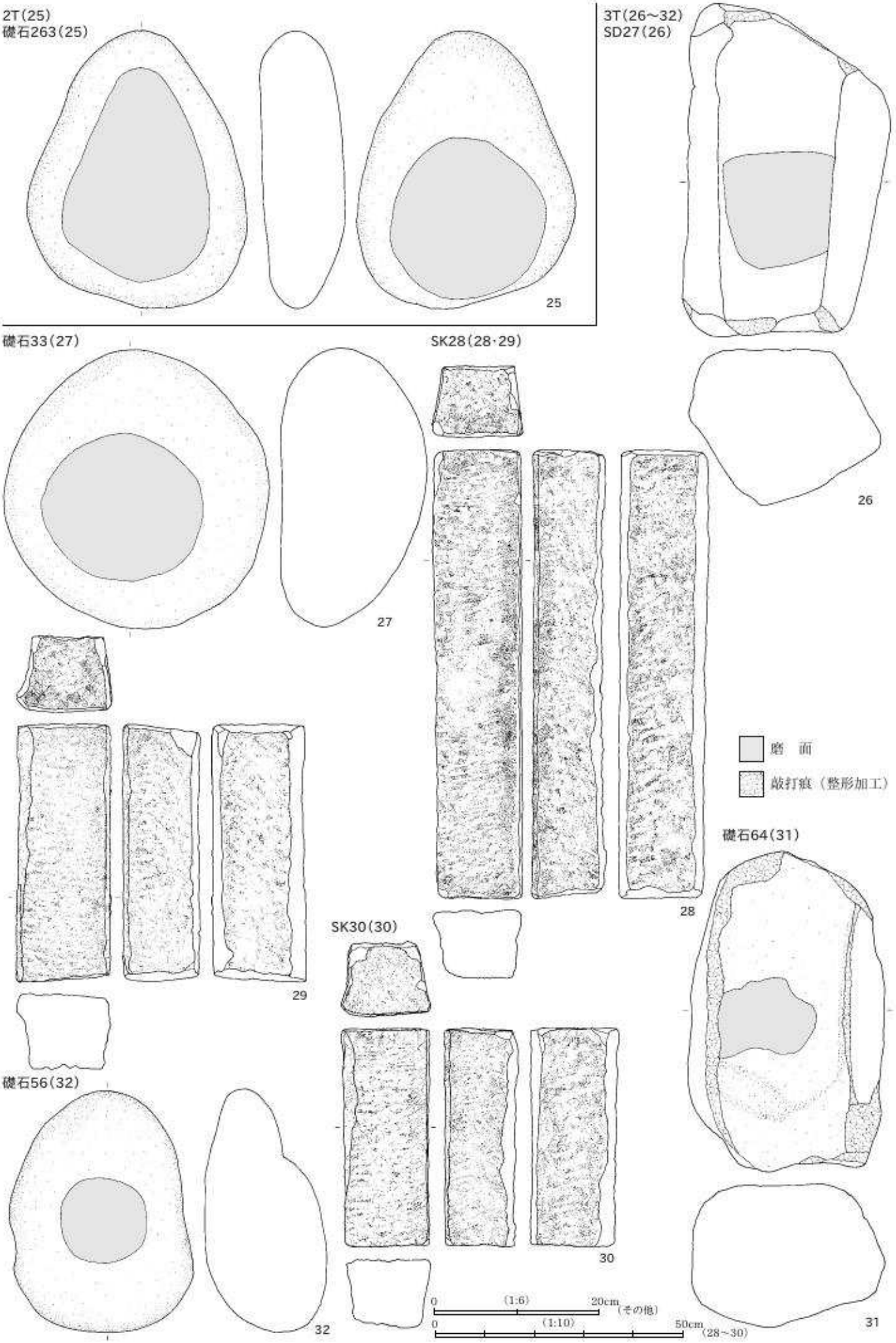
礎石36(8)



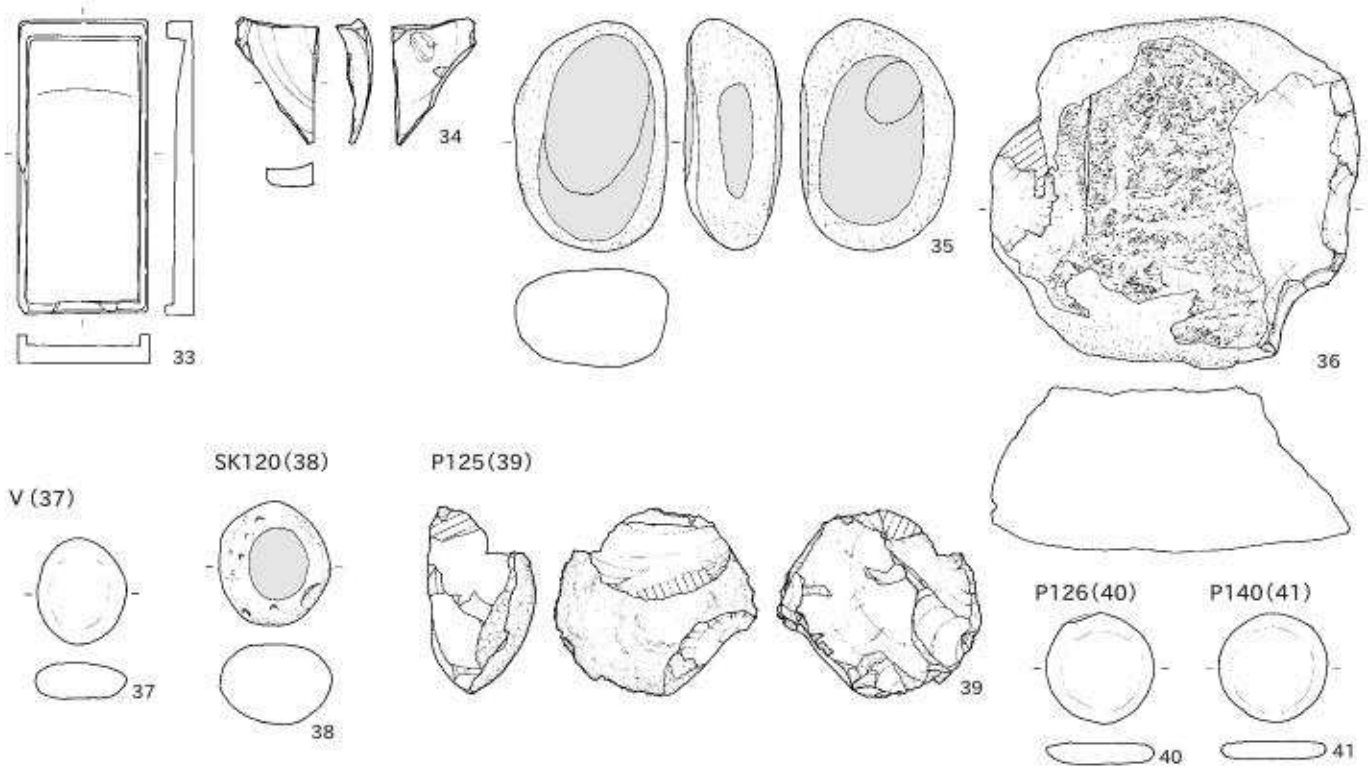
炭化物付着

0　(1:10)　50cm


2T(10~24)
礫石80(10~13)
10
11
12
P131(14)
14
SD136(16~19)
16
17
18
19
13
礫石116(15)
15
礫石160(21)
21
VII(20)
20
礫石254(22)
22
礫石255(23)
23
礫石256(24)
24
磨面
節理
炭化物付着
0 (2:3) 5cm (17~19)
0 (1:4) 10cm (16)
0 (1:6) 20cm (その他)

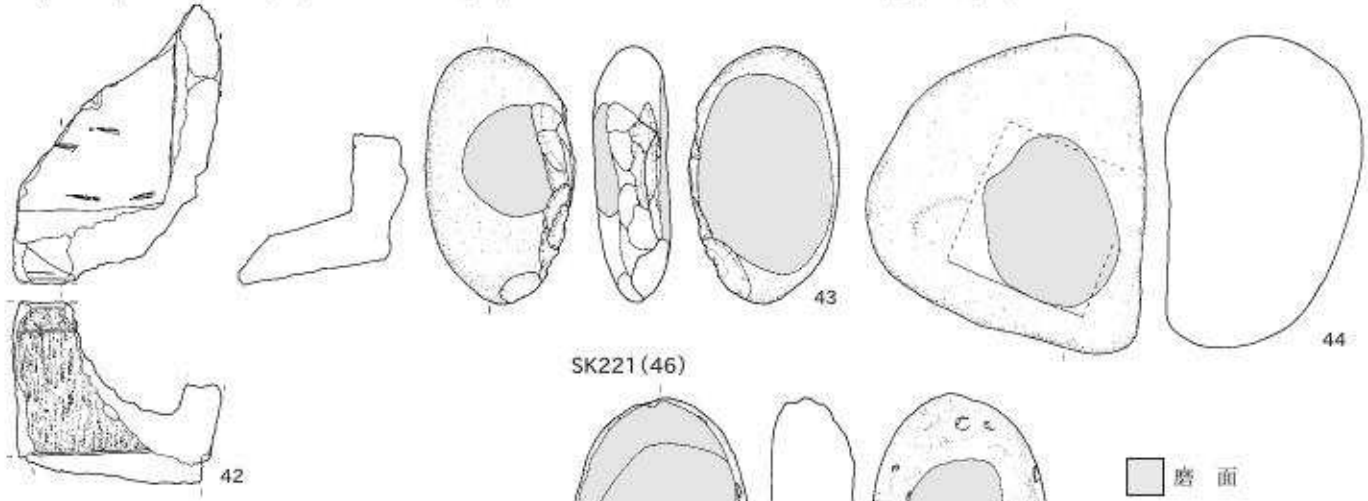

2T(25)
礎石263(25)
25
3T(26～32)
SD27(26)
礎石33(27)
27
SK28(28·29)
26
28
磨　面
敲打痕（整形加工）
礎石64(31)
29
SK30(30)
礎石56(32)
30
32
31
0　(1:6)　20cm（その他）
0　(1:10)　50cm（28～30）

3T(33~41)　IV(33·34)　SD79(35)　礫石108(36)

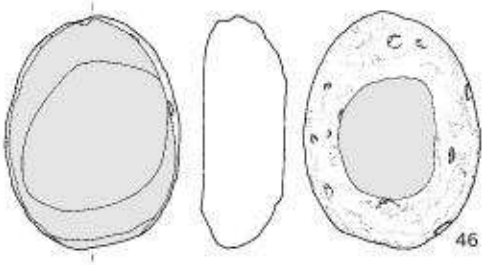


V(37)　SK120(38)　P125(39)　P126(40)　P140(41)

5T(42~47)　SD224(42)　V(43)　礫石206(44)

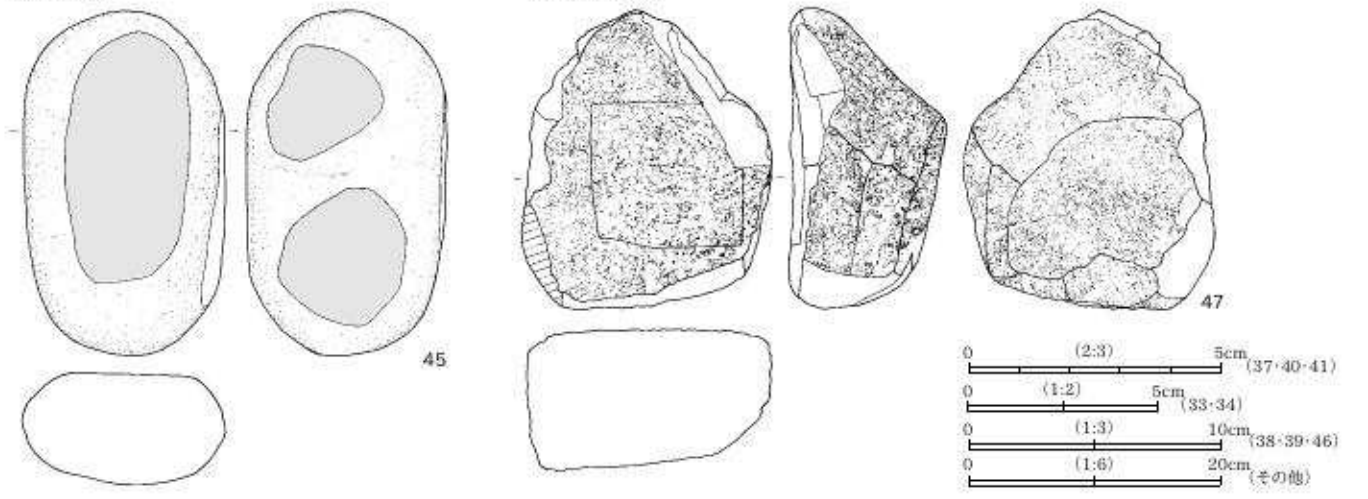


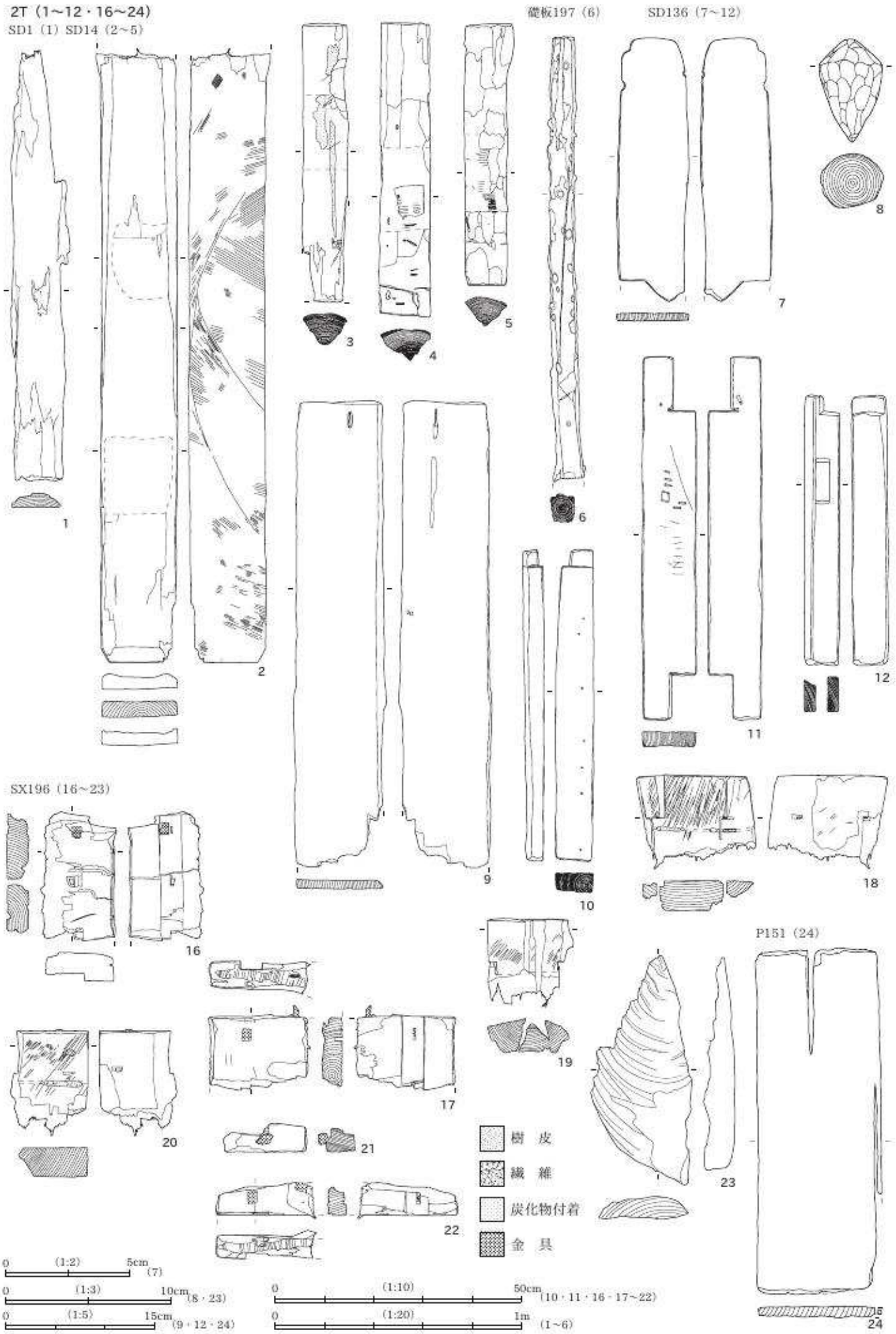
SK221(46)

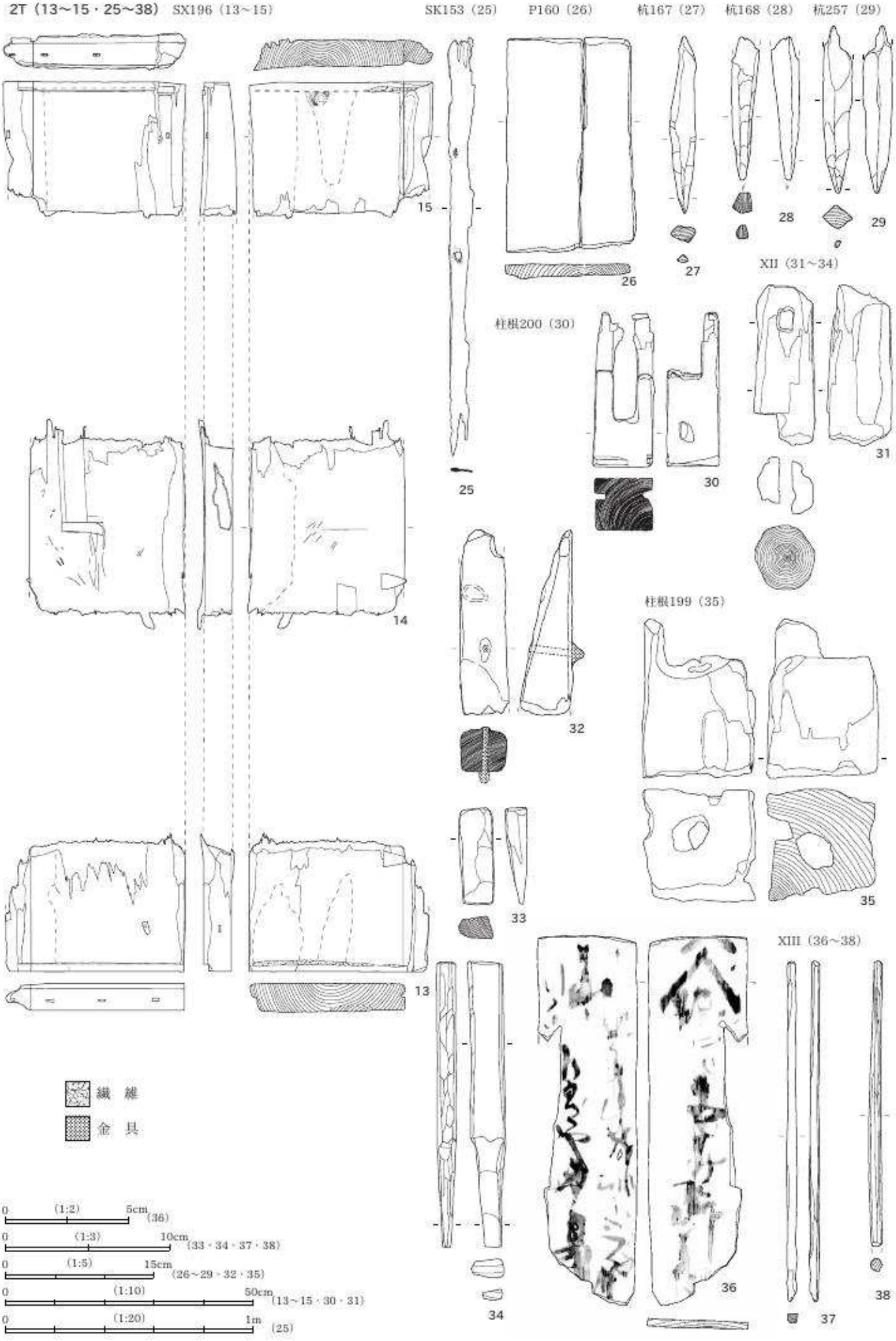


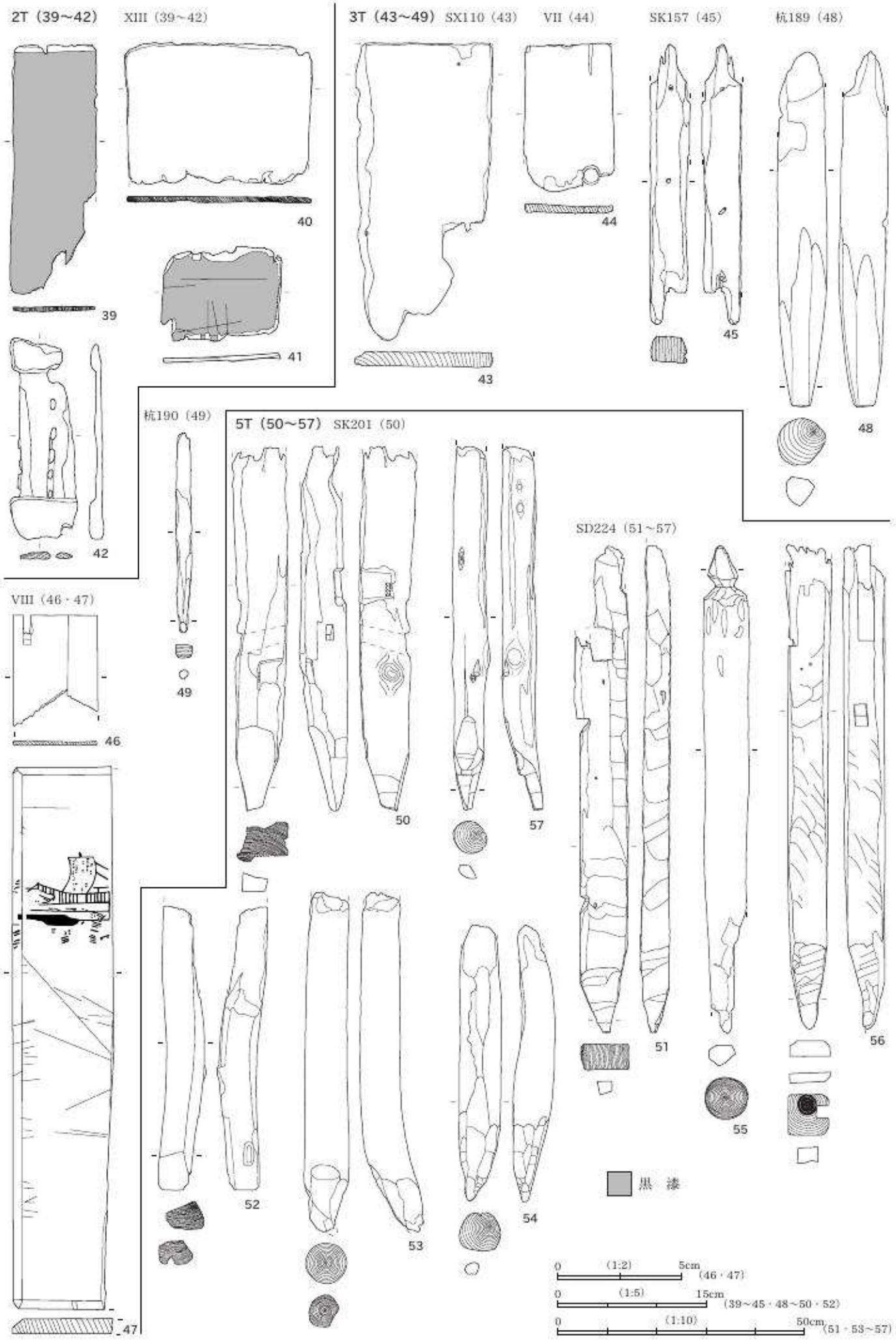
磨　面
節　理
敲打痕（整形加工）

P239(45)　礫石244(47)

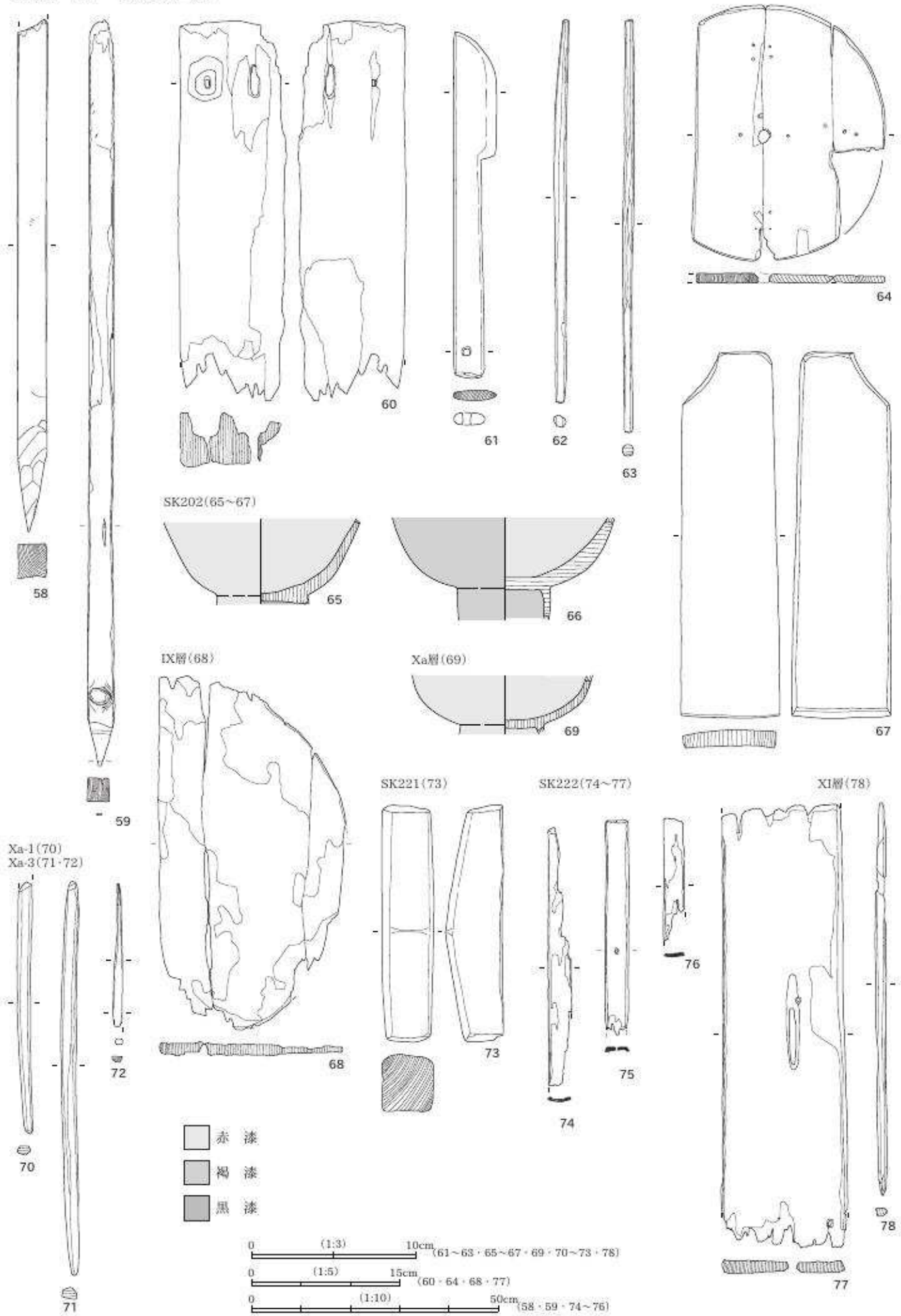


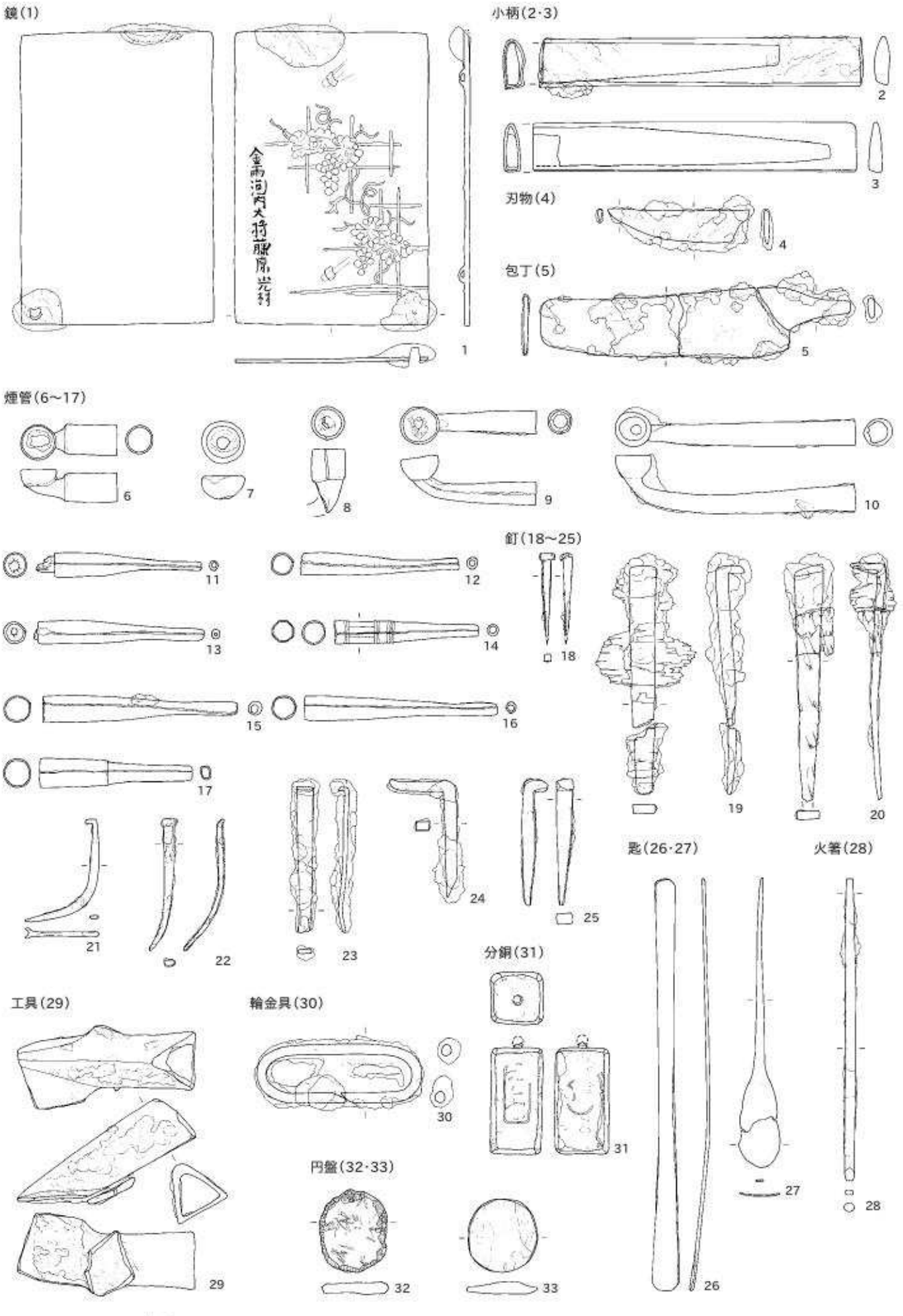

2T（1～12・16～24）
SD1（1）SD14（2～5）
礎板197（6）
SD136（7～12）
SX196（16～23）
P151（24）
樹　皮
繊　維
炭化物付着
金　具
0　(1:2)　5cm　(7)
0　(1:3)　10cm　(8・23)
0　(1:5)　15cm　(9・12・24)
0　(1:10)　50cm　(10・11・16・17～22)
0　(1:20)　1m　(1～6)


2T（13~15・25~38）
SX196（13~15）
SK153（25）
P160（26）
杭167（27）
杭168（28）
杭257（29）
XII（31~34）
柱根200（30）
柱根199（35）
XIII（36~38）
13
14
15
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
繊維
金具
0 (1:2) 5cm（36）
0 (1:3) 10cm（33・34・37・38）
0 (1:5) 15cm（26~29・32・35）
0 (1:10) 50cm（13~15・30・31）
0 (1:20) 1m（25）

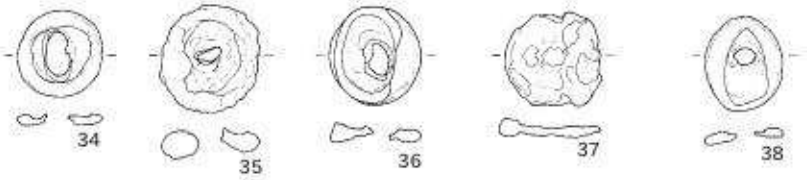

2T（39～42）
XIII（39～42）
3T（43～49）
SX110（43）
VII（44）
SK157（45）
杭189（48）
杭190（49）
5T（50～57）
SK201（50）
SD224（51～57）
VIII（46・47）
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
黒 漆
0 (1:2) 5cm (46・47)
0 (1:5) 15cm (39～45・48～50・52)
0 (1:10) 50cm (51・53～57)

5T(58~78)　SD224(58~64)

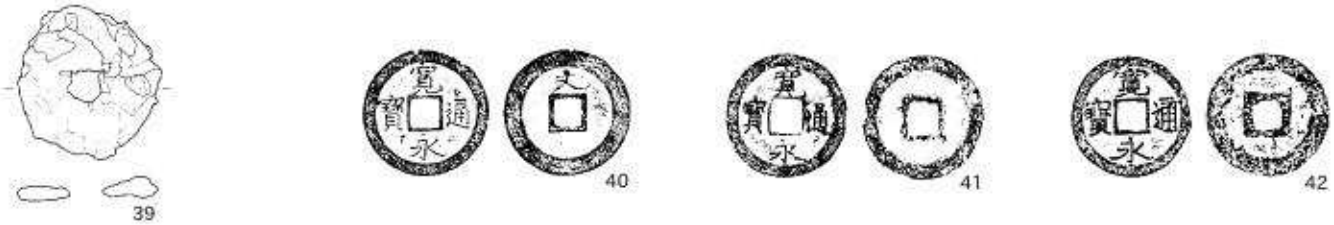



鏡(1)
小柄(2·3)
刃物(4)
包丁(5)
煙管(6~17)
釘(18~25)
鈴(26·27)
火箸(28)
工具(29)
輪金具(30)
分銅(31)
円盤(32·33)
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
0 (2:3) 5cm (1~3·26·27·31~33)
0 (1:2) 5cm (6~18·30)
0 (1:3) 10cm (4·5·19~25·28·29)

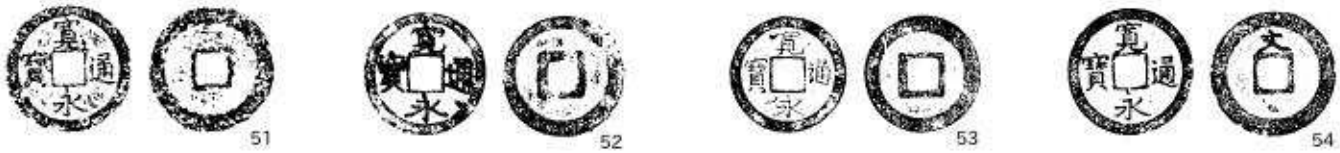
雁首銭(34～38)

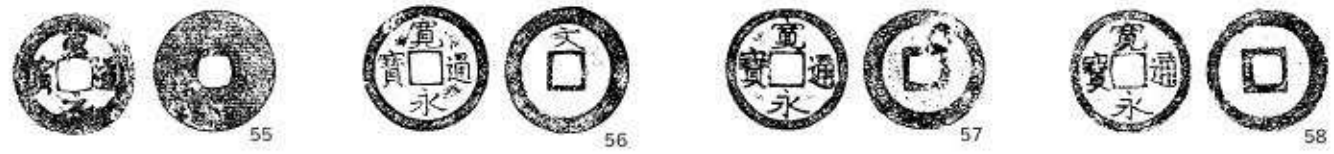


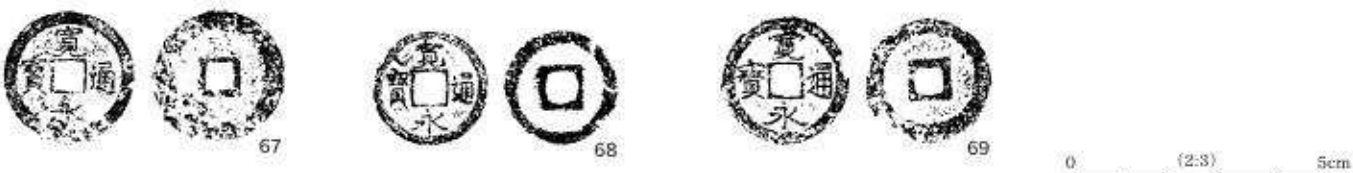
銭貨(39～69)　2T(39～48)



3T(49～69)





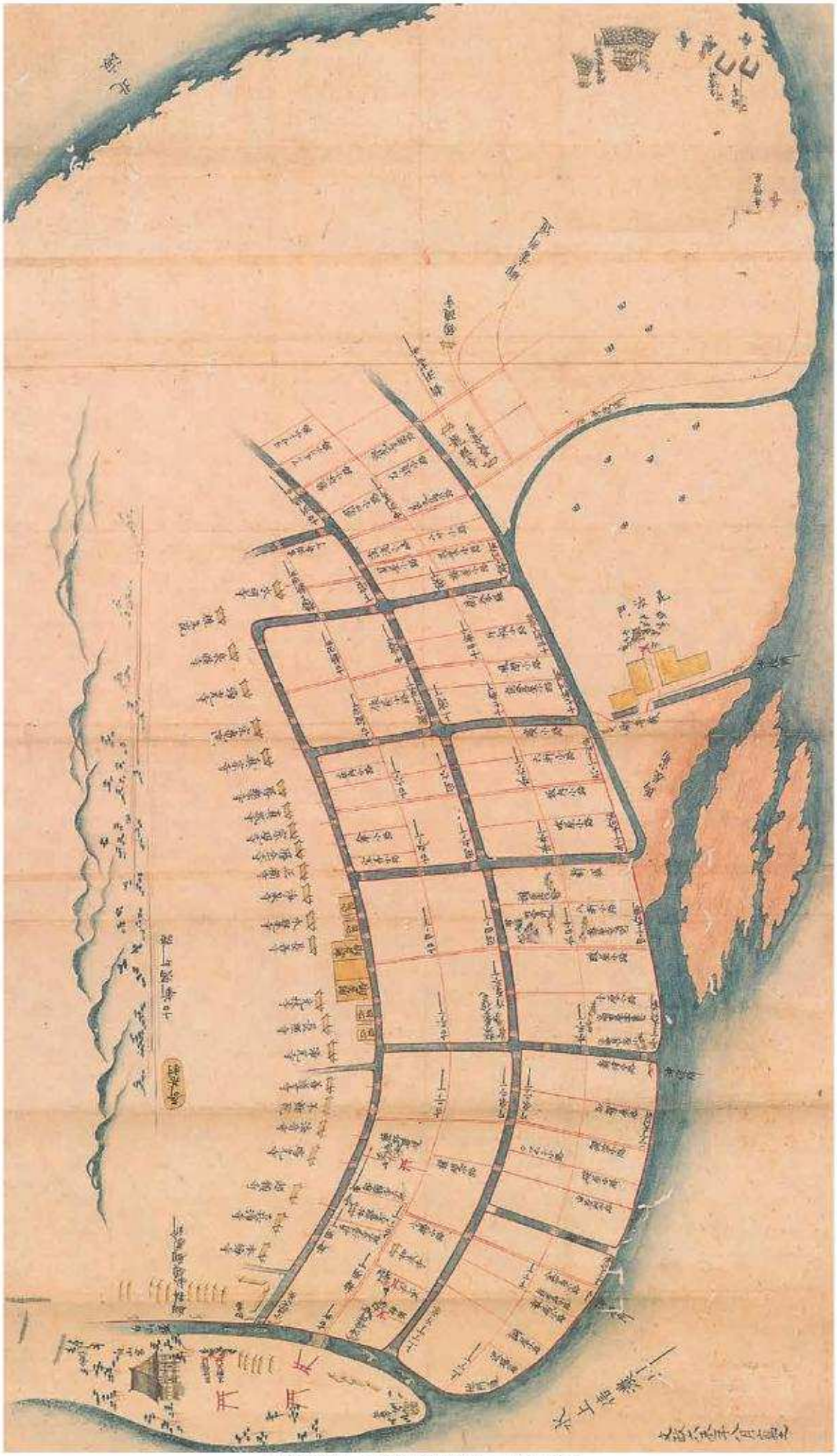


0　(2:3)　5cm

3T(70～78)

5T(79～85)

0　(2:3)　5cm



「新潟町絵図」　文政6（1823）年　新潟市所蔵

本町通九番町付近（南から）明治6（1873）年　新潟市所蔵

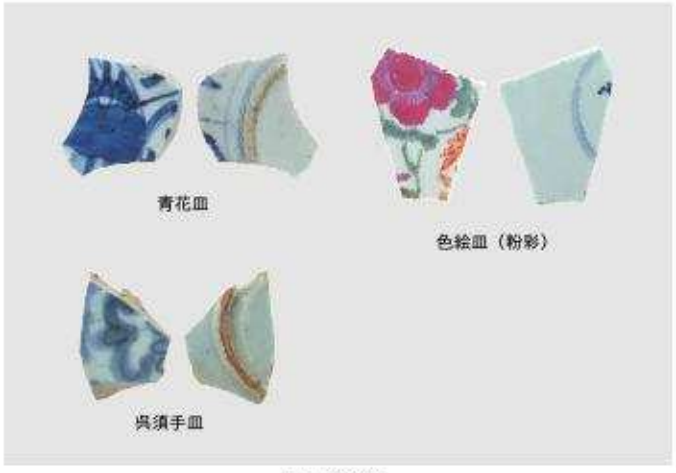
本町通六番町の朝市（南から）大正期～昭和期　新潟市所蔵

国産磁器　17世紀～19世紀

国産陶器　17世紀～19世紀

灯火具

土人形



中国産磁器

遺跡の位置（日本地図センター発行、昭和23年5月20日米軍撮影）
遺跡推定線
西堀通
古町通
東堀通
5T
広小路
本町通
3T
2T
上大川前通
遺跡推定線

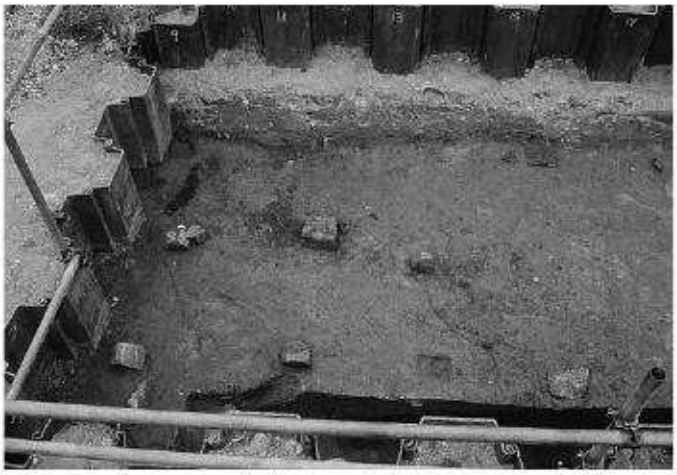
図版 50

2T　近景　西から

北壁基本層序Ⅰ～Ⅴ層　南から

北壁基本層序Ⅴ～Ⅻ層　南から

Ⅱ層　礎石検出状況（東側）　南から



Ⅱ層　礎石検出状況（西側）　南から

SD1一礎板1検出状況　南から

SD1　断面（北側）　南から

ⅢS層　完掘（東側）　南から

ⅢS層　完掘（西側）　南から

SD2　断面　南から

SD3　断面　北から

Ⅲ層　完掘（東側）　南から

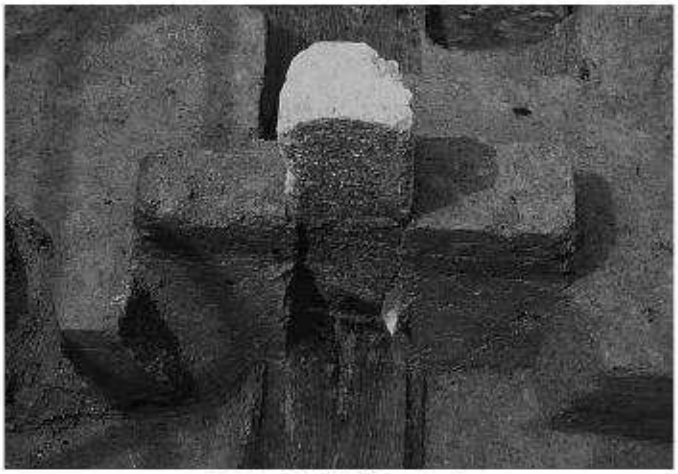
Ⅲ層　完掘（西側）　南から

礎石35　断面　南から

礎石40　断面　北から

SD14ー礎板1検出状況　西から

SD14一礎板・そろばん検出状況　西から



SD14一礎石1断面　南から

SK4　断面　東から

SK23　完掘　南から

SD127　完掘　南から

ⅣS層　完掘（東側）　南から

ⅣS層　完掘（西側）　南から

礎石36　検出状況　西から

礎石39　検出状況　西から

SK37　断面　西から

SK37　完掘　南から

SK12　完掘　東から

P75　柱根断面　東から

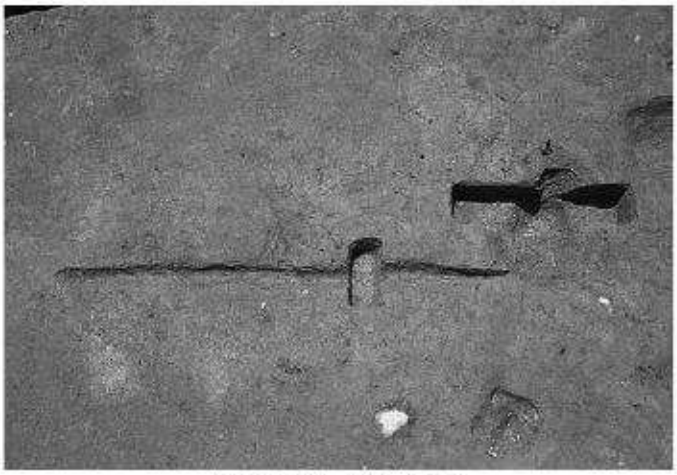
Ⅵ層　完掘（東側）　南から

Ⅵ層　完掘（西側）　南から

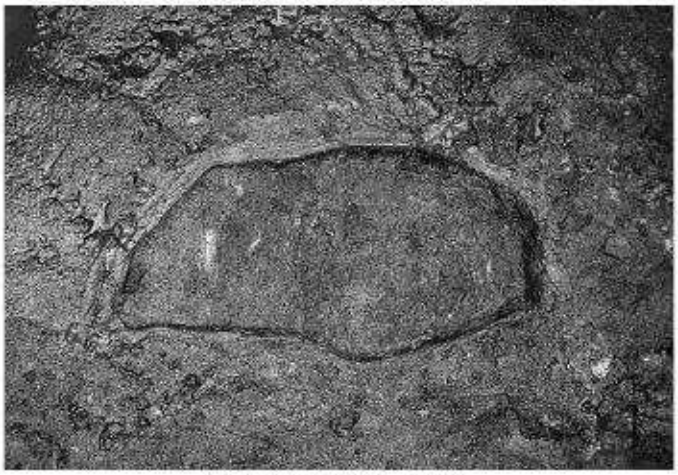
礎石80・根固め検出状況　東から

礎石80・根固め断面　東から

礎石80下　根固め検出状況　東から



SD58・P60　完掘　北から



礎石115　検出状況　東から

礎石122・123　検出状況　北から

礎板197　検出状況　南から

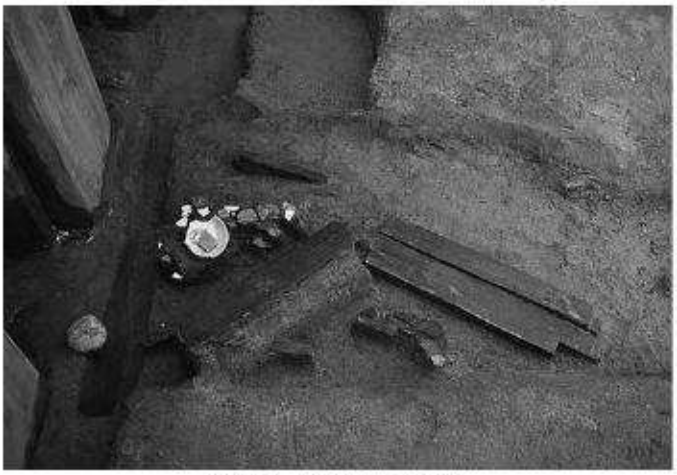
礎板197　断面　西から

杭258　断面　東から

SK129　甕検出状況　南から

SK129　甕断面　西から

SD136　出土状況　北から


SD136　出土状況　東から

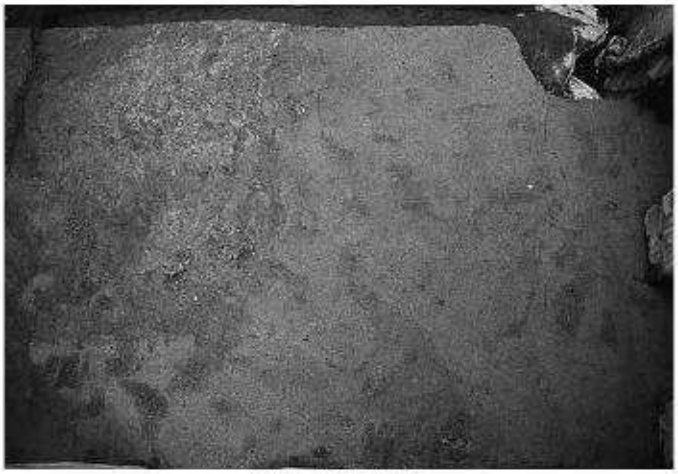
SX196　検出状況　南から

Ⅷ層　出土状況　東から

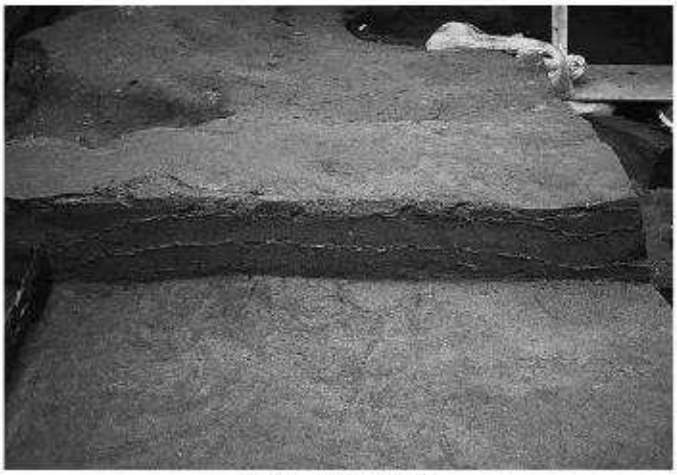
Ⅷ層　出土状況　西から

SK146　完掘　北から

P151　完掘　北西から



X層　完掘　南から



SK153　断面　東から

SK153　完掘　北から

XI層　完掘（西側）　北から

杭167　断面　北から

杭257　断面　南から

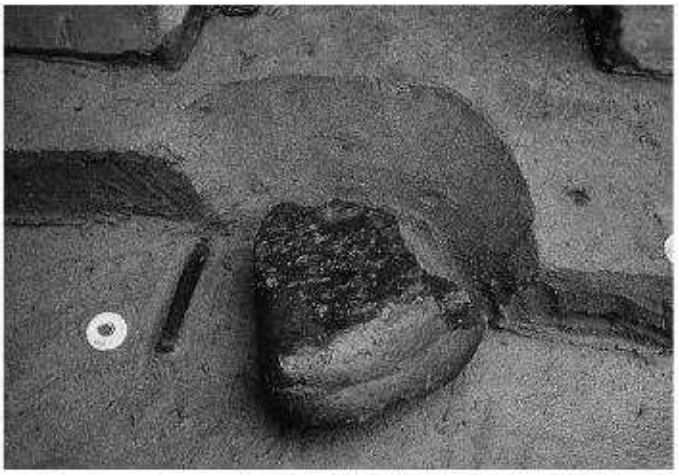
P159・160　断面　南から

P160　出土状況　北から

SX178　完掘　東から

XIIIS層　出土状況　東から

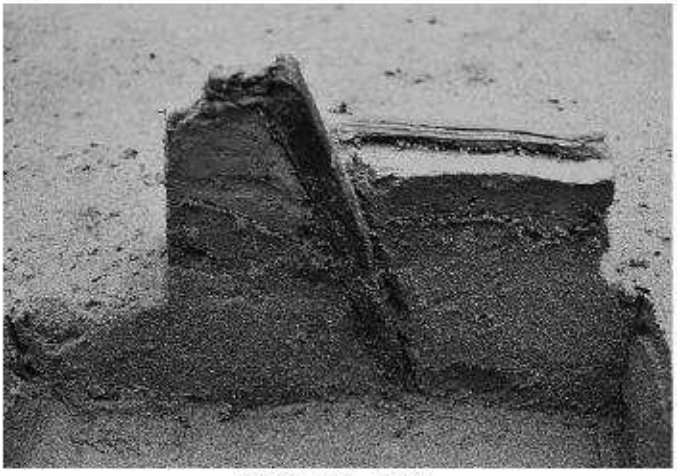
柱根199・礎石256　断面　南から



礎石256　完掘　南から

礎石259　出土状況　南から

礎石262　断面　西から



杭252　断面　北から

3T　近景　南から

西壁基本層序（Ⅰ～Ⅳ）　東から

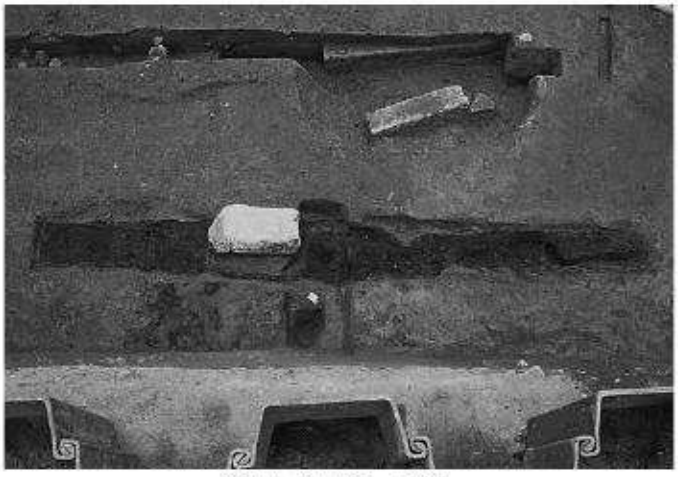
西壁基本層序（ＶＳ～Ｘ）　東から

Ⅱ層上面　焼土・礎石検出状況（東側）　南から

Ⅱ層上面　焼土・礎石検出状況（中央）　南から

Ⅱ層上面　焼土・礎石検出状況（中央）　南から

Ⅱ層上面　焼土・礎石検出状況（西側）　南から


SD27　検出状況　北から

SD27　断面（西側）　西から

SD27　断面（中央・東）　東から

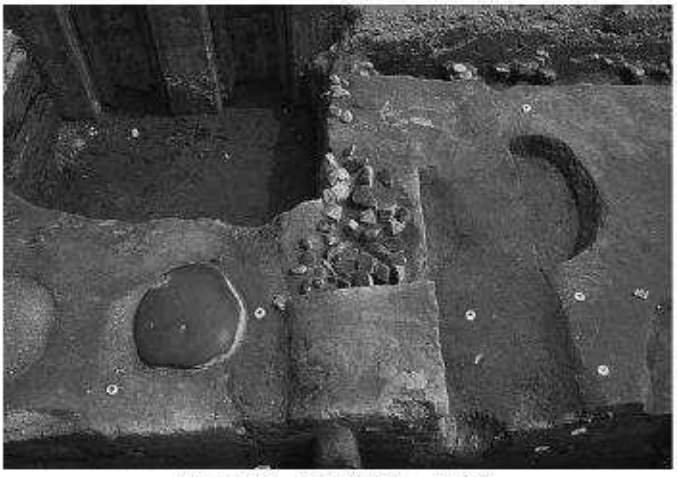
SD27　断面（中央・西）　西から

SD27　断面（東側）　西から

SD27　完掘　北から

P20・P45　断面　東から

Ⅲａ層上面　完掘（東側）　南から


Ⅲａ層上面　完掘（中央）　南から

Ⅲａ層上面　完掘（西側）　南から

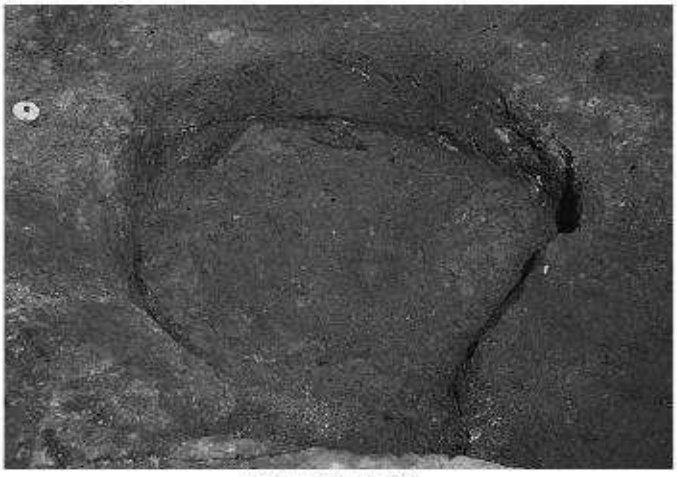
SK13　断面　北から

SK13　完掘　北から

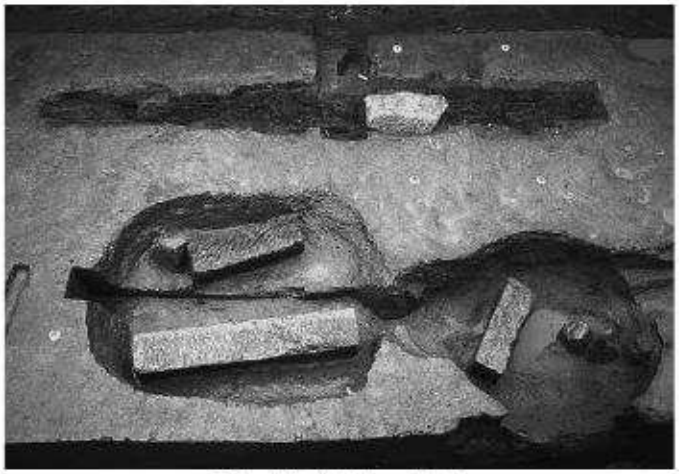
SD15　礫検出状況　西から

SD15　断面　北から

P19　断面　西から

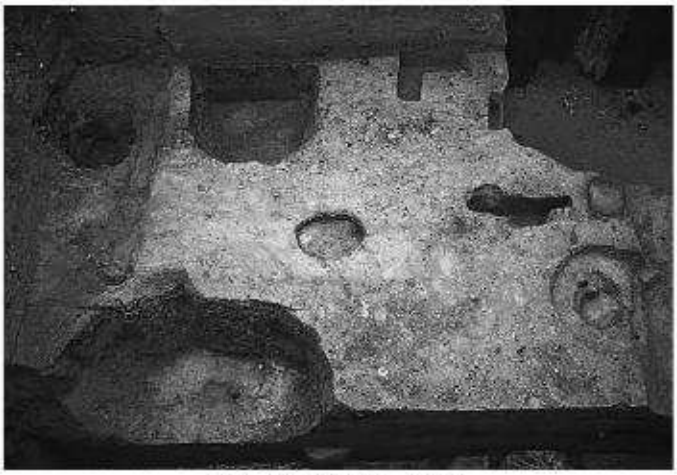

P19　完掘　西から

Ⅲ層　完掘（東側）　南から



Ⅲ層　完掘（中央）　南から

Ⅲ層　完掘（中央）　南から



Ⅲ層　完掘（西側）　南から

SK26　断面　北から

SK26　完掘　南から

SK28　断面　北から

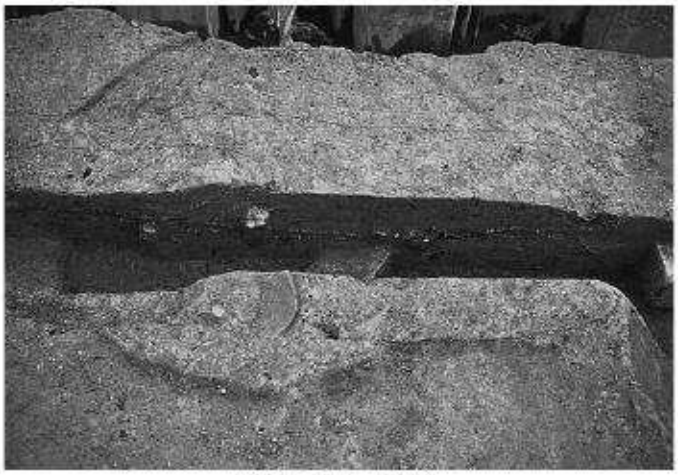
SK28　完掘　北から

SK30　断面　北から

SK30　完掘　北から

SD29　断面　北から

SD29　完掘　北から



SD32　断面　北から

SD31　完掘　北から

SD32　完掘　南から

SD31　断面　北から

SD145　礎板検出状況　西から

SD145　礎板検出状況　東から

SD145　断面　北から

SD145　断面　南から

Ⅳ層　完掘（東側）　南から

Ⅳ層　完掘（中央）　南から

Ⅳ層　完掘（西側）　南から

SK68　断面　北から

SK68　完掘　北から

SD48　断面　北から

SD48　完掘　東から

SD71　検出状況　東から

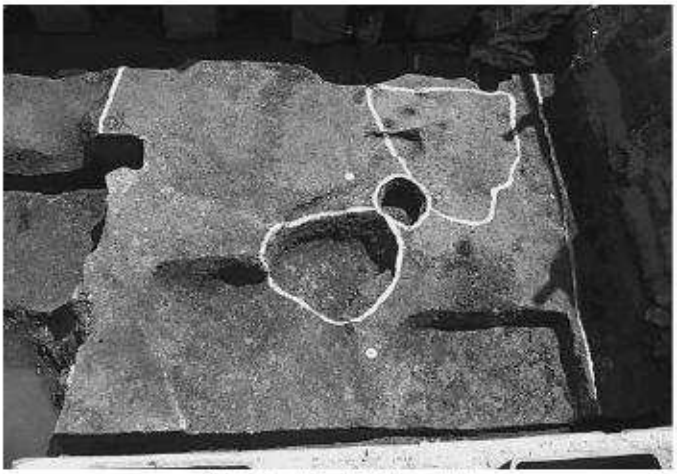
SD71　断面　南から

SD71・78　断面　南から

SD71　完掘　東から

Ⅴ層上面　完掘（東側）　北から

Ⅴ層上面　完掘（中央）　北から


Ⅴ層上面　完掘（西側）　北から

SK95　断面　西から

SK95　完掘　北から

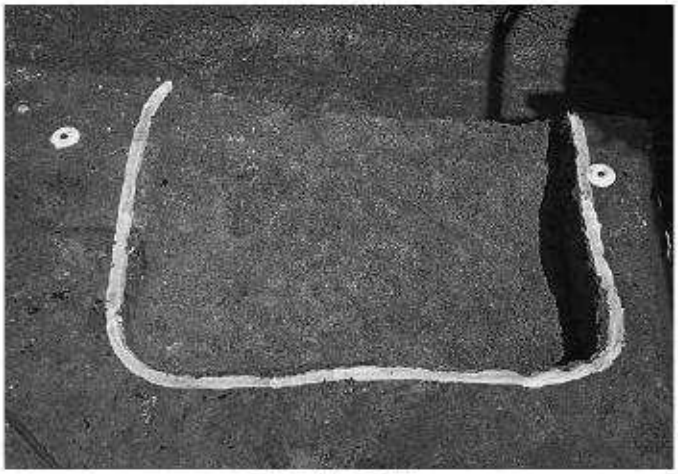
SD79　断面　北から

SD79　完掘　東から

SD91　断面　北から

SD91　完掘　東から

P96　断面　西から

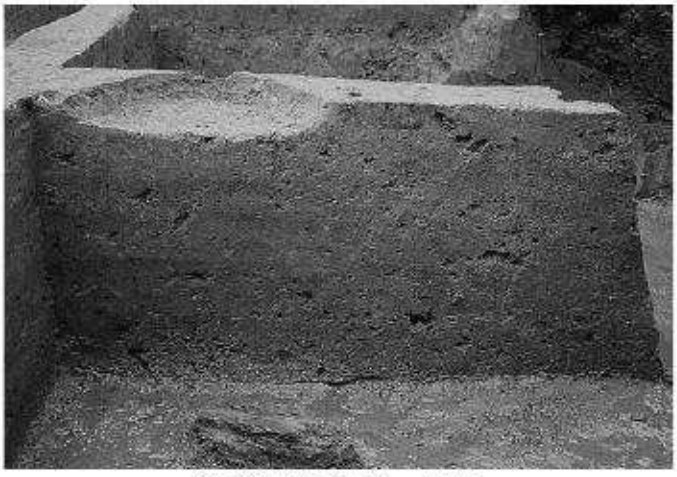

P96　完掘　西から

P183　断面　南から

SX94　断面　西から

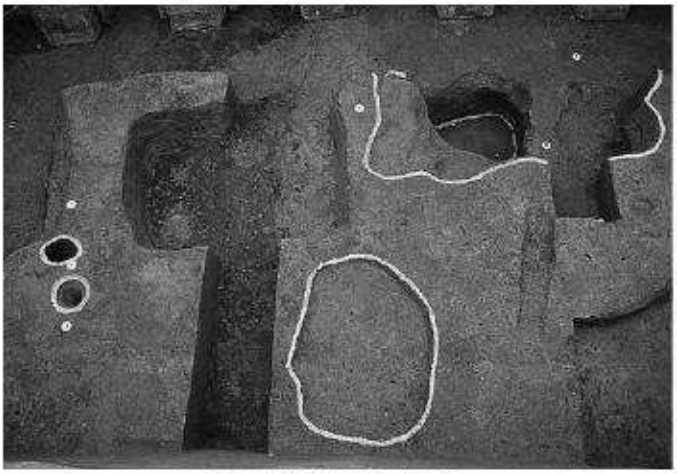
SX94　出土状況　北から

SX110　断面（西側）　南から

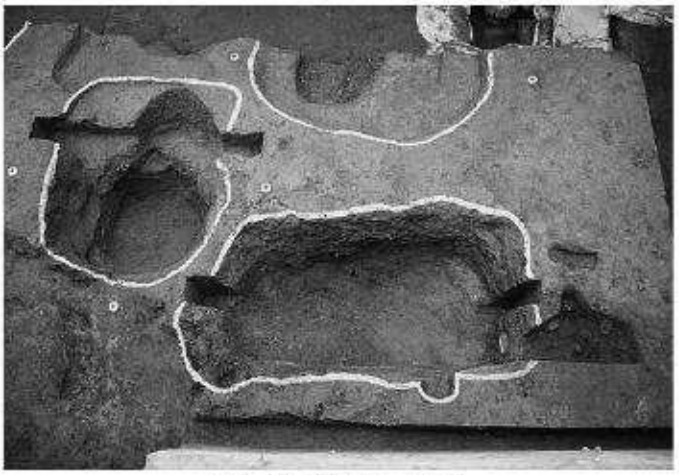

SX110　断面（東側）　南から

SX110　硬化面検出状況　東から

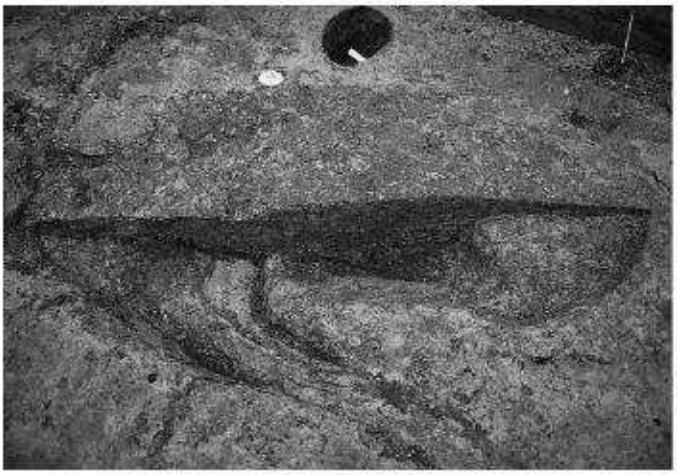
SX110　完掘　東から



Ⅵ層　完掘（中央）　北から



Ⅵ層　完掘（西側）　北から



SK117　断面　南から

SK119　断面　北から

SK119　完掘　北から

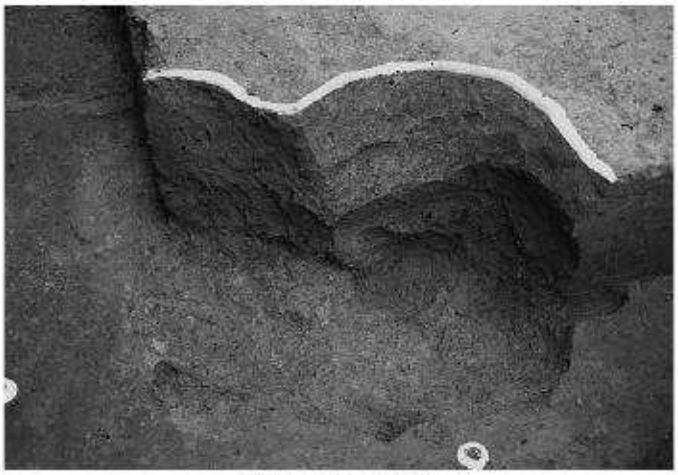
SK120　断面　南から

SK120　完掘　北から

P118　断面　東から

P118　完掘　南から

P125　断面　東から

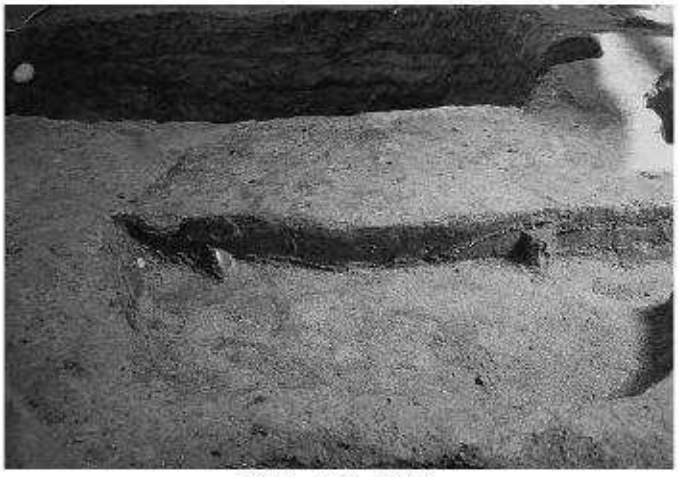


P125　完掘　南から

Ⅶ層　完掘（中央）　南から

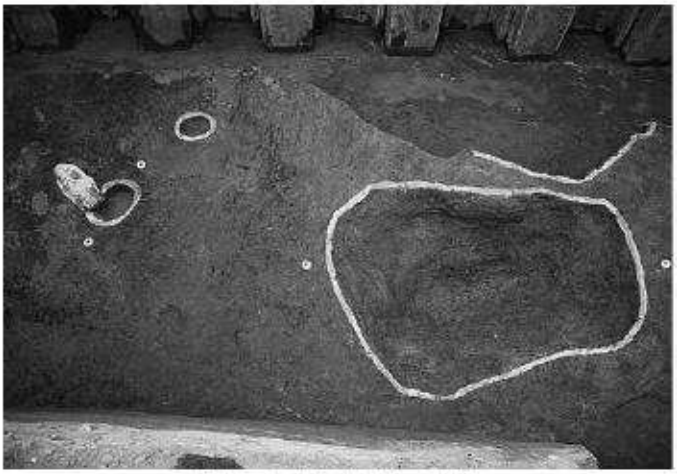
Ⅶ層　完掘（西側）　南から

ⅦS層　木製品出土状況　東から



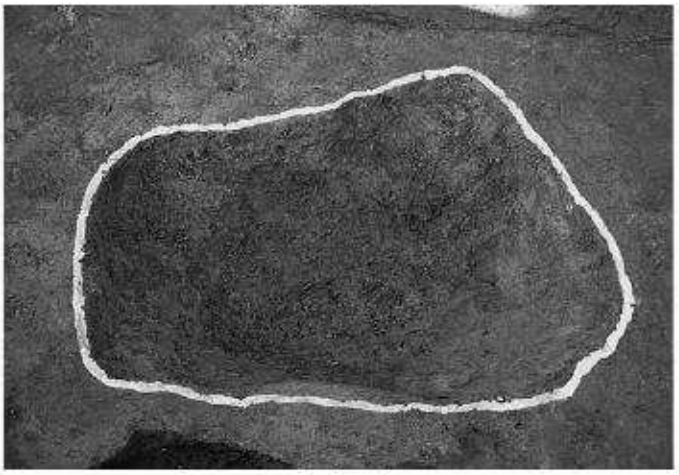
P142　断面　南から

P142　完掘　南から


Ⅷ層上面　完掘（中央）　北から

Ⅷ層上面　完掘（西側）　北から

SK157　断面　南から

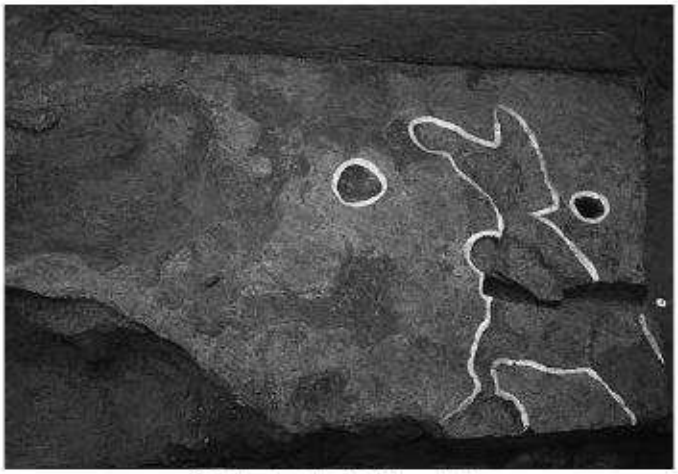

SK157　完掘　南から

P156　断面　東から

P156　完掘　南から

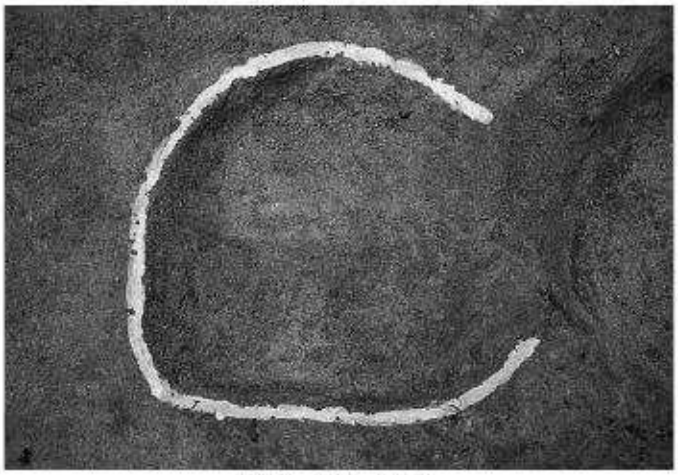
P141　断面　北から

P141　完掘　北から



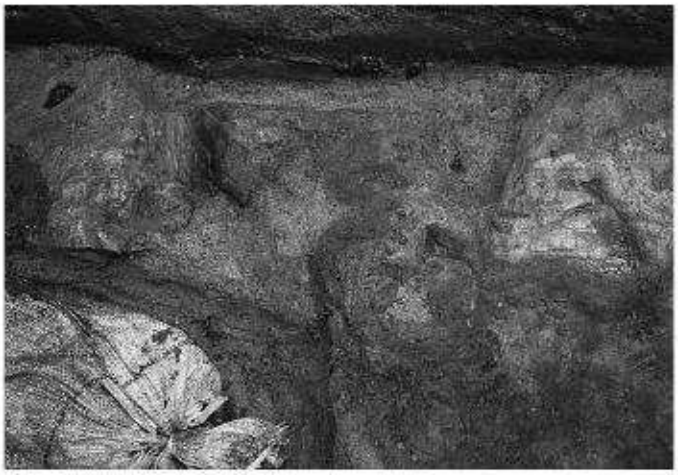
Ⅸ層上面　完掘（東側）　北から

Ⅸ層上面　完掘（西側）　北から



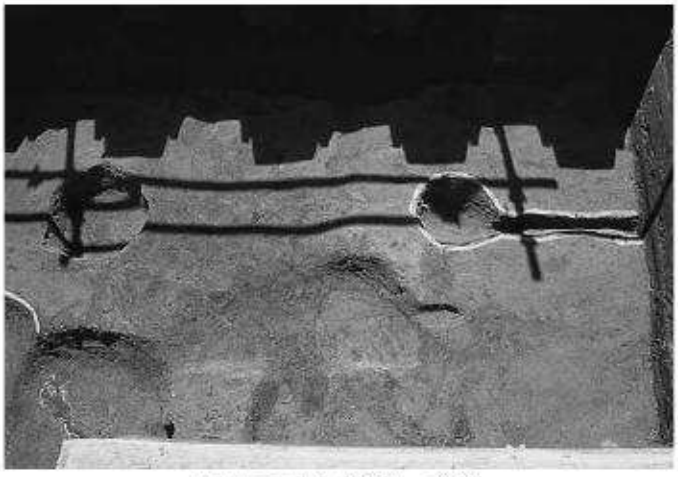
P158　完掘　南から

SK174　断面　南から



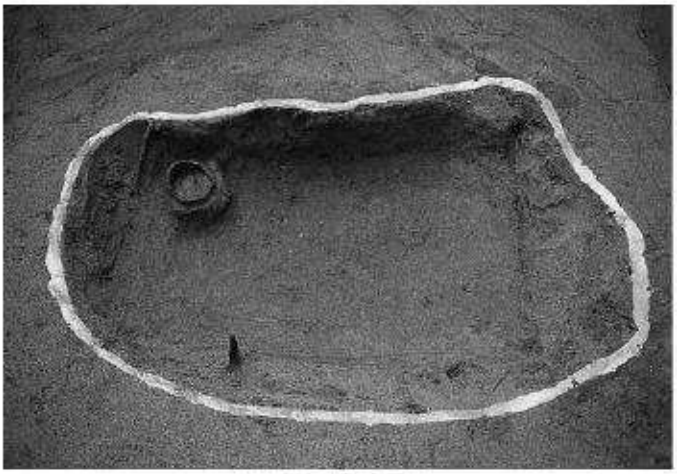
SK174　完掘　南から

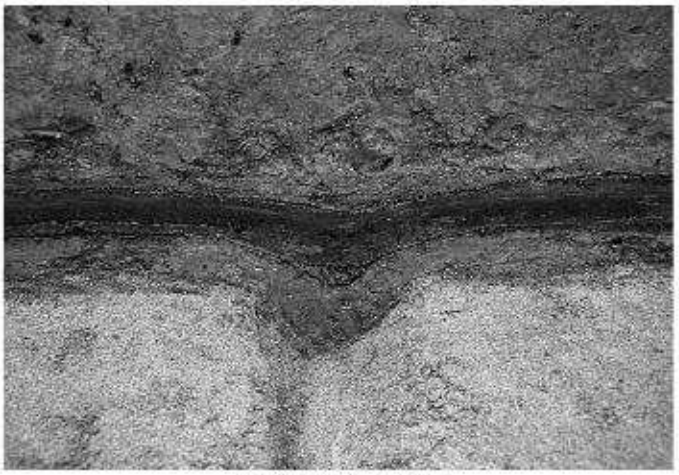
Ⅹ層上面　完掘（中央）　北から

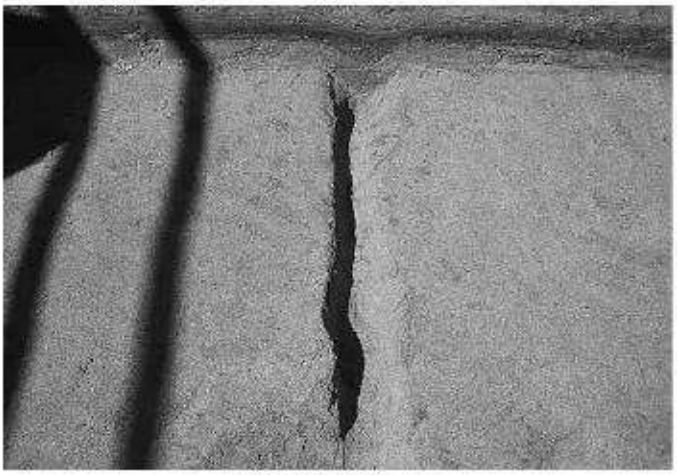


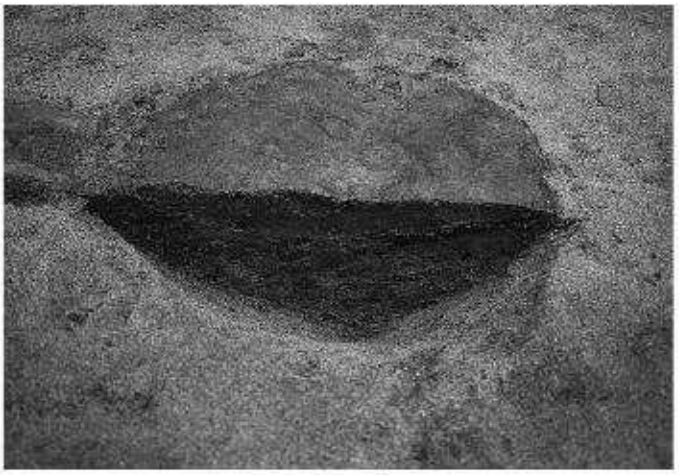
Ⅹ層上面　完掘（西側）　北から

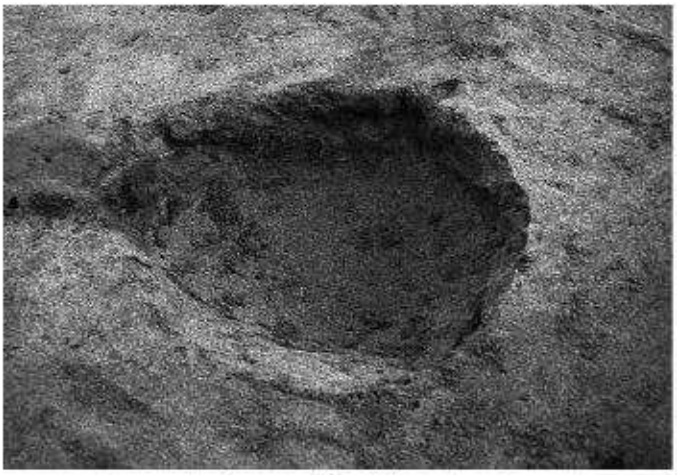
SK187　断面　東から

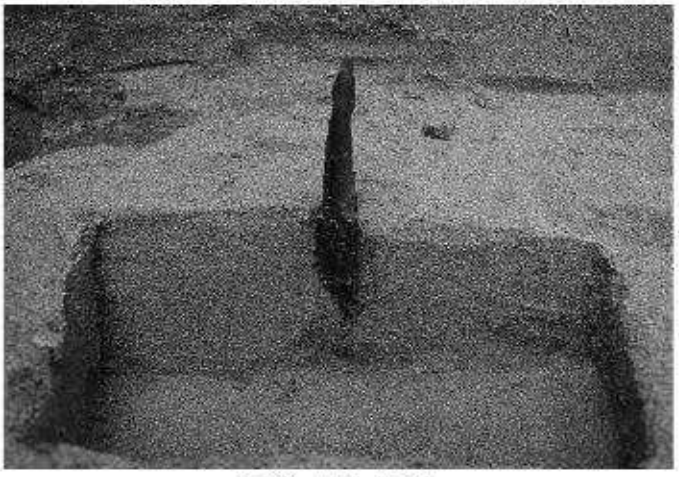

SK187　完掘　東から


SD182　断面　東から


SD182　完掘　東から


P181　断面　南から


P181　完掘　南から


杭190　断面　東から

5T　近景　東から

南壁基本層序（Ⅰ～Ⅳ層）　北から

南壁基本層序（Ⅴ～Ⅻ層）　北から

Ⅲ層　遺物出土状況　北から

SD224　杭検出状況（東側）　北から

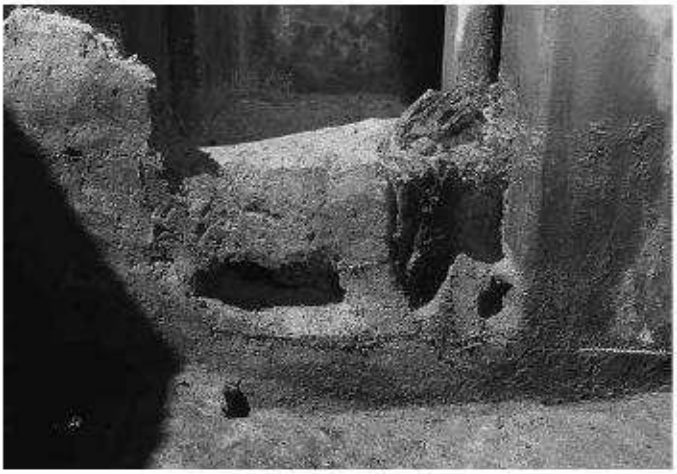
SD224　杭検出状況（西側）　北から

SD224　杭1・2断面　北西から

SD224　杭12断面　東から

SD224　杭24断面　東から

SD224　杭35断面　北から


P201　断面　東から

P201　礎板検出状況　東から

Ⅴ層　完掘（東側）　北から

Ⅴ層　完掘（西側）　北から

SK202　遺物出土状況　北から

SK202　断面　西から

SK202　完掘　北から

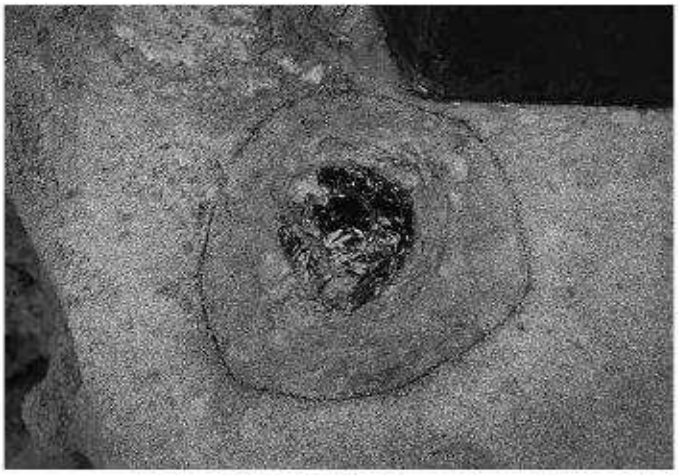
Ⅵ層上面　完掘（東側）　北から

Ⅵ層上面　完掘（西側）　北から

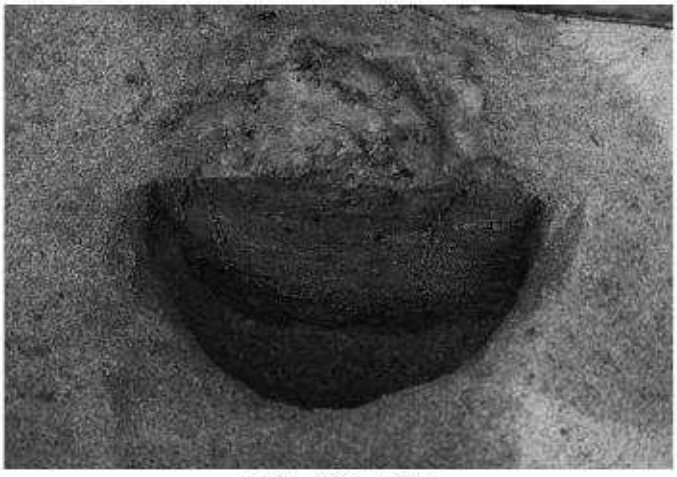
SK203　断面　南から

P205　断面　南から

SK231　完掘　北から



P227　検出状況　南から



P227　断面　南から

SD230　完掘　北から

Ⅸ層上面　完掘（東側）　北から

Ⅸ層上面　完掘（西側）　北から

SK207　完掘　北から

Ⅸ層　木製品出土状況　西から

Ⅸa層　煙管・小柄出土状況　北から

Ⅸb層　土鐘出土状況　北から

Ⅹ層上面　完掘（東側）　北から

Ⅹ層上面　完掘（西側）　北から

P213　断面　北から

P213　完掘　西から

XI層　完掘（東側）　北から

XI層　完掘（西側）　北から

礎石229　断面　南側

礎石229　完掘　南から

SK219　完掘　北から

SK221　木製品出土状況　西から

SK221　断面　西から

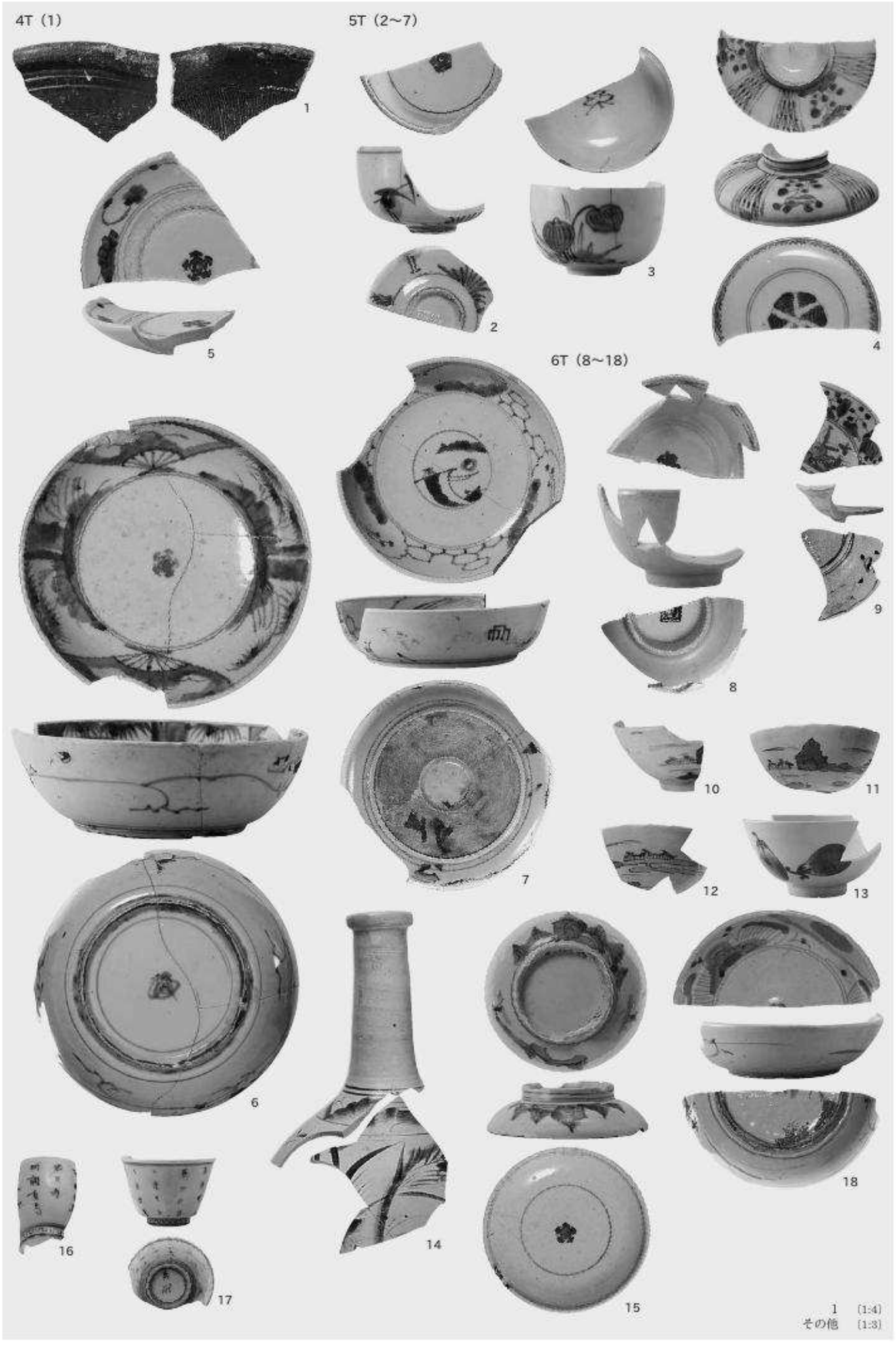
SK222　木製品出土状況　北から

SK222・223　断面　北から

XII層　完掘　東から

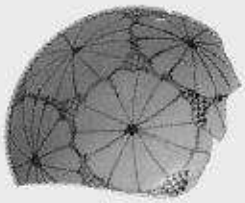
礎石245　検出状況　南から

柱根243　検出状況　南から


4T（1）
5T（2～7）
6T（8～18）
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
1　[1:4]
その他　[1:3]

6T（19～27）
19
20
21
22
23
24
25
26
27
7T（28・29）
28
8T（30・31）
29
30
31-1
31-2
9T（32～38）
32
33
34
35
36
37
38
全て　(1:3)

10T（39・40）


39

40

11T（41～48）

41

42

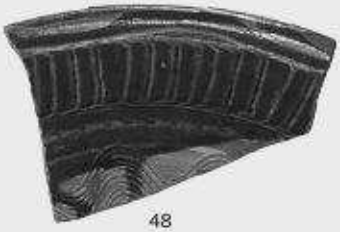
43

44

45

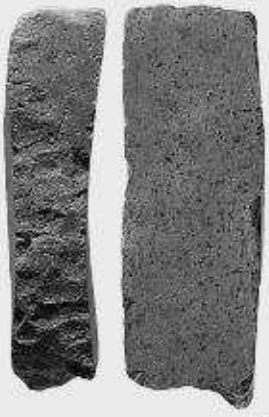
46

47


48

43・48（1:4）
その他（1:3）

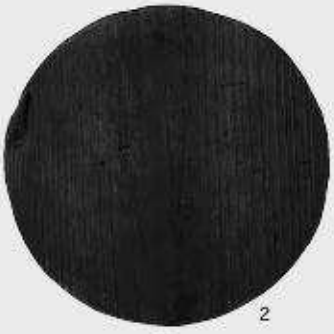
1


2

1（1:2）
2（1:4）

3T（1～6）

1

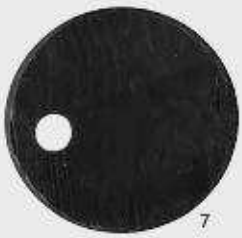

2

3

4

5

4T（7）


7

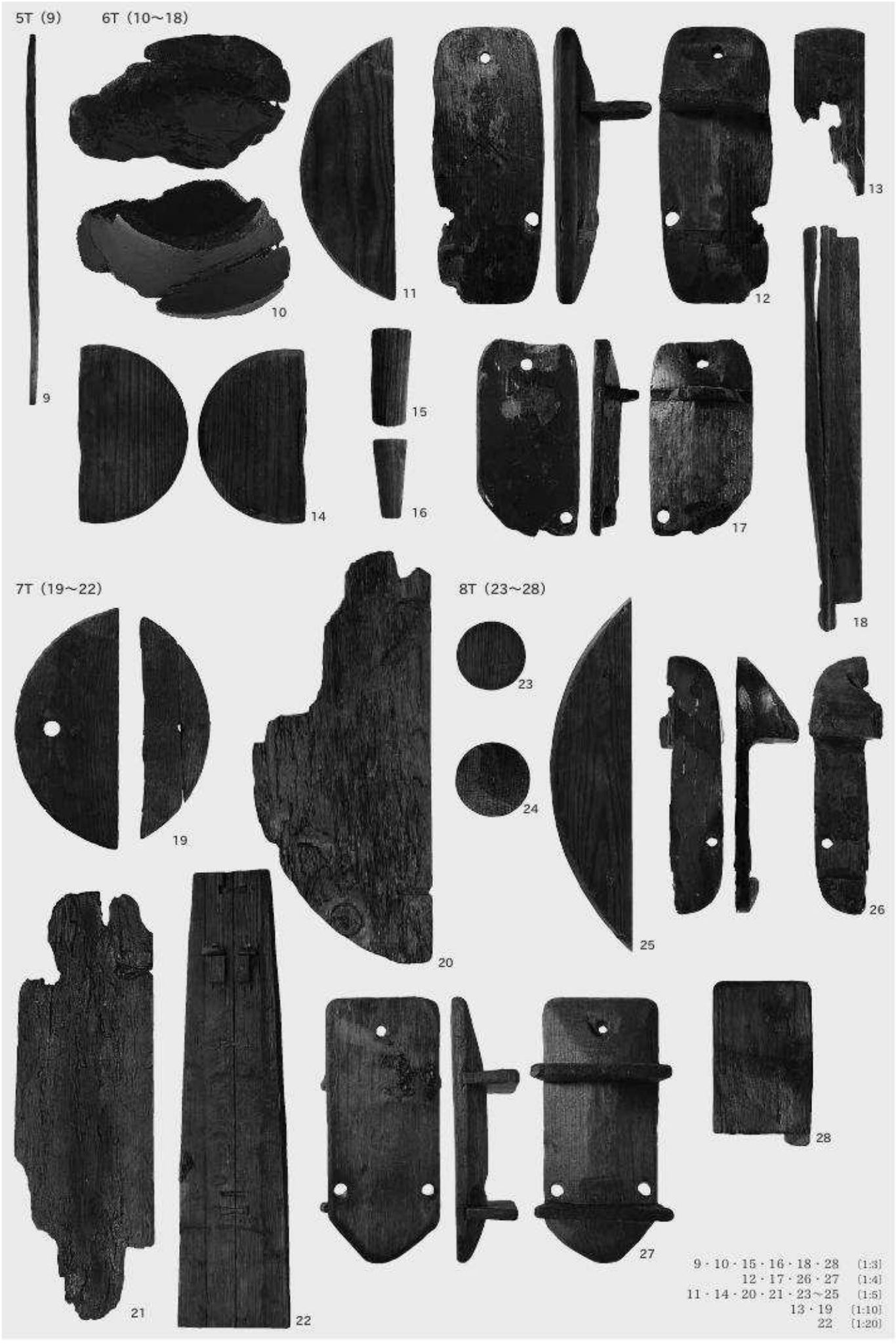
5T（8）

8

6

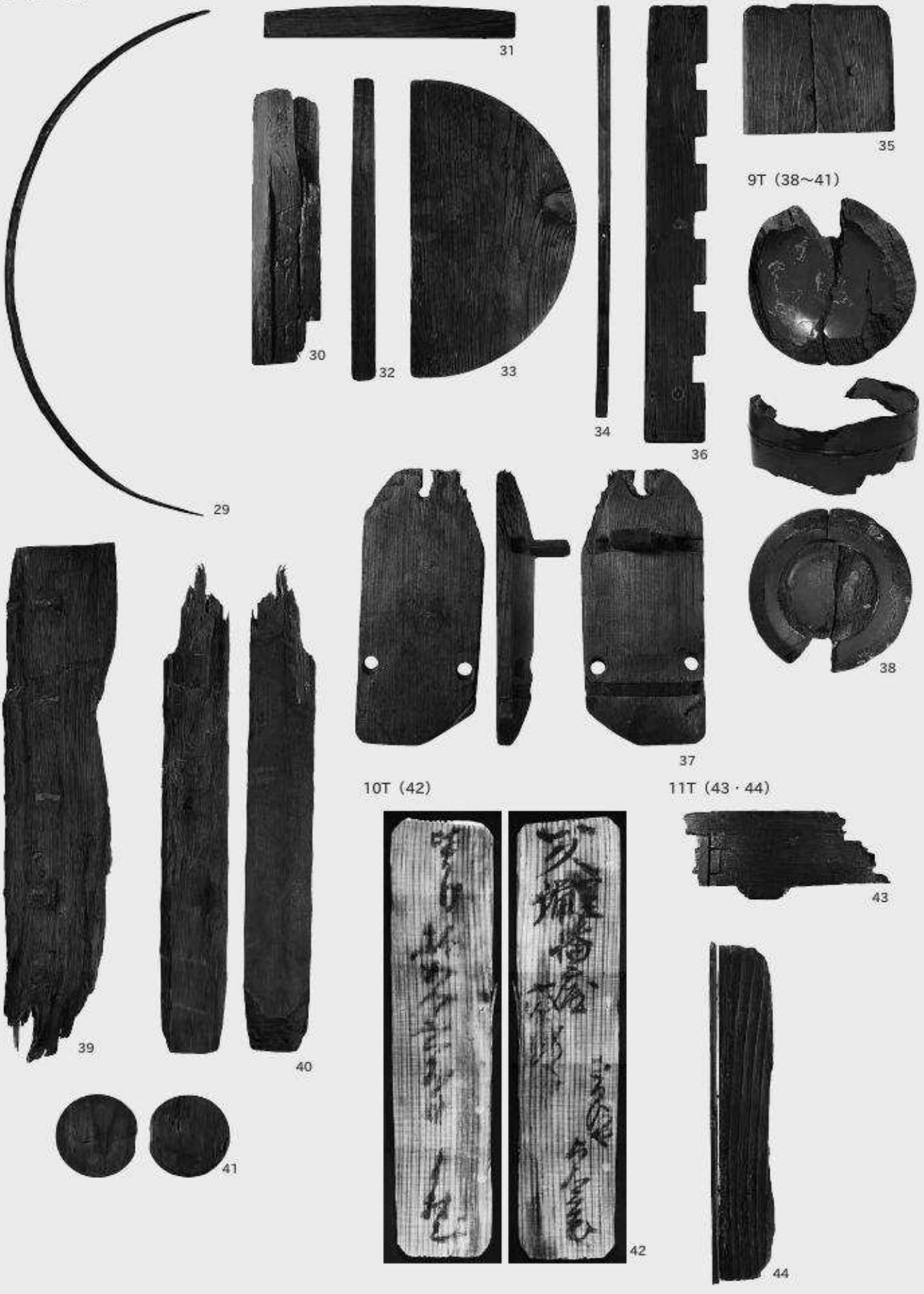
1～5・7（1:6）8（1:3）6（1:10）

試掘調査出土木製品（2）5T～8T



9・10・15・16・18・28 [1:3]
12・17・26・27 [1:4]
11・14・20・21・23～25 [1:5]
13・19 [1:10]
22 [1:20]

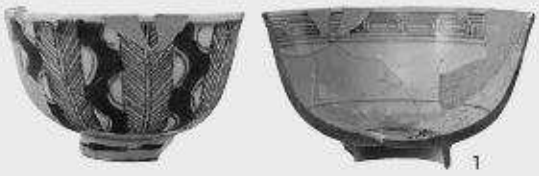
8T（29～37）



42　[1:2]
31・38・43・44　[1:3]
37　[1:4]
29・30・32～36・41　[1:5]
39・40　[1:10]

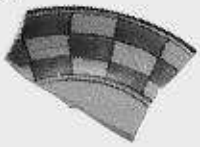
2T（1～17）

SK4（1）



1

V（3）



3

IV（2）

SK129（4）

4

VI（5）

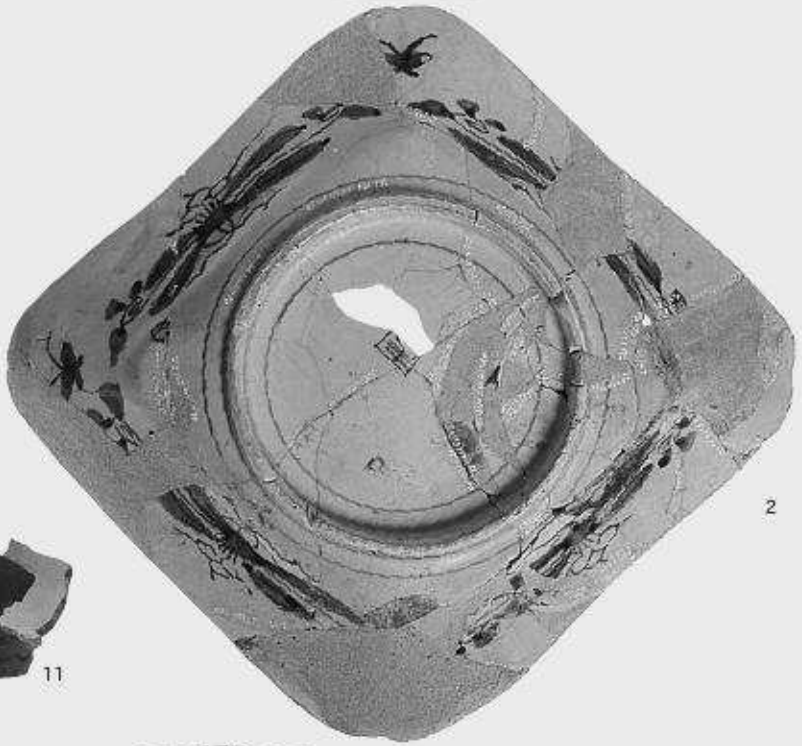
5

SD136（6・7）

6

7

9



2

XII（11・12）

IX（10）

10

11

VII（8・9）

8

12

XIII（13～17）

13

14

15

16

17

8　[1:4]
4　[1:8]
その他　[1:3]

3T（18～41）
SK61（18～20）

18

19

II（21）

21

20

P19（22）

22

SK26（23）

23

SD31（24・25）

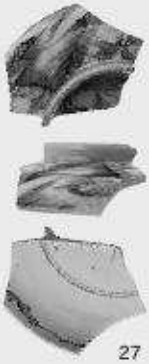
24

25

P25（26）

26

IIIa（27）


27

III（28）

28

IIIb（29・30）

30

29

SD48（31）

31

IV（32～41）

32

33

35

36

37

39

40

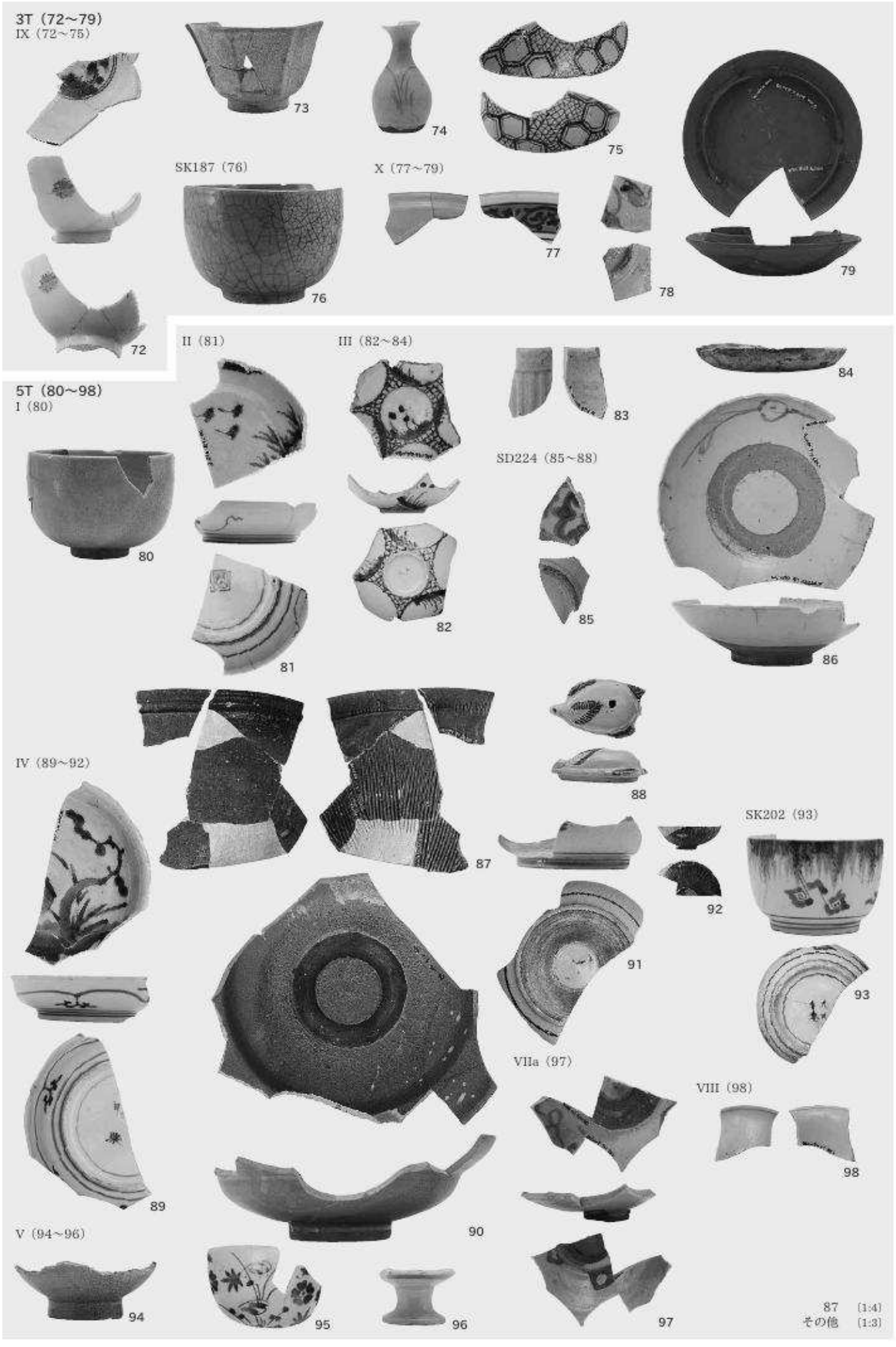
41

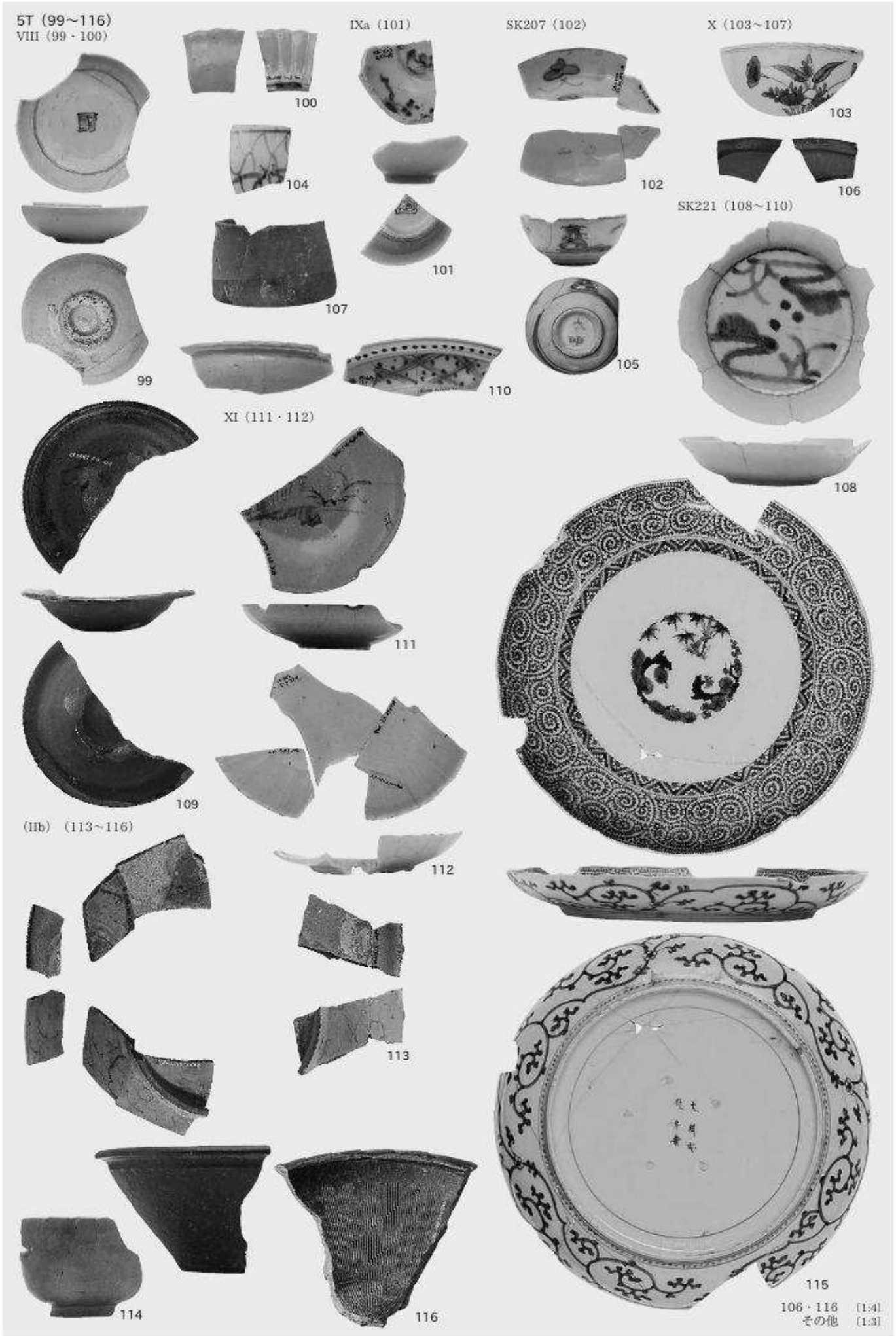
34

38

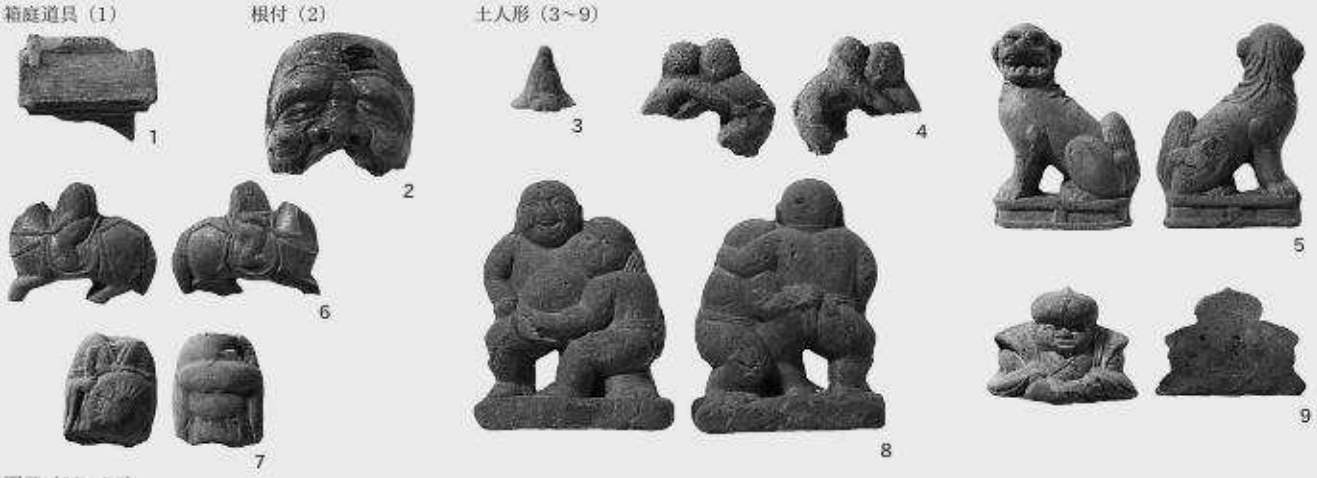
18・20・35・40　[1:4]
その他　[1:3]
41　[2:3]

3T（42～71）
IV（42～45）
42
43
44
SX110（46）
45
46
V（47～52）
47
48
49
50
51
52
SK117（53）
53
SK120（54～57）
54
55
56
57
VI（58～60）
58
59
60
VIIS（61）
61
VII（62～67）
62
63
64
65
66
VIII（68～71）
67
68
69
70
71
44・46・51・70・71　(1:4)
その他　(1:3)


3T（72～79）
IX（72～75）
72
73
74
75
SK187（76）
76
X（77～79）
77
78
79
5T（80～98）
I（80）
80
II（81）
81
III（82～84）
82
83
84
SD224（85～88）
85
86
IV（89～92）
87
88
89
90
91
92
SK202（93）
93
V（94～96）
94
95
96
VIIa（97）
97
VIII（98）
98
87　（1:4）
その他　（1:3）

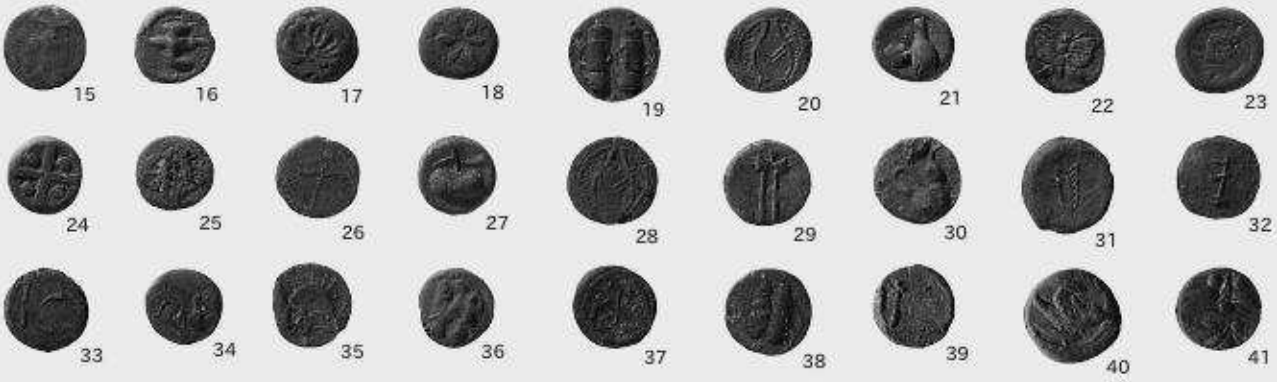

5T（99～116）
VIII（99・100）
IXa（101）
SK207（102）
X（103～107）
SK221（108～110）
XI（111・112）
（IIb）（113～116）
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
106・116 [1:4]
その他 [1:3]

箱庭道具（1）　根付（2）　土人形（3～9）



面子（10～14）

泥面子（15～41）



玉（42）　土錘（43～48）　坩堝（49・50）

1～9・49・50　(1:2)
43～48　(1:3)
10～42　(2:3)

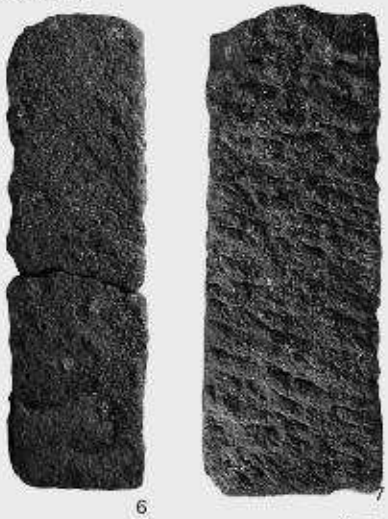
2T（1～7）

SD1（1・2）

礫石128（3）

礫石40（4・5）

SD14（6・7）

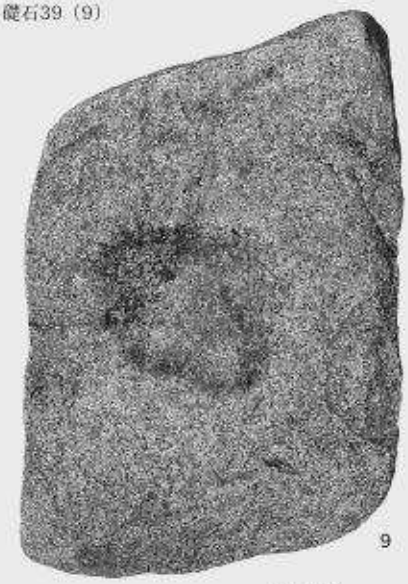


全て　(1:10)

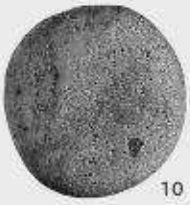
2T（8～25）
礫石36（8）

8

礫石39（9）


9

礫石80（10～13）


10

11

12

P131（14）

13

14

礫石116（15）

15

SD136（16～19）

16

17

18

19

VII（20）

20

礫石160（21）

21

礫石254（22）

22

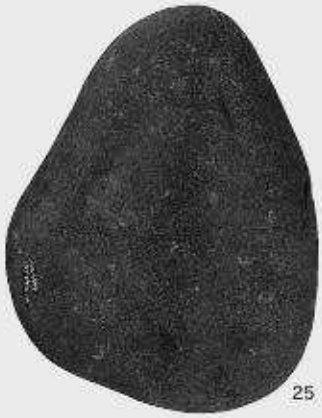
礫石255（23）

23

礫石256（24）

24

礫石263（25）


25

3T（26・27）
SD27（26）

26

礫石33（27）

27

17～19　(2:3)
16　(1:4)
10～15・20～27　(1:6)
8・9　(1:10)

3T（28～41）
SK28（28・29）

28

29

31

礫石64（31）

礫石56（32）

32

IV（33・34）

33

34

SD79（35）

35

V（37）

37

SK120（38）

38

P125（39）

39

SK30（30）

30

礫石108（36）

36

P126（40）

40

P140（41）

41

5T（42～47）
SD224（42）

42

V（43）

43

礫石206（44）

44

P239（45）

45

SK221（46）

46

礫石224（47）

47

参考資料：旧堀割護岸石
（広小路通・東堀交差点出土間瀬石）

2T（1～6）
SD1（1）

1

SD14（2～5）

2

5

3

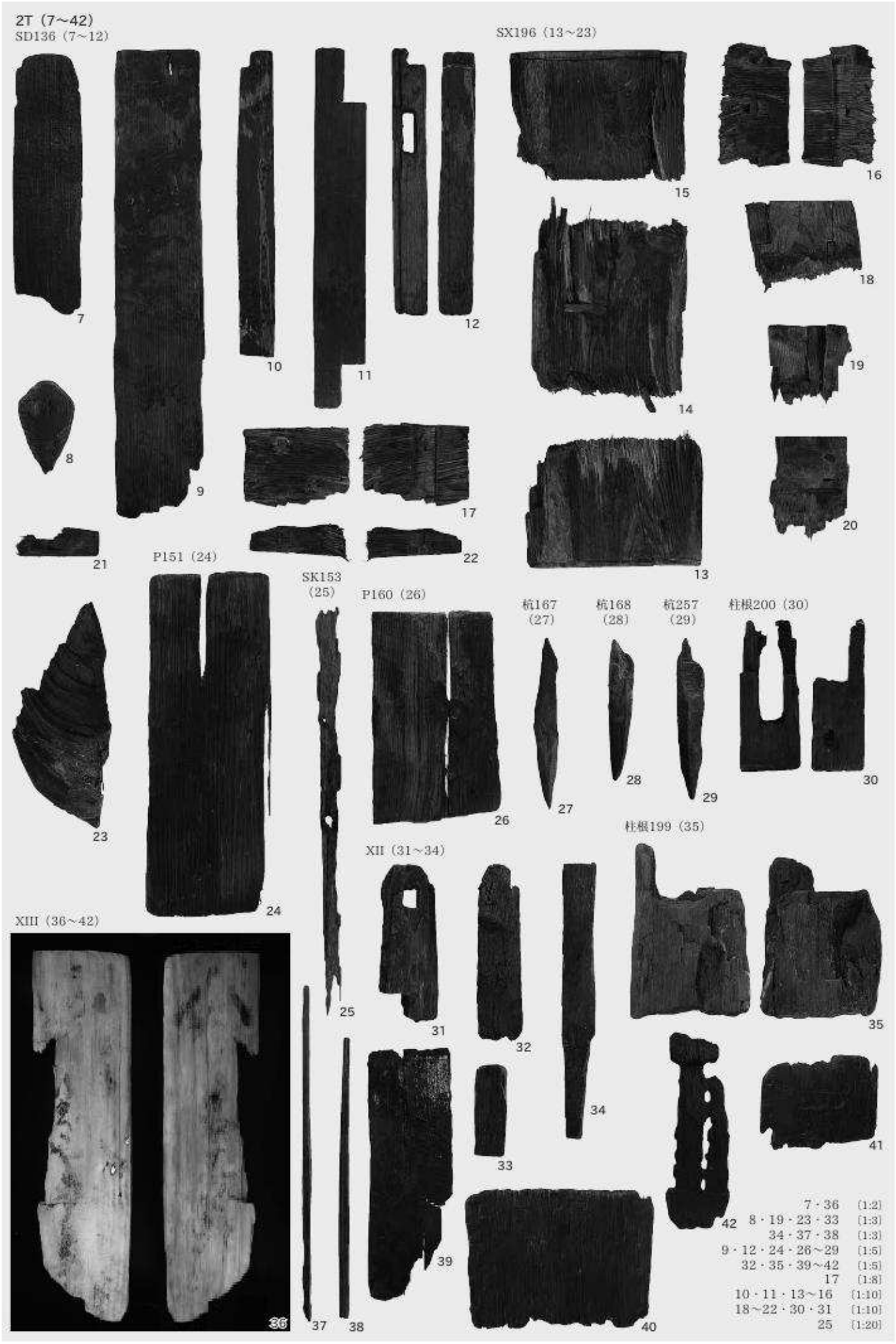
礫板197（6）

6

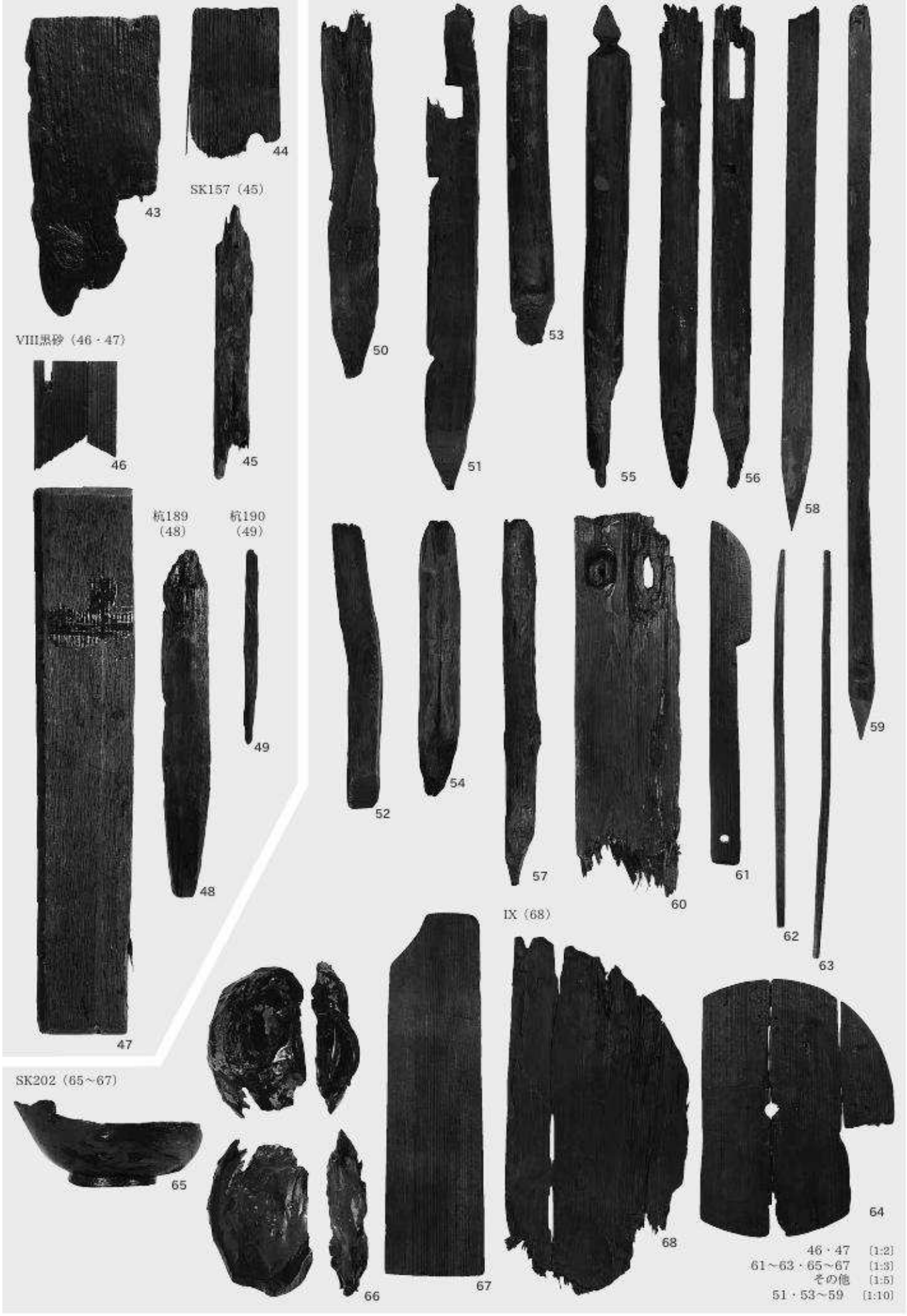
4

33・34　[1:2]
38・39・43・46　[1:3]
37・40・41　[2:3]
32・35・36・42～45・47　[1:6]
28～31・参考資料　[1:10]

全て　[1:20]


2T（7～42）
SD136（7～12）
SX196（13～23）
P151（24）
SK153
（25）
P160（26）
杭167
（27）
杭168
（28）
杭257
（29）
柱根200（30）
XII（31～34）
柱根199（35）
XIII（36～42）
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
7・36　[1:2]
8・19・23・33　[1:3]
34・37・38　[1:3]
9・12・24・26～29　[1:5]
32・35・39～42　[1:5]
17　[1:8]
10・11・13～16　[1:10]
18～22・30・31　[1:10]
25　[1:20]

3T（43～49）
SX110（43）
VII（44）
SK157（45）
VIII黒砂（46・47）
杭189（48）
杭190（49）
5T（50～68）
SK201（50）
SD224（51～64）
IX（68）
SK202（65～67）

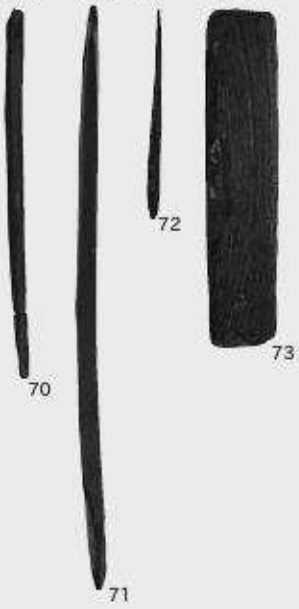


46・47　[1:2]
61～63・65～67　[1:3]
その他　[1:5]
51・53～59　[1:10]

5T（69～78）
Xa（69）

69

Xa-1（70）　Xa-3（71・72）　SK221（73）


70　71　72　73

鏡（1）

1

小柄（2・3）

2　3

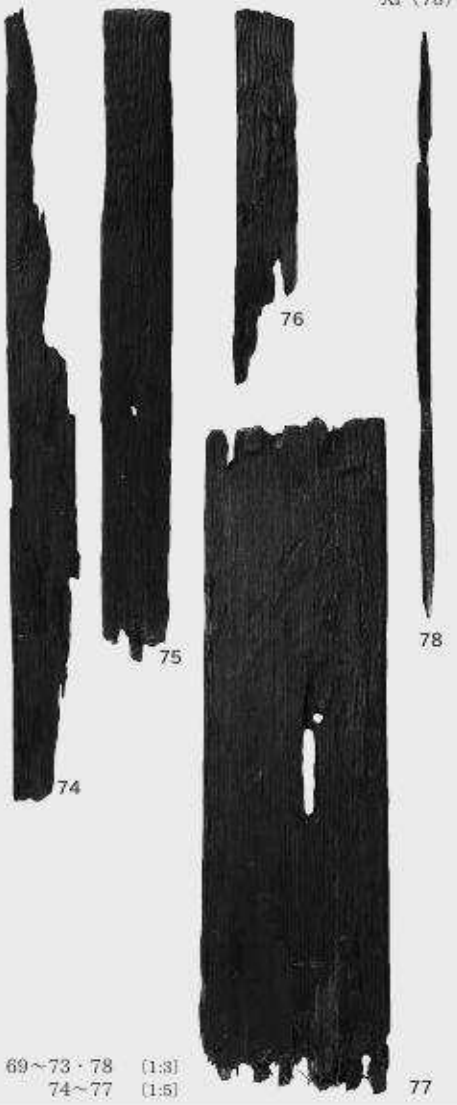
刃物（4）

4

包丁（5）

5

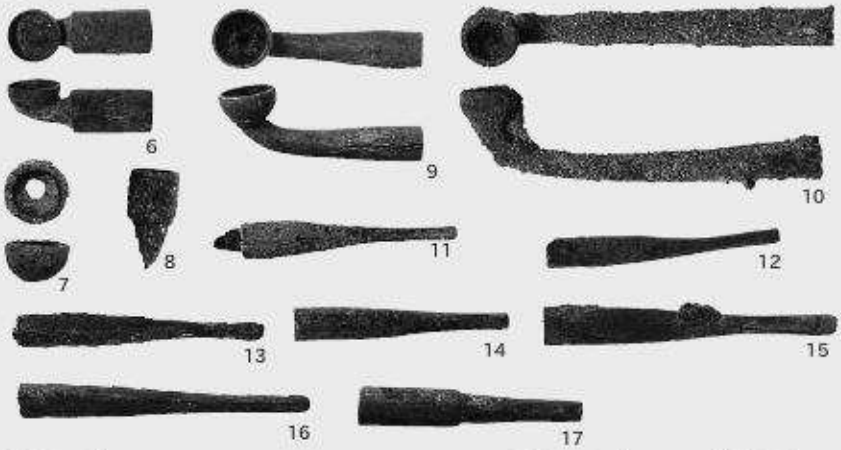
SK222（74～77）


74　75　76　77

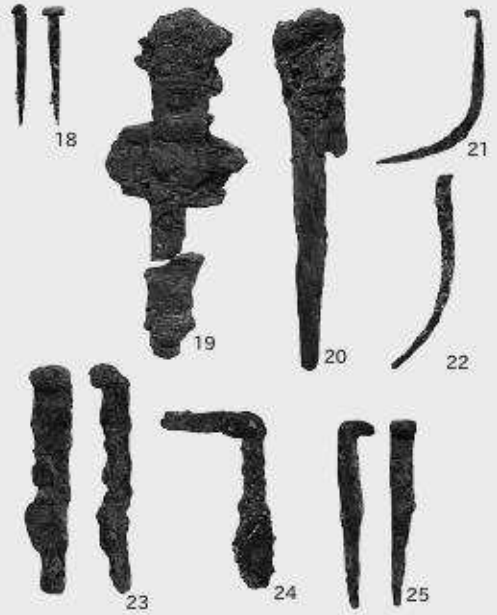
XI（78）

78

煙管（6～17）


6　7　8　9　10　11　12　13　14　15　16　17

釘（18～25）


18　19　20　21　22　23　24　25

匙（26・27）

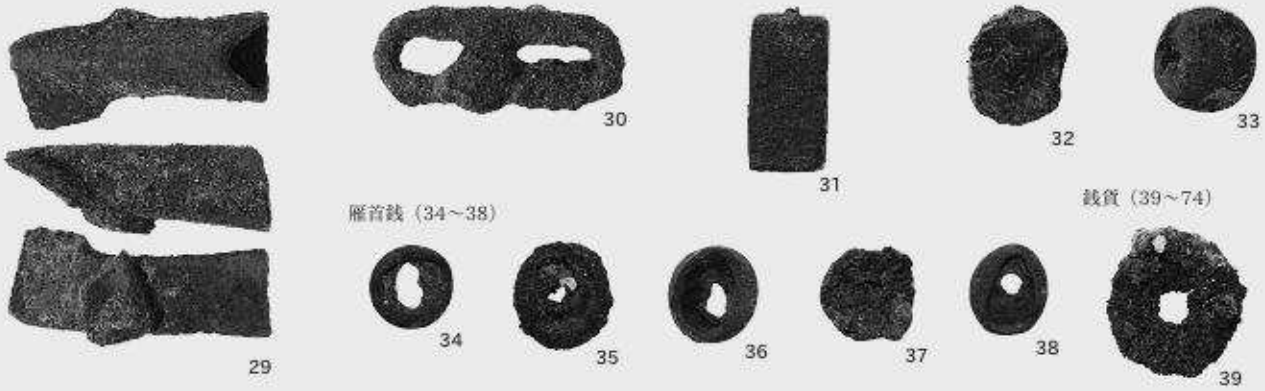
26　27

火箸（28）

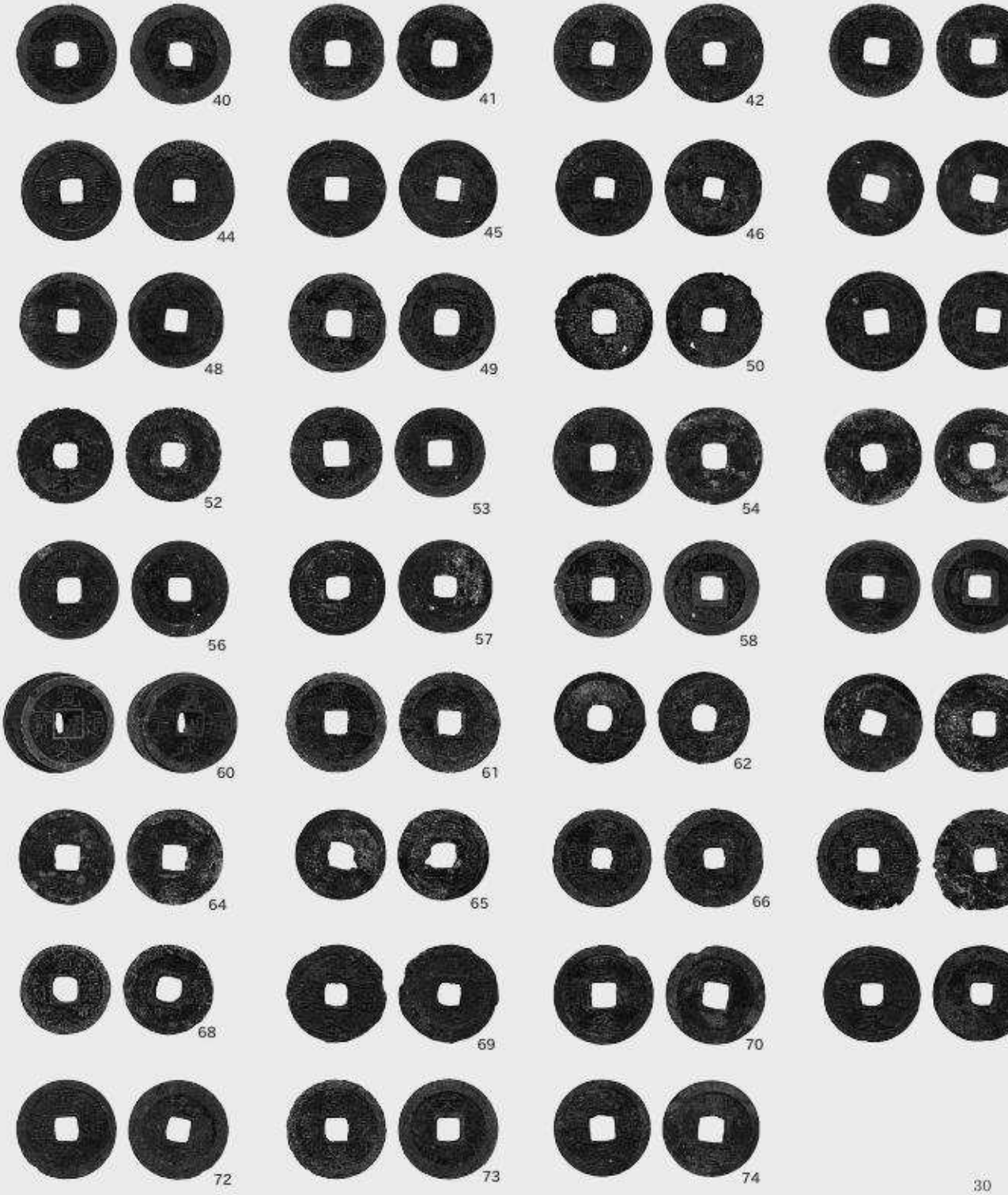
28

69～73・78　[1:3]
74～77　[1:5]
6～18　[1:2]
4・5・19～25・28　[1:3]
1～3・26・27　[2:3]

工具（29）　輪金具（30）　分銅（31）　円盤（32・33）

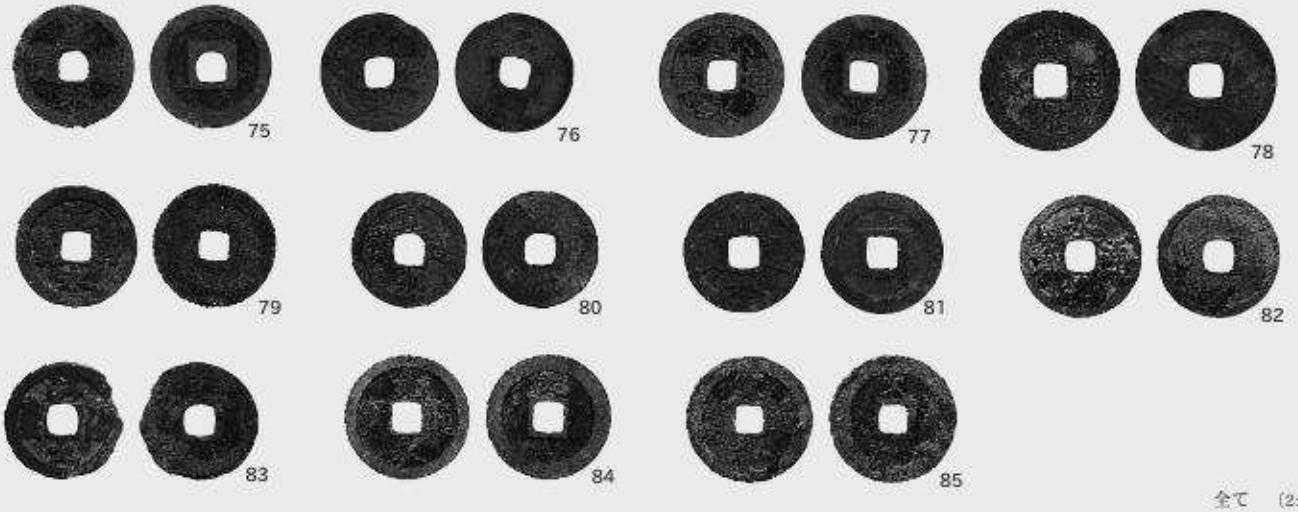


雁首銭（34～38）　銭貨（39～74）



30　[1:2]
29　[1:3]
31～74　[2:3]

銭貨（75～85）



全て　(2:3)

報告書抄録

ふりがな	きんせいにいがたまちあとひろこうじぼりちてん
書名	近世新潟町跡広小路堀地点
副書名	一般国道7号万代橋下流橋関係発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第187集
編著者名	佐藤友子・桐原雅史（以上、埋文事業団）、高田賢治（帆苅組）、 黒澤一男・長友純子・中村賢太郎・植田弥生・藤根　久・鈴木　茂（以上、パレオ・ラボ）
編集機関	財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒956-0845　新潟県新潟市秋葉区金津93番地1　TEL　0250（25）3981
発行年月日	2008（平成20）年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
近世新潟町跡 広小路堀地点	新潟県新潟市中央区本町通十番町1,862番地、上大川前通十番町1,863番地、東堀前通九番町1,392番地ほか	15201	575	37度 55分 33秒	139度 02分 55秒	20060601～ 20061031	755	道路（一般国道7号万代橋下流橋）事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
近世新潟町跡 広小路堀地点	港町跡	近世 （17～19世紀）	柱根3・礎石30・礎板2・杭16・土坑36・溝34・ピット122・性格不明遺構12、焼土1	肥前系陶磁器、瀬戸・美濃、須佐唐津、堺、京・信楽、中国製磁器（青花、色絵・粉彩）、土師器、土人形、泥面子、水注、硯、木筒、箸状木製品、鏡、銭貨、煙管、小柄	明暦元（1655）年に現在地に移転した当初に町割された範囲（約南北2,200m×東西1,100m）

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第187集

一般国道7号万代橋下流橋関係発掘調査報告書

近世新潟町跡（広小路堀地点）

平成20年3月28日印刷
平成20年3月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950-8570　新潟市中央区新光町4番地1
電話　025（285）5511

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845　新潟市秋葉区金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　長谷川印刷
〒950-2022　新潟市西区小針1-11-8
電話　025（233）0321
FAX　025（233）0322

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第187集 『近世新潟町跡(広小路堀地点)』正誤表

頁	位置	誤	正
抄録	市町村コード	１５２０１	１５１０３